宮城県文化財調査報告書第172集

一本杉窯跡群

平成 8 年 3 月

宮城県教育委員会
東北電力株式会社

遺跡遠景 （白石古窯跡群）

上・下　遺跡全景

上　調査風景
下　ＳＲ－01窯跡

上　ＳＲ－10窯跡
下　ＳＲ－11窯跡

上　ＳＲ－14窯跡
下　ＳＲ－14焼成部床面

上　ＳＲ－17窯跡
下　ＳＲ－19窯跡

上　ＳＲ－20窯跡
下　ＳＲ－20窯跡遺物出土状況

上・下 ＳＲ－20窯跡遺物出土状況

序　　文

宮城県には、現在約5,600カ所の遺跡の存在が知られています。これらの遺跡には、旧石器時代以来各時代にわたって築かれた祖先の歴史が刻み込まれています。このようなかけがえのない文化遺産を後世に伝えることは、私達にとって重要な責務であると考えます。

近年の文化財を取り巻く状況をみますと、従来の経済優先に対する反省から、物資のみならず精神的・文化的な面を大切にしようとする価値観の転換がなされつつあるのは、すでに私達の知るところであります。こうした時代の趨勢にあって、文化財や歴史的環境を保存し、地域づくりの一環として積極的に整備活用してゆこうとする気運が徐々に高まる傾向にあることは、文化財保護思想のより一層の普及・啓蒙につながるものであり、まさに歓迎すべきことといえましょう。

しかし、一方では絶えることのない開発事業により、遺跡の多くは依然として破壊・消滅の危機にさらされているのが実情です。こうしたなかにあって、当教育委員会では遺跡の所在等について関係者への周知を図るとともに、協議調整を重ね、可能な限りの保存に努めているところであります。

本書は、東白石変電所建設工事に伴って実施した「一本杉窯跡群」の発掘調査成果をまとめたものです。これらの成果が広く活用され、地域の歴史の解明に資するところとなれば大きな喜びであります。

最後に、遺跡の保存に御理解を示され、調査に際しては多大なるこ協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成8年3月

宮城県教育委員会教育長

鈴　鴨　清　美

例　　言

1. 本書は、白石市白川犬卒塔婆字一本杉に所在する「一本杉窯跡群」の発掘調査の報告書である。
2. 「一本杉窯跡群」の発掘調査は株式会社東北電力「東白石変電所」の建設に伴い、これに先だって行なわれたものである。
3. 本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の検討を経て菊地逸夫と早川英紀がおこなった。執筆の分担は下記のとおりである。

　　Ⅰ．位置と環境　菊地逸夫

　　Ⅱ．発見された遺構と遺物　菊地逸夫・早川英紀

　　Ⅲ．考察とまとめ　菊地逸夫

4. 本書における土色についての記述には「新版標準土色帖」（1973）を利用した。
5. 本書の第1図「周辺の遺跡」は国土地理院発行の1/25,000の地形図「白石」「大河原」「白石東南部」「白石西南部」を複製して使用した。
6. 遺構の平面図は、窯ごとに前庭部の前方と煙道部の後方に任意の基準杭を設定し、これを結ぶ直線を測量の基準線とした。原図の宿尺は20分の1で行い、傾斜面については斜距離を水平距離に変換して作図した。
7. 第3図「遺構配置図」は、あらかじめ窯ごとに基準点の国家座標を計測し、その計測値をもとに縮小した遺構の平面図を500分の1の地形図におとしたものである。
8. 図示した遺物の中には、図上で復元したものもある。特に擂鉢類の中には、片口部を欠損しているものについても図上で復元して表現してある。片口の残存するものと復元したものの違いについては凡例のとおりである。
9. 遺構の各部位の名称と範囲については第1図の通りである。
10. 調査成果の一部は、すでに現地説明会・宮城県遺跡調査成果発表会などで公表しているが、本書の内容はこれらに優先するものである。
11. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、宮城県教育委員会が保管している。

なお、発掘調査や、資料の整理に際し、次の方々から多大の御指導、御助言をいただいた。感謝申し上げたい。

特に、福島県文化センターの飯村均氏および常滑市民俗資料館の中野晴久氏、多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉孝弥氏には貴重な御助言をいただいた。重ねて感謝申し上げたい。

赤羽一郎（愛知県教育委員会）　小川淳一（仙台市教育委員会）　小野正敏（国立歴史民俗博物館）　斉藤義弘（福島県文化振興公社）　田中則和（仙台市教育委員会）　中橋彰吾（日本考古学協会会員）　楢崎彰一（名古屋学院大学）　藤沢典彦（元興寺文化財研究所）　藤沼邦彦（東北歴史資料館）　吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）（五十音順・敬称略）

目　　次

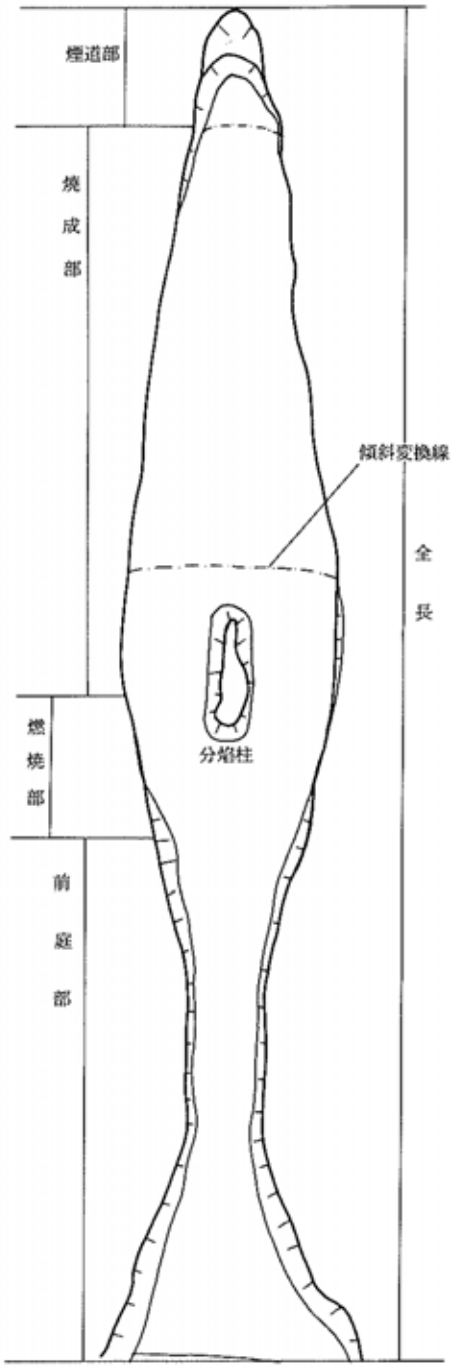
序
Ⅰ．位置と環境 …… 1
Ⅱ．発見された遺構と遺物 …… 7
ＳＲ－01 窯跡と出土遺物 …… 7
ＳＲ－02 窯跡と出土遺物 …… 13
ＳＲ－03 窯跡と出土遺物 …… 20
ＳＲ－04 窯跡と出土遺物 …… 22
ＳＲ－05 窯跡と出土遺物 …… 36
ＳＲ－06 窯跡と出土遺物 …… 41
ＳＲ－07 窯跡と出土遺物 …… 43
ＳＲ－08 窯跡と出土遺物 …… 66
ＳＲ－09 窯跡と出土遺物 …… 72
ＳＲ－10 窯跡と出土遺物 …… 76
ＳＲ－11 窯跡と出土遺物 …… 82
ＳＲ－12 窯跡と出土遺物 …… 91
ＳＲ－13 窯跡 …… 99
ＳＲ－14 窯跡と出土遺物 …… 100
ＳＲ－15 窯跡と出土遺物 …… 103
ＳＲ－16 窯跡 …… 104
ＳＲ－17 窯跡と出土遺物 …… 111
ＳＲ－18 窯跡と出土遺物 …… 117
ＳＲ－19 窯跡と出土遺物 …… 120
ＳＲ－20 窯跡と出土遺物 …… 121
Ⅲ．考察 …… 135
1．遺構について …… 135
(1) 窯跡の変遷 …… 135
(2) 窯跡の構造と特徴 …… 136
【前庭部】 …… 136
【前庭部の施設】 …… 137
【燃焼部】 …… 137
【分焔柱】 …… 137
【焼成部】 …… 138

【焼成部の施設】 144
【煙道部】 145
(3) 他地域の窯跡との構造の比較 145
(4) 窯詰めの状況 150
2. 遺物について 152
(1) 遺物の分類 155
【甕】 155
【壷類】 156
【広口壷】 156
【短頸壷】 157
【無頸壷】 157
【小壷】 157
【玉縁口縁壷】 157
【仏花瓶】 158
【小瓶】 158
【擂鉢】 158
筋目の占有率 159
筋目の入れ方 159
【火鉢】 165
【卸皿】 165
【陶硯】 165
【五輪塔】 166
【陶錘】 166
【その他の遺物】 166
(2) 遺物の組合せと変遷の検討 166
(3) 他窯跡との比較と年代について 168
① 他支群との比較 168
② 周辺の諸窯との比較 168
【八郎窯跡】 168
【宮城県北部の窯跡】 169
③ 他地域の窯との比較 169
【常滑窯】 170
【北陸諸窯】 170
④ 年代 173
(4) 消費遺跡との関連 173

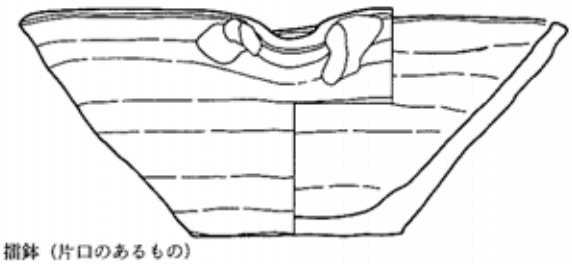
4.「ヘラ書き」をもつ遺物について …… 176
Ⅳ. まとめ …… 184
引用・参考文献 …… 185
写真図版 …… 189

調 査 要 項

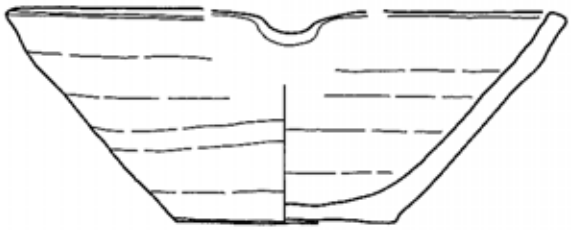
1. 遺跡名　　一本杉窯跡群（宮城県遺跡登録番号：02432）
2. 所在地　　白石市白川犬卒塔婆字一本杉
3. 調査主体　　宮城県教育委員会
4. 発掘面積　　約 3500 ㎡
5. 調査期間　　第 1 次調査　1992 年 6 月 8 日～6 月 11 日（範囲確認調査）
　　第 2 次調査　1992 年 7 月 13 日～11 月 11 日（事前調査）
　　第 3 次調査　1993 年 4 月 7 日～6 月 18 日（事前調査）
6. 調査員　　第 1 次調査　加藤道男、佐藤則之、清野俊太郎（白石市教育委員会）
　　第 2 次調査　佐藤則之、菊地逸夫、佐久間光平、天野順陽、木皿直幸、早川英紀、小村田達也、太田肇、千葉正康
　　第 3 次調査　菊地逸夫、早川英紀、三好秀樹、窪田忍
7. 遺物整理参加者
　　鎌田久美子、森幸子、熊倉静子、菅原友子、勝山美佐子、浜松由希、吉岡聡子、千葉栄子、菊地大介、佐藤由美子



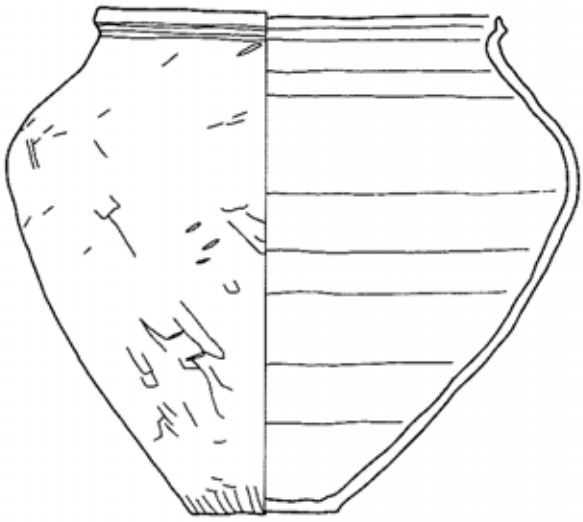
窯模式図



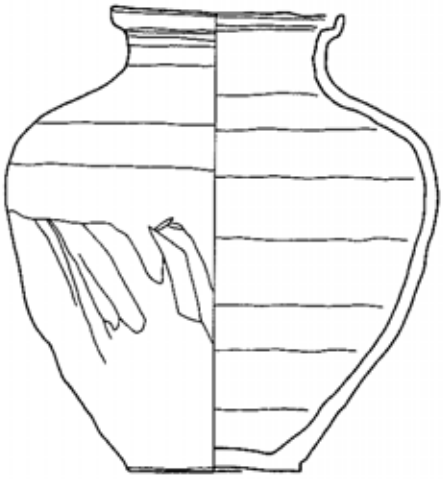
擂鉢（片口のあるもの）



擂鉢（片口の欠損したもの）



甕



広口壺

第１図　凡例

Ⅰ．位置と環境

一本杉窯跡群は、白石市白川犬卒塔婆字一本杉に所在し、白石市の中心部、東北本線白石駅から東に約4.3㎞、白石と角田をむすぶ国道113号線の東側約0.2㎞の所に位置している。

本遺跡の所在する白石市は、宮城県内陸部の最南端にあたり、福島県に接している。

白石市周辺の地形を概観すると、西には奥羽山脈の一部をなす蔵王連峰やそれに連なる二井宿山地や高館丘陵が、東には阿武隈山地に連らなる角田丘陵地性山地や角田丘陵が、またこれらの山地帯に囲まれた中央部は白石低地と呼ばれる比較的狭隘な盆地性低地が広がっている。

この白石低地は、白石川やその支流の斉川・子捨川によって形成されたもので、東西約3㎞、南北約10㎞の広がりをもち、その南端は福島県伊達郡国見の阿津賀志山の麓をへて福島盆地の北端と接している。また、白石低地の中央部には標高約 100mの独立した小丘陵である傑山寺丘陵が南北にはしり、その東側に市街地が広がっている。

一本杉窯跡群は、白石低地の東に広がる東部の丘陵に位置し、白石川の支流である高田川に開析され樹枝状に広がる、沖積地に臨む東西にのびる比較的急峻な尾根上に立地している。

この東部丘陵は阿武隈山系の北端にあたる花崗閃緑岩からなる老齢期のゆるい丘陵地帯で、第三紀層の凝灰岩層を伴い、白石川を隔てて蔵王町猫田丘陵へと続く標高100～200mの高地である。

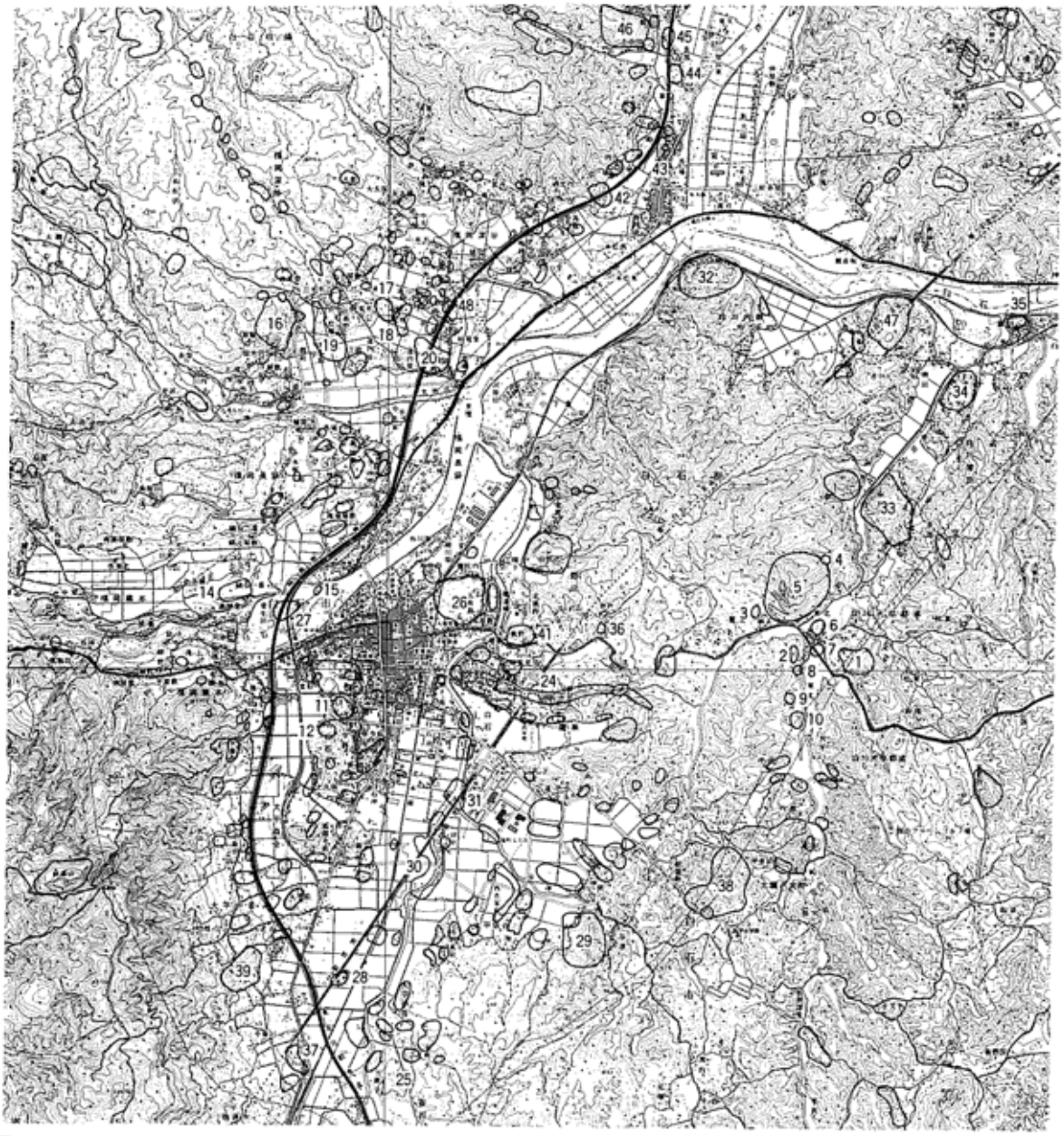
遺跡の周辺は風化の進んだ花崗閃緑岩や凝灰岩の低い丘陵地となっており、高田川やそれに続く小さな沢や谷によって開析された複雑な地形になっている。高田川に作られた樹枝状の沖積地には、犬卒塔婆の集落が広がり、周囲は沢筋に発達した水田地帯となっている。

この沖積地を取り囲む丘陵地には一本杉窯跡群の他にも、東北窯跡群、市ノ沢窯跡群、黒森窯跡群などがあり全体で「白石古窯跡群」を形成している。これらの窯跡群の間をぬって流れる高田川は、現在は護岸工事の施された小河川となっているが、以前は比較的水量の多い川だったといわれている。

また、当川は水運に関係する地名とされる白石市白川津田付近で白石川と合流しており、当時は高田川も水路として利用されていた可能性がある。

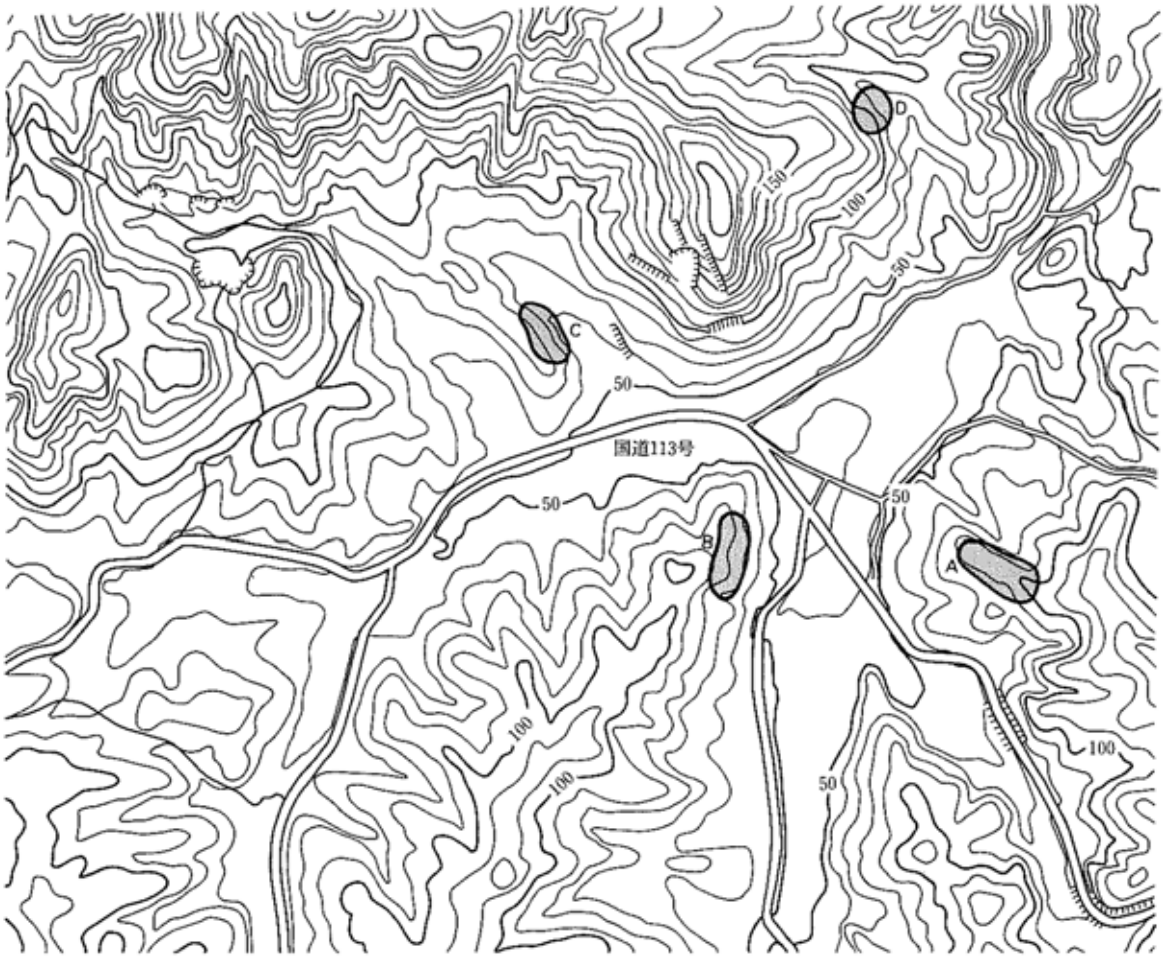
白石市内には、現在約400ヶ所の遺跡が確認されており、県内でも最も遺跡の集中する地域となっている。以下、盆地内の遺跡について概観してみよう。旧石器時代の遺跡は6遺跡しか確認されていないが、深谷地区からは神子柴型の大形尖頭器が、大鷹沢地区からは局部磨製石器が出土している。縄文時代になると遺跡数は60ヶ所と急激に増加し、そのほとんどが白石市北部の深谷地区に集中しおり、盆地周縁部の段丘や低丘陵に立地する傾向がみられる。この時代の代表的な遺跡には荒井遺跡・三本木遺跡・菅生田遺跡などがあり、菅生田遺跡からは複式炉をもつ竪穴住居跡が多数検出されている。弥生時代の遺跡は、縄文時代に比して激減しており、わずかに8ヶ所知られているにすぎない。一方、白石低地の北部に位置する円田盆地ではこの時代になると遺跡数が急激に増加しており、白石付近とは好対照な地域となっている。この時代の遺跡には、谷津川遺跡や大柳前遺跡・大畑遺跡があり、いずれも斉川流域の自然堤防上に立地している。

古墳時代には、眺望のよい斉川東岸の丘陵には古墳が密集して造営されており、主軸長約56mの瓶ヶ



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	一本杉窯跡群	丘陵	窯跡	中世	17	高野遺跡	段丘	包含地 製鉄跡	縄文早～後、古代	33	本館跡	丘陵	城館	中世
2	東北窯跡群	丘陵斜面	窯跡	中世	18	荒井遺跡	段丘	包含地 製鉄跡	縄文前～晩、弥生、古代	34	天神館跡	丘陵	城館	中世
3	市の沢窯跡群	丘陵	窯跡	中世	19	下館遺跡	段丘	包含地、城館 製鉄跡	縄文後、平安、中世	35	越田館遺跡	段丘	城館	中世
4	黒森窯跡群	丘陵斜面	窯跡	中世	20	青木遺跡	段丘	集落跡	縄文早・中・晩、弥生、平安	36	上蟹沢古墳	丘陵中腹	円墳	古墳後
5	柳原山館跡	丘陵	城館	中世	21	郡山横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳後、奈良	37	地蔵院館跡	丘陵	城館、包含地	縄文・中世
6	們下遺跡	丘陵麓	包含地	縄文後、古代	22	郡山寺入西 横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳後、奈良	38	大町城跡	丘陵	城館	中世
7	岩ノ上遺跡	丘陵麓	包含地	縄文・古代・中世	23	郡山寺入東 横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳後、奈良	39	赤館跡	丘陵	城館	中世
8	中島遺跡	丘陵斜面	包含地	平安	24	蟹沢古墳群	丘陵	前方後円墳 円墳、包含地	古墳、古代	40	郡山館跡	丘陵	城館、包含地	古代、中世
9	石森遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代	25	亀田古墳群	丘陵	前方後円 墳、円墳	古墳	41	鹿島山遺跡	丘陵	包含地、城館	縄文、古代、中世
10	曽の勝遺跡	丘陵麓	包含地	縄文前、古代	26	大畑遺跡	段丘	包含地、官衙	弥生、奈良、平安、中世	42	宮城館跡	丘陵	城館、包含地	古墳、中世
11	元山遺跡	丘陵	包含地 窯跡	奈良、平安	27	菅生田遺跡	段丘	集落跡	縄文前～後、弥生	43	馬場北遺跡	自然堤防	包含地	縄文早、平安
12	八幡坂西窯跡	段丘	窯跡	古代	28	飯詰館跡	分離丘陵	城館	中世	44	長峰遺跡	丘陵	包含地	縄文前・中、弥生、古代
13	弧峯遺跡	丘陵頂部	包含地	縄文中、古墳	29	三沢城跡	丘陵	城館	中世	45	竹長地遺跡	段丘	集落跡	旧石器、縄文前～後 弥生、古墳～中世
14	茶園遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文前、平安	30	田中遺跡	自然堤防	包含地	縄文～中世	46	山家館跡	丘陵	城館	中世
15	瓦焼場窯跡	段丘	窯跡	江戸	31	谷津田遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、古代、中世	47	冠木館跡	丘陵	包含地、城館	縄文中、中世
16	三本木遺跡	段丘	包含地	縄文前・後・晩、古代、中世	32	根城館跡	丘陵	城館、包含地	縄文、中世	48	松田遺跡	段丘	集落跡	縄文早、弥生、古代

第２図　周辺の遺跡



第３図　白石古窯跡群周辺図

盛古墳や上蟹択古墳をはじめとする鷹の巣古墳群や全長44mの亀田古墳を主墳とする亀田古墳群、郡山横穴群や黒岩横穴群などの横穴墓の存在が知られている。中でも、上蟹沢古墳からは凝灰岩の一枚岩の切り石による複室の横穴式石室が検出されており注目される。また、この時代の集落跡には梅田遺跡・北無双作遺跡・亀田西遺跡があり、いずれも斉川流域の自然堤防上に立地している。

奈良・平安時代の遺跡には大畑遺跡や観音崎遺跡、深谷地区の遺跡群がある。この中で深谷地区の遺跡群は平安時代になると爆発的な遺跡数の増加がみられることや青木遺跡・道内原遺跡・高野遺跡などの鉄滓を出土する遺跡が大多数を占めるなどの特色がいくつかみられる。

また、大畑遺跡は養老 5 年(721)に建郡された苅田郡の郡衙跡と考えられており、発掘調査により柱筋を揃え計画的に配置された倉庫群が検出され、瓦類が多く出土している。

白石周辺における窯業の歴史もこの時代まで遡り、傑山寺丘陵の八幡坂窯跡群や兀山遺跡（窯跡）では須恵器や瓦の生産が始まっており、兀山遺跡で生産された瓦は大畑遺跡に供給されていることが知られている。また、兀山遺跡で焼成されている軒丸瓦の瓦当文様が福島県相馬市黒木田遺跡出土のものと同一意匠であり、このことは当時の工人の系譜を探る上で興味深い。

平安時代の末には、この地は平泉の勢力下にあったことが知られている。

一本杉窯跡群から峠を越えて角田盆地に入ってすぐの高倉地区にはこの時代に建立された「高蔵寺」があり、三間四方の阿弥陀堂には阿弥陀如来の丈六仏が祀られている。また、白石低地の南、福島盆

地の北端に位置する福島県伊達郡国見町阿津賀志山付近は文治５年（1189）の奥州合戦の舞台として知られている。

中世の遺跡には白石古窯跡群の他には多くの館跡がある。

館跡の分布は旧奥州街道が狭い隘路を通る福島間との県境から斉川周辺にかけて集中しており、この付近だけでも街道に臨む丘陵上には地蔵院館や飯詰館をはじめとする 22 もの館跡が存在している。また、市東部の大鷹沢三沢に所在する三沢城は南北朝期に北畠顕信が一時拠った場所として知られている。近世の白石は伊達家の所領となり、片倉小十郎の城下となる。この時代の特徴的な遺跡には白石川により形成された高位段丘の原段丘に位置する近世の陶器・磁器を焼成した萩ノ坂窯・鍋石窯・瓦焼場窯がある。中でも原地区の山ノ神講中には萩ノ坂窯で焼かれたとされる文化９年（1812）銘をもつ瓢形御神酒徳利（磁器）が伝わっており、東北地方での磁器生産を知る上で注目されている。

次に、一本杉窯跡群が存在したと考えられる鎌倉時代から室町時代にかけての歴史的状況を文献の上からみてみよう。

奥州合戦後頼朝は、東北地方を掌握するため奥州総奉行・陸奥留守職の両職を設け、さらに郡・郷を直接支配するために御家人を地頭として配し奥州を実質的な知行地とした。

この地に下向した御家人は刈田氏（本姓中条氏）と考えられ、『吾妻鏡』元久二年（1205）の条に「刈田平右衛門尉義季」、同三年の条には義季の子「刈田右衛門三郎義行」の名がみられる。

しかし、義行は仁治二年（1234）に死去する段階ではすでに和賀氏を名乗っており、これ以降の地頭については不明である。その後北条氏の勢力拡大に伴い、地頭の配置換えがしばしば行なわれ、鎌倉末期までに奥羽の大半は得宗領となり、刈田もその一つと考えられるようになった。

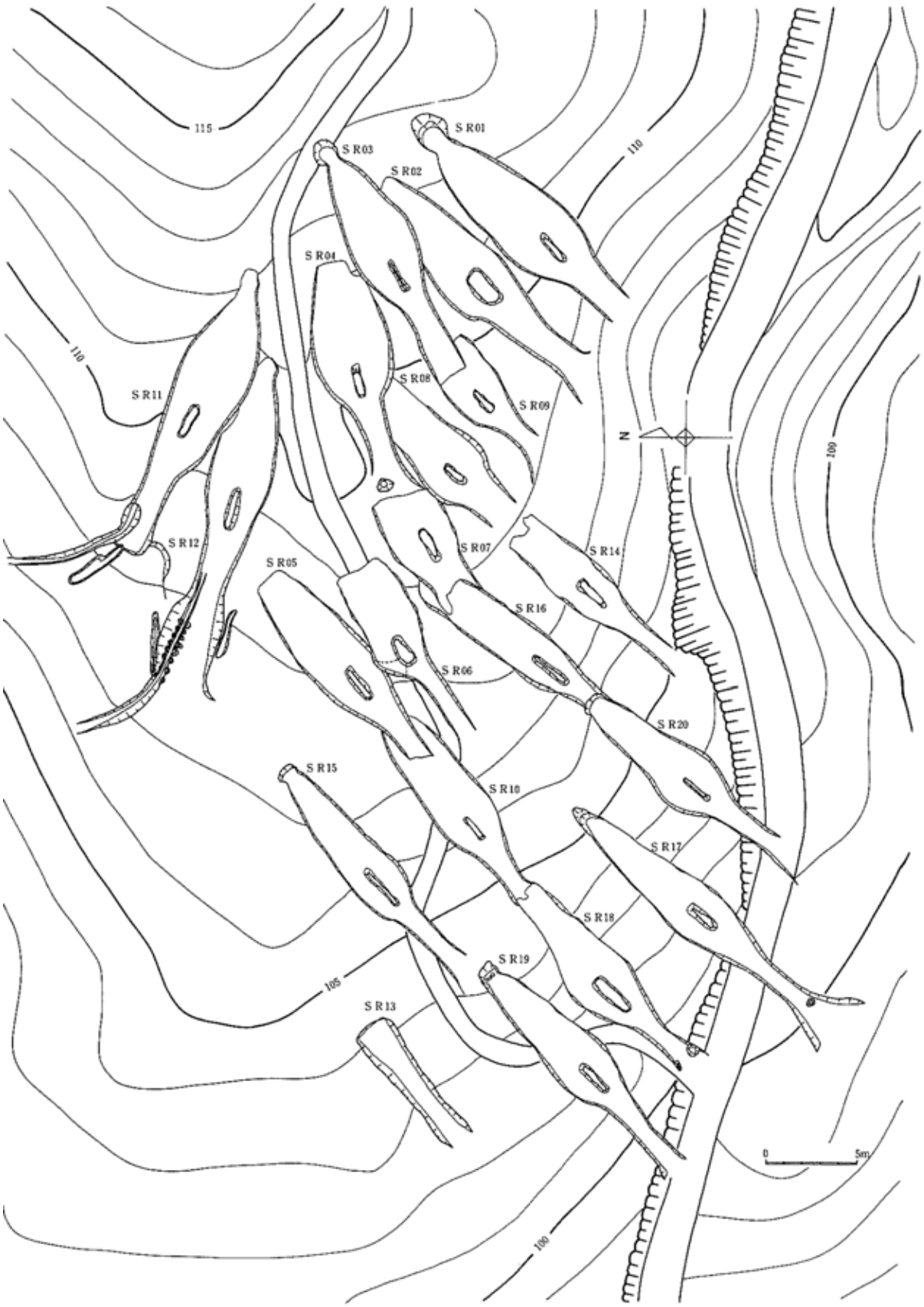
『近江国番場宿蓮華寺過去帳』元弘三年（1333）には「桜田治部刈田彦三郎師時」の名がみられるように桜田禅師系統の北条一族が刈田の地頭職に就いていたものと考えられている。その場合、刈田が得宗領であることから、北条一族門流が地頭に任命されたものと考えられる。

鎌倉幕府滅亡以後、約半世紀は南北朝内乱の時勢となるが、その時代のこの地域は地方権力確立のため争奪となる多賀国府と距離的に近いことや、地形的に軍事要衝の地にあることなどから高い緊張状態のもとにあったと考えられている。

興国元年（1340）北畠顕信は葛西城に入り、北党に渡った国府の奪回を図ったが、これに対して足利尊氏は正平元年（1346）吉良貞家と畠山高国を奥州探題に任じ、多賀国府に下して南党の制圧を命じた。両者の勢力は拮抗し一進一退を繰り返しながらも、南党勢は正平６年（1351）名取郡広瀬川で吉良を破り一時的に国府を奪還する。翌年２月、顕信は関東進出を図るものの、福島県白河市付近で北党勢に阻まれ、刈田郡三沢城まで兵を返す結果となっている。さらに同年３月には国府は再び北党の手に帰し、北党による残敵掃討が各地で行なわれたといわれている。このことにより、顕信は三沢城を放棄し宇津峯城に退いた。翌年５月には宇津峯城も落城し、南奥一帯の両党勢力は完全に制圧されこの時点で北党による覇権が確立した。

多賀国府が北党に帰した以後のこの地は、藩府内部の主導権争いを反映して再び戦乱の世となるが永徳元年（1381）伊達宗遠は、亘理郡から刈田に侵入した武石打胤を破り、伊達氏の領域を刈田・伊

第４図　一本杉窯跡群と周辺の地形



第５図　一本杉窯跡群遺構配置図

具・亘理まで拡大した。このように南北朝の末期の段階では刈田は伊達氏領に属することになり、その後一時蒲生領になるのを除けば、この地の伊達氏による支配は明治まで続いた。

Ⅱ．発見された遺構と遺物

一本杉窯跡群を含む白石古窯跡群のうち、早くから知られていたのは東北窯跡群である。昭和 22～23 年頃に、佐藤庄吉が破片を採集している。この場所を中世陶器の窯跡と考えたのは片倉信光らしく、数人の研究者が現地を訪れている。その後、各地で発掘調査が実施されるようになると、中世陶器に対する関心も高まり、昭和 48 年には白石市史編さん委員会によって、窯跡の確認や地形図の作成などが行われた（白石市：1976）。昭和 51 年には藤沼によって詳しく紹介され、年代や系統、消費地との関連なども述べられている（藤沼：1976）。一方、中橋彰吾らは周辺の分布調査を続け、市の沢支群や黒森支群を発見し、この一帯が一大窯業地帯であることを明らかにした。

ＳＲ－01 窯跡（第 6～10 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も高位（標鷹 108～113m）に位置するもののひとつである。他の窯との重複はない。基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。燃焼部から煙道部にかけては比較的保存がよいが、前庭部の先端から灰原にかけては後世の林道造成のために削平されている。天井部はすべて崩落していた。

窯体の平面形は紡錘形で主軸線の方向はN-41°－Ｅである。斜面と主軸の角度は 4°で、窯は斜面に対してほぼ垂直に作られている。規模は残存する部分で窯長が 15.5m、窯幅は最大部分で 4.0mある。6 回の作り替えが認められ、1 次面と 7 次面の標高差は約 1.3mある。

［前底部］前庭部は通路状を呈し焚口からほぼ直線的に延びる。先端部から灰原に続く部分は削平を受けているが、現存する部分の規模は長さ約 2.4m、幅 1.4～1.8mある。床面は 1 次面では地山の掘り込み面をそのまま使用しているが、2 次面以降はそれまでの使用面を埋め戻して（10～40㎝）その面を使用している。床面の傾斜は 23°あり、焚口に向かって比較的急に下がる。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけての側壁はほぼ直線で、焚口から分焔柱までは緩やかに外傾する。前底部の最もすぼまる部分から燃焼部（焚口）となる。燃焼部は焚口から分焔柱付近までで、全長約 2.0mあり、この部分からは木炭が多量に検出されている。床面は 1 次面では地山の掘り込み面をそのまま使用しているが、2 次面以降はそれまでの使用面を埋め戻し（厚さ 10～30 ㎝）、その上に粘土を貼って床としている。床面の傾斜はほぼ水平である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは残りのよい部分で約 1mある。1～4 次面では掘り込み面をそのまま壁としているが、5・6 次面では大きな補修が行われており、この面の右側壁では窯壁の崩落した部分に焼台やゆ陶片を積み上げその上に粘土を貼りつけて壁としている。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られ、1 次面では 70～80 ㎝の高さまで残存している。平面形は隅の丸い長方形を呈し、規模は基底部で長さ 2.0m、幅 0.4mある。1～6 次面を通して大きな作

り替えは行なわれておらず、位置もほぼ同じ場所に作られている。通焔孔の幅は基底部で、1・2 次面が右側 124 ㎝、左側 100㎝、5・6 次面が右側 96 ㎝、左側 120㎝ある。

［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から徐々に広がり、分焔柱から約 80 ㎝奥まった傾斜変換線の部分で最大幅となり、煙道に向かって幅をせばめる。規模は水平距離で約 9.0mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は 11.0mある。幅は傾斜変換線付近で最大となり約 4.0mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まで緩やかに上がり（約 10°）、それよりも奥は約 39° の急角度になっている。

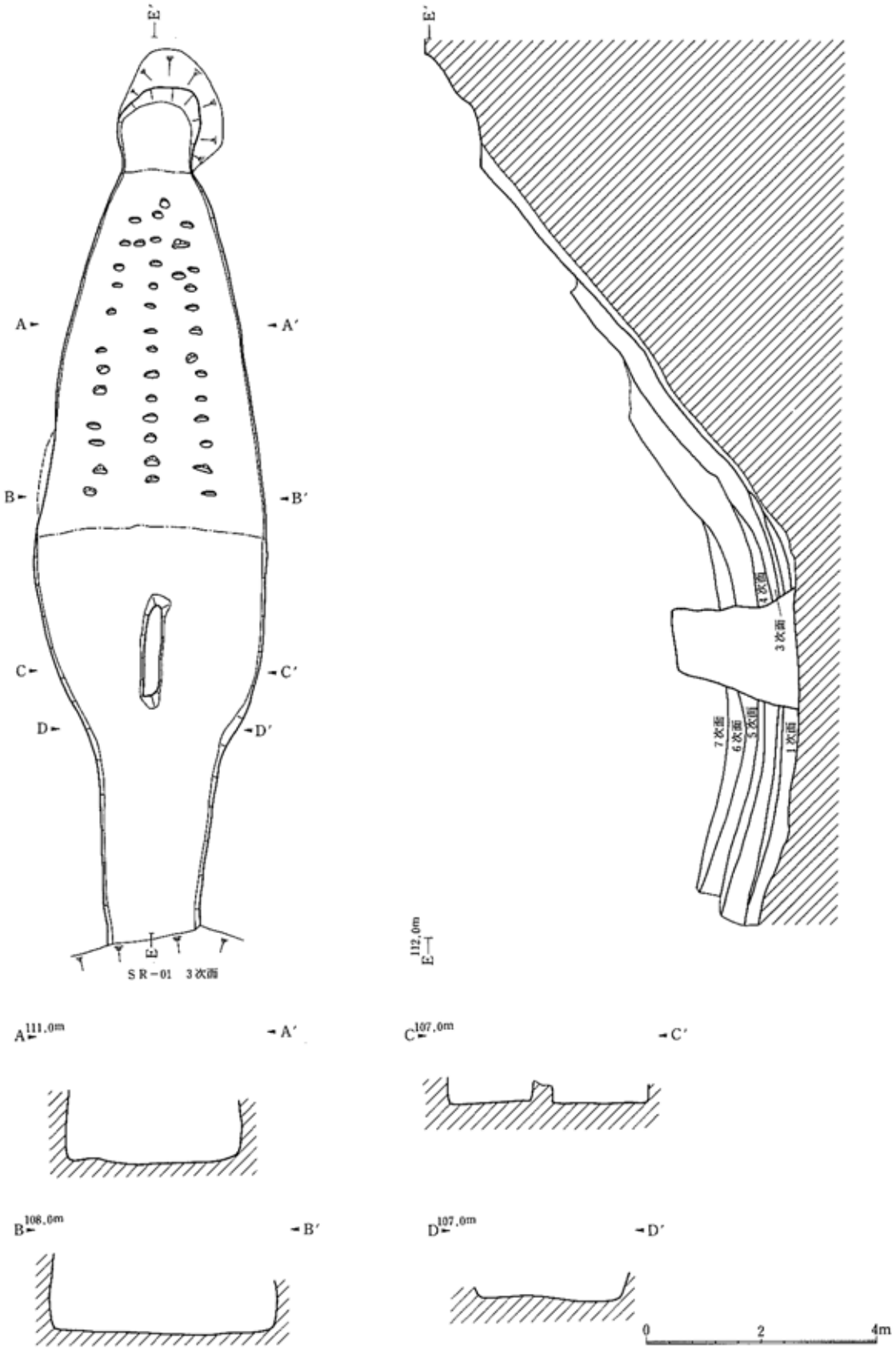
床面はすべて貼り床で、1 次面では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で埋め戻し、その上に粘土を貼り構築している。また、2 次面以降はそれまでの使用面を埋め戻し、その上に粘土を貼って床面を構築している。貼り床は、窯全体に及ぶ場合（4・6 次面）と、傾斜変換線付近から前方にのみ行なわれる場合（2・3・5・7 次面）があり、6 次面では 5 次面を 60㎝ほど埋め戻し、その上に粘土を貼り床面を再生している。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり、最も保存のよい部分で約 140 ㎝ある。

［焼成部の施設］すべての面の焼成部の斜面から足場穴が検出されている。足場穴は窯の軸線に沿って 70～80 ㎝間隔で 3 条作られており、最も保存のよい 5・6 次面では 13 段認められた。穴の大きさは幅 20～35 ㎝、深さ 5 ㎝で、40～50 ㎝間隔で掘られている。

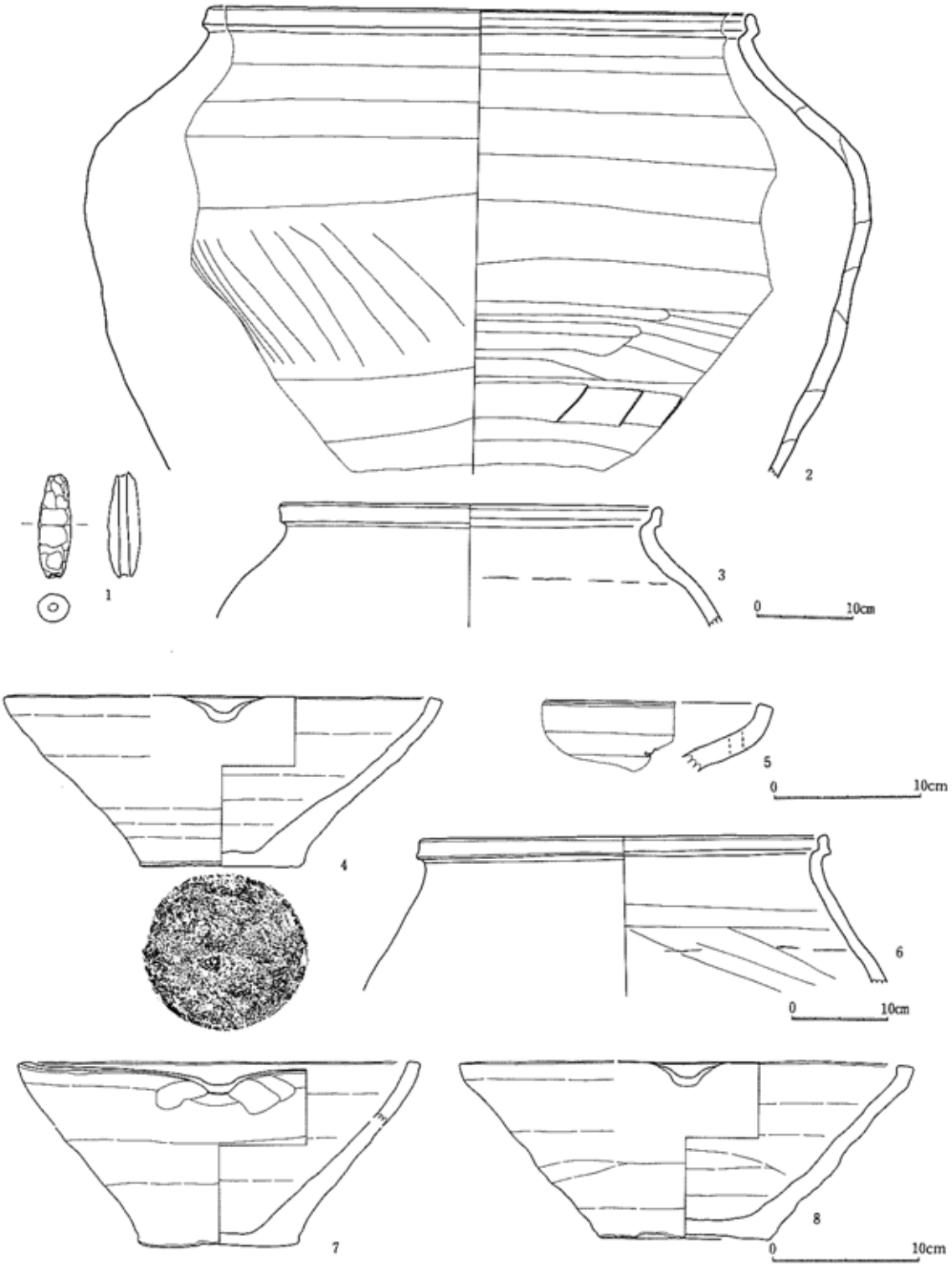
［煙道部］焼成部から煙道部へは窯体のくびれと床面傾斜角の変換によって移行する。煙道部の平面形は馬蹄形を呈しており、規模は幅 1.1m、長さ 1.4mである。床面の傾斜は 23° で、焼成部床面と比べてかなり緩やかである。側壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり残存高は約 50 ㎝である。

焼成部と煙道部の境界付近は残存状況が悪く、ダンパーなどの施設は検出されなかった。

［出土遺物］窯内や灰原から甕・広口壷・小壷・短頸壷・擂鉢・火鉢・陶錘・馬爪形焼台が出土しているが、原位置を保っているものはない。焼成部や燃焼部から出土しているものには焼台として使用されたものや、側壁を補修する際に材として使われたものがある。これらの遺物中で 1・2 次面と 3・4 次面、1 次面と 5 次面、3・4 次面と 5・6 次の遺物の間で接合関係が認められた。また、他の遺構間で接合関係が認められるものもあり、本窯の灰原から出土している火鉢（4-10）はＳＲ-04 灰原 5 層（6 次面に対応）出土のものと接合した。

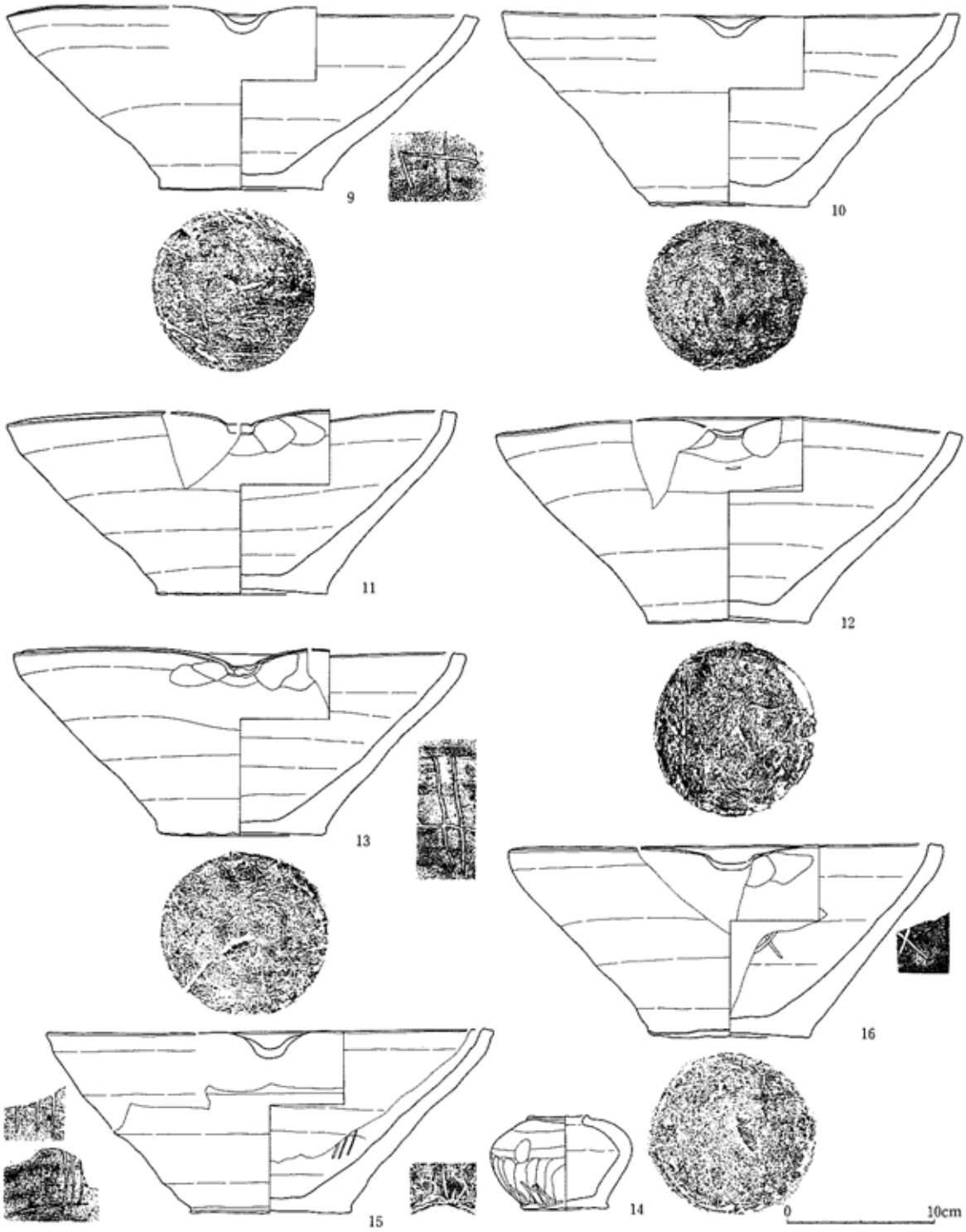

E'
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
SR－01　3次面
E'
4次面
3次面
7次面
6次面
5次面
1次面
112.0m
E
A 111.0m
A'
C 107.0m
C'
B 108.0m
B'
D 107.0m
D'
0
2
4m

第6図　SR－01窯跡



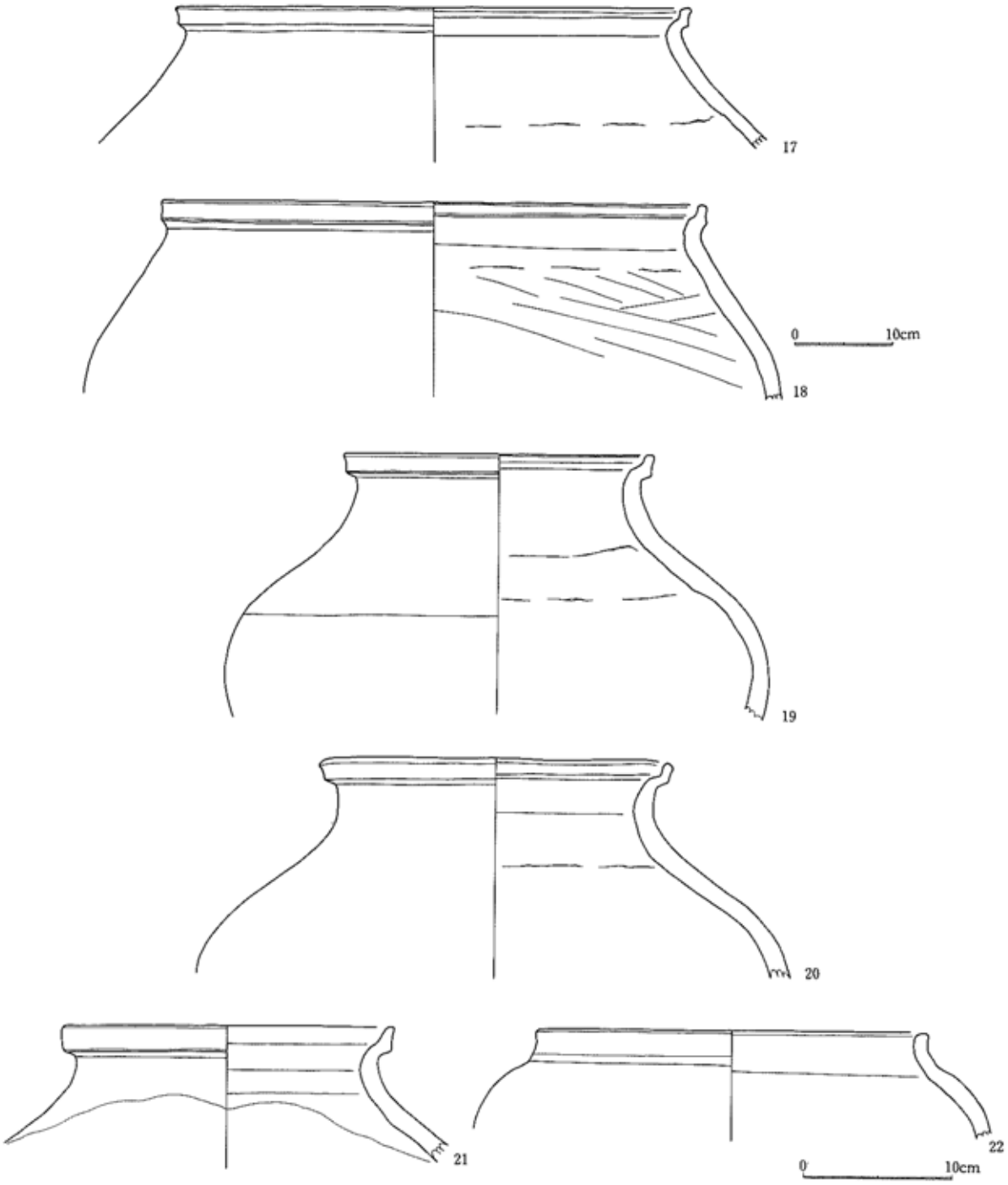
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	内焼	残率	特徴	登録
1	1埋	陶器	2.4		7.4		−	1/1		01−60
2	3焼床	甕	55.6			II B	+	1/8	口縁部のみ	01−61
3	5焼床	甕	39.5			B	−			01−50
4	5焼床	擂鉢	30.1	11.4	12.7	III C5	+		筋目なし　片口部欠損　37.9%	01−30
5	5焼床	火鉢				B	+	小片	口縁部に貫通孔	01−52
6	6焼床	甕	42.0			II B	+	1/6	3焼床と接合	01−37
7	6焼壁	擂鉢	27.6	11.0	12.7	組 B5	+	2/5	筋目なし　壁の修復に使用　39.8%	01−16
8	6焼壁	擂鉢	31.2	11.6	13.2	III C4	−	2/5	筋目なし　壁の修復に使用　片口部欠損　37.2%	01−18

第７図　ＳＲ－01窯跡出土遺物　（１）



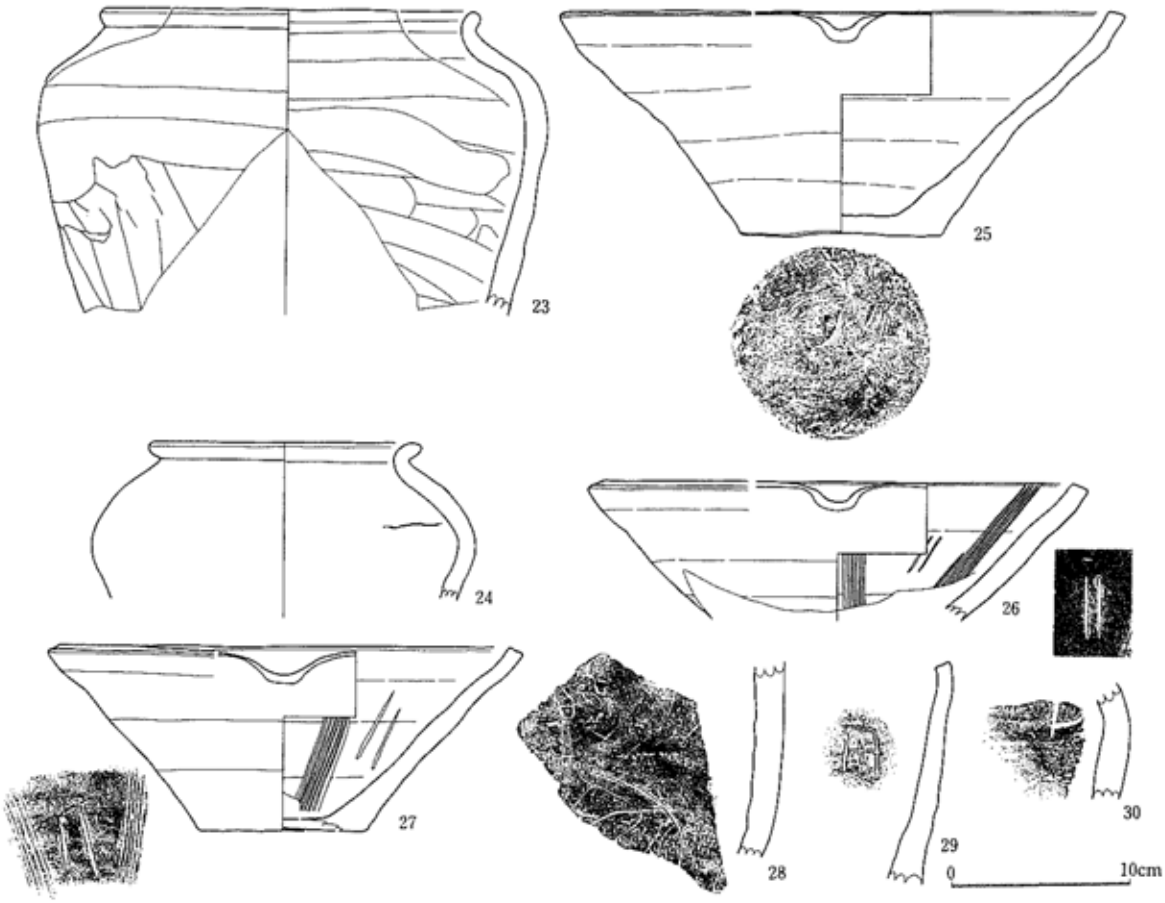
№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
9	6焼壁	埦	32.0	11.0	12.5	Ⅲ C4	−		筋目なし　壁の修復に使用　片口部欠損　34.3%	01−17
10	6焼壁	埦	30.8	10.2	13.2	Ⅲ C3	+	2/5	筋目なし　壁の修復に使用　片口部欠損　33.0%	01−19
11	6焼壁	埦	30.4	11.6	12.5	Ⅲ C3	+	3/4	筋目なし　壁の修復に使用　38.1%	01−20
12	6焼壁	埦	31.6	10.8	14.1	Ⅲ C3	+	2/3	筋目なし　壁の修復に使用　34.2%	01−21
13	6焼壁	埦	30.3	10.8	12.4	Ⅲ C5	−	1/4	筋目あり　壁の修復に使用　「Ⅰ」のヘラ書き　35.6%	01−22
14	6燃床	小壺	4.1	5.8	6.4	A	−	完形	花押状のヘラ書き	01−59
15	6燃床	埦	30.6	11.2	12.8	Ⅲ C4	−		筋目なし「＊」のヘラ書き　36.7%	01−15
16	6燃床	埦	29.5	10.7	13.2	Ⅲ C3	−	1/2	底部に凸形痕　内面に「×」のヘラ書き　36.2%	01−42

第８図　ＳＲ−01窯跡出土遺物　（２）



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
17	7焼床	甕	52.0			ⅡA	+	1/5	口縁部のみ	01－04
18	7焼埋	甕	55.0			ⅡB	－		口縁部のみ	01－24
19	7焼埋	広口壺	20.8			ⅡB	+		口縁部のみ	01－41
20	7焼床	広口壺	23.2			ⅡB	+		口縁部のみ	01－40
21	7焼床	広口壺	21.9			B	+	1/5	口縁部のみ	01－10
22	7焼埋	短頸壺	26.6			A	+	1/8	口縁部のみ	01－23

第９図　ＳＲ－01窯跡出土遺物　（３）



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
23	7焼床	短頸壺	21.4			A	+			01−11
24	7焼床	短頸壺	14.6			A	−	1/8		01−12
25	7焼床	擂鉢	31.8	11.4	12.7	III C3	+	1/4	片口部欠損 35.8%	01−29
26	7焼床	擂鉢	28.0			III	+	1/4	口縁部のみ 「I」のヘラ書き 筋目あり	01−31
27	7焼床	擂鉢	26.2	9.2	8.6	II C1	−	1/4	筋目あり 「I」のヘラ書き 35.1%	01−D

第10図 ＳＲ−01窯跡出土遺物 （4）

ＳＲ−02 窯跡（第 11〜15 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も高位（標高 109〜112m）に位置するもののひとつである。ＳＲ-03 と重複し、これに切られている。したがって新旧関係はＳＲ-02→ＳＲ-03 となる。凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。前庭部から燃焼部にかけては比較的保存がよいが、灰原の部分は後世の林道造成のために、煙道部はＳＲ-03 によって削平されている。天井部はすべて崩落していた。窯体の平面形は紡錘形を呈し、主軸線の方向はＮ−43°−Ｅである。また、斜面と主軸の角度は 5°で、窯は斜面に対してほぼ垂直に作られている。規模は残存する部分で窯長が 15.3m、窯幅は最大部分で 4.3mある。合計 9 回の作り替えが行なわれており、1 次面と 10 次面の標高差は約 1.6mある。

［前庭部］前庭部の側壁は先端に向かって緩やかに外領し、前庭部から焚口にかけてはほぼ直線となる。規模は現存する部分で長さ約 4.2m、幅約 1.7mある。1 次面では地山の掘り込み面を 10 ㎝ほど埋

め戻して、2 次面以降ではそれまでの使用面を埋め込んで床としている。床面の傾斜は約 14°あり、焚口に向かって緩やかに下がる。

［前庭部の施設］前庭部の床面を掘り下げた段階（地山の掘り込み面）で、左側壁の直下から溝が 1 条検出されている。この溝は焚口付近から掘り込まれ、灰原に向かって延びているもので、規模は長さ 3.5m以上、幅約 40 ㎝ある。溝の底面は先端にむかって徐々に深くなっていることから排水の施設と考えられ、窯の機能時には埋め戻されていることから、暗渠であったと考えられる。

［焚口・燃焼部］燃焼部の側壁は焚口から分焔柱に向かって緩やかに外傾する。炭化材が厚く堆積している部分が燃焼部と考えられ、この部分の床面や側壁は青灰色を呈している。炭化材は分焔柱付近まで分布しており、範囲は約 2.2mある。床面は、1 次面では地山の掘り込み面を約 10 ㎝埋め、その上に粘土を貼り構築している。また、2 次面以降はそれまでの使用面を埋め（厚さ 10～30 ㎝）その上に粘土を貼り床面としている。床面の傾斜は、前庭部から焚口にかけてはゆるやかに下り、そこから分焔柱にかけてはほぼ水平である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは約 80㎝ ある。側壁は基本的には掘り込み面をそのまま壁としているが、2 次面では大きな補修が行なわれている。補修は分焔柱付近の左側壁に焼台や陶片を積み上げその上に粘土を貼りつけるというもので、その結果この部分は前段階と比べ 60 ㎝ほどすぼまった平面形になっている。

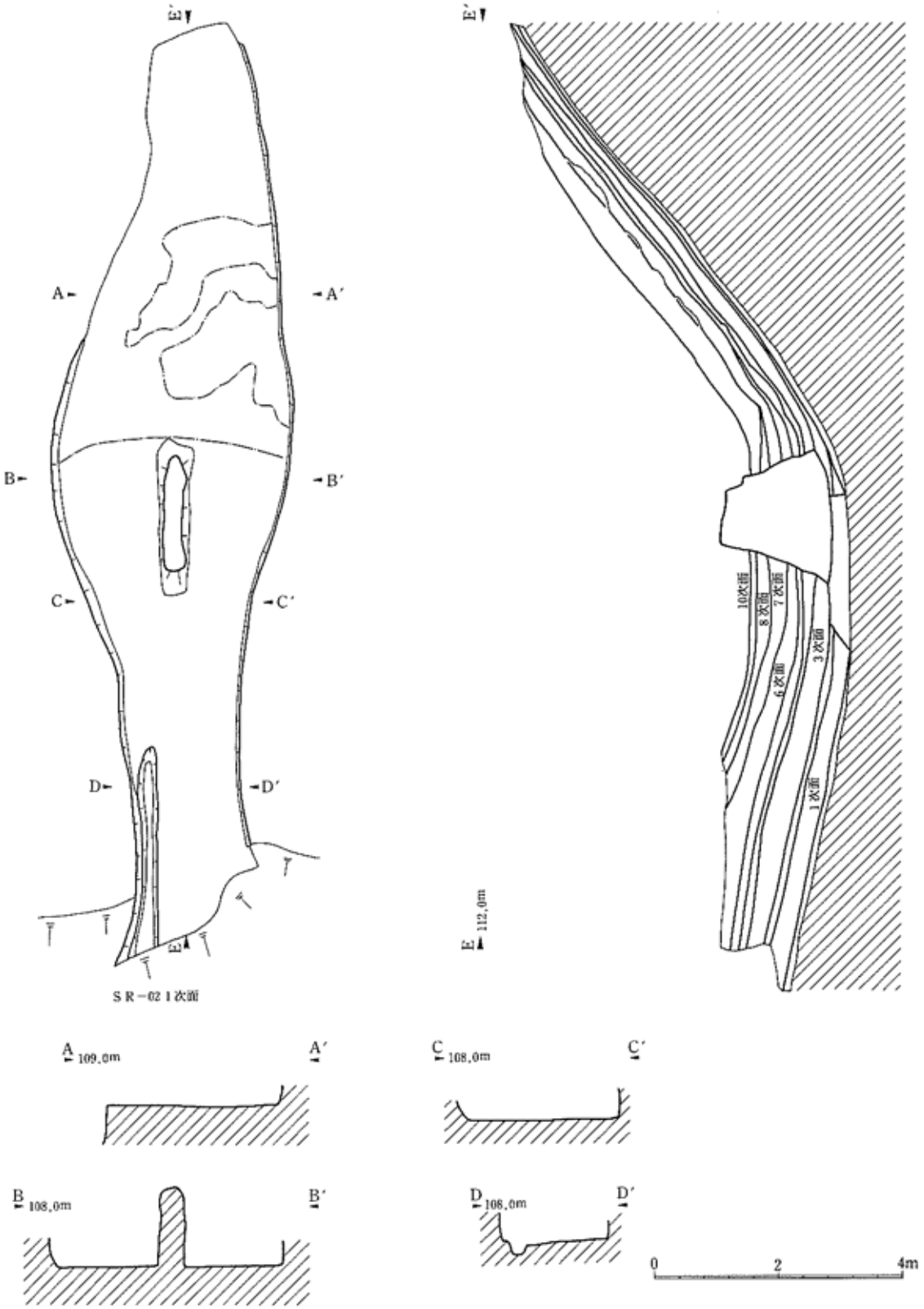
［分焔柱］分焔柱は地山を削り出して作られ、10 次面では約 50 ㎝の高さまで残存している。平面形は細長い長方形を呈し、規模は基底部で長さ 2.6m、幅 0.5mある。4 次面で大きな作り替えが行なわれており、この面の分焔柱は、前段階よりも約 40 ㎝後方に位置をずらして作られている。通焔孔の幅は基底部で、1 次面の右側が 100㎝、左側が 120㎝、2 次面の右側が 103㎝、左側が 80㎝ である。

［焼成部］焼成部の左側壁はＳＲ-03 により切られているが、残存部から平面形は細長い鶏卵形を呈すると考えられる。窯壁は通焔孔の付近から徐々に広がり分焔柱の後端付近で最大幅となり、煙道に向かって緩やかに幅をせばめる。残存する部分の規模は水平距離で約 9.2mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は 11.7mである。幅は分焔柱の後端付近で約 4.3mある。床面の傾斜は分焔柱付近ではほぼ水平であるが、傾斜変換線よりも奥は約 39°の急角度になっている。

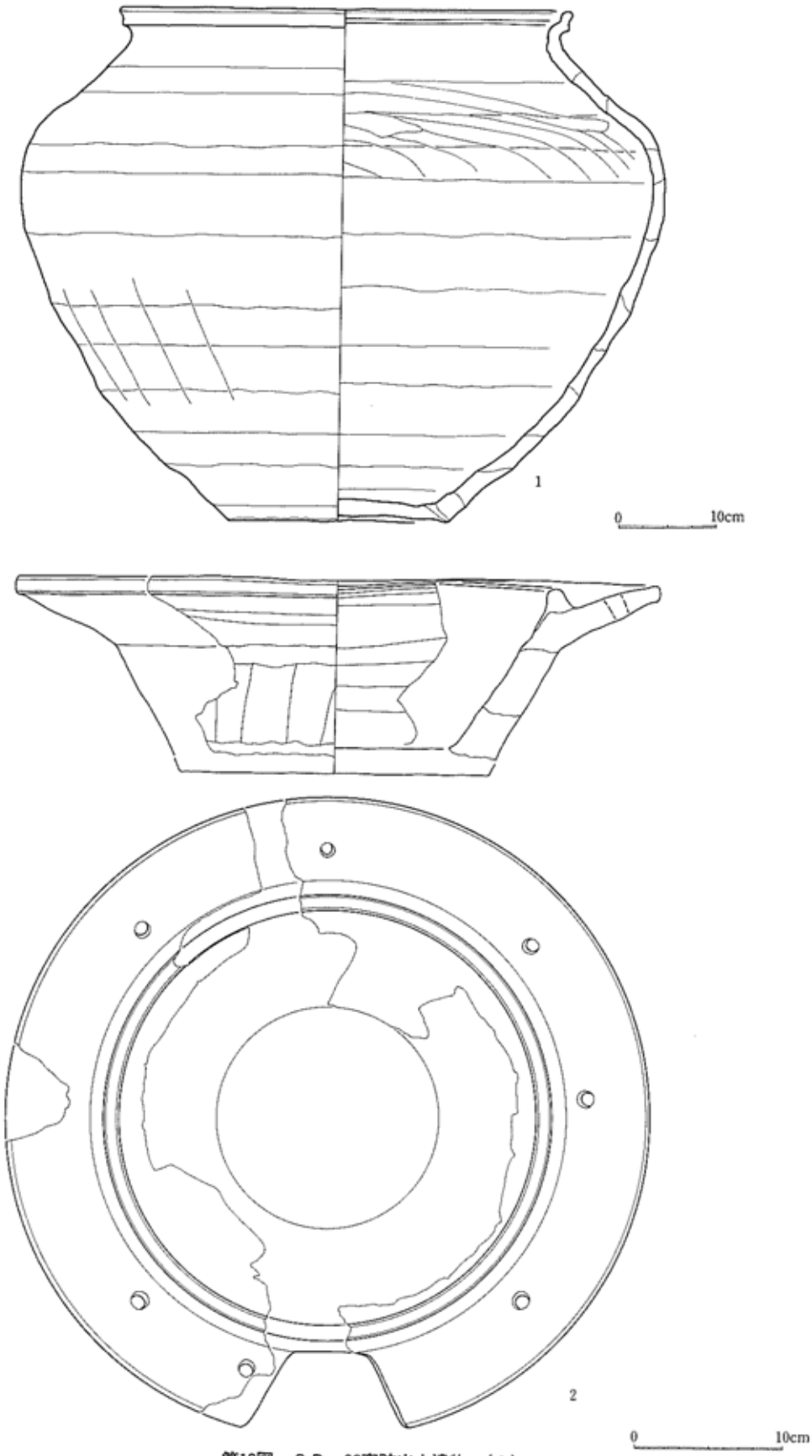
焼成部の床面はすべて貼り床で、1 次面では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で埋め戻し、その上に粘土を貼り構築している。2 次面以降ではそれまでの使用面を埋め戻し、その上に粘土を貼って床面を再構築している。床面の作り替えは、燃焼部全体に及ぶ場合（1・3～6・8・10 次面）と、傾斜変換線付近から前方のみ行なわれる場合（2・7・9 次面）があり、9 次面から 10 次面の作り替えの際には約 40㎝ ほど嵩上されている。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約 90 ㎝ある。

［焼成部の施設］床面の残存状況のよい 5～7 次面と 10 次面で焼成部の斜面から足場穴が検出されている。足場穴は窯の軸線方向に沿って約 1m間隔で 3 条作られており、最も保存のよい 1 次面では 11 段認められた。穴の大きさは幅 20～35 ㎝、深さ 5 ㎝で、40～50 ㎝間隔で掘られている。

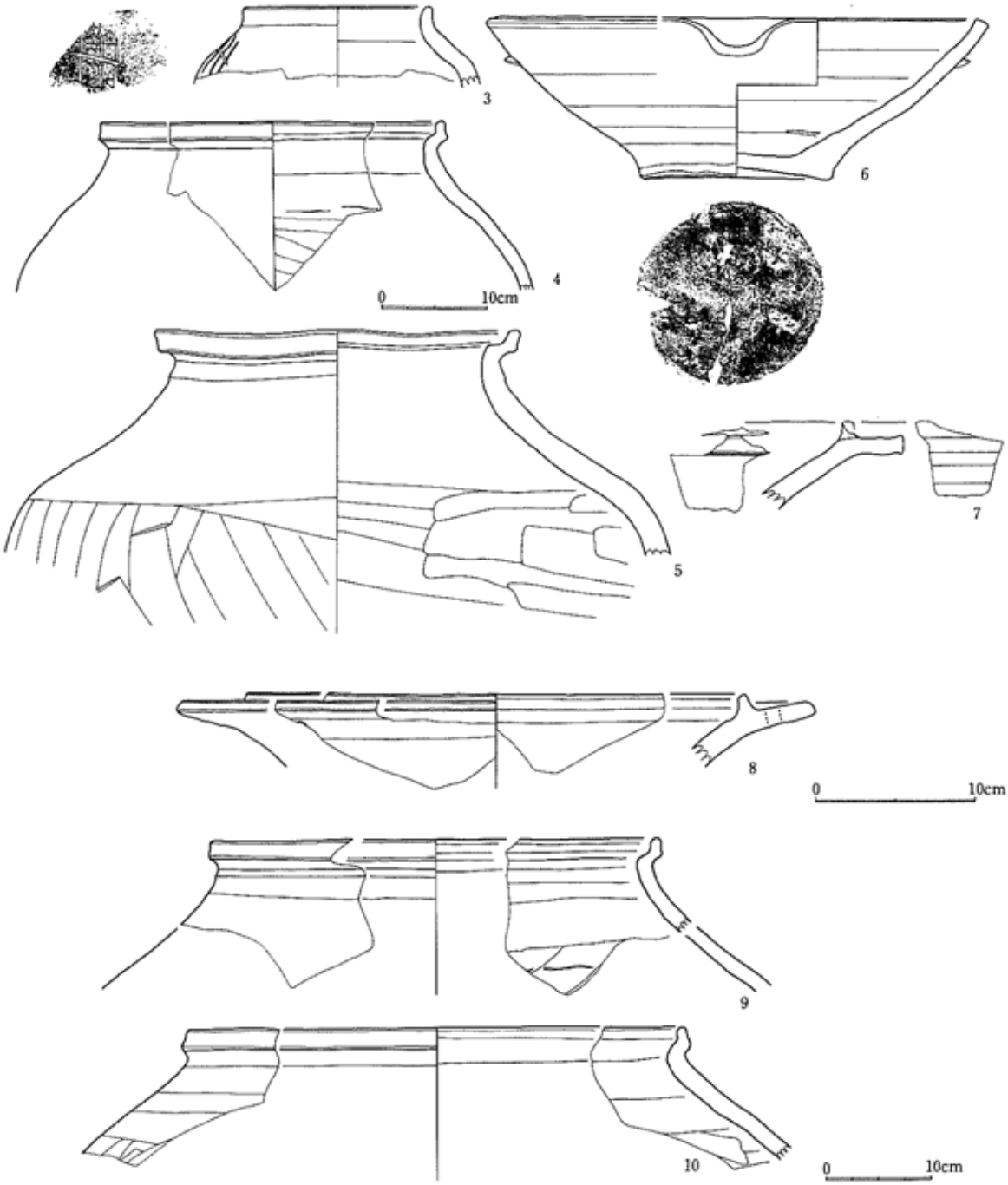
［出土遺物］窯内や灰原から甕・広口壷・短頸壷・五輪塔・擂鉢・馬爪形焼台が出土しているが、原位置を保っているものはない。焼成部や燃焼部から出土しているものには焼台として使用されたも


E
E′
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
SR－02 1次面
10次面
8次面
7次面
6次面
3次面
1次面
E 112.0m
A 109.0m
A′
C 108.0m
C′
B 108.0m
B′
D 108.0m
D′
0
2
4m

第11図　ＳＲ－02窯跡

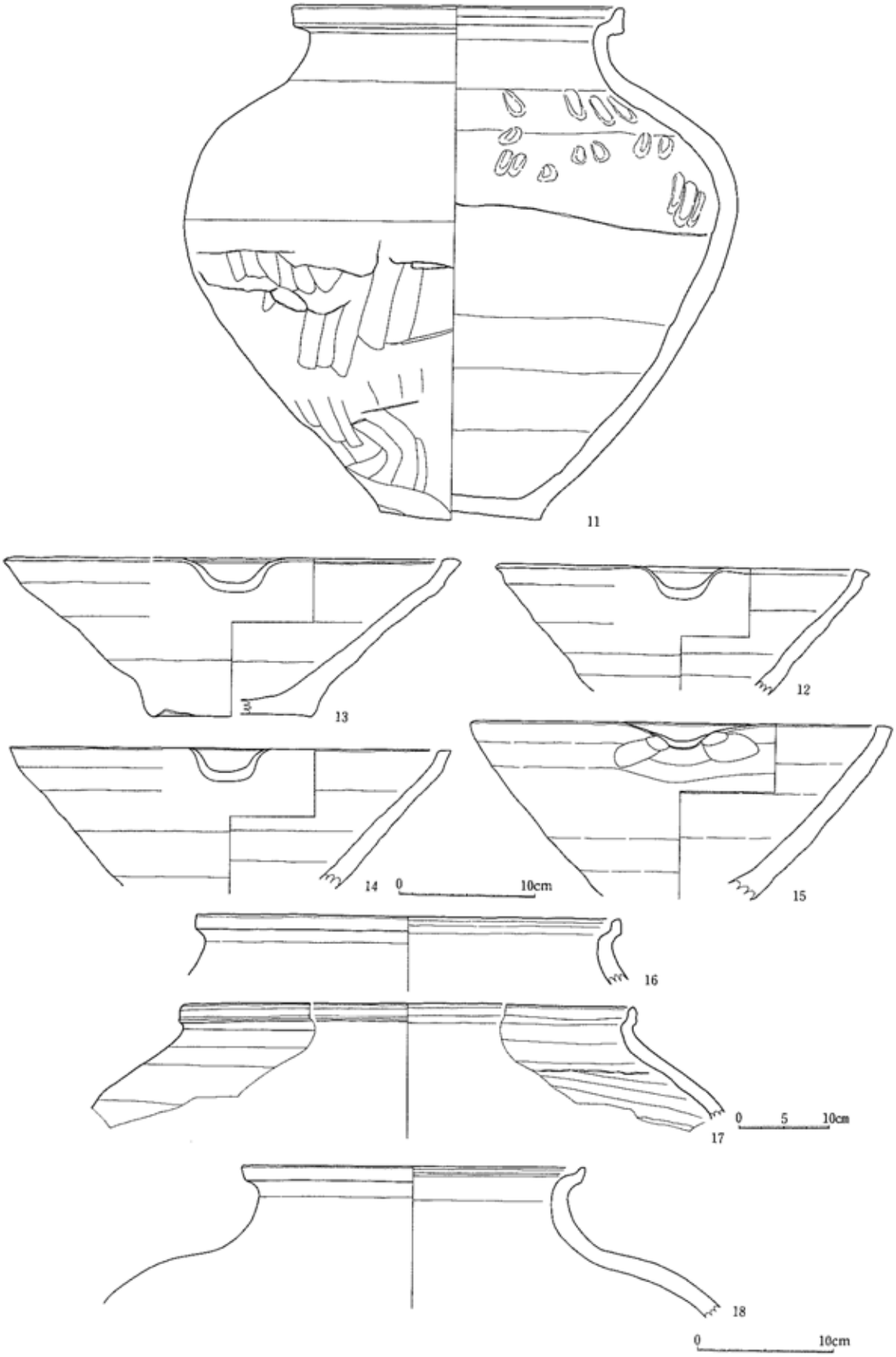


第12図　ＳＲ－02窯跡出土遺物　（１）

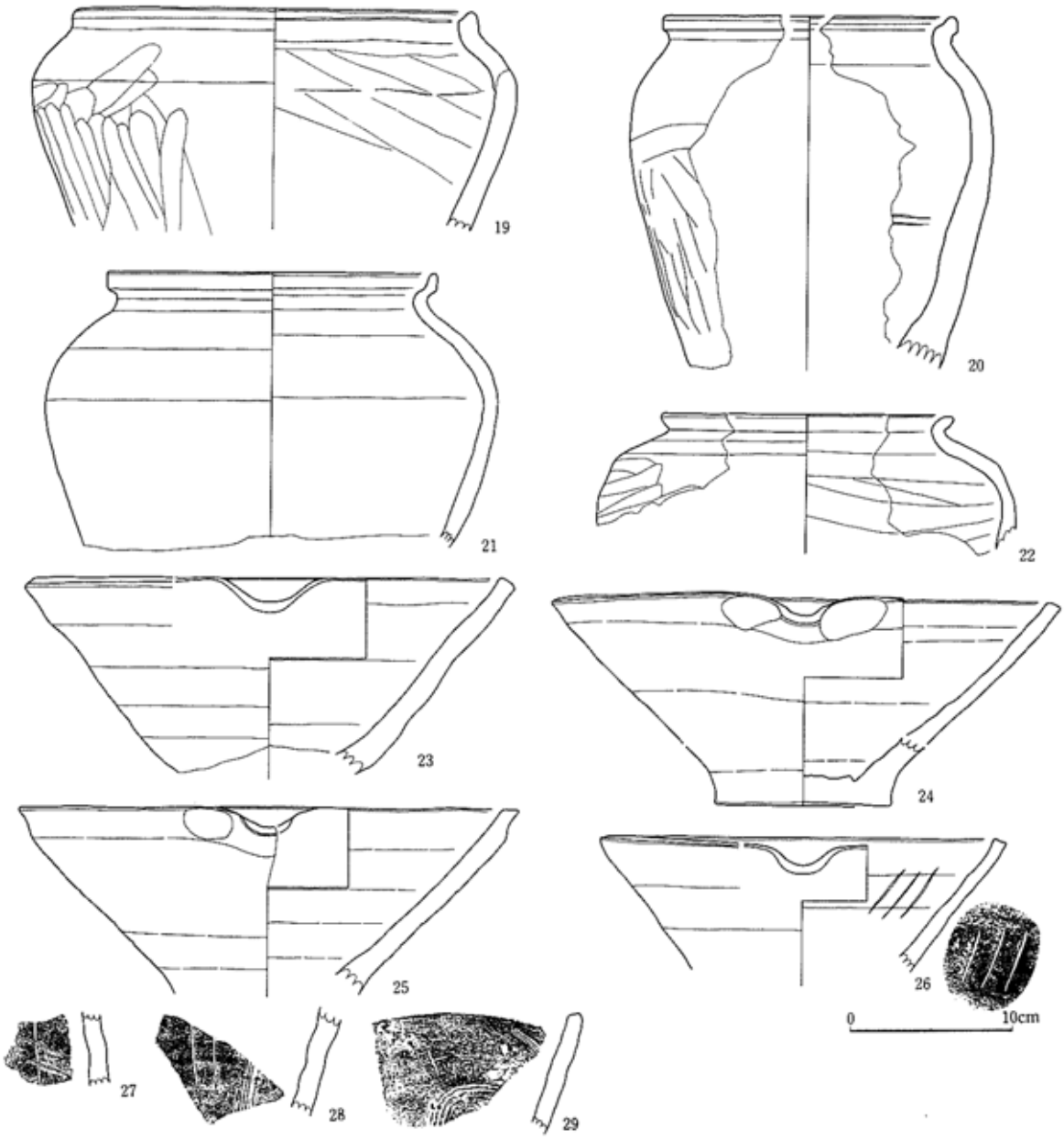


No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	刷毛	残存	特徴	登録
1	1遺床	甕	45.8	22.8	53.0	IIB	−	1/4	体部最大径66.1cm	02−89
2	1遺床	火鉢	45.2	23.3	14.5	A	−	1/3	SR-12伏原4層出土のものと接合関係あり	02−76
3	1遺床	短頸壺	11.6			A	+	1/5	肩に「井」のヘラ書き	02−87
4	3遺床	甕	32.2			IIB	+	1/8		02−83
5	5遺床	広口壺	22.8			IIC	+	1/5		02−63
6	5伏原	擂鉢	31.4	11.4	10.2	IIIC4	+	1/5	片口欠損　筋目なし　36.3%「＝」のヘラ書き	02−60
7	5遺床	火鉢				A	+	小片		02−64
8	5遺床	火鉢	40.0			A	+			02−72
9	67遺床	甕	42.3			IIA	+	1/8		02−33
10	67遺床	甕	47.2			IIB	+	1/8		02−29

第13図　ＳＲ－02窯跡出土遺物　（２）

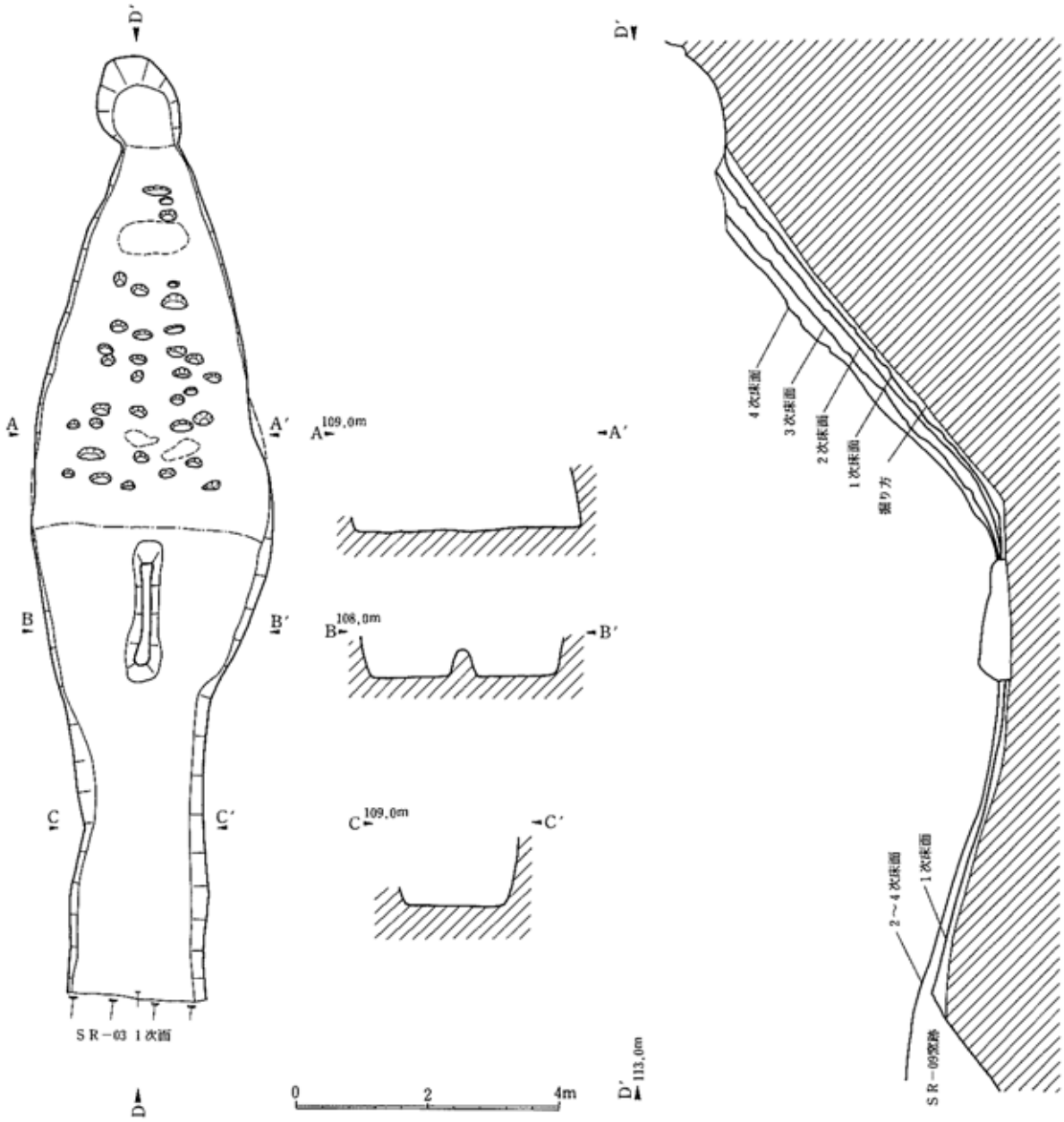


第14図　ＳＲ－02竈跡出土遺物　（３）



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	焼成	残率	特徴	登録
11	67焼床	広口壺	24.5	11.9	38.0	IIB	+	1/2		02−86
12	67焼床	甕鉢	27.4			II	+	1/8	片口欠損　筋目なし	02−40
13	67焼床	甕鉢	33.6	11.6	11.7	IIIC4	+	1/6	片口欠損　筋目なし　34.5%	02−39
14	8壁壁	甕鉢	32.4			III	−		片口欠損　筋目なし	02−09
15	8壁壁	甕鉢	31.0			III	+	1/4	10次焼成部埋土と接合関係あり　片口欠損　筋目なし	02−45
16	10焼埋	甕	47.0			B	+	1/6		02−62
17	10焼埋	甕	50.4			IIB	+	1/5		02−88
18	10焼埋	広口壺	23.2			IIC	+		全体に降りもの	02−52
19	10焼埋	短頸壺	24.2			B	+			02−51
20	10焼埋	短頸壺	20.2			C	+	1/5		02−59
21	10焼埋	短頸壺	17.6			C	+	1/2		02−50
22	10焼床	短頸壺	18.0			A	+	小片		02−03
23	10焼埋	甕鉢	30.2			III	+	2/5	片口欠損　筋目なし	02−43
24	10焼床	甕鉢	31.6	10.6	13.3	IIIC4	+	1/3	筋目なし　33.5%	02−21
25	10焼埋	甕鉢	30.8			III	+	1/8	筋目なし	02−44
26	10焼埋	甕鉢	24.8			II			筋目なし「＝」のへら書き	02−D

第15図　ＳＲ−02窯跡出土遺物　（４）



第16図　ＳＲ－03窯跡

のや、側壁を補修する際に材として使われたものがあり、焼台として使われた物は二次焼成の痕跡が認められる。これらの遺物中で10次面出土の五輪塔火輪（4-54）はＳＲ-04灰原1～7層（4～8次面に対応）出土のものと、火鉢（2-02）はＳＲ－12灰原4Ｃ・4D層出土のものとそれぞれ接合関係が認められた。

ＳＲ－03窯跡（第16・17図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も高位（標高約110～113m）に位置する。ＳＲ-02・04・09とそれぞれ重複し、すべての窯を切っている。したがってこれらの中で最も新しい。基盤の凝

灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。天井部はすべて崩落しているが、最も保存状態のよい窯のひとつである。窯体の平面形は細長い紡錘形を呈し、主軸線の方向はＮ－57°－Ｅである。斜面と窯体主軸の角度は87°で窯体は斜面に対してほぼ直角に作られている。規模は残存する部分で窯長が14.9m、窯幅は最大部分で3.8mある。合計で3回の作り替えが認められる。

［前庭部］前庭部はＳＲ-09の焼成部の上半から掘り込まれている。前庭部は通路状を呈しほぼ直線的に延びる。規模は長さ5.0m、幅1.8mある。床面は、1次面では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約10㎝ほど埋め込んだ面を、2次面以降ではそれまでの使用面の上に堆積した土の上面をそのまま床面としている。床面は焚口に向かって下がり、角度は17°ある。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線的であるのに対し、焚口から分焔柱にかけては緩やかに開く。前庭部の最もすぼまる部分から分焔柱の前端から約50㎝ほど奥まった付近にかけて木炭が多量に検出されており、この部分が燃焼部と考えられる。規模は全長約1.8mある。

床面は、1次面では地山の掘り込み面を約10㎝埋め、その上に粘土を貼り構築している。また、2次面以降は大きな作り替えは行なわれておらず、それまでの使用面の上に堆積した土の上面をそのまま床面にしている。床面の傾斜は4°で分焔柱に向かってわずかに下る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは約1mある。掘り込み面をそのまま壁としている。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られ、1次面では約50㎝の高さまで残存している。平面形は細長い長方形を呈し、規模は基底部で長さ1.9m、幅0.4mある。大きな作り替えは行なわれておらず、規模や位置もほぼ同じである。通焔孔の幅は焼成部に向かって右側が82㎝、左側が92㎝ある。

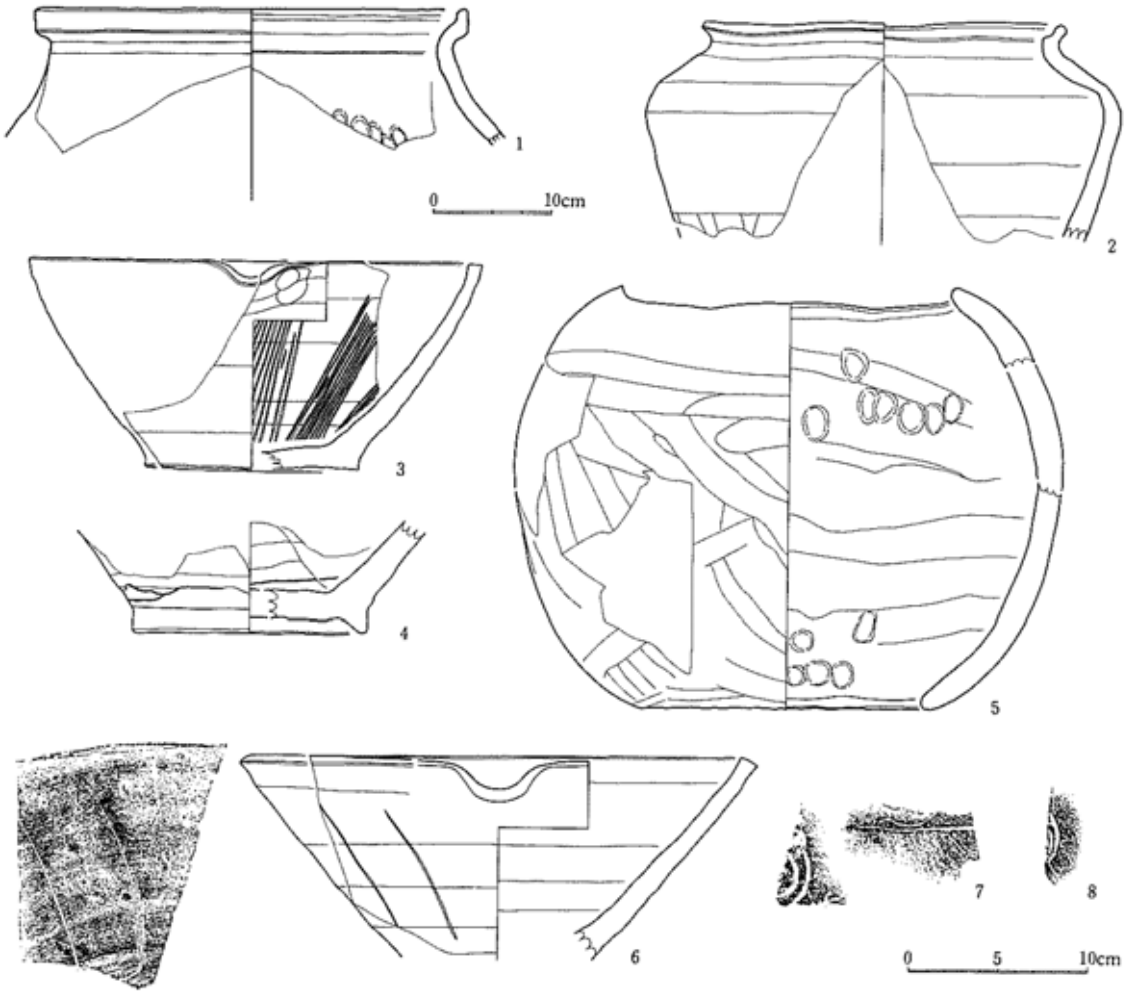
［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。通焔孔の付近から徐々に広がり傾斜変換線の部分で最大幅となり、煙道に向かって幅をせばめる。規模は水平距離で約8.1mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は9.7mある。幅は傾斜変換線からやや奥まった付近で最大となり約3.7mある。床面の傾斜は分焔柱付近ではほぼ水平で、傾斜変換線よりも奥は約41°の急角度になっている。

床面はすべて貼り床で、1次面では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で埋め戻しその上に粘土を貼り構築している。2次面以降ではそれまでの使用面を20～30㎝ほど埋め、その上に粘土を貼り床面を構築している。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約120㎝ある。

［焼成部の施設］すべての面で、焼成部の斜面から足場穴が検出されている。足場穴は窯の軸線方向に沿って約60㎝間隔で3条作られており、最も保存のよい3次面では12段認められた。穴の大きさは幅20～35㎝、深さ5㎝で、30～40㎝間隔で掘られている。

［煙道部］焼成部から煙道部へは窯体のくびれと床面傾斜角の変換によって移行する。煙道部の平面形は馬蹄形を呈しており、規模は幅90㎝、長さ1.3mである。床面の傾斜はほぼ平坦である。側壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり残存高は約40㎝である。ダンパーなどの施設は検出されなかった。

［出土遺物］窯内から出土したもので図示したものとしては甕・短頸壷・擂鉢・高台鉢・五輪塔・馬爪形焼台があるが、これらの他に広口壷・小壷が出土している。いずれも原位置を保っているものはない。焼成部や燃焼部から出土しているものの多くは第二次焼成の痕跡が認められ、焼台として使用



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
1	4灰原	甕	36.4			B	−	1/4		03-01
2	4灰原	短頸壺	19.8			C	−	1/4		03-02
3	4灰原	擂鉢	25.4	12.0	11.8	IIA1	−	1/8	筋目あり	03-05
4	4灰原	台付鉢		12.8			−	1/4	底部のみ　付け高石	03-09
5	4焼床	五輪塔	30.4		23.6		+		水輪　SR-04と接合関係	03-08
6	灰原	擂鉢	28.4			II			「1」のヘラ書き	タ03-1

第17図　ＳＲ－03窯跡出土遺物

されたものと考えられる。また、4 次面の傾斜変換線付近からは馬爪形焼台が多量に出土しており、これらは燃焼部の斜面部から剥離転倒したものと考えられる。遺物の中で、五輪塔水輪（3-5）はＳＲ-04 の 10 次面出土のものと接合関係が認められた。

ＳＲ－04 窯跡（第 18～29 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も高位（標高約 109～112m）に位置する窯のひとつである。ＳＲ-03 やＳＲ-08、ＳＲ-07 と重複し、ＳＲ-03 に切られ、ＳＲ-07 とＳＲ-08 を切っており、新旧関係はＳＲ-07・ＳＲ-08→ＳＲ-04→ＳＲ-03 となる。

基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、焚口・燃焼部・焼成部からなる。燃焼部・焼成部は比較的保存がよいが、焼成部の上部から煙道部にかけては後世の林道造成のために削平されている。天井部はすべて崩落していた。

窯体の平面形は紡錘形で主軸線の方角はN－68°－Eである。斜面と主軸の角度は27°で、窯は谷側に若干偏って作られている。規模は残存する部分で窯長が15.0m、窯幅は最大部分で4.0mある。合計で9回の作り替えが行なわれており、1次面と10次面の標高差は2.3mにも及ぶ。

［前庭部］前庭部はＳＲ-07の焼成部の上半から掘り込まれている。前庭部の平面形は撥状を呈しており先端部に向かって大きく広がる。規模は長さ4.3m、幅1.3～1.5m、先端部で約3.0mある。

床面は1次面では地山の掘り込み面をそのまま、2次面以降はそれまでの使用面を10～30cmほど埋めて新たな面としている。床面は焚口に向かって下がり、その角度は19°ある。

［燃焼部］前庭部の最もすぼまる部分の焚口から分焔柱の40cmほど奥まった付近にかけて木炭が多量に検出されており、この部分が燃焼部であると考えられる。全長は約2.1mある。平面形は前庭部は直線的であるのに対して、燃焼部は分焔柱に向かって緩やかに開く。床は1次面が地山の掘り込み面をそのまま使用しているが、2 次面以降はすべて貼り床となっている。貼り床は、燃焼部ではそれまでの使用面を窯を掘り抜いた土で埋め、その上に粘土を貼って構築している。床面の傾斜は前庭部から焚口にかけては緩やかに下がるが、焚口から分焔柱の付近はほぼ水平である。

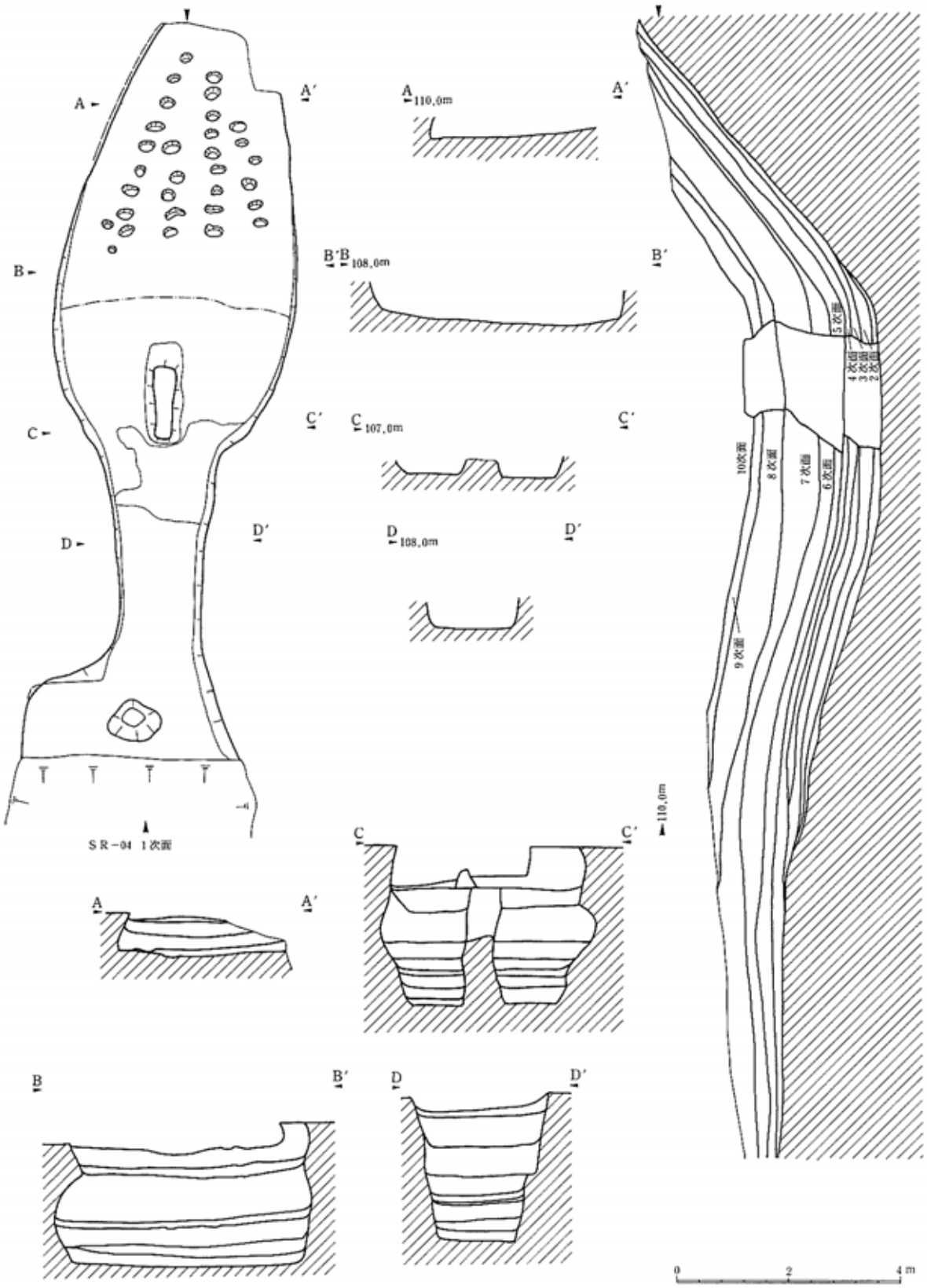
壁は基本的には掘り込み面をそのまま壁としているが、8次面と10次面では剥離した部分に焼台の陶片を積み上げそこに粘土を貼りつけて修復している。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、保存のよい7次面と9次面では約70cm残存している。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られ、床面から約50cmの高さまで残存している。平面形は隅の丸い長方形を呈し、規模は基底部で長さ2.0m、幅0.6mある。分焔柱は5・6・8次面で作り替えが行なわれており、8～10次面に伴う分焔柱は初めのものよりも約70cm後方に位置をずらして作られている。通焔孔の幅は焼成部に向かって右側が128cm、左側が106cmある。

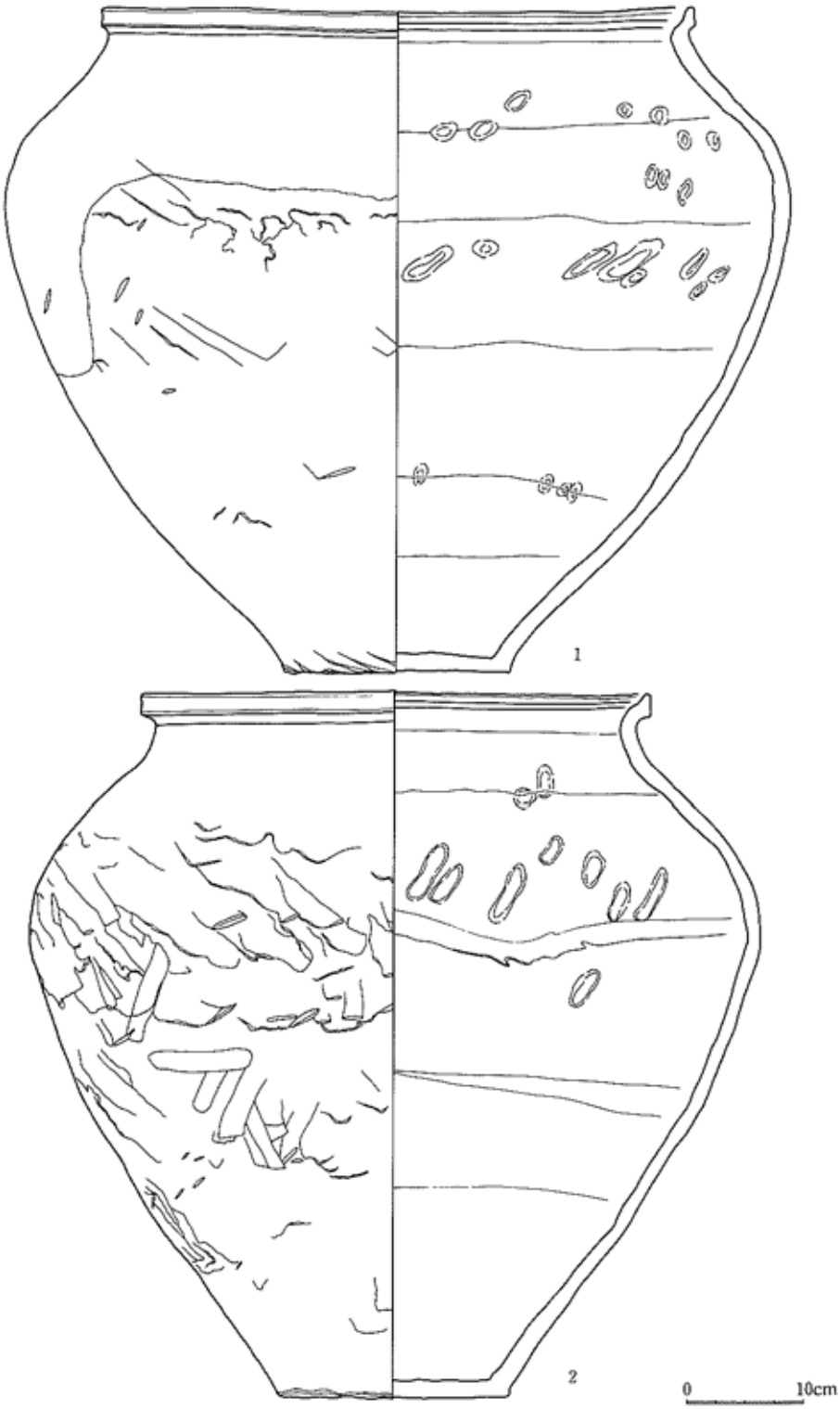
［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。通焔孔の付近から徐々に広がり傾斜変換線の部分で最大幅となり、煙道に向かって幅をせばめる。規模は水平距離で約7.4mあるが、実質的な床面の長さ(斜距離)は約9.2mある。幅は分焔柱の基部から約80cm奥まった部分で最大となり約4.0mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まではほぼ水平で、それよりも奥は約 38°の急角度になっている。床面は1次面では地山の掘り込み面をそのまま使用しているが、2・3次面では傾斜変換線から手前の部分は貼り床となっている。また、4 次面以降は床面全体を貼り替えており、それまでの使用面を埋め込んで新しい面を作り出している。貼り床の厚さは各面により大きく異なり最も厚い8次面では約80cmある。また、5次面や9次面の床面からは幅3～5cm、長さ50cm前後の数条単位の線状痕が顕著に認められており、棒状の工具で床面を叩きしめた痕跡と考えられる。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約80cmある。

［焼成部の施設］残存状況の悪い7次面を除くすべての面で、焼成部の斜面から足場穴が検出されている。足場穴は窯の軸線方角に沿って70～80cm間隔で3～4条作られており、多いもので約10段認められた。穴の大きさは幅20～30cm、深さ5cmで、40～50cm間隔で掘られている。

［その他の施設］前庭部から不整の方形のピットが1個検出されている。規模は一辺約80cmで、深さ約30cmある。

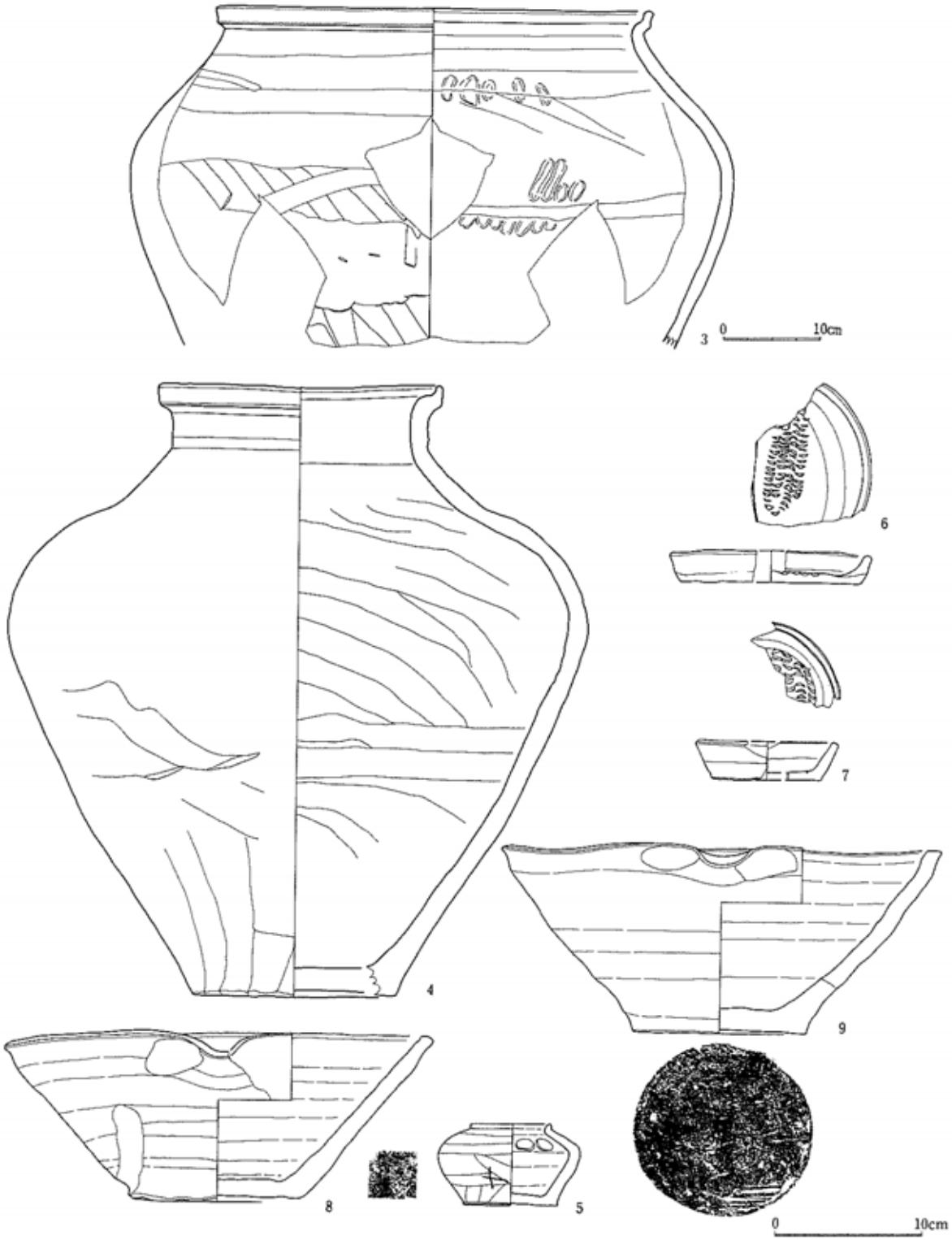

A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
A 110.0m
B′B 108.0m
C 107.0m
D 108.0m
SR－04 1次面
5次面
4次面
3次面
2次面
10次面
9次面
8次面
7次面
6次面
110.0m
0
2
4m

第18図　ＳＲ－04窯跡



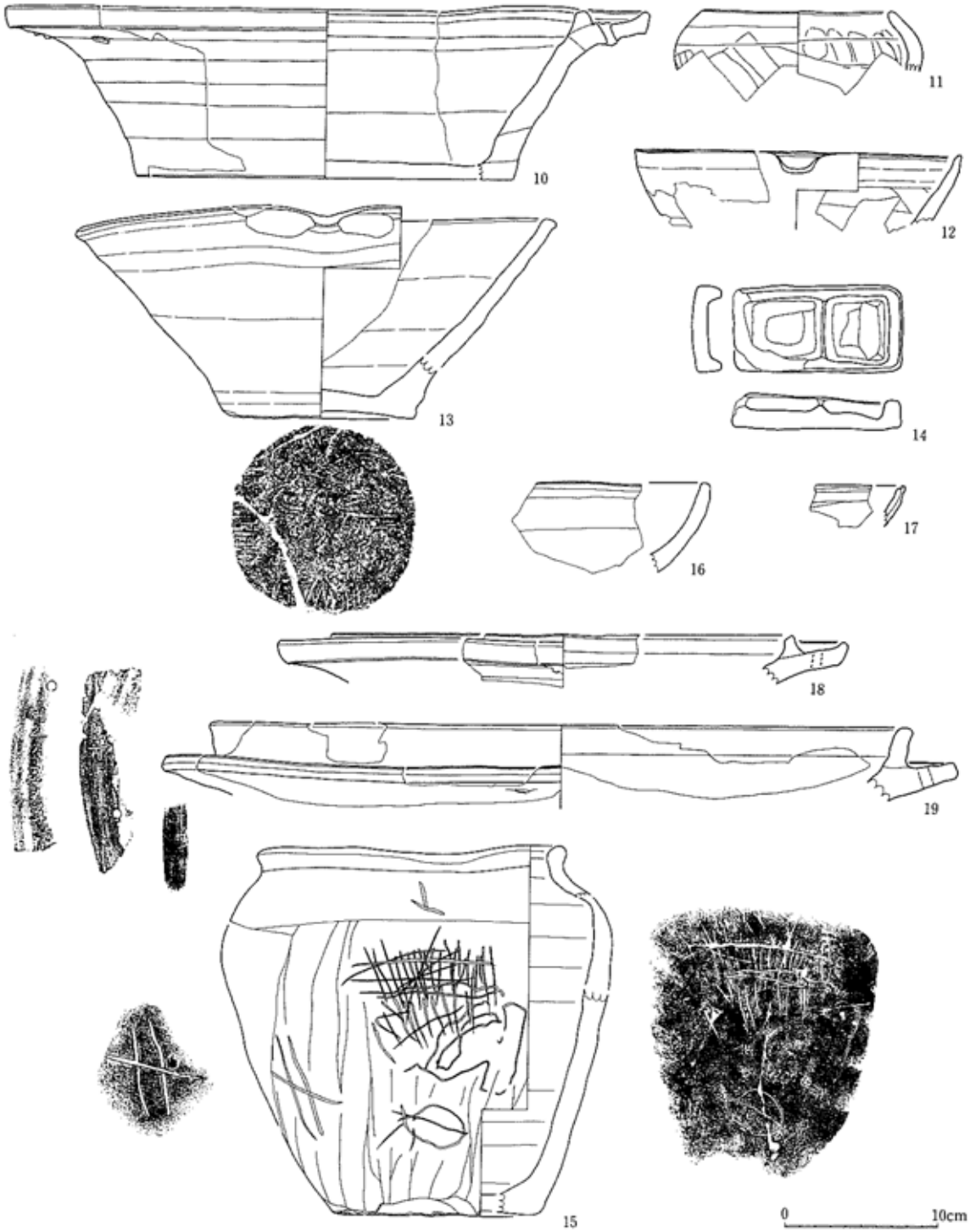
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
1	1焼床	甕	50.4	19.4	52.2	II B	−	4/5	最大径67.1cm	04−26
2	1焼	甕	43.0	19.8	60.7	1 B	−	1/2	最大径62.4cm	04−27

第19図　ＳＲ−04窯跡出土遺物　（1）



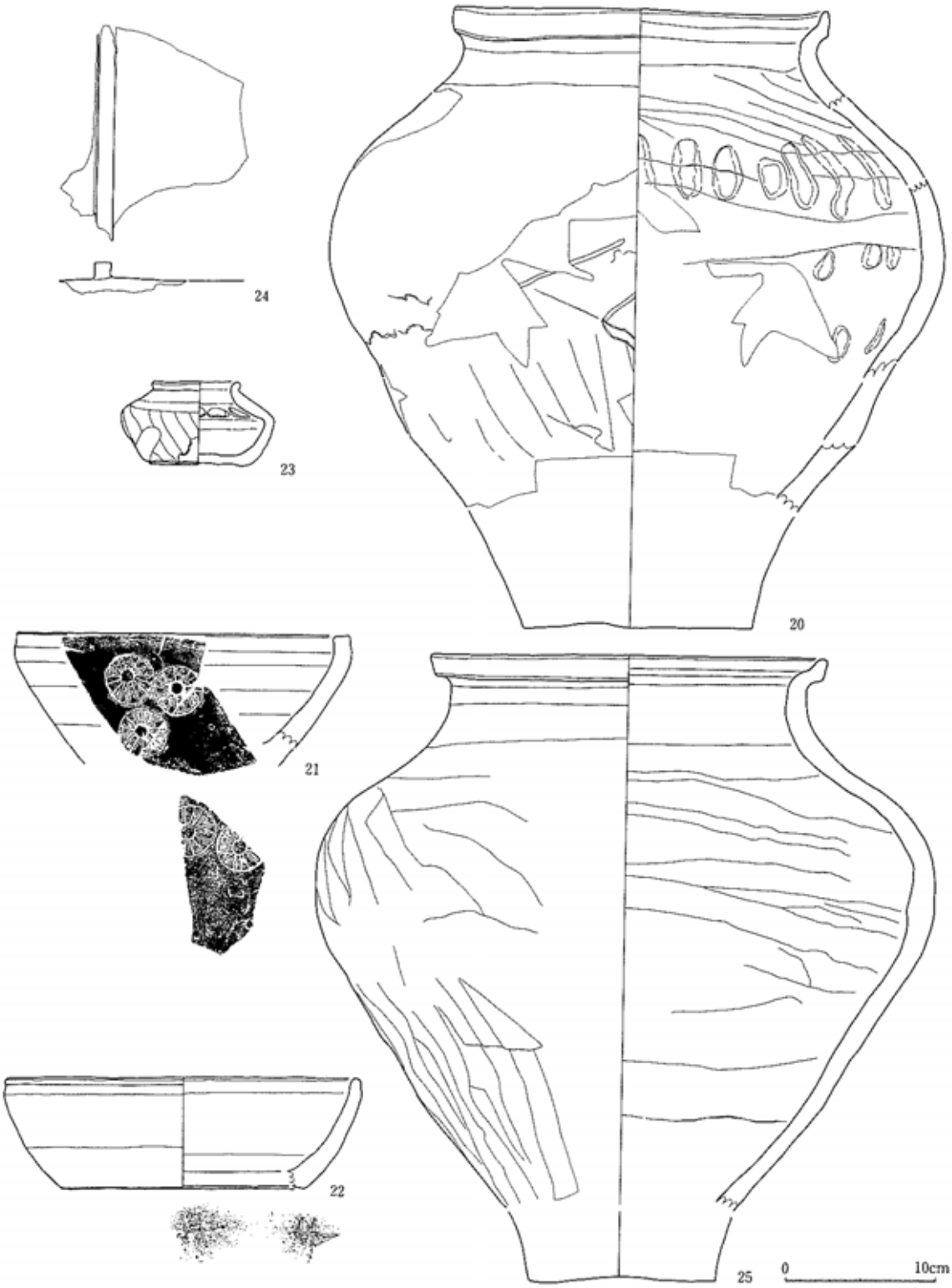
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
3	1焼床	甕	44.4			II B	−	1/4	最大径62.3cm	04−48
4	3灰原	広口壺	18.8	13.6	42.0	I C	+	1/4	最大径39.5cm	04−45
5	5灰原	小壺	5.4	6.4	5.7	A	−	3/5	最大径9.7cm「＋」のヘラ書き	04−40
6	3灰原	鉢 皿	13.7	12.2	2.3	−	−	1/4	半截竹管状の工具で押目	04−60
7	3灰原	鉢 皿	9.7	7.4	2.8	−	−	1/4	半截竹管状の工具で押目	04−62
8	5灰原	鍋 鉢	29.2	11.9	11.8	III B4	+	1/2	筋目なし	04−29
9	5焼床	鍋 鉢	30.0	11.8	13.0	III B1	+	3/4	筋目なし	04−23

第20図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　（２）



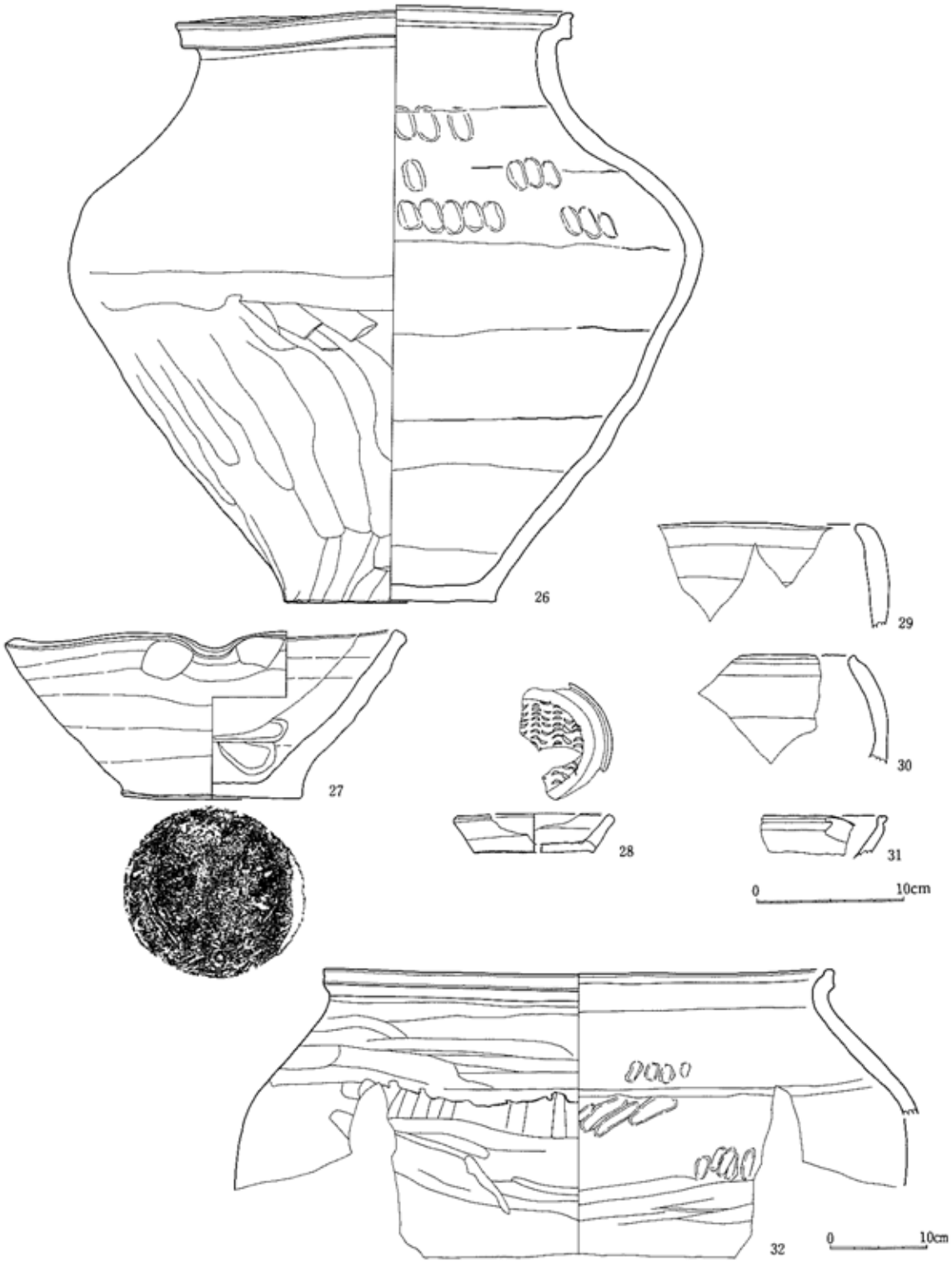
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
10	6灰原	火鉢	41.8	24.6	11.5	A	−	1/6	SR-01出土のものと接合	04−30
11	6焼床	無頸壺	12.2				+	1/4	口縁のみ	04−50
12	6灰原	擂鉢	21.2			II	+	1/4		04−57
13	6灰原	擂鉢	31.5	12.3	14.1	III C5	+	2/3	39.0%	04−24
14	6灰原	硯	11.1	5.8	2.4		−	4/5		04−38
15	7焼床	短頸壺	18.9	13.6	24.4	A	−	3/4	体部にヘラ書き「記号・文様」	04−65
16	7灰原	擂鉢？					−	小片		04−52
17	7焼床	擂鉢？					+	小片		04−58
18	7灰原	火鉢	37.4			A	−	1/10		04−67
19	8灰原	火鉢	52.2			A	−	1/6	「陣？川留主者平四・J」「・等」のヘラ書き	04−66

第21図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　（３）



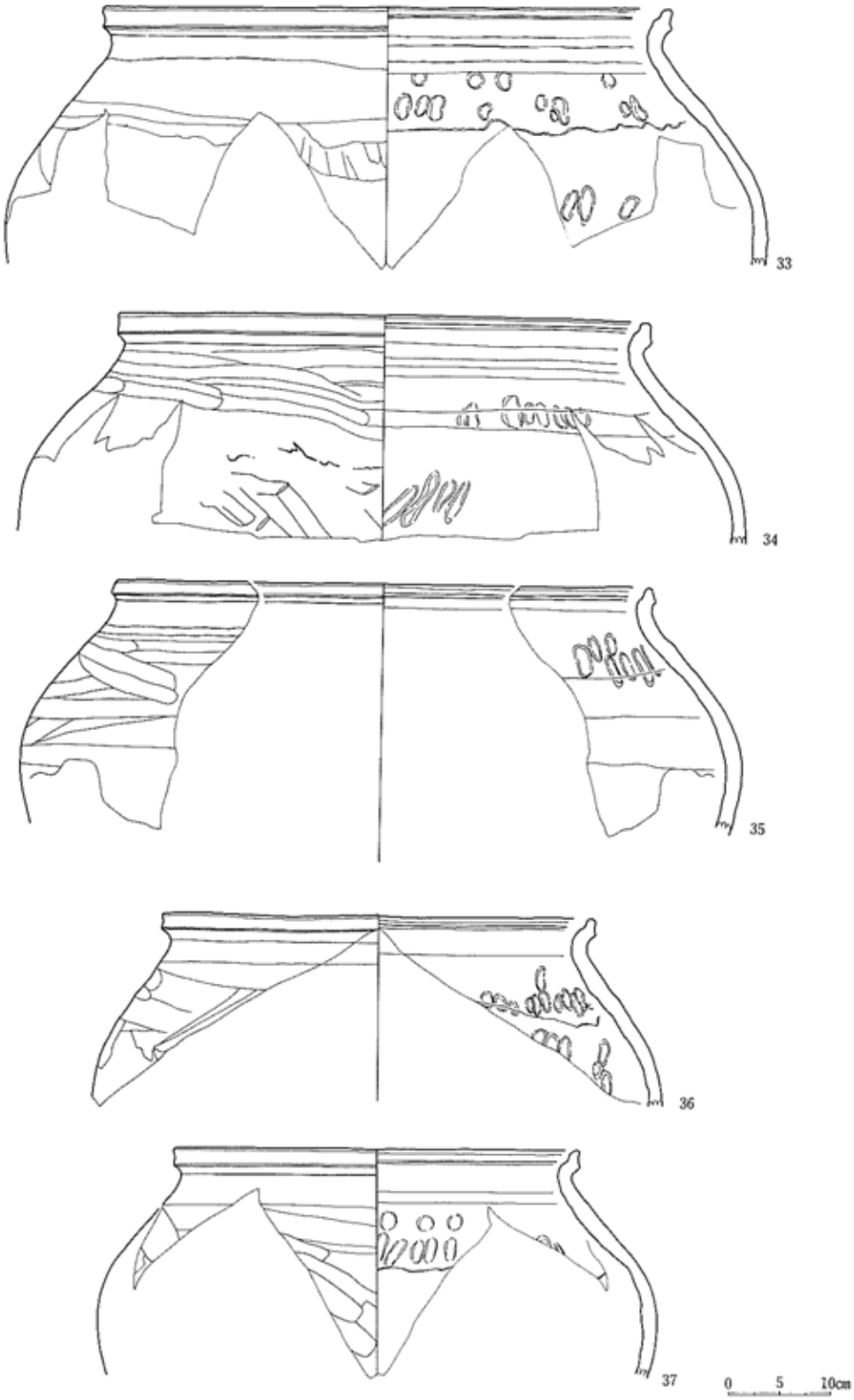
№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
20	8区原	広口壺	24.8			IIC	+	2/5	口縁部のみ　最大径41.2cm	04－46
21	8区原	火鉢	22.6			B			外面に花文のヘラ書き	04－69
22	8区原	火鉢	24.0	16.2	7.6	B	－		内面に『女』のヘラ書き	04－71
23	8区原	小壺	5.7	6.6	5.7	A	－	3/4	最大径10.3cm	04－39
24	8区原	不明								04－63
25	5→8区	広口壺	26.0			IIB	+	2/5	最大径41.4cm	04－47

第22図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　（４）



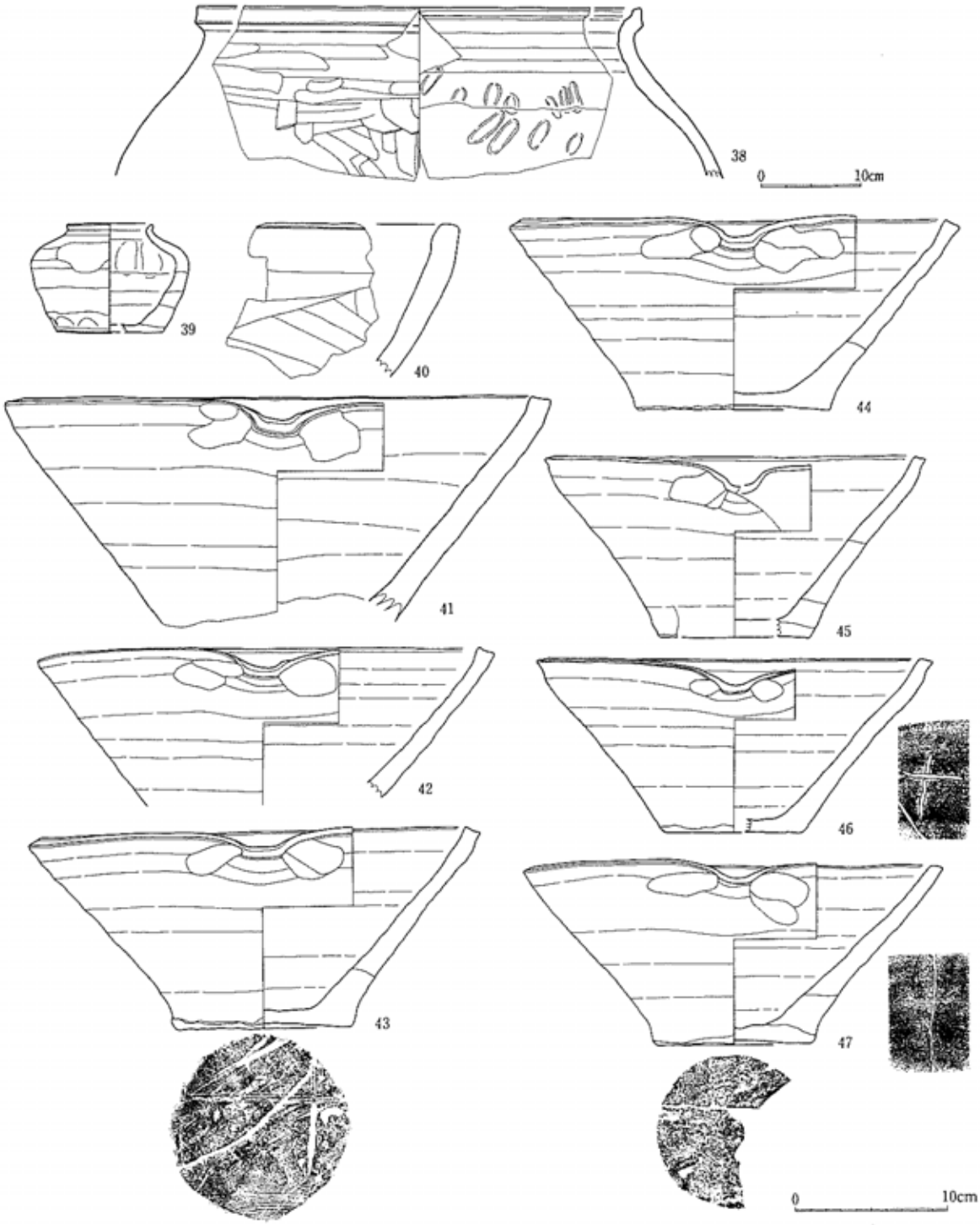
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
26	6→7焼	広口壺	26.5	14.3	40.9	ⅡC	−	3/4		04−28
27	5→6灰	鉢	27.3	11.9	11.6	ⅡA4	+	2/3	刷目なし　内面にヘラ書き　43.5%	04−21
28	7・8灰	鉢	11.0	8.2	2.7		−	1/3	半截竹管状の工具で鉢目	04−61
29	5→8灰	無類壺					+	小片		04−56
30	5→8灰	無類壺					+	小片		04−51
31	5→8灰	鉢					+	小片		04−59
32	9焼床	甕	52.4			ⅡB	−			04−33

第23図　ＳＲ－04竈跡出土遺物　（５）



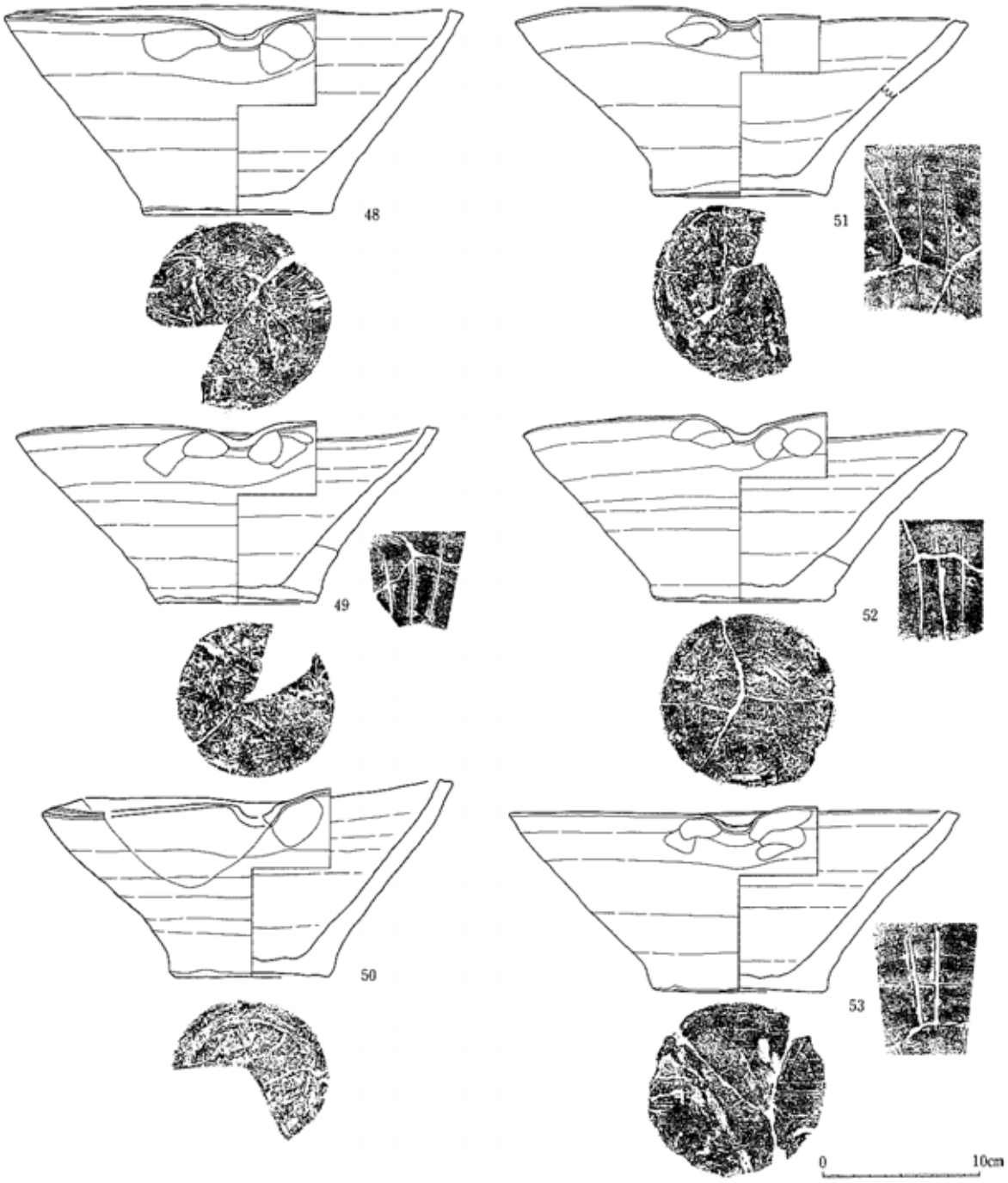
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
33	9焼床	甕	55.6			ⅡB	−	3/8	口縁部のみ	04−34
34	9焼床	甕	52.2			ⅡB	−	1/4	口縁部のみ	04−37
35	9焼床	甕	52.6			ⅡB	−	1/5	口縁部のみ	04−32
36	9焼床	甕	42.6			ⅡB	−	1/4	口縁部のみ	04−31
37	9焼床	甕	40.0			ⅡA	−	1/4	口縁部のみ	04−35

第24図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　（６）



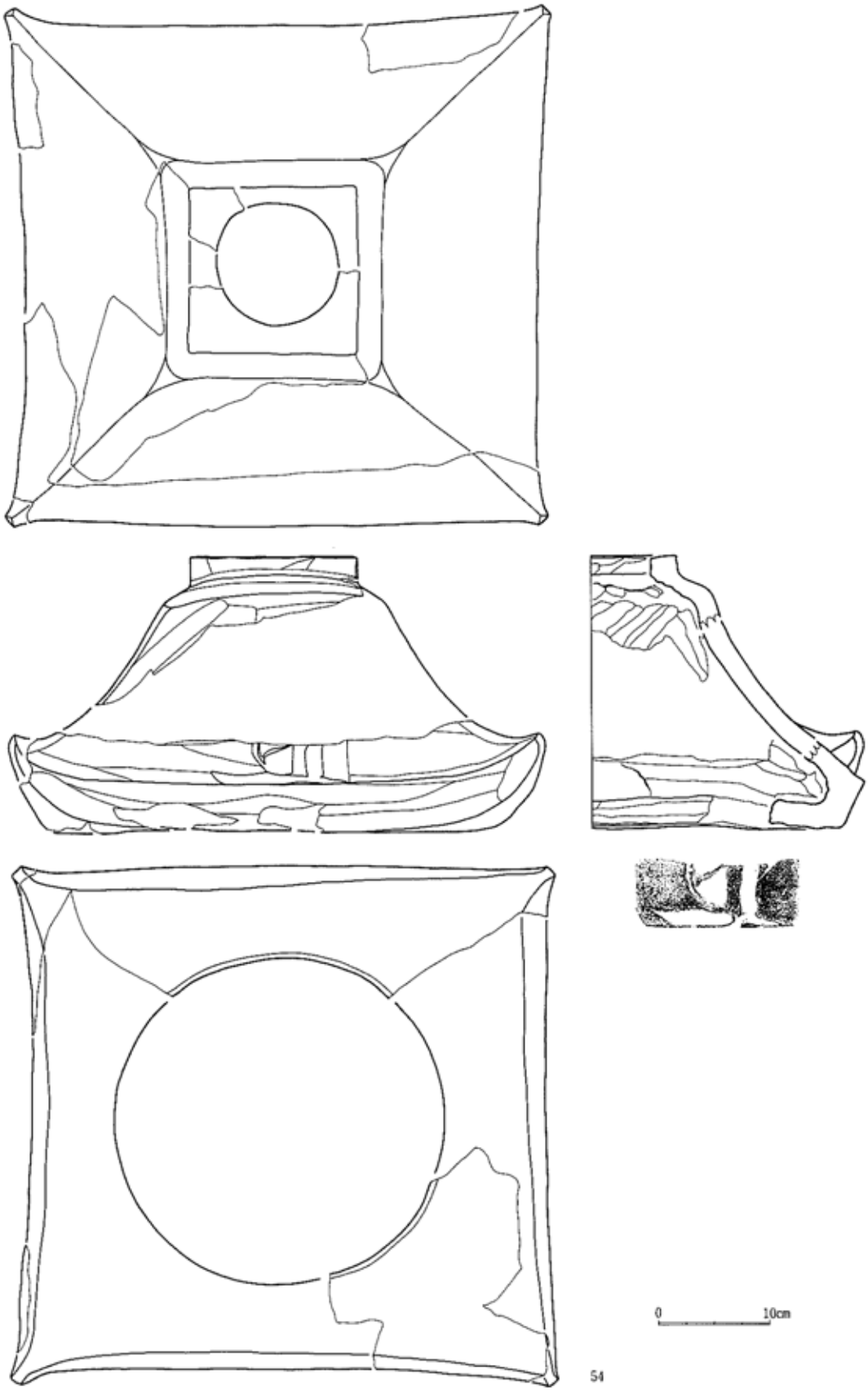
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
38	9焼床	壺	44.4			ⅡB	−	1/5		04−36
39	10埋土	小壺	5.8	7.0	7.3	A	−	1/3	最大径10.4cm	04−49
40	10焼床	鉢					+	小片		04−54
41	10焼床	擂鉢	36.0			Ⅲ	+	1/2	筋目なし	04−42
42	10焼床	擂鉢	30.2			Ⅲ	−	3/5	筋目なし	04−11
43	10焼床	擂鉢	29.8	11.4	13.1	ⅢB4	+	4/5	筋目なし 38.2%	04−04
44	10焼床	擂鉢	29.6	12.6	12.7	ⅢA4		1/2	筋目なし 42.6%	04−13
45	10埋土	擂鉢	25.2	10.0	12.0	ⅡB5	+	1/2	筋目なし 39.7%	04−18
46	10埋土	擂鉢	26.1	9.0	11.5	ⅡC3	−	4/5	筋目なし 34.7% 内面にヘラ書き	04−01
47	10焼床	擂鉢	27.6	10.0	12.3	ⅢC4	+	3/4	筋目なし 36.0% 内面に「+」のヘラ書き	04−06

第25図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　（７）

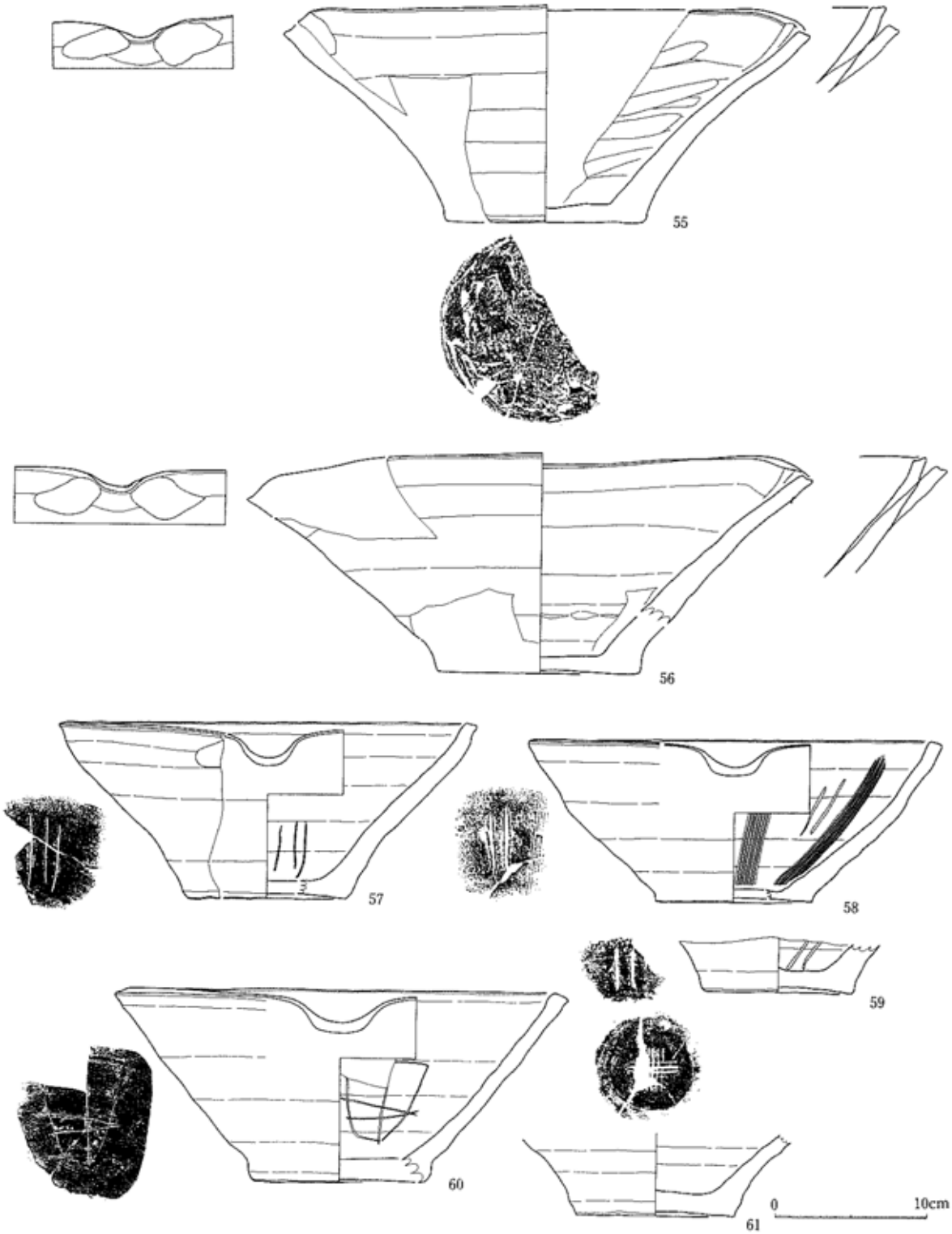


№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
48	10焼床	擂鉢	29.3	11.4	13.1	Ⅲ C3	+	9/10	38.9% 筋目なし	04－03
49	10焼床	擂鉢	27.0	10.0	11.5	Ⅱ C5	+	完形	37.6% 筋目なし 内面にヘラ書き	04－20
50	10焼床	擂鉢	26.2	9.8	12.7	Ⅱ C5	+	3/4	37.4% 筋目なし	04－14
51	10焼床	擂鉢	28.8	10.9	12.2	Ⅲ C5	+	3/4	37.8% 筋目なし	04－41
52	10焼床	擂鉢	28.4	10.9	11.3	Ⅲ C5	+	完成	38.4% 筋目なし	04－02
53	10焼床	擂鉢	28.8	10.8	11.9	Ⅲ C5	+	6/7	38.2% 筋目なし 内面に「井」のヘラ書き	04－25

第26図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　（８）

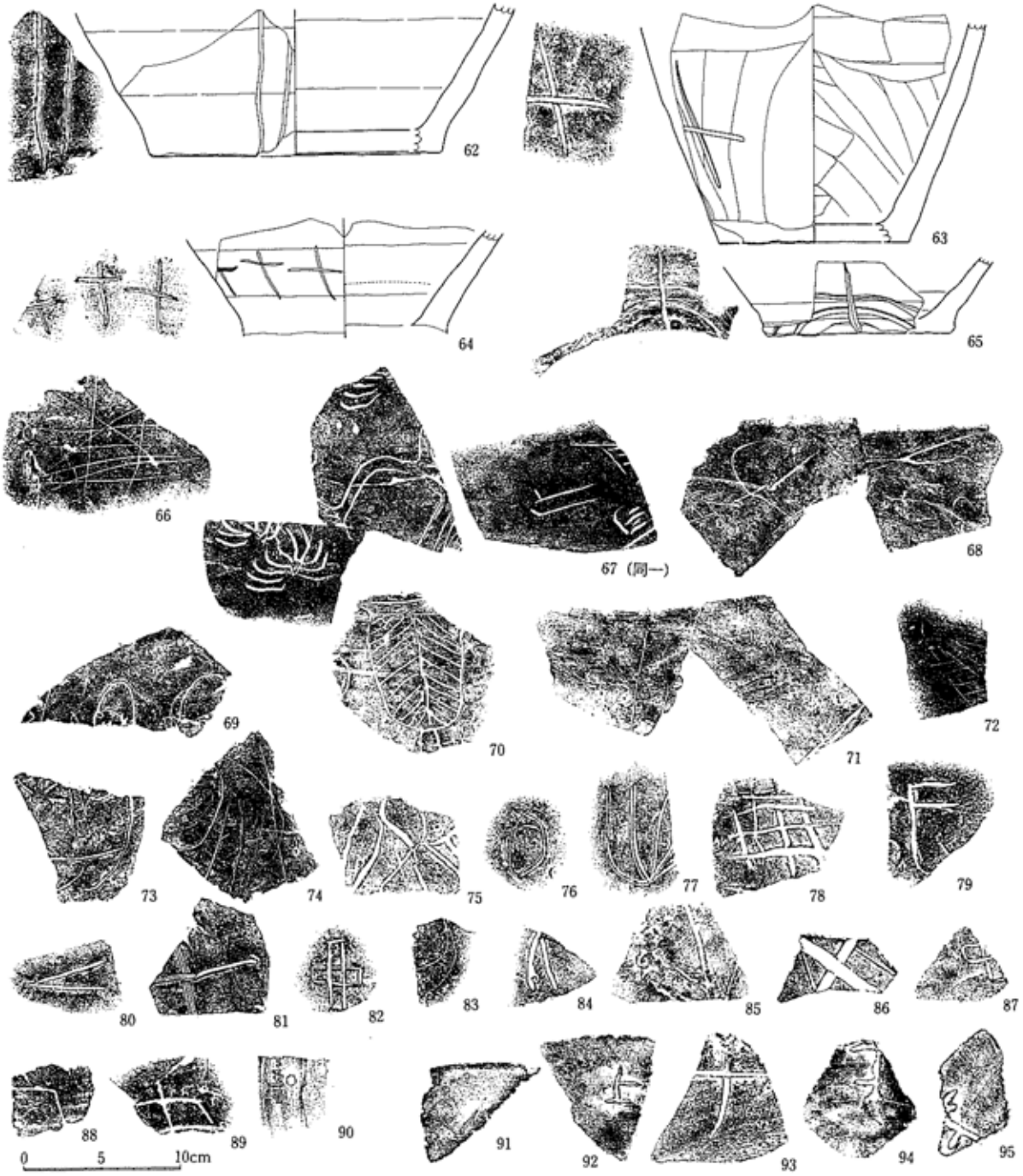


第27図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　（９）



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
55	灰原	擂鉢	34.4	13.2	14.5	III C3	−	1/3	双口をもつ　筋目なし　38.4%	04−22
56	灰原	擂鉢	33.3	13.5	14.8	III B4	−	1/3	双口をもつ　筋目なし　40.5%	04−44
57	灰原	擂鉢	27.8	10.4	11.8	II C3	−	1/4	片口欠損　筋目なし　内面に「III」のヘラ書き　37.4%	タ4-06
58	灰原	擂鉢	27.2	10.1	10.8	II C3	−	1/4	片口欠損　筋目あり　内面に「I」のヘラ書き　37.1%	タ4-53
59	灰原	擂鉢		10.0			−		底部のみ　内面に「I」のヘラ書き	タ4-04
60	灰原	擂鉢	30.0	12.0	12.9	III B4	−	1/3	片口欠損　筋目なし　内面にヘラ書き　40.0	タ4-09
61	灰原	擂鉢		10.4			−	完成	底部のみ　見込みに「+」の線刻書き	タ4-08

第28図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　(10)



第29図　ＳＲ－04窯跡出土遺物　(11)

［出土遺物］窯体内や灰原から甕・広口壷・小壷・短頸壷・無頸壷・火鉢・硯・卸皿・五輪塔・馬爪形焼台が出土しており、焼成された器種の最も多い窯である。これらの遺物は原位置を保っているものはなく、焼成部や燃焼部から出土しているものの多くは二次焼成の痕跡が認められ、焼台として使用されたものと考えられる。この中で五輪塔火輪(4-54)しはＳＲ-02窯10次面前庭部やＳＲ-15の埋土から出土したものと、6 次面の灰原から出土した火鉢(4-10)はＳＲ-01 のものと、10 次面出土の五輪塔水輪はＳＲ-03 窯 4 次面出土のもの（3-5）とそれぞれ接合関係が認められた。

遺物にはヘラ書きの施されたものが多く認められ、なかでも 4-19 には作者名と考えられる銘が書かれている。

ＳＲ－05 窯跡（第 30～34 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では比較的高位(標高 107～109m)に位置する。窯はＳＲ-10 の焼成部の上端から掘り込まれており、これよりも新しい。また、灰原の部分でＳＲ-06 と重複しており、堆積層の観察によればこれよりも古い。したがって新旧関係はＳＲ-10→ＳＲ-05→ＳＲ-06 となる。

基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。天井部は分焔柱付近で一部残存していたが、窯壁の部分はすべて剥落していた。前庭部から焼成部にかけての保存状態は良好であるが、煙道部付近は後世の林道造成のため削平されている。窯体の平面形は砲弾形を呈し、主軸線の方向はＮ－46°－Ｅである。窯体は尾根の鞍部に対し、谷側から掘り込まれており、斜面と窯体主軸の角度は 66°ある。

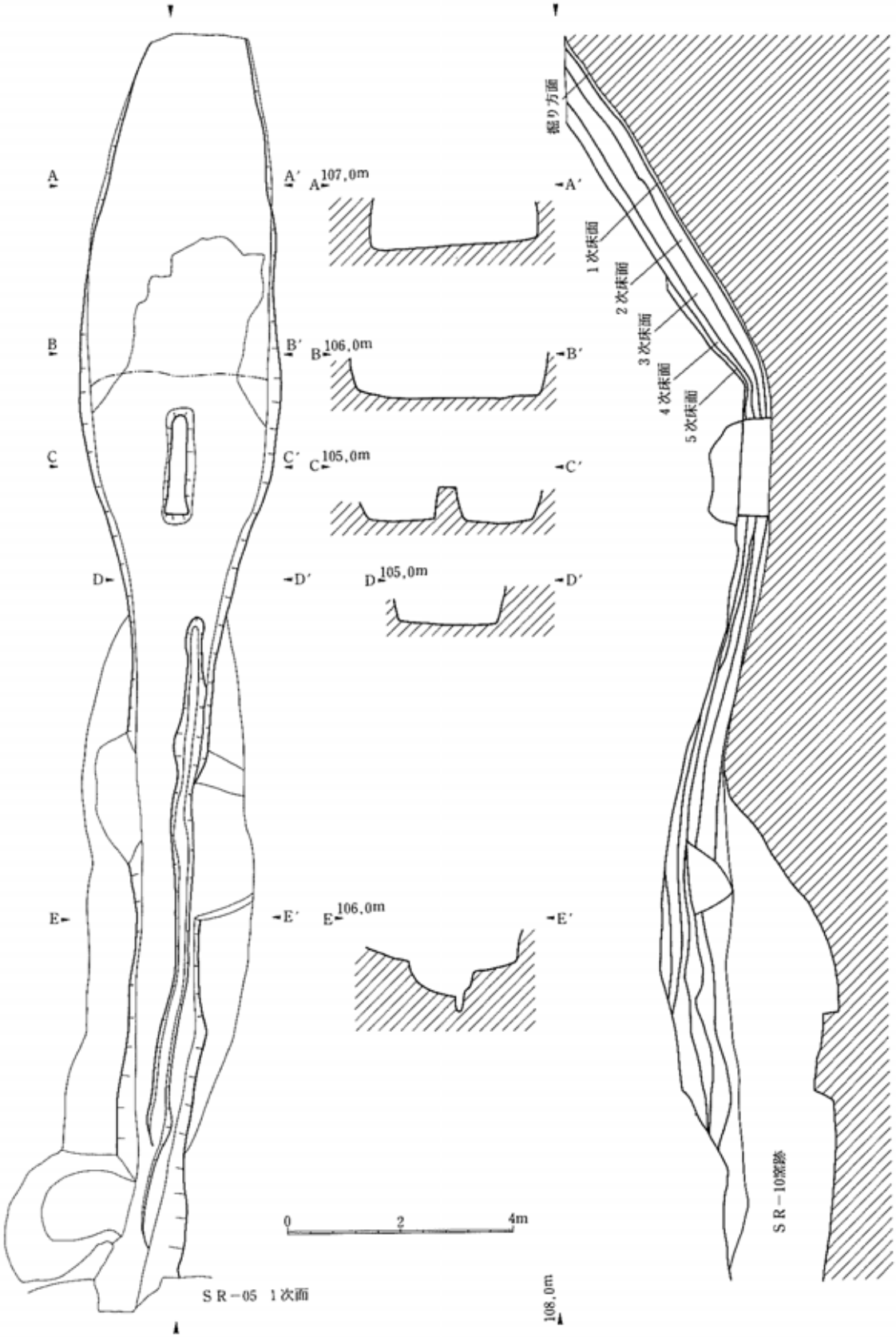
規模は残存する部分で窯長が約 22.4m、窯幅は最大部分で 3.4mある。合計 4 回の作り替えが認められており、1 次面と 5 次面の標高差は 50～80 ㎝ある。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延びる。規模は幅 1.2～1.4m、長さが約 11.6mと非常に長く、本群の窯の中では最長である。床面は、1 次面では焚口付近で地山の掘り込み面をそのまま使用し、ＳＲ-10 と重複する部分はＳＲ-05 を掘り抜いた土の上面を床としている。ＳＲ-10 の焼成部を埋め込んでいる土は最も厚い部分では約 1.9mにも達する。2 次面以降はそれまでの使用面を約 10 ㎝埋め戻し、その面を床としている。底面の傾斜は焚口から前方に向かって約 11°の角度をもって緩やかに上がり、先端部に推移するにつれて平坦となる。

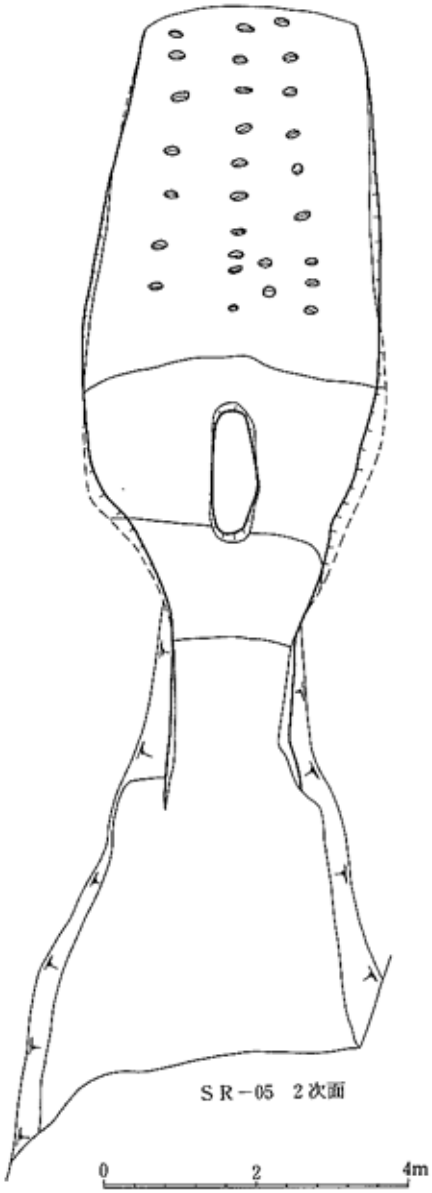
［前庭部の施設］床面を除去した段階（掘り方面）で、右側壁に寄った位置から溝が 1 条検出されている。溝は燃焼部の焚口付近から前庭部の先端まで掘られ、規模は全長 11.2m、幅 40～50 ㎝ある。溝の底面は先端に向かってわずかに傾斜している。また、溝は窯を掘り抜いた際の土で埋め戻されていることから、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、焚口から分焔柱に向かっては撥状に広がる。溝が掘られている付近から分焔柱にかけての約 2.0mの範囲からは木炭が多量に検出されており、この部分が燃焼部と考えられる。

床面は、1 次面では地山の掘り込み面を約 10 ㎝埋めその上に粘土を貼り、2 次面以降はそれまでの



第30図　ＳＲ－05窯跡１次面



第31図　SR-05窯跡２次面

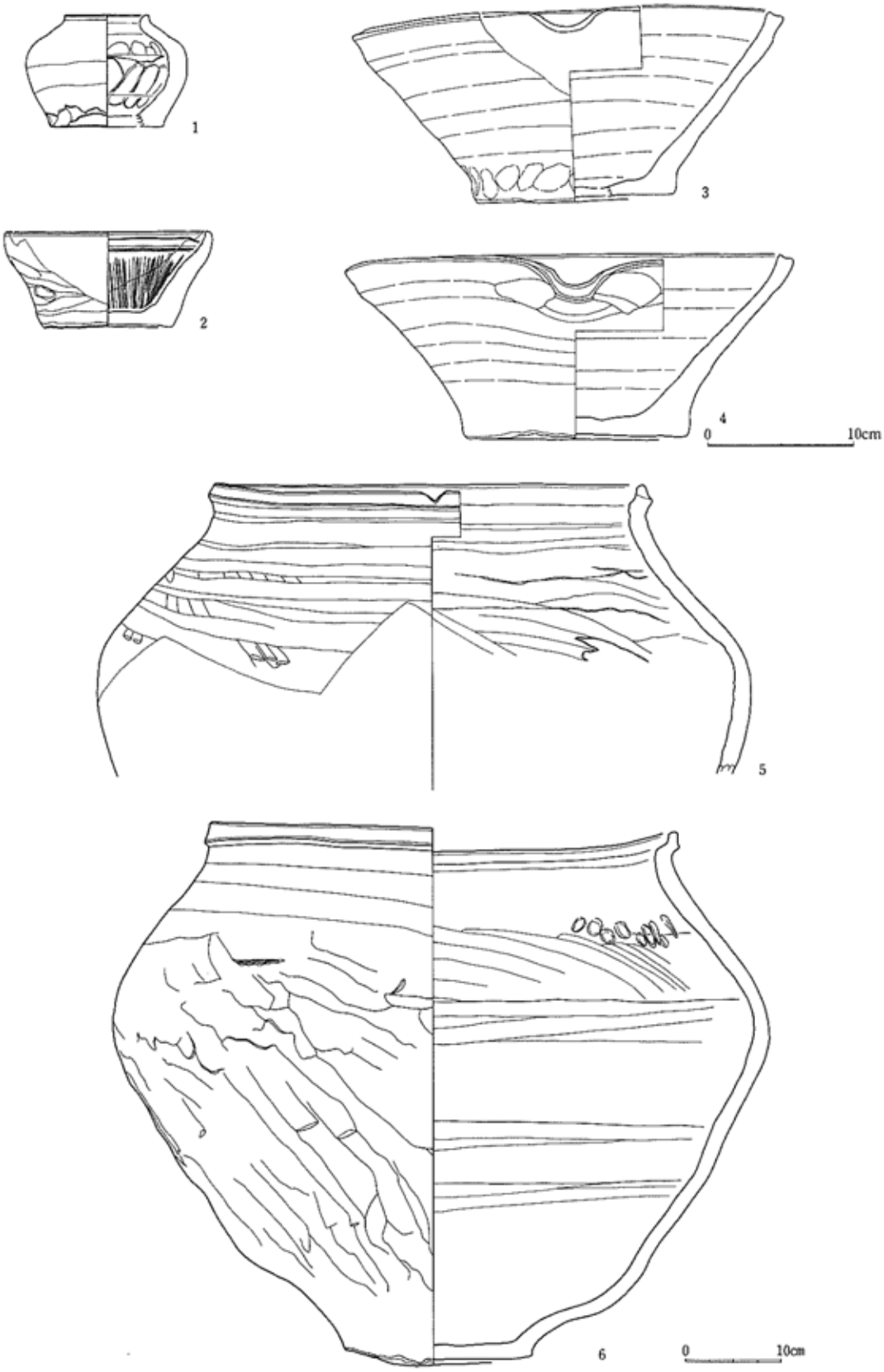
使用面を5～15㎝埋め戻しその上に粘土を貼り床としている。床面の傾斜は11°で分焔柱に向かって緩やかに下る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは約50㎝ある。掘り込み面をそのまま壁としている。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られ、1次面では約60㎝の高さまで残存している。平面形は細長い長方形を呈し、規模は基底部で長さ2.1m、幅0.5mある。分焔柱の補修は2・4次面で行なわれており、2次面では側面の崩れた部分に粘土を貼り、4次面では前面の崩れた部分に石を積み上げてその上に粘土を貼って補修している。また、5次面の分焔柱は大きな作り替えが行なわれ、それまでのものよりも約20㎝前方に位置をずらして構築している。通焔孔の幅は基底部で焼成部に向かって右側が92㎝、左側が84㎝である。

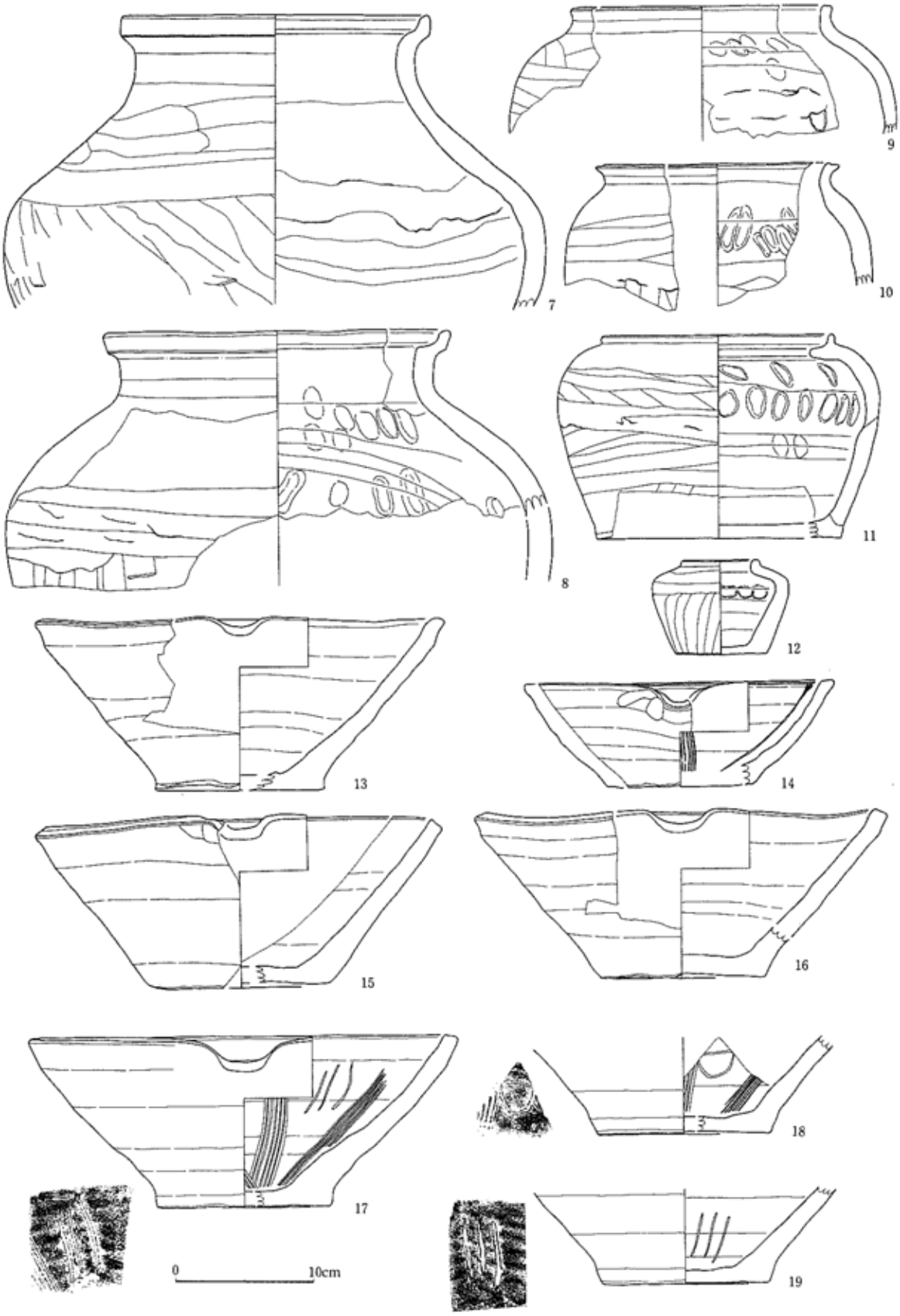
［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。通焔孔の付近から徐々に広がり傾斜変換線の部分で最大幅となり、煙道に向かって緩やかに幅をせばめる。規模は残存する部分で水平距離が8.4mあるが実質的な床面の長さ（斜距離）は9.2mある。幅は傾斜変換線付近で最大となり約3.2mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まではほぼ水平で、それよりも奥は約31°の急角度になっている。焼成部の床面はすべて貼り床で、1次面では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約10㎝ほど埋め戻し、2次面以降ではそれまで使用面を20～30㎝ほど埋め、その上に粘土を貼り床面としている。壁は地山を削り出して構築しており、焼成部の上半の側壁からは窯を掘りぬく際の幅10～15㎝の工具痕が明瞭に観察される。壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約100㎝ある。

［焼成部の施設］1～4次面で、焼成部の斜面から足場穴が検出されている。足場穴は窯の軸線方向に沿って80㎝間隔で3条作られており、最も保存のよい2次面では9段認められた。穴の大きさは幅20～35㎝、深さ5㎝で、40～60㎝間隔で掘られている。

［出土遺物］窯内や灰原、排水溝の埋土から甕・広口壷・短頸壷・小壷・擂鉢・馬爪形焼台が出土し



第32図　ＳＲ－05窯跡出土遺物　（１）



第33図　ＳＲ－05竈跡出土遺物　（２）

No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
1	1灰原	小壺	5.6	6.6	7.0	A	+	1/3		05-14
2	1灰原	擂鉢	14.0	8.8	6.8	IA1	+	1/3	筋目あり 62.9% 片口欠損	05-20
3	1前床	擂鉢	29.4	13.4	13.3	IIIA4	+	1/2	45.6% 片口欠損	05-15
4	3灰原	擂鉢	30.7	15.1	12.8	IIIA5	−	1/2	49.2%	05-05
5	45焼床	甕	44.8			IIB	+	1/2	口縁部のみ	05-02
6	灰原	甕	45.4	19.5	56.8	IIB	−	完形		05-01
7	45前床	広口壺	22.0			IIC	−	1/3	口縁部のみ	05-04
8	5灰原	広口壺	25.2			IIB	+	1/2	口縁部のみ	05-16
9	45燃埋	短頸壺	19.0			B	+	1/8	口縁部のみ	05-18
10	45燃埋	短頸壺	17.6			B	+	1/8	口縁部のみ	05-17
11	45燃床	短頸壺	16.4	17.6	15.0	C	−	1/3	最大径23.4cm	05-03
12	45燃埋	小壺	5.6	6.6	7.0	B	−	1/2	最大径9.9cm	05-13
13	45燃埋	擂鉢	29.8	12.5	12.9	IIIA4	−	2/3	41.9% 片口欠損	05-07
14	45燃埋	擂鉢	22.5	10.4	7.7	IA3	−	1/4	筋目あり 46.2% 片口欠損	05-12
15	45燃床	擂鉢	29.6	12.6	12.6	IIIA1	−	2/5	42.6% 片口欠損	05-06
16	45燃埋	擂鉢	30.0	11.9	12.4	IIIB3	−	2/3	39.7% 内面に「田」のヘラ書き 筋目あり	05-08
17	灰原	擂鉢	29.0	12.6	12.8	IIIA4			43.4% 片口欠損	タ5-10

第34図　ＳＲ－05窯跡出土遺物　（３）

ているが、原位置を保った状態で出土しているものはない。焼成部や燃焼部から出土しているものの多くは二次焼成の痕跡が認められることから焼台として使用されたものと考えられる。

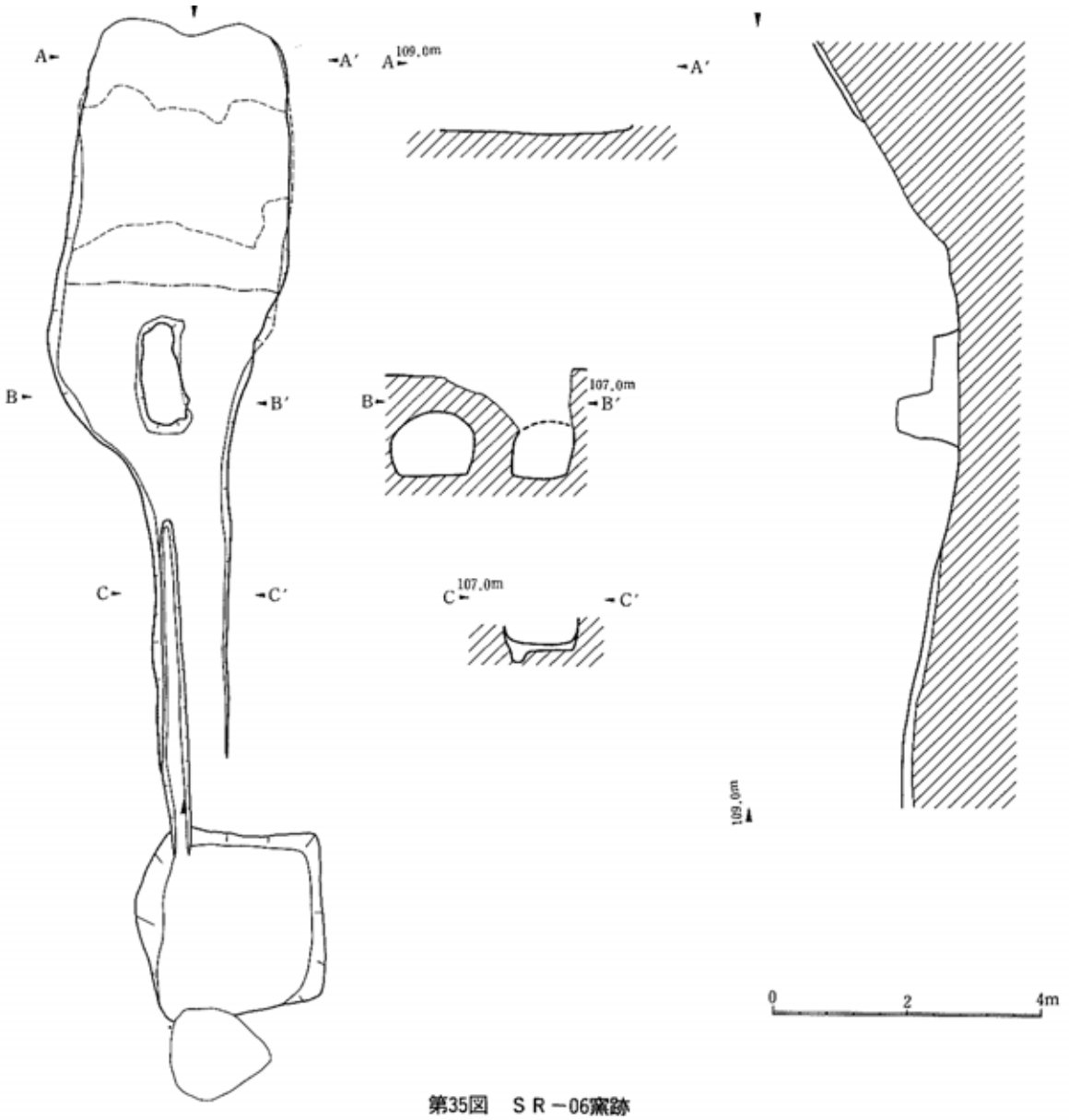
ＳＲ-06 窯跡（第 35・36 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では比較的高位（標高 107～109m）に位置する。他の窯との直接の重複は認められないが、灰原の部分でＳＲ-05･07 と重複する。灰原は堆積層の観察からＳＲ-05→ＳＲ-06→ＳＲ-07 の順に形成されており、新旧関係もこれと同様となる。基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。天井部は分焔柱の部分で残存していた他は、すべて崩落していた。前庭部から焼成部の下半にかけての保存状態は良好であるが、焼成部の上半より後は後世の林道造成のため削平されている。窯体の平面形は残存する部分から紡錘形を呈すると考えられる。窯体の主軸線の方向はＮ－48°－Ｅで、斜面と窯体主軸の角度は約 5°あり、窯体は斜面に対して谷側に偏って作られている。規模は残存する部分で窯長が約 10.9m、幅は最大部分で 3.2mある。作り替えは認められない。

［前庭部］前底部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延びる。また、先端部には地山を削り出した方形の平場が広がる。前庭部の規模は全長約 4.8m、幅 0.8～1.0m、平場は一辺約 2.0mである。床面は、地山の掘り込み面を約 10 ㎝ほど埋め込んだ面を床面としている。底面は焚口に向かって緩やかに下がり、角度は約 10°ある。平場はほぼ平坦である。

［前庭部の施設］床面を除去した段階（掘り方面）で、左側壁に沿って溝が 1 条検出されている。溝は焚口部から平場の部分まで掘られ、底面は先端に向かって緩やかに傾斜している。規模は全長 5.0m、幅 20～30 ㎝ある。また、溝は窯を掘り抜いた際の土で埋め戻されていることから、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、焚口から分焔柱に向かっては撥状に広がる。この部分からは木炭が多量に検出されている。燃焼部は全長約 1.4mある。



第35図　ＳＲ－06窯跡

床面は、地山の掘り込み面をそのまま利用しており、約5°の傾斜をもって分焔柱に向かって緩やかに下る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい分焔柱付近で約1mある。

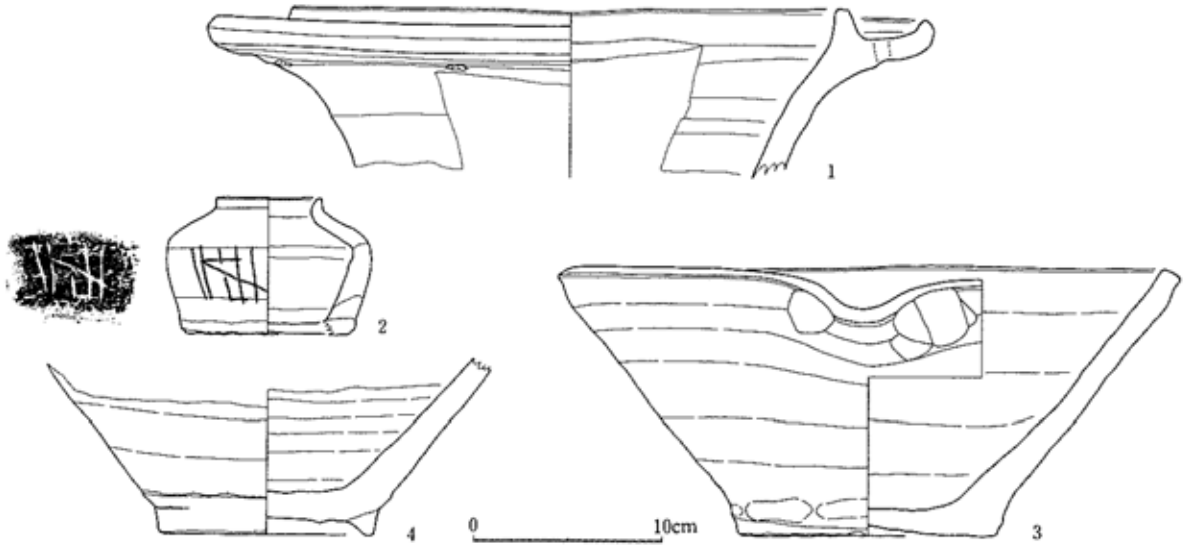
［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られており、前底部の中心軸よりも若干左に偏って配されている。分焔柱の残存状況は良好で、通焔孔の左側の天井部がアーチ状に残存している。

通焔孔の規模は焼成部に向かって右側が直径96㎝、高さ85㎝(推定)、左側が直径59㎝、高さ85㎝で、右側の穴が大きく作られている。

分焔柱の平面形は細長い長方形を呈し、規模は基底部付近で長さ1.8m、幅0.8mある。

［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈するが、左側の通焔孔の部分が膨らんでいる。

窯壁は通焔孔の付近から広がり傾斜変換線の部分で最大幅となり、煙道に向かって直線的に続く。残存する部分の規模は水平距離で約5.2mあるが、実質的な床面の長さ(斜距離)は5.8mある。幅は傾斜変換線からやや奥まった付近で最大となり約3.2mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
1	排溝埋	火鉢	30.4			I	－	1/5	SR-07灰原5層のものと接合関係あり	06－03
2	灰原	小壺	5.4	8.8	7.3			1/4	体部外面にヘラ書き	06－04
3	焼床	擂鉢	33.0	13.6	14.5	Ⅲ B2	－	4/5	41.2%　筋目なし	06－01
4	焼埋	高台鉢		11.0			－	小片	付け高台	06－02

第36図　ＳＲ－06窯跡出土遺物

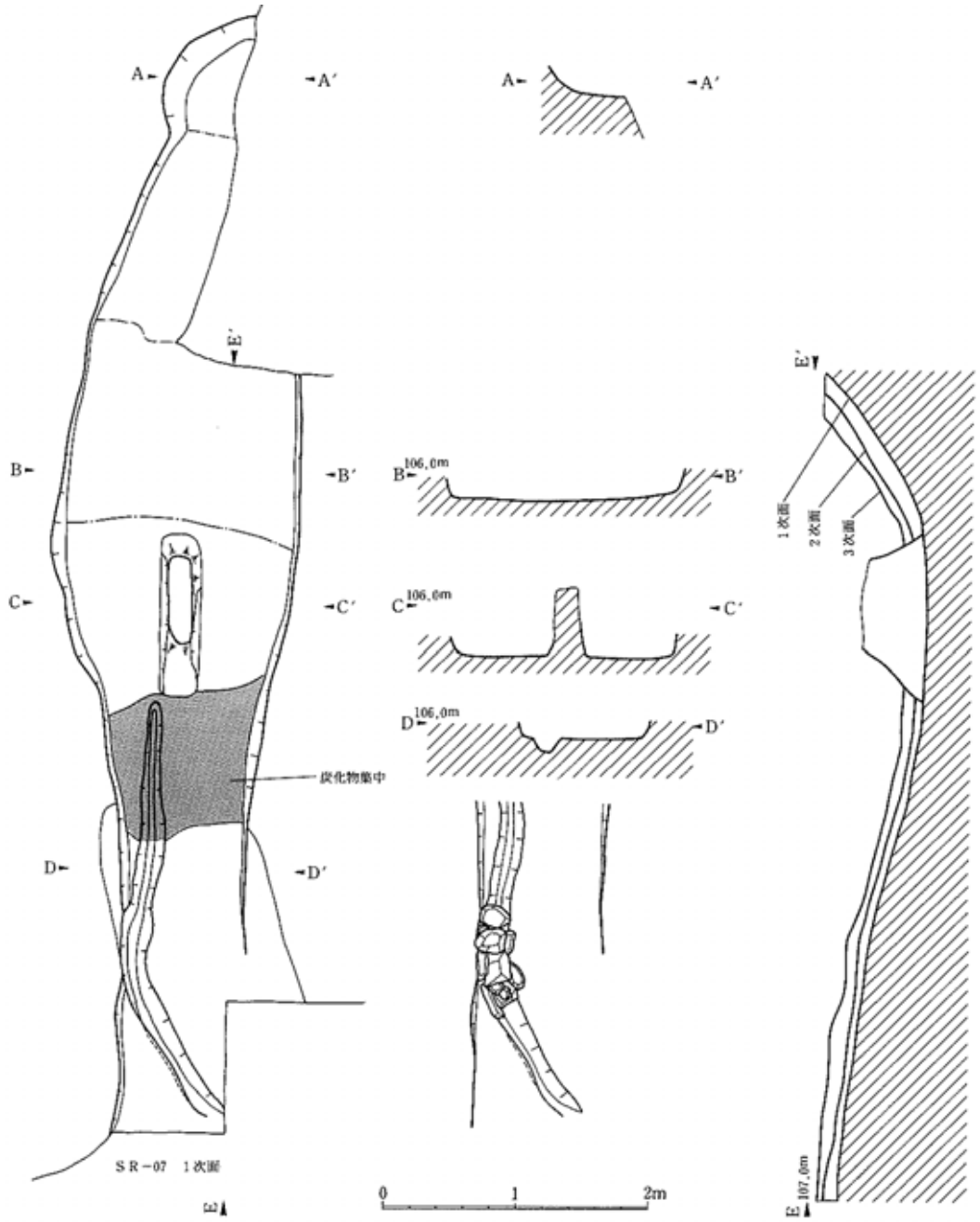
までは約11°と緩やかであるが、それよりも奥は約34°の急角度になっている。

床面は貼り床で、地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約10㎝ほど埋め戻し、その上に粘土を貼り構築している。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約120㎝ある。

［出土遺物］窯内や灰原、前庭部の排水溝埋土から甕・広口壷・小壷・擂鉢・高台鉢・火鉢･馬爪形焼台が出土しているが、図示できたものは小壷・擂鉢・高台鉢・火鉢である。原位置を保っているものはなく、遺物の中には二次焼成が認められるものもあり、これらは焼台として使用されたものと考えられる。遺物の中の高台鉢は付け高台によるものである。

ＳＲ－07窯跡（第37～59図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では比較的高位(標高109～110m)に位置する。ＳＲ-04・16と重複しＳＲ-16を切り、ＳＲ-04に切られている。また、灰原の部分でＳＲ-06・08と重複し、これら2基の窯の灰原が形成されたのちに本窯跡の灰原の堆積が観察される。したがって新旧関係はＳＲ-16・06・08→ＳＲ-07→ＳＲ-04の順となる。基盤の凝阪岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。前庭部から焼成部の下半にかけての保存状態は良好であるが、焼成部の上半から煙道部にかけての右側はＳＲ-04によって失われている。天井部はすべて崩落していた。窯体の平面形は紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－54°－Ｅで、また斜面と窯体主軸の角度は約80°あり、窯体は斜面に対して若干谷側に偏って作られている。



第37図　ＳＲ－07窯跡

規模は窯長が約17.0m、窯幅は最大部分で3.5mある。合計2回の作り替えが認められており、1次面と3次面の標高差は30～50cmある。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延びる。規模は残存部で長さ約5.0m、幅約1.8mある。1次面では、地山の掘り込み面をそのまま床としており、2次面以降はそれまでの使用面を約10cm埋め戻し、その面を床としている。底面の傾斜は焚口から前方に向かって約14°の角度をもって緩やかに上がる。

［前庭部の施設］床面を除去した段階（掘り方面）で、溝が1条検出されている。溝は分焔柱の先端部付近（燃焼部）から掘り込まれ、前庭部の平坦な部分まで掘られており、規模は全長7.3m、幅20～30

cmある。底面は先端に向かって緩やかに傾斜している。また、溝は焚口付近は扁平な石で覆われ、それ以外の部分は窯を掘り抜いた際の土で埋め戻されており、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、焚口から分焔柱に向かって緩やかに広がる。燃焼部は全長約1.7mある。この部分からは木炭が多量に検出されている。

床面は、地山の掘り込み面をそのまま利用しており、約9°の傾斜をもって分焔柱に向かって緩やかに下る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい分焔柱の手前で約1.2mある。

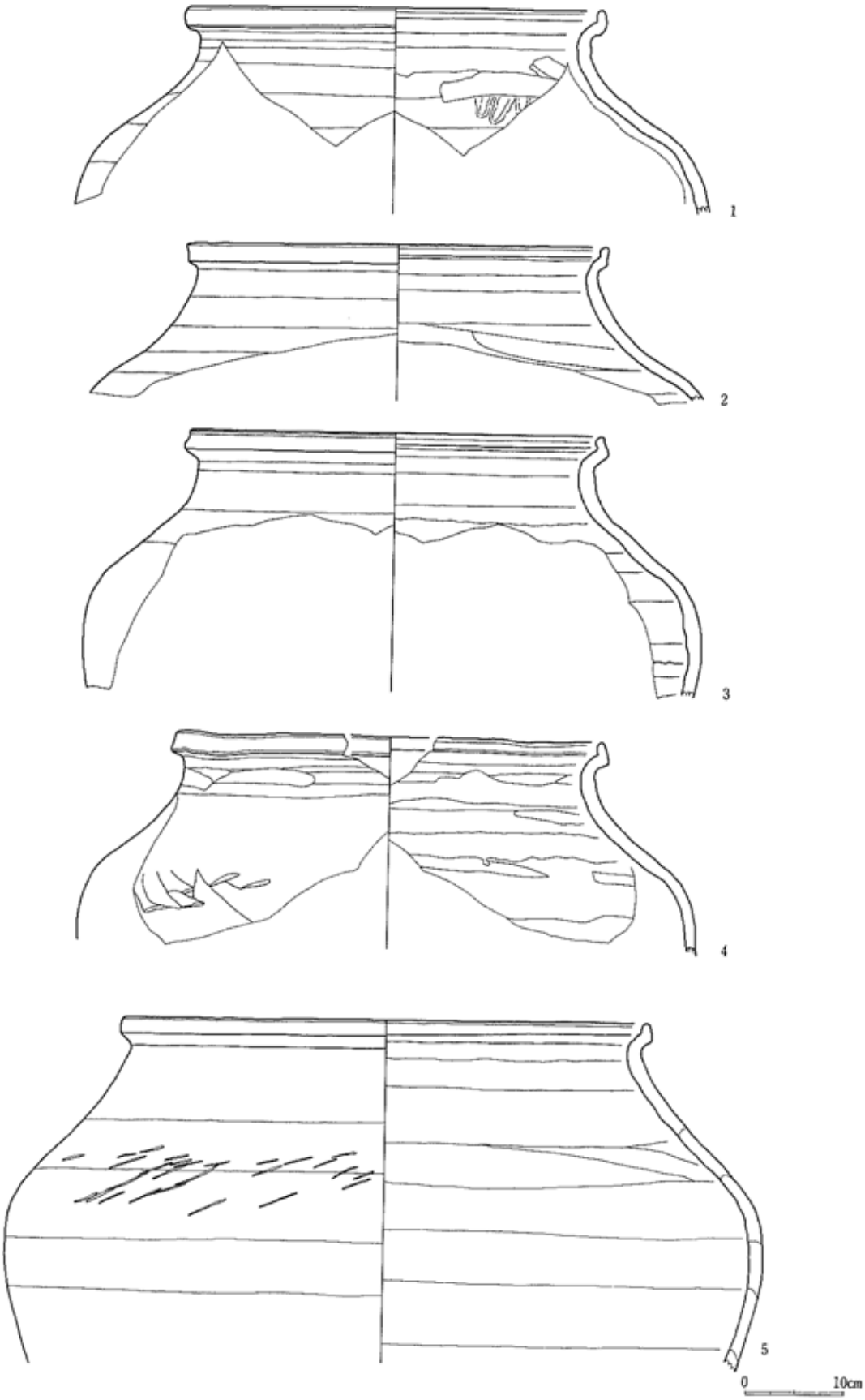
［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られ、1次面では約30cmの高さまで残存している。平面形は細長い長方形を呈し、規模は基底部で長さ2.5m、幅0.6mある。大きな補修は行なわれてないが、3次面に伴う分焔柱は当初のものよりも若干小さく作られている。通焔孔の幅は基底部で焼成部に向かって右側が92cm、左側が88cmある。

［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から徐々に広がり傾斜変換線の部分で最大幅となり、煙道に向かって緩やかにすぼまる。焼成部の規模は水平距離で約8.6mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は9.9mである。窯壁の幅は傾斜変換線付近で最大となり約3.4mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まではほぼ水平であるが、それよりも奥は約34°の急角度になっている。床面は1次面では、地山の掘り込み面をそのまま床としており、2次面以降は、地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で10～20cmほど埋め戻し、その上に粘土を貼り床としている。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約70cmある。

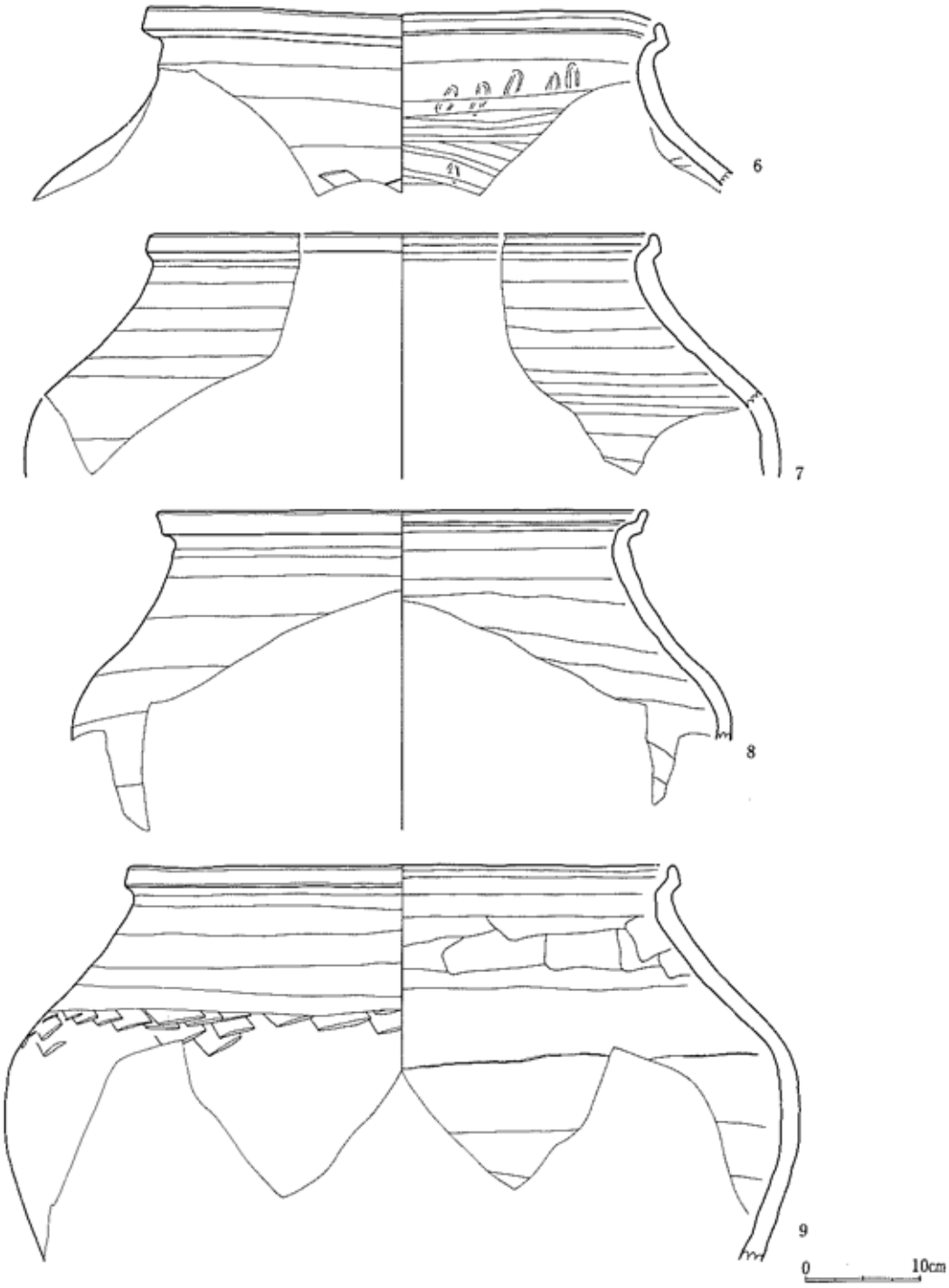
［煙道部］焼成部から煙道部へは窯体のくびれと床面傾斜角の変換によって移行する。煙道部の南半はＳＲ-04によって切られているが、残存する部分から馬蹄形を呈するものと考えられる。平坦面は長さ1.4mあり、その奥では奥壁が急激に立ち上がる。ダンパーなどの施設は検出されなかった。

［出土遺物］図示したものだけでも120点以上の遺物がある。これらの遺物のほとんどは灰原の5～7層から出土したもので、窯体内から出土したものは少ない。遺物には甕・広口壷・短頸壷・小壷・擂鉢・火鉢・高台付鉢などがあり、これらの中で2次焼成痕のある焼台として再利用されたわずかのものを除けば、多くのものが焼き歪みの少ない完形品であることが特徴的である。また、遺物が集中的に出土した5～7層は厚さ1.7mにも達するものの、層を構成するのは陶器片と炭が大部分で土はほとんど含まれていない。以上のことからこれらの遺物は焼成後の何らかの理由で一括廃棄されたものと考えられ、窯出しの最中に崩落したものの可能性がある。

ヘラ書きや文様の施されたものが多くみられ、7-122では広口壷の肩部に6行のかな文字が、7-17では広口壷の肩部に櫛歯による波状文が加えられている。

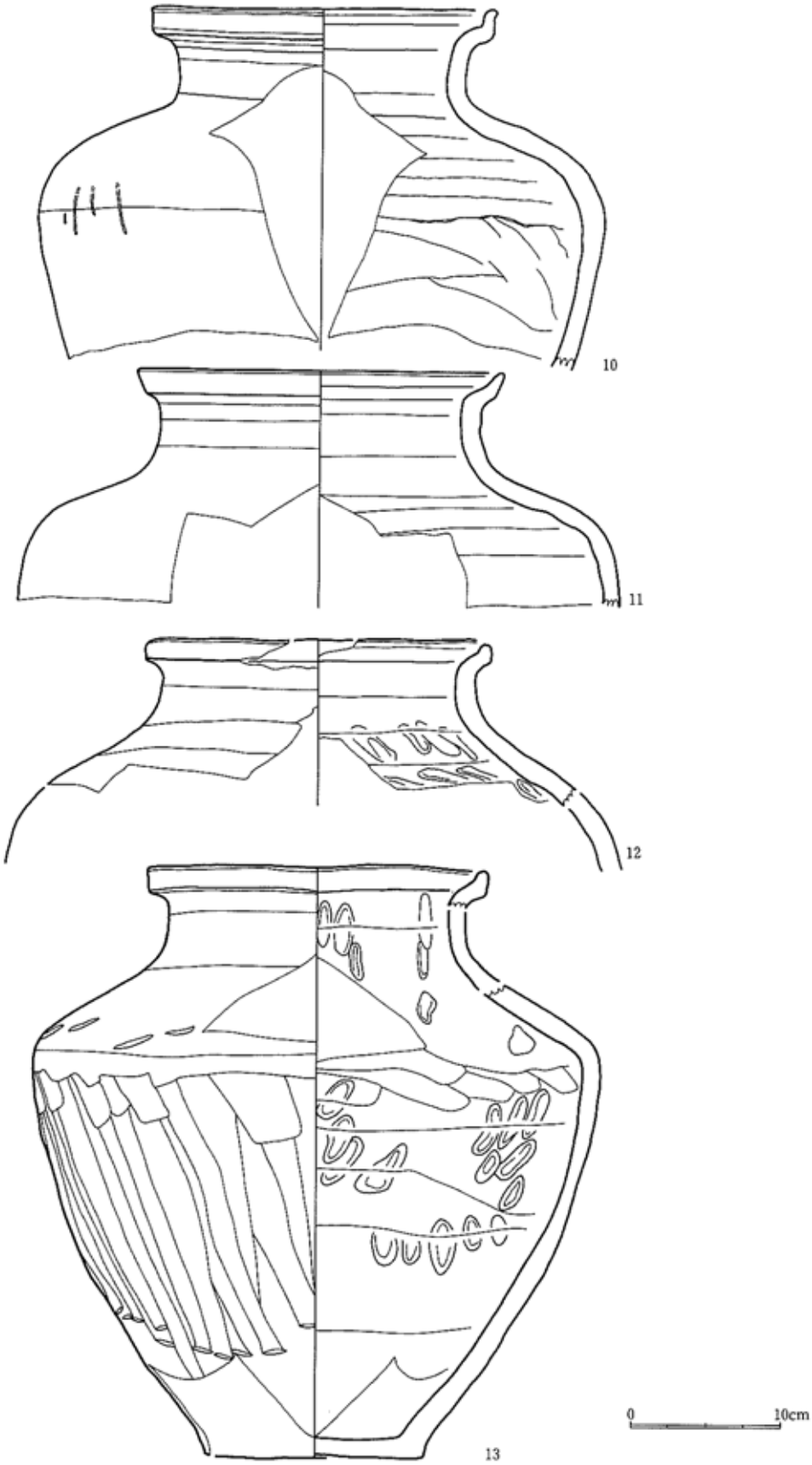


第38図　ＳＲ－07竈跡出土遺物　（１）

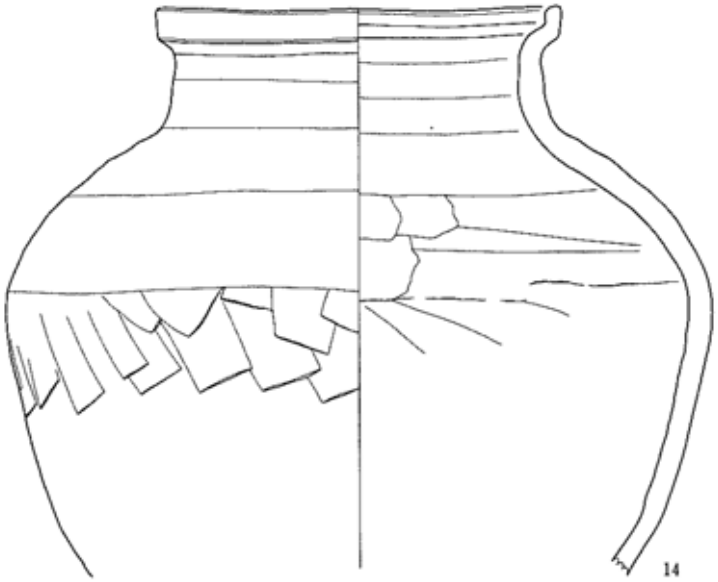


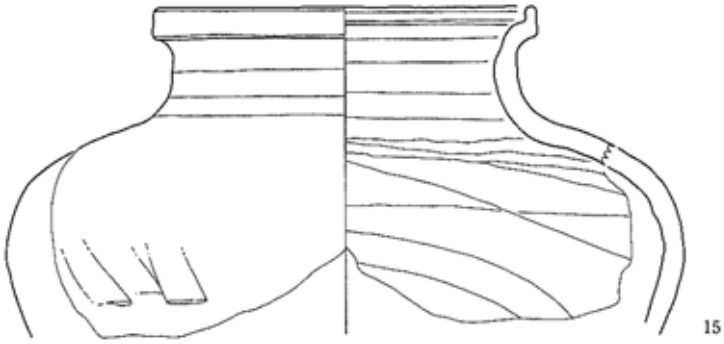
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	特徴	登録
1	Ⅰ灰9	甕	41.8			ⅡB	－	口縁部のみ	07-109
2	Ⅰ灰9	壺	42.6			A	－	口縁部のみ	07-123
3	Ⅰ灰9	甕	41.6			ⅡA	－		07-124
4	Ⅰ灰9	甕	43.0			ⅡA	－	口縁部のみ	07-100
5	Ⅰ灰9	甕	53.1			ⅡB	－		07-126
6	Ⅰ灰6	甕	44.9			A	－	口縁部のみ	07-95
7	Ⅰ灰6	甕	43.7			ⅡB	－	口縁部のみ	07-125
8	Ⅰ灰6	甕	42.4			ⅡA	－		07-122
9	Ⅰ灰56	甕	47.2			ⅡB	－		07-106

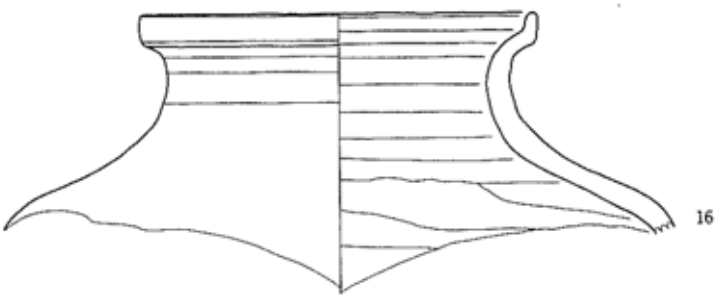
第39図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（２）

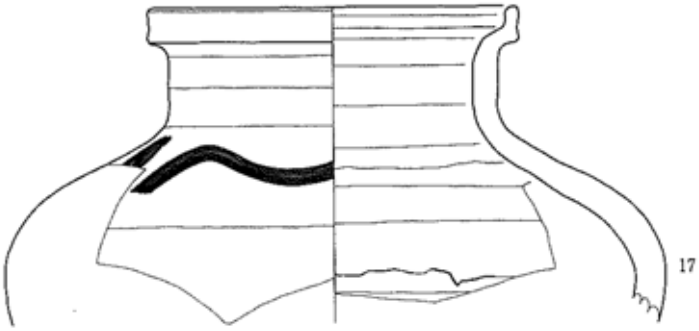


第40図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（３）



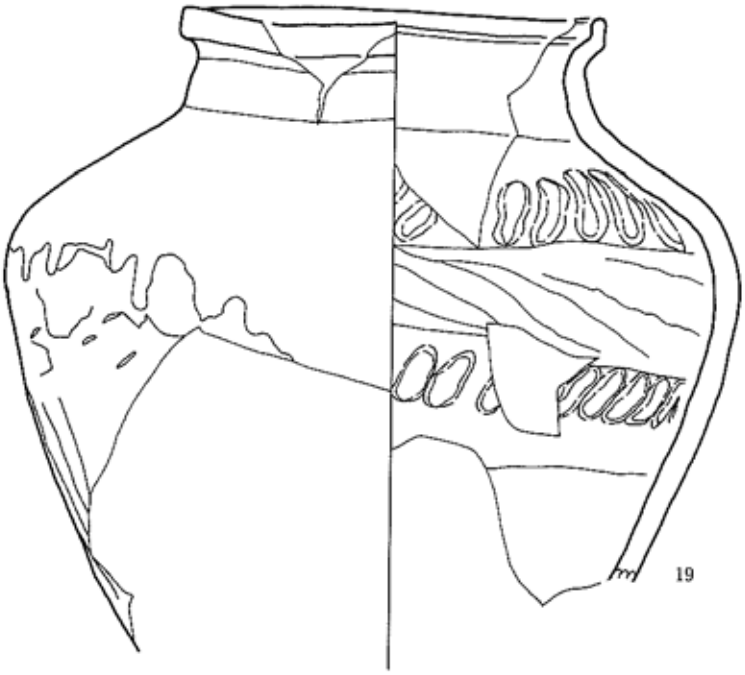






0 10cm

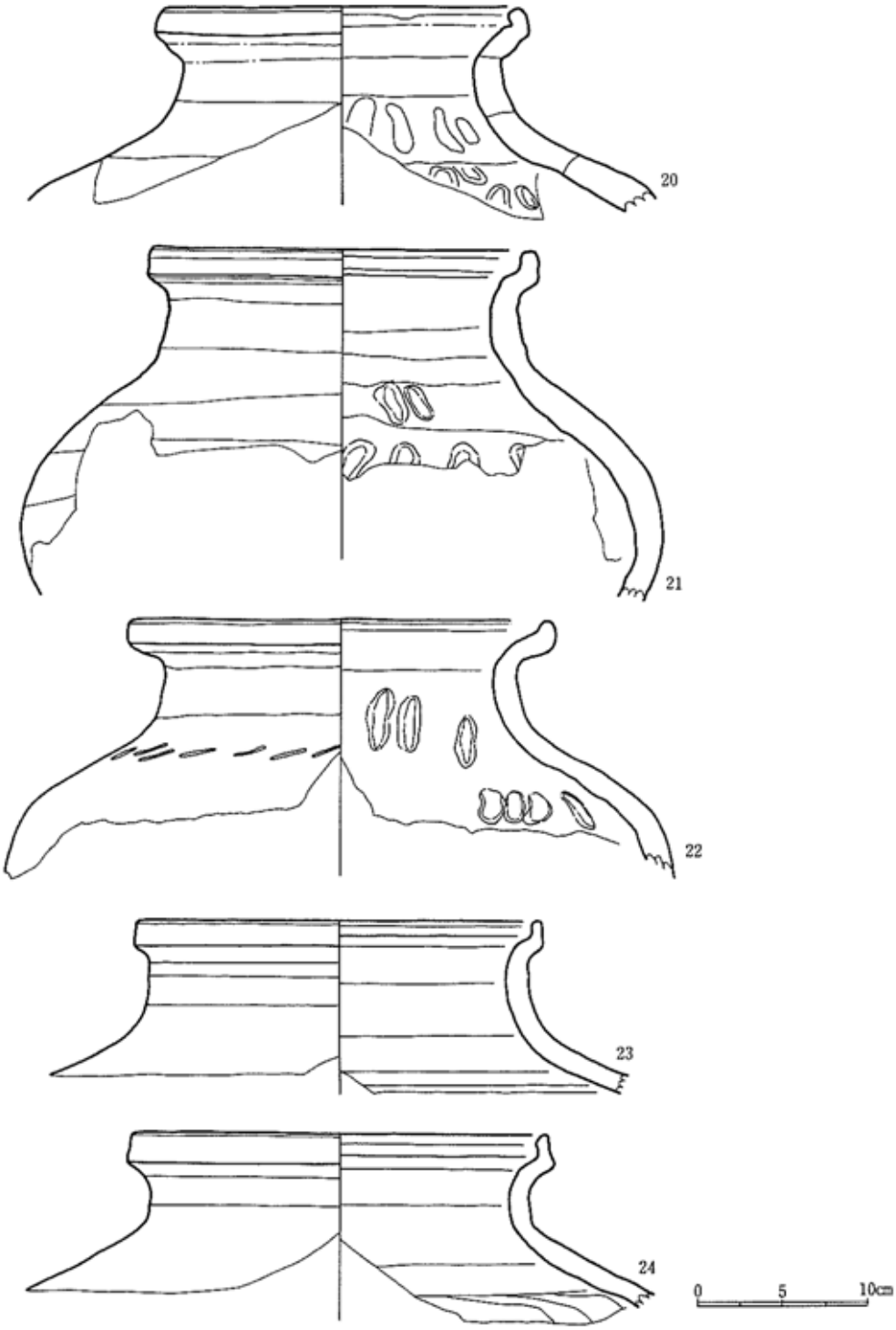
第41図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（４）



0　10cm

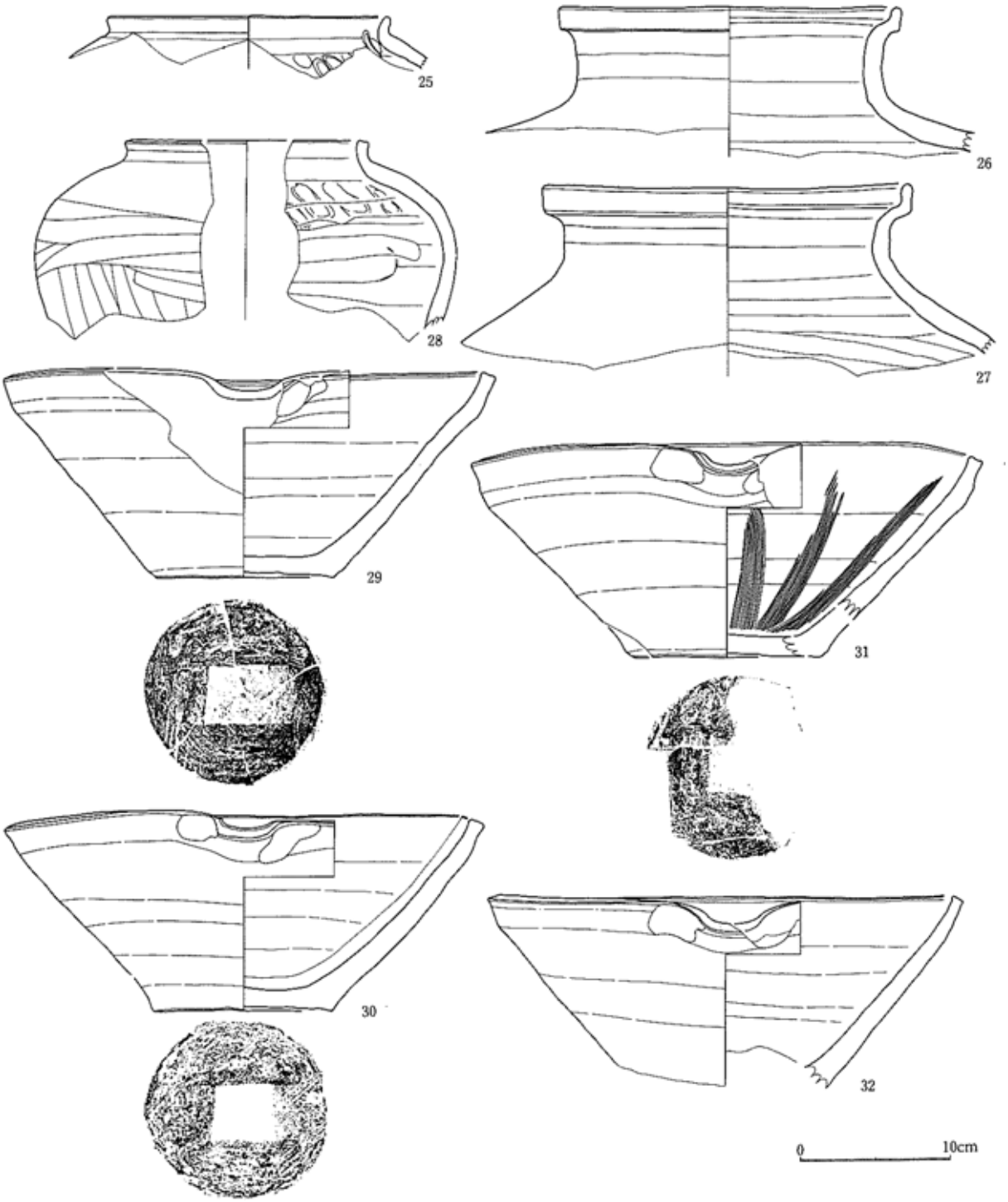
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
10	1灰9	広口壺	22.4			IB	−			07-107
11	1灰9	広口壺	24.0			B	−			07-118
12	1灰6	広口壺	22.5			C	−			07-103
13	1灰69	広口壺	22.6	14.8	39.7	IC	−	3/4		07-105
14	1灰69	広口壺	22.6			IIC	−	2/3		07-108
15	1灰6	広口壺	20.8			IIA	−			07-114
16	1灰6	広口壺	21.8			B	−			07-116
17	1灰6〜8	広口壺	20.2			IIB	−		肩に櫛描による波状文	07-121
18	1灰6	広口壺	22.8			IIA				07-93
19	1灰6	広口壺	22.0			IIC				07-94

第42図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（５）



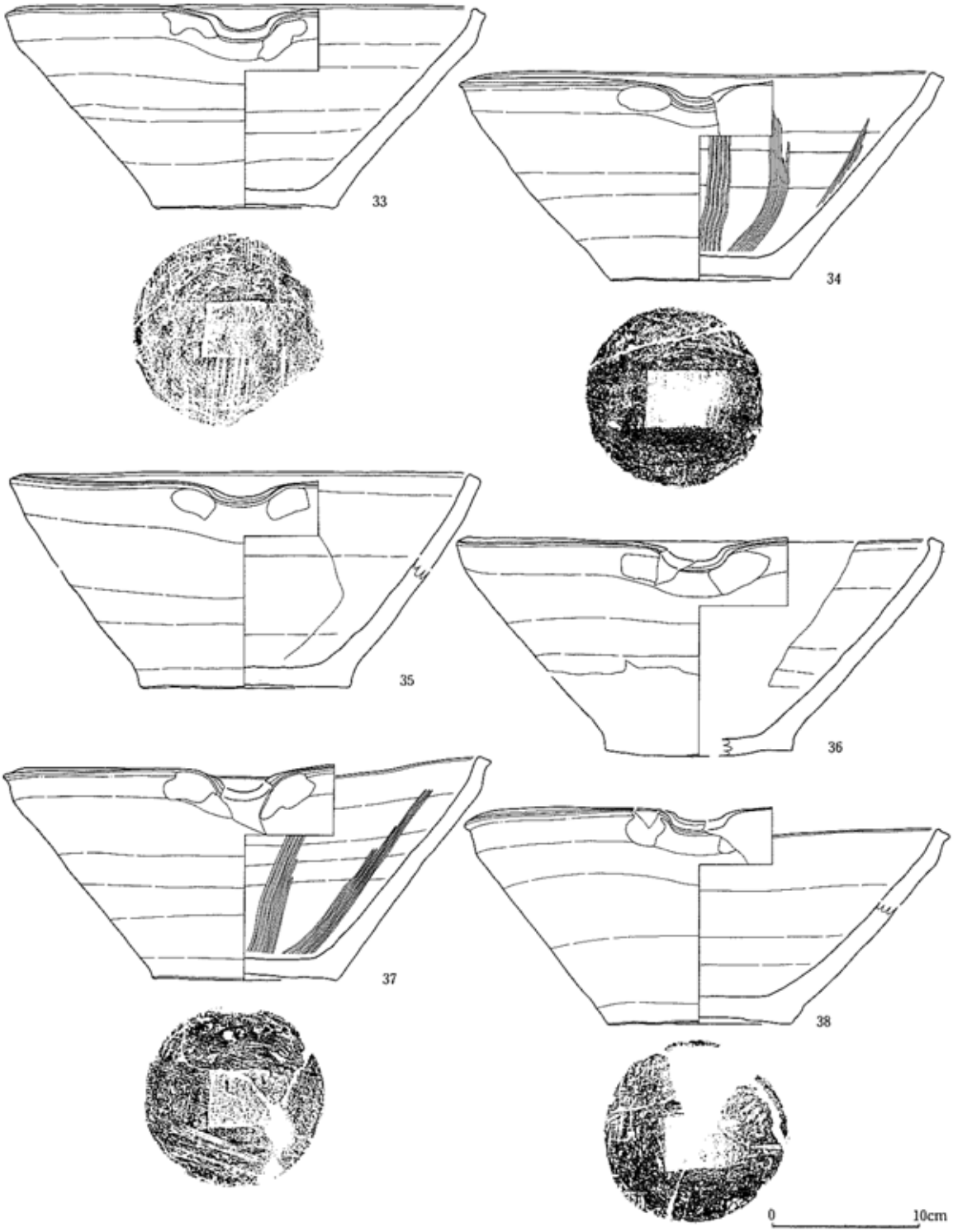
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
20	1区5	広口壺	20.4			C	−			07-101
21	区郭	広口壺	22.2			ⅡC	−			07-91
22	1区6	広口壺	24.2			C	−			07-92
23	1区5	広口壺	23.2			B	−			07-119
24	1区5	広口壺	24.0			A	−			07-120

第43図　ＳＲ－07竈跡出土遺物　（６）



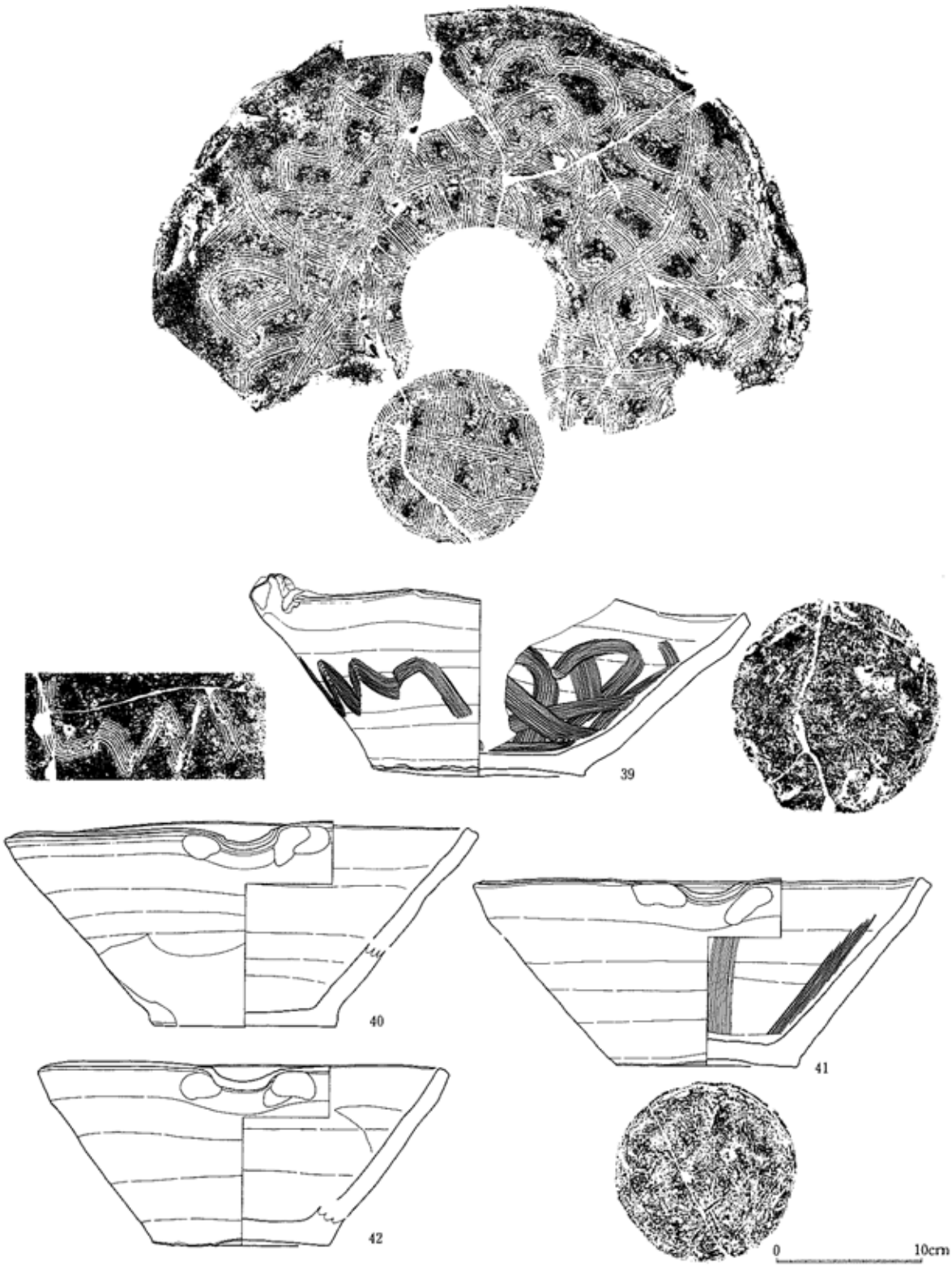
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
25	灰原	短頸壺	18.6			A	+			07-97
26	1区5	広口壺	22.2			C	−			07-115
27	1区5	広口壺	24.0			C	−			07-117
28	1区9	短頸壺	16.2			B	−			07-96
29	1区9	擂鉢	31.7	11.7	14.0	III C2	−	4/5	底部に方形の凹み　筋目なし　36.9%	07-33
30	1区9	擂鉢	32.9	11.9	13.4	III C3	−	2/3	底部に方形の凹み　筋目なし　37.2%	07-43
31	1区9	擂鉢	34.0	12.4	14.3	III C3	−	1/4	底面に方形の凹み　筋目あり　36.5%	07-65
32	1区9	擂鉢	31.6			III	−	4/5	筋目なし	07-55

第44図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（７）



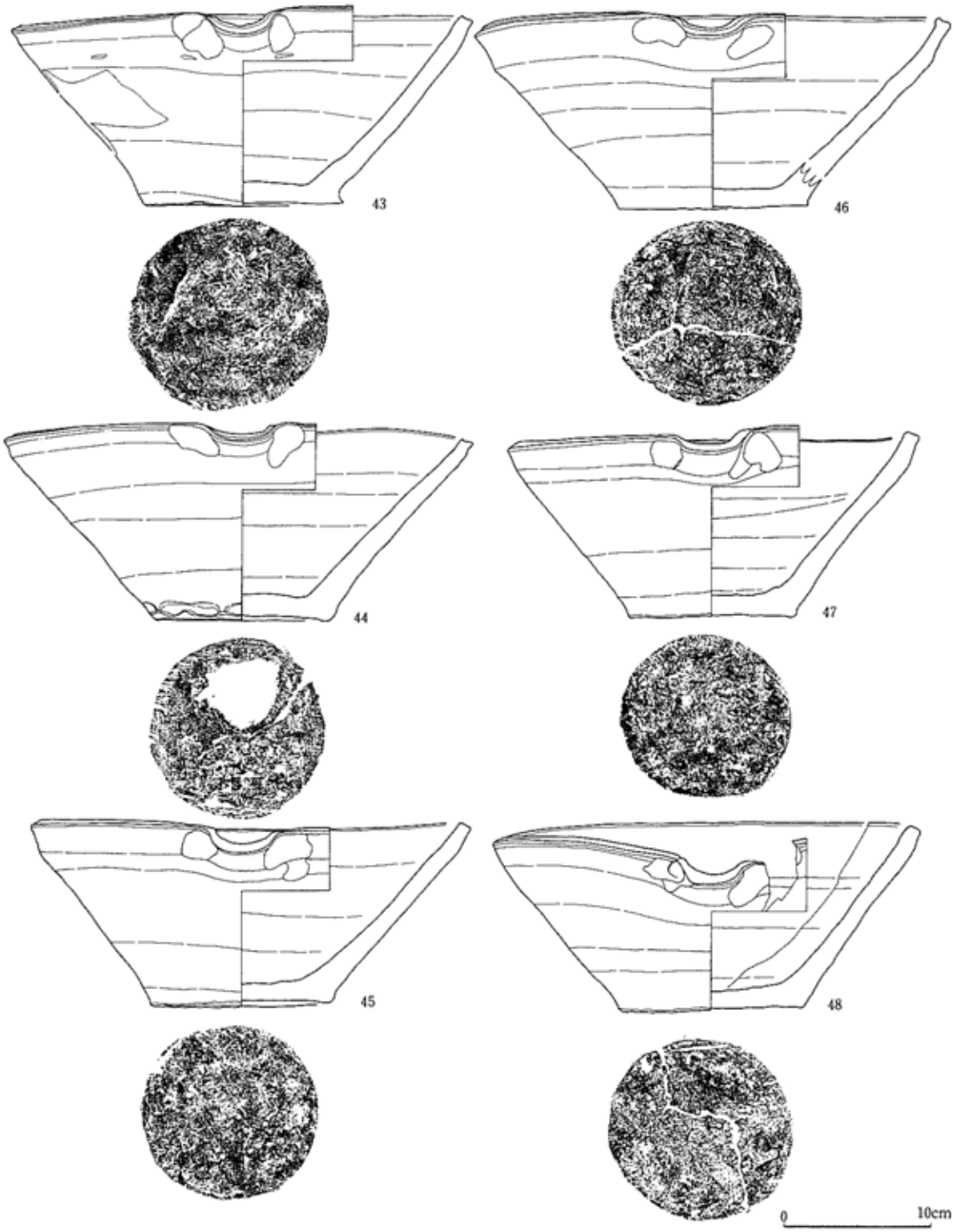
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
33	1区9	擂鉢	32.8	12.0	14.0	III C2	−	1/2	底部に方形の凹み 筋目なし 36.6%	07−71
34	1区5	擂鉢	33.0	12.2	14.5	III C2	−	完形	底部に方形の凹み 筋目あり 37.0%	07−72
35	1区5	擂鉢	33.2	12.8	15.0	III B4	−	1/2	筋目なし 38.6%	07−75
36	1区9	擂鉢	32.2	14.2	14.9	III A4	−	1/2	筋目なし 44.1%	07−76
37	1区9	擂鉢	33.4	12.6	15.5	III C2	−	完形	底部に方形の凹み 筋目あり 37.7%	07−80
38	1区9	擂鉢	33.3	12.6	15.0	III C2	−	3/4	底部に方形の凹み 筋目なし 37.7%	07−86

第45図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（８）



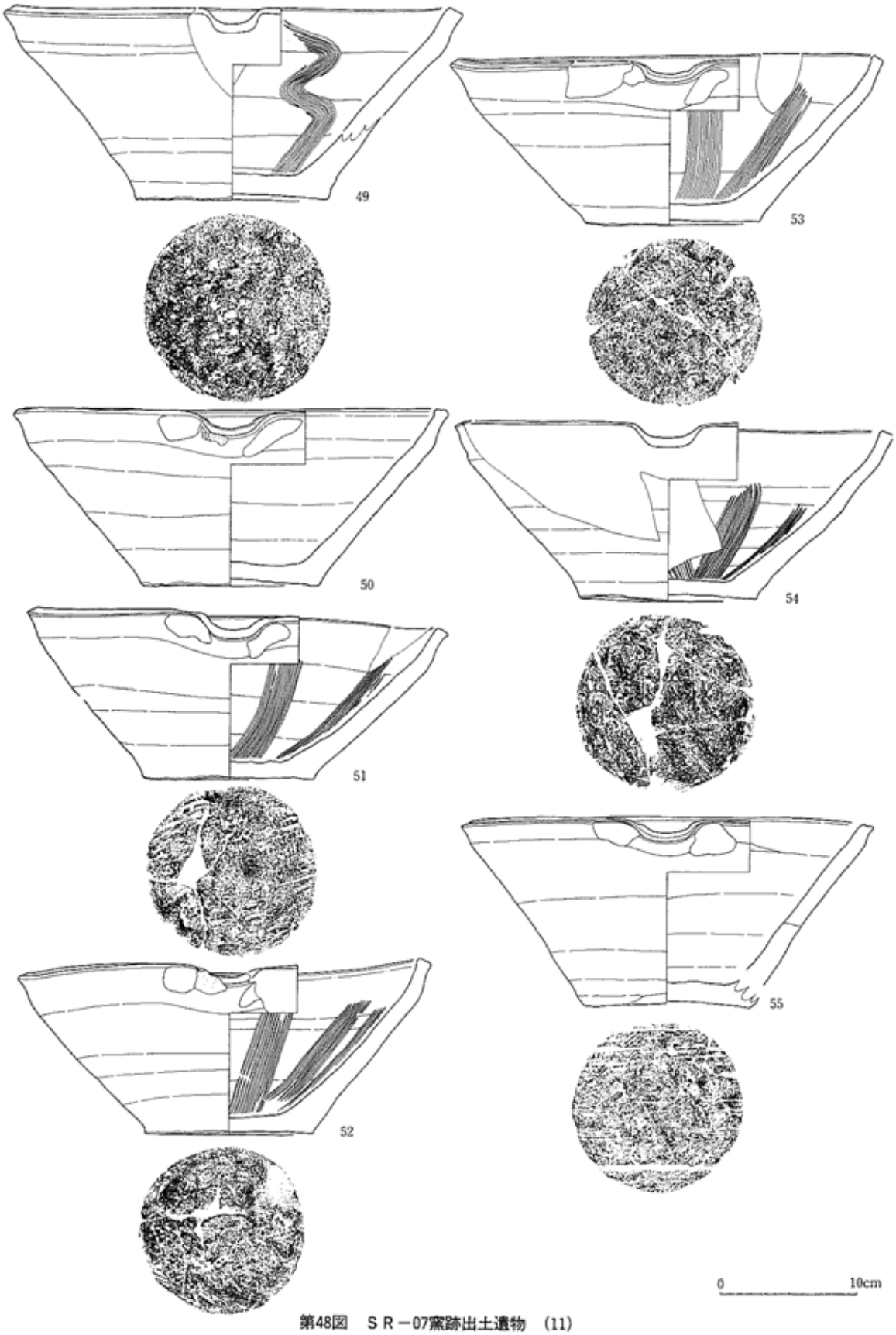
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
39	1区9	擂鉢	34.3	14.4	14.0	ⅢA	－	3/4	口縁　外面に波状の櫛歯書き　歪み大　42.0	07－69
40	1区5～6	擂鉢	32.7	12.5	14.4	ⅢB1	－	4/5	筋目なし　38.2%	07－69
41	1区5.7	擂鉢	31.7	12.4	13.3	ⅢB2	－	ほぼ完形	筋目なし　39.1%	07－70
42	1区6	擂鉢	28.6	12.2	12.8	ⅢA1	－	2/3	底部に方形の凹み　筋目あり　42.7%	07－40

第46図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（９）

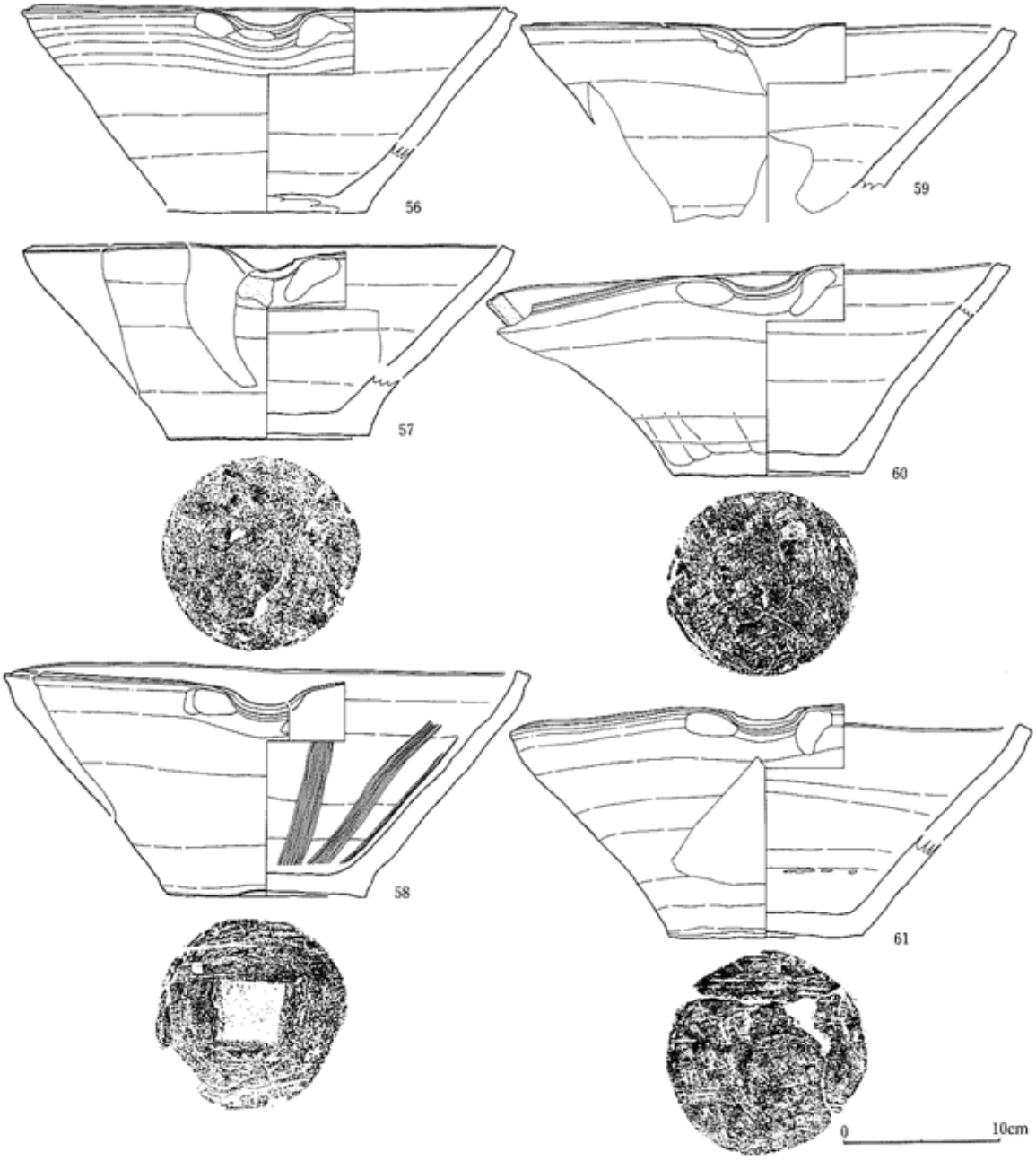


No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
43	1灰6	擂鉢	31.5	13.5	13.8	Ⅲ A4	－	完形	筋目なし 42.9%	07－32
44	1灰6	擂鉢	32.1	11.8	13.5	Ⅲ C2	－	3/4	筋目なし 36.8%	07－34
45	1灰6	擂鉢	30.2	12.2	12.9	Ⅲ B2	－	3/4	筋目なし 40.4%	07－35
46	1灰6	擂鉢	32.6	13.0	13.7	Ⅲ B2	－	2/3	筋目なし 39.9%	07－39
47	1灰6	擂鉢	28.2	11.1	13.0	Ⅱ B1	＋	ほぼ完形	筋目なし 39.4%	07－30
48	1灰6	擂鉢	29.3	12.3	13.1	Ⅱ A1	－	4/5	筋目なし 42.0%	07－42

第47図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(10)

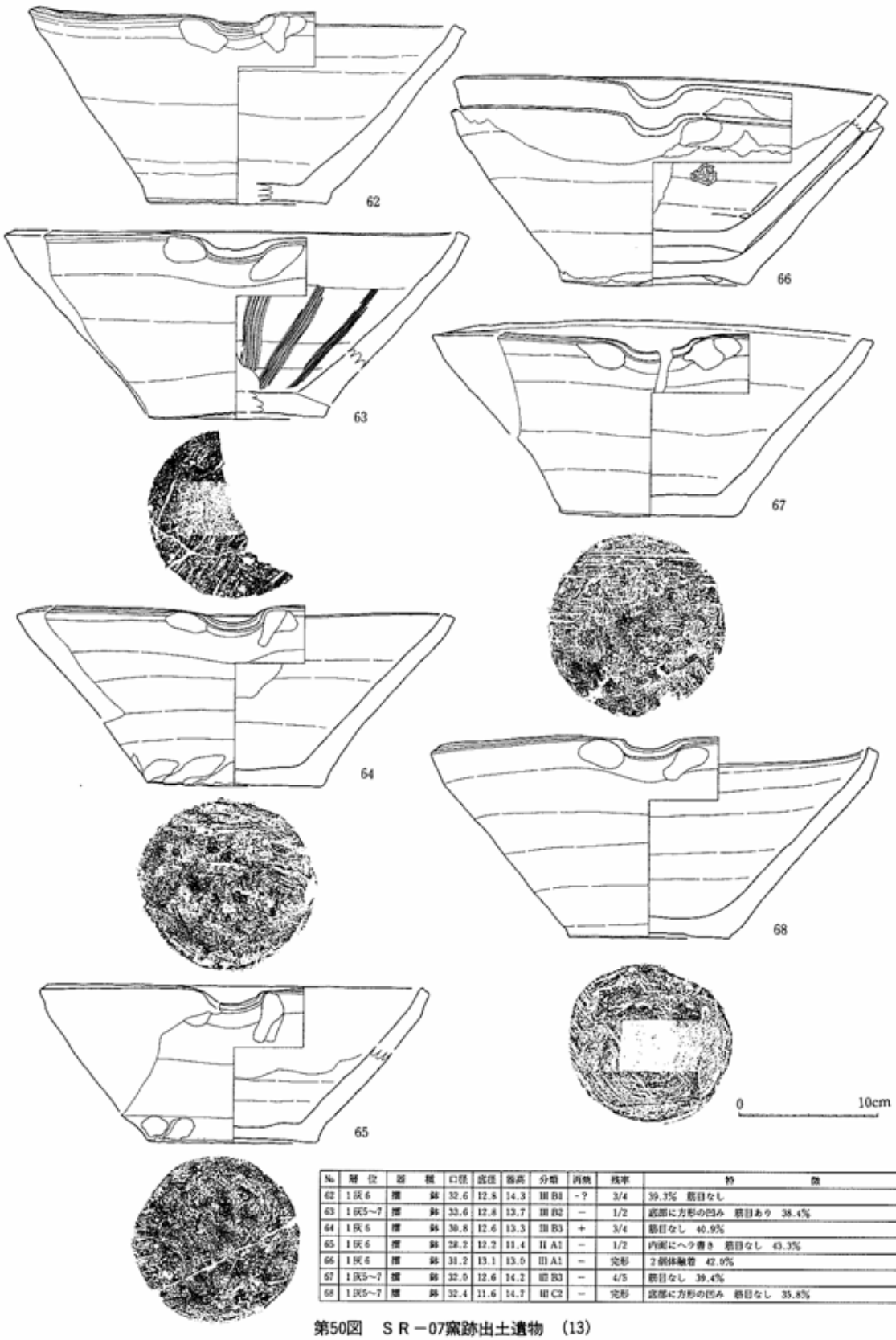


第48図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(11)



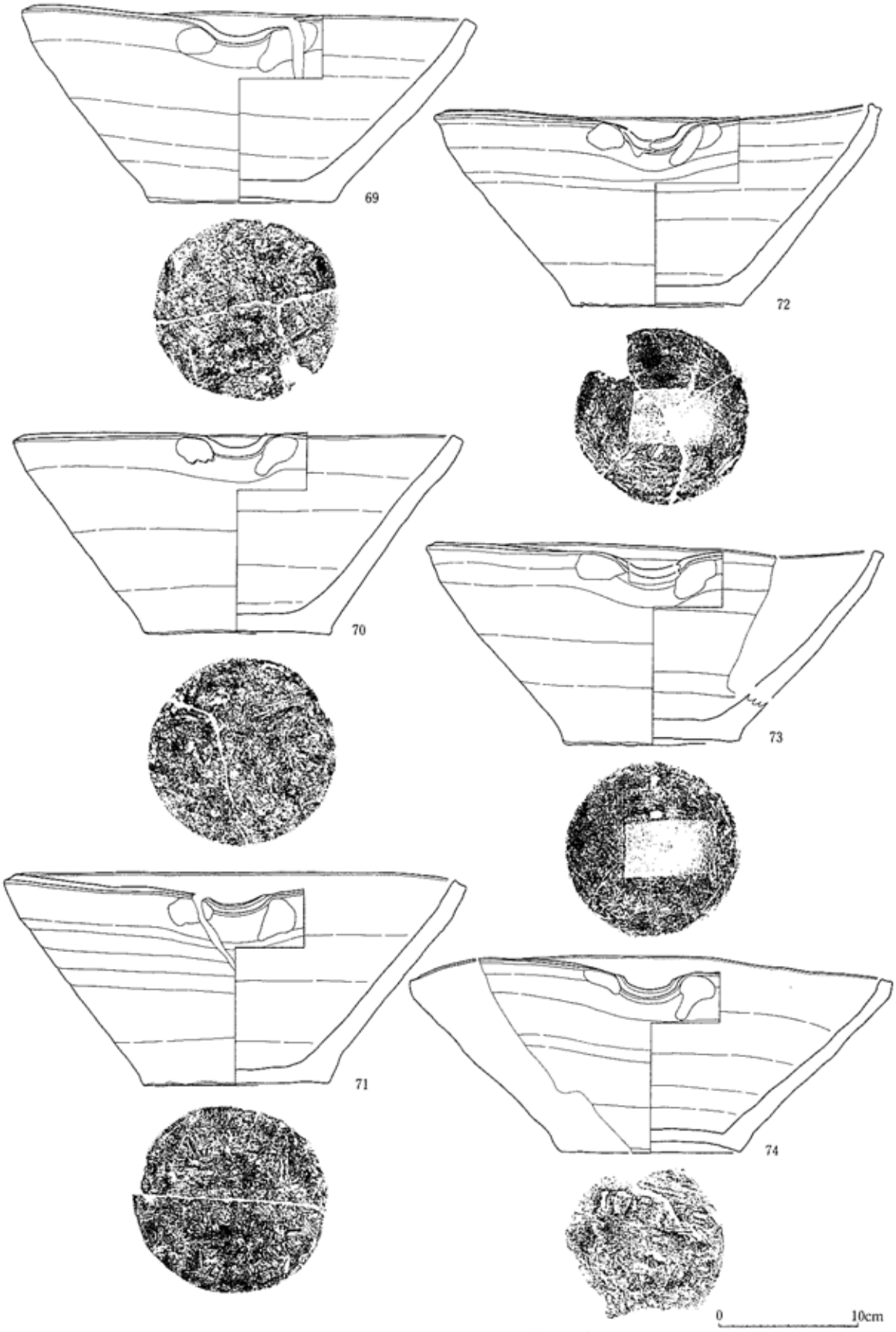
№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残存	特徴	登録
49	1灰6	擂鉢	33.6	14.0	14.3	Ⅲ A4	−	1/2	筋目あり 41.7%	07−46
50	1灰6	擂鉢	32.0	12.8	13.2	Ⅲ B2	−	1/2	内面にヘラ書き 筋目なし 40.0%	07−47
51	1灰6	擂鉢	31.0	12.5	12.7	Ⅲ B2	+	3/4	筋目あり 40.3%	07−49
52	1灰6	擂鉢	30.4	12.4	13.1	Ⅲ B2	+	3/4	筋目あり 40.8%	07−50
53	1灰6	擂鉢	31.6	12.7	12.8	Ⅲ B2	+	ほぼ完成	筋目あり 40.2%	07−53
54	1灰6	擂鉢	32.0	12.8	13.2	Ⅲ B3	−	2/3	筋目あり 40.0	07−56
55	1灰6	擂鉢	30.2	12.2	14.0	Ⅲ B1	-?	3/4	筋目なし 38.1%	07−59
56	1灰6	擂鉢	31.8	12.8	13.4	Ⅲ B1	-?	1/4	筋目なし 40.3%	07−62
57	1灰6	擂鉢	31.7	12.9	12.6	Ⅲ B4	−	1/2	筋目なし 40.7%	07−63
58	1灰6	擂鉢	33.8	12.8	15.0	Ⅲ C2	-?	2/3	底部に方形の凹み 筋目あり 37.9%	07−73
59	1灰6	擂鉢	31.7			Ⅲ	+	1/2		07−68
60	1灰6	擂鉢	33.6	12.2	13.6	Ⅲ C3	+	完形	筋目なし 36.3%	07−74
61	1灰6	擂鉢	33.4	12.4	15.1	Ⅲ C3	+	4/5	筋目なし 37.1%	07−79

第49図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(12)

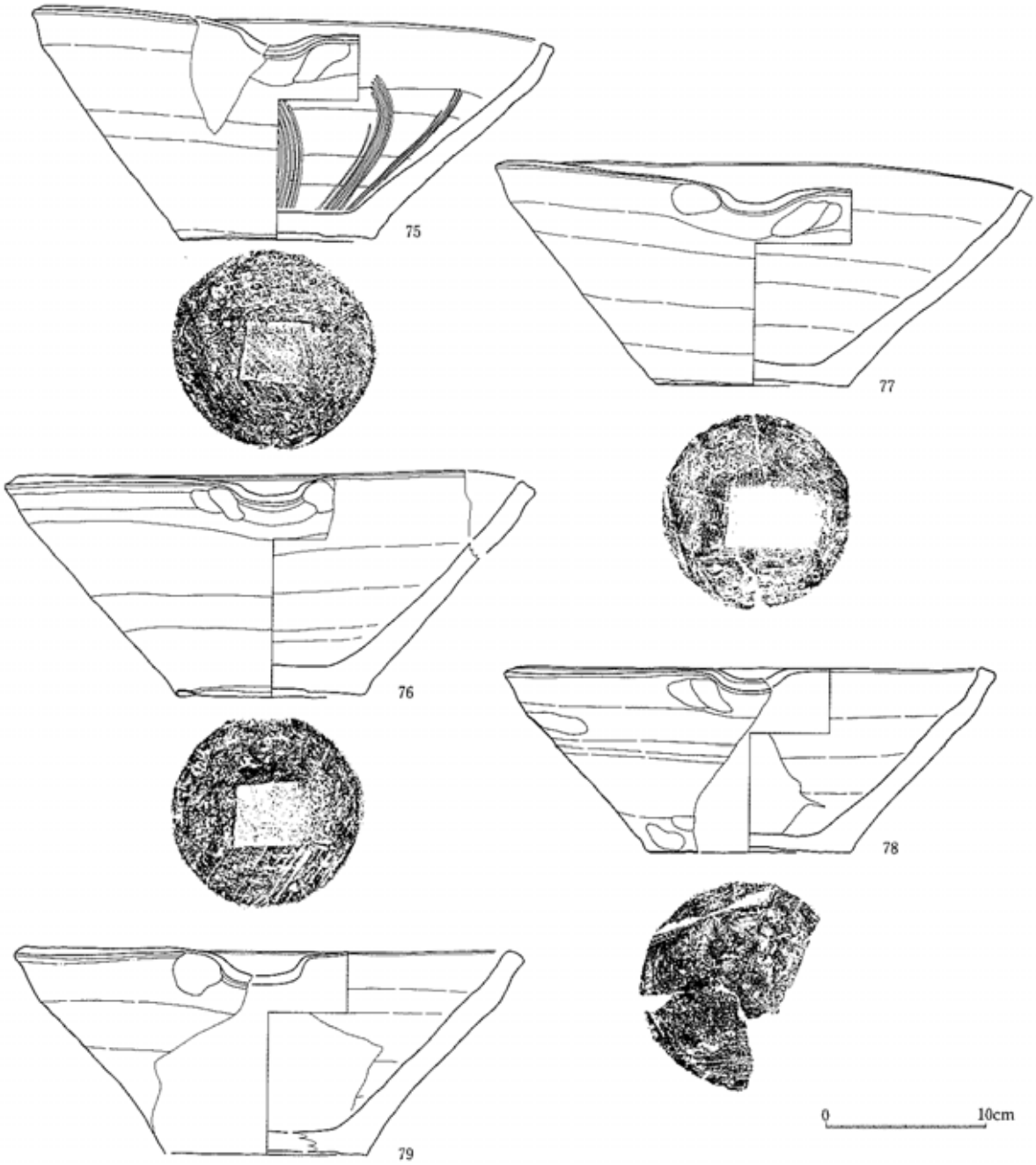


№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
62	1区6	壺	鉢	32.6	12.8	14.3	III B1	-?	3/4	39.3% 筋目なし	07−83
63	1区5~7	壺	鉢	33.6	12.8	13.7	III B2	−	1/2	底部に方形の凹み 筋目あり 38.4%	07−84
64	1区6	壺	鉢	30.8	12.6	13.3	III B3	+	3/4	筋目なし 40.9%	07−85
65	1区6	壺	鉢	28.2	12.2	11.4	II A1	−	1/2	内面にヘラ書き 筋目なし 43.3%	07−88
66	1区6	壺	鉢	31.2	13.1	13.0	III A1	−	完形	2個体融着 42.0%	07−90
67	1区5~7	壺	鉢	32.0	12.6	14.2	III B3	−	4/5	筋目なし 39.4%	07-24
68	1区5~7	壺	鉢	32.4	11.6	14.7	III C2	−	完形	底部に方形の凹み 筋目なし 35.8%	07−25

第50図　ＳＲ−07竈跡出土遺物　(13)

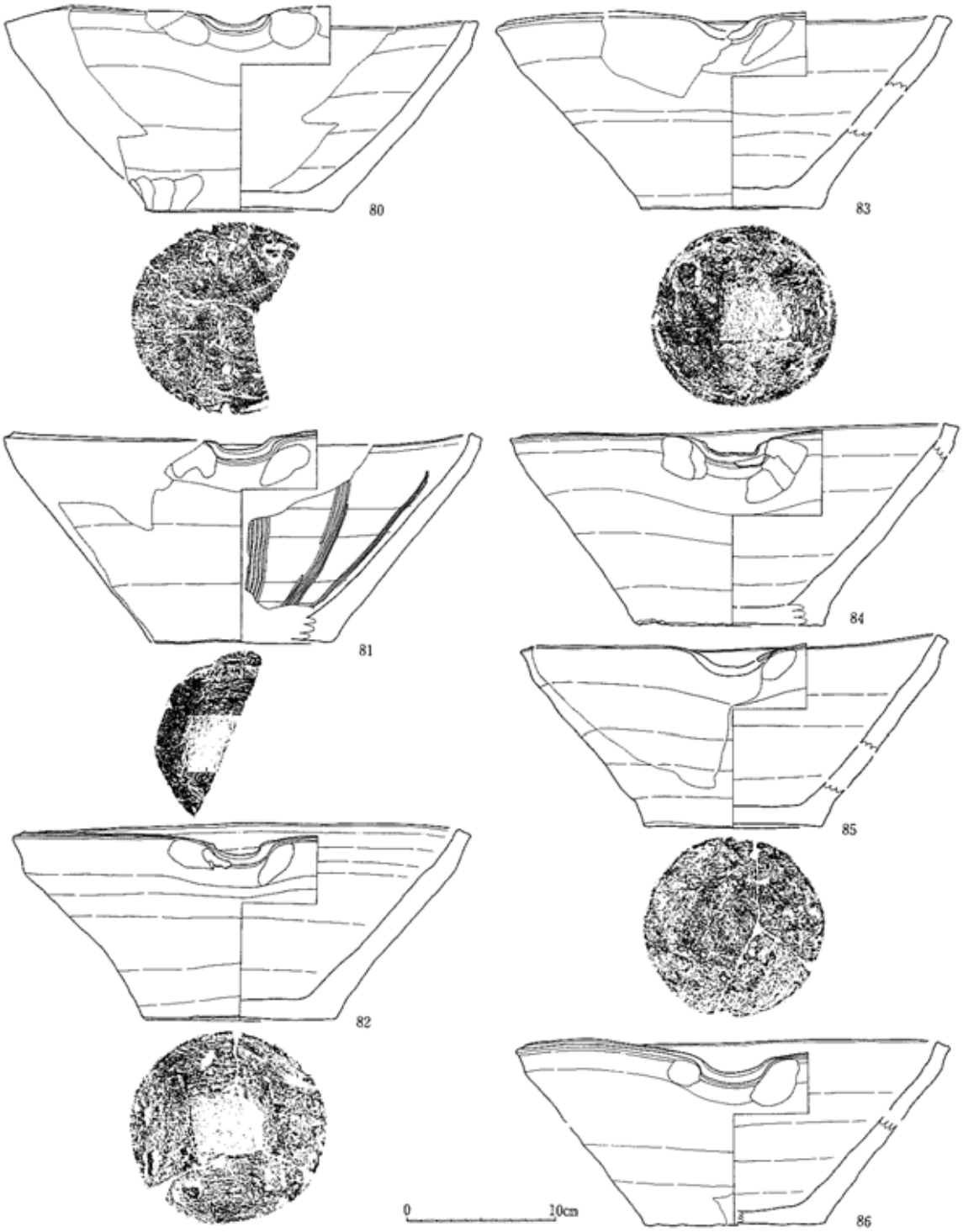


第51図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(14)



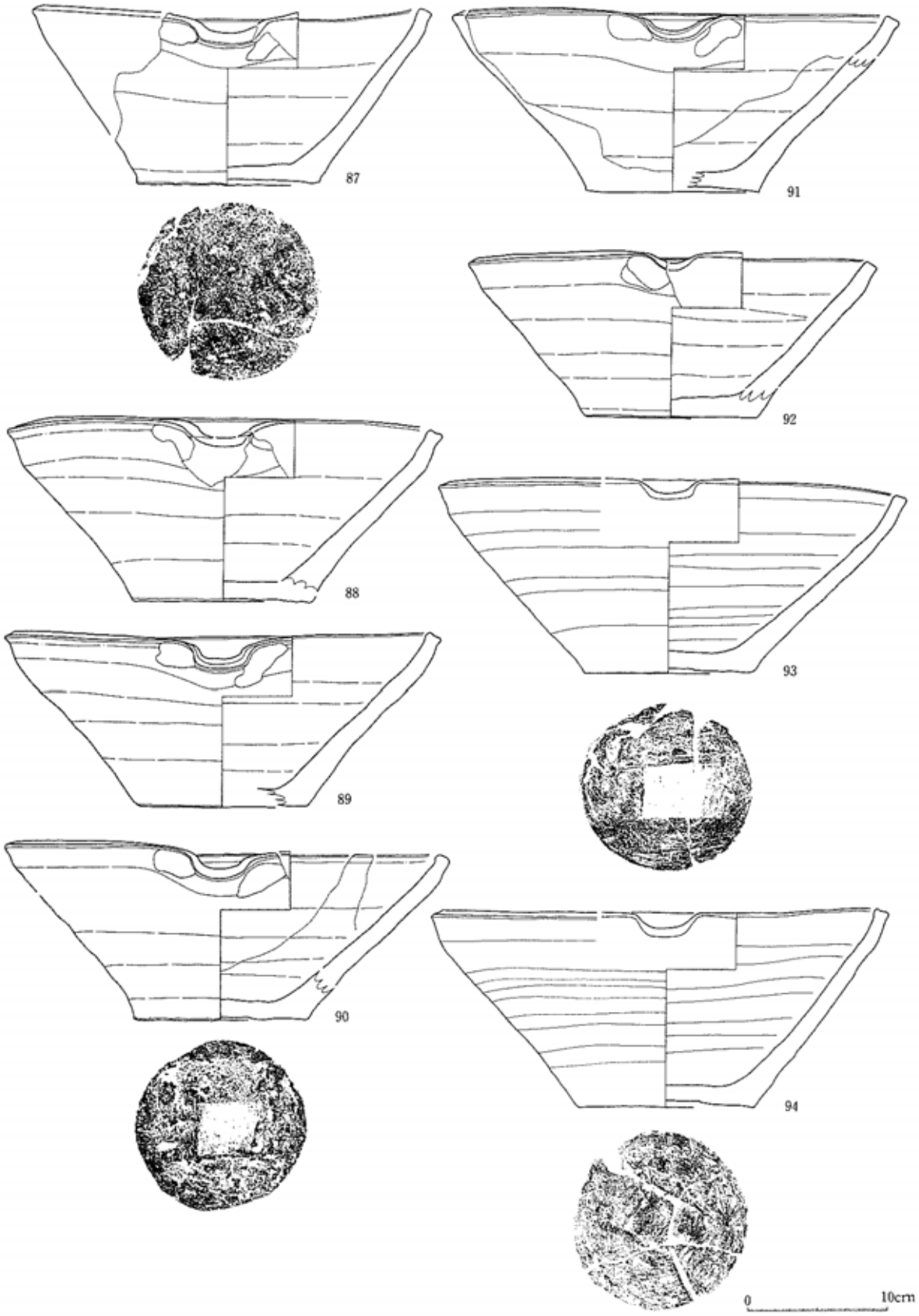
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
69	1灰5～7	擂鉢	33.0	13.1	14.4	III B1	－	完形	筋目なし 39.7%	07－27
70	1灰5～7	擂鉢	32.7	13.4	15.6	III A1	－	完形	筋目なし 41.0%	07－29
71	1灰5～7	擂鉢	33.5	13.3	15.5	III B1	－	完形	39.7%	07－31
72	1灰5～7	擂鉢	32.4	12.3	14.7	III C3	－	完形	底部に方形の凹み 筋目なし 38.0%	07－36
73	1灰5～7	擂鉢	33.1	12.5	14.7	III C2	－	4/5	底部に方形の凹み 筋目なし 37.8%	07－37
74	1灰5～7	擂鉢	35.0	12.8	14.8	III C	－	3/4	筋目なし 36.6%	07－44
75	1灰5～7	擂鉢	33.0	12.2	14.8	III C2	＋	ほぼ完形	底部に方形の凹み 筋目あり 37.0%	07－48
76	1灰5～7	擂鉢	33.3	11.6	14.4	III C2	－	3/4	底部に方形の凹み 筋目なし 34.8%	07－07
77	1灰5～7	擂鉢	33.7	12.1	14.0	III C3	－	完形	底部に方形の凹み 筋目なし 35.9%	07－08
78	1灰5	擂鉢	30.8	12.6	11.7	III B2	－	1/3	筋目なし 40.9%	07－09
79	1灰5	擂鉢	32.0	12.6	13.1	III B3	－	1/3	筋目なし 39.4%	07－10

第52図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(15)

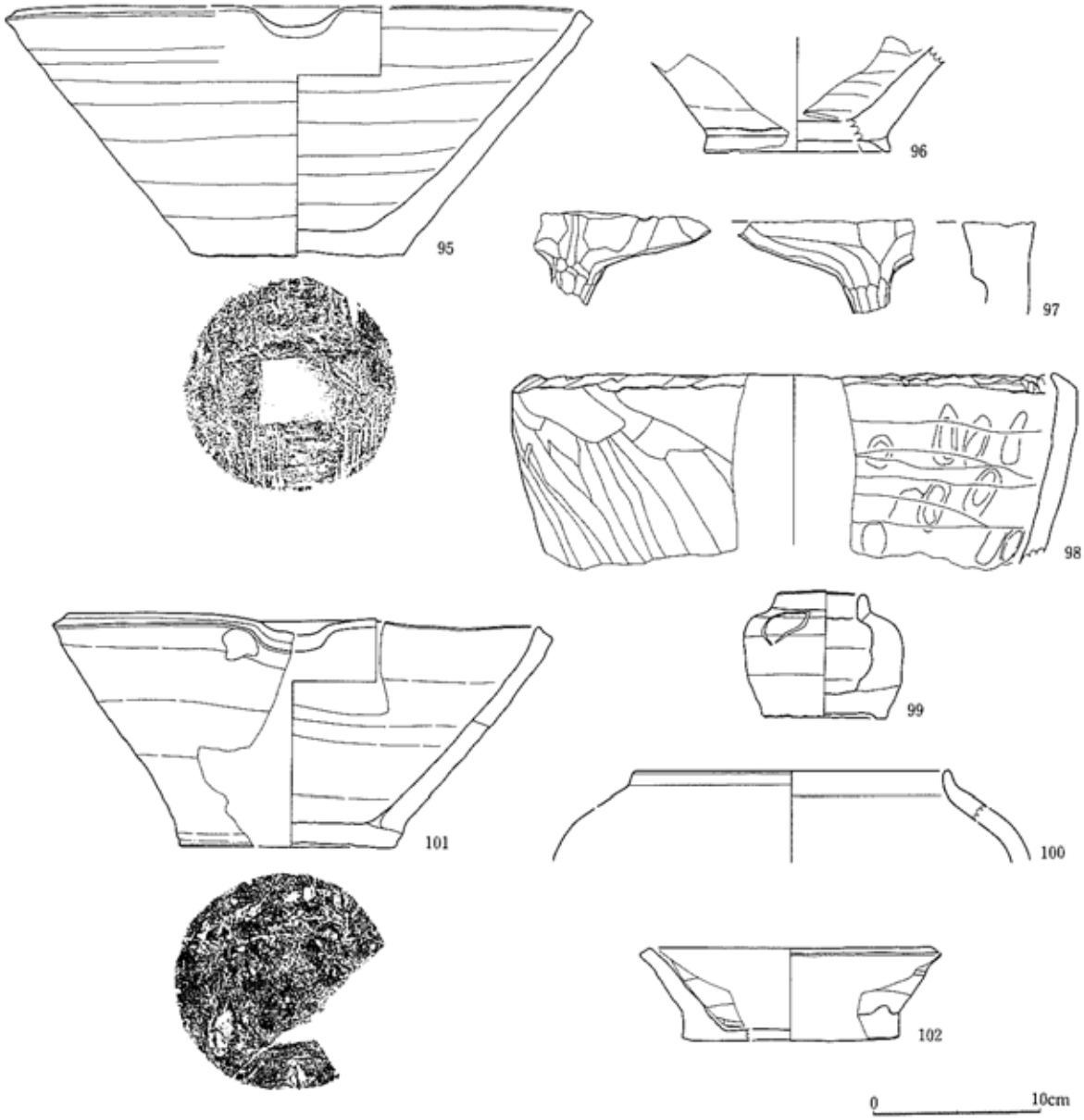


No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
80	1区5	鍋	32.0	12.6	15.7	III B2	－	2/3	筋目なし 39.4%	07－23
81	1区6	鍋	32.1	12.3	14.4	III B2	－	1/2	底部に方形の凹み 筋目あり 38.4%	07－81
82	灰原	鍋	30.9	12.9	13.4	III A3	－	完形	底部に方形の凹み 筋目なし 41.7%	07－04
83	灰原	鍋	30.6	12.1	13.4	III B3	－	4/5	底部に方形の凹み 筋目なし 39.5%	07－05
84	灰原	鍋	30.2	12.4	13.8	III A3	－	2/3	筋目なし 41.1%	07－18
85	灰原	鍋	28.9	12.0	13.0	II A4	－	3/4	筋目なし 41.5%	07－19
86	灰原	鍋	29.2	12.1	12.5	III A2	－	3/4	筋目なし 41.4%	07－54

第53図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(16)

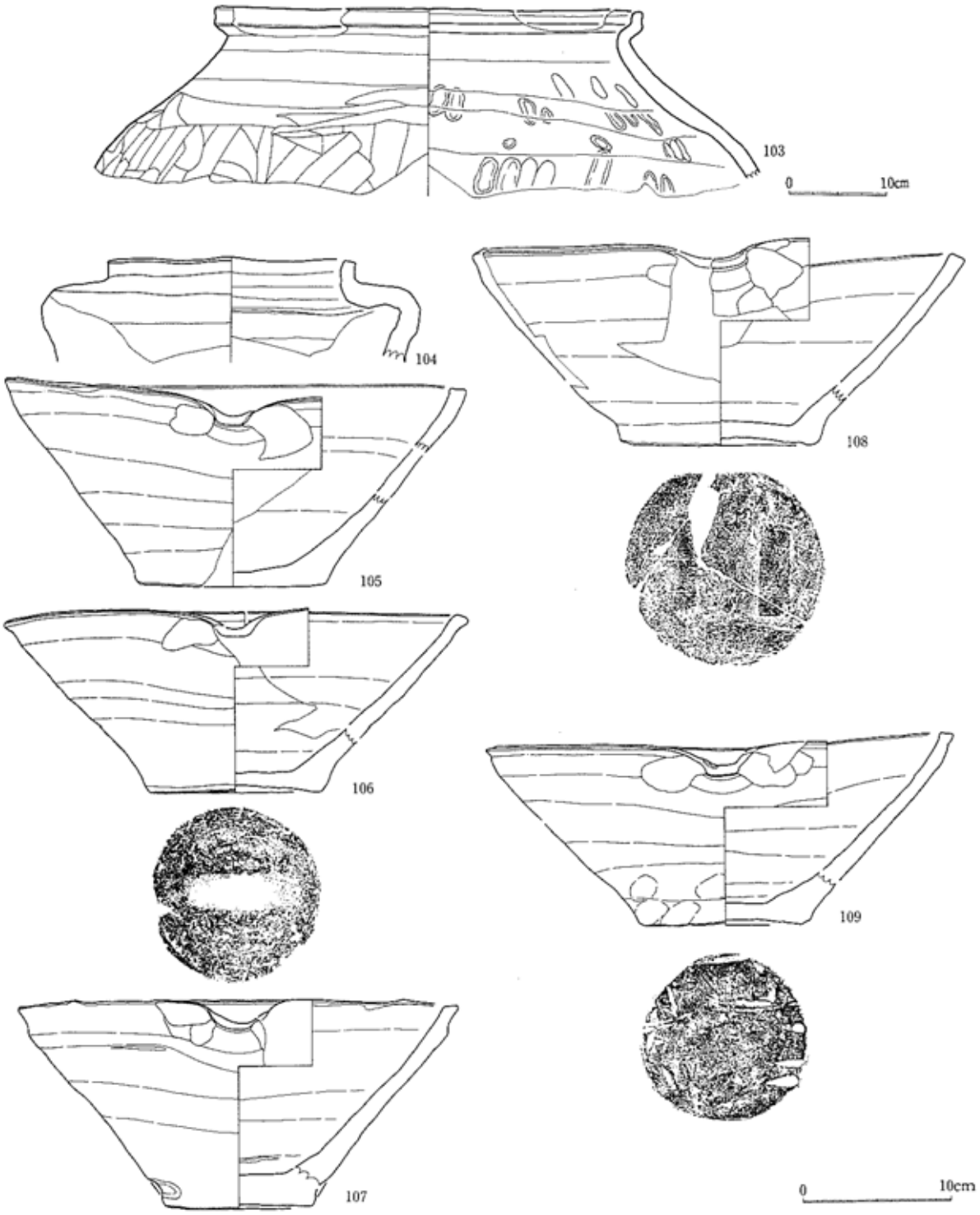


第54図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(17)



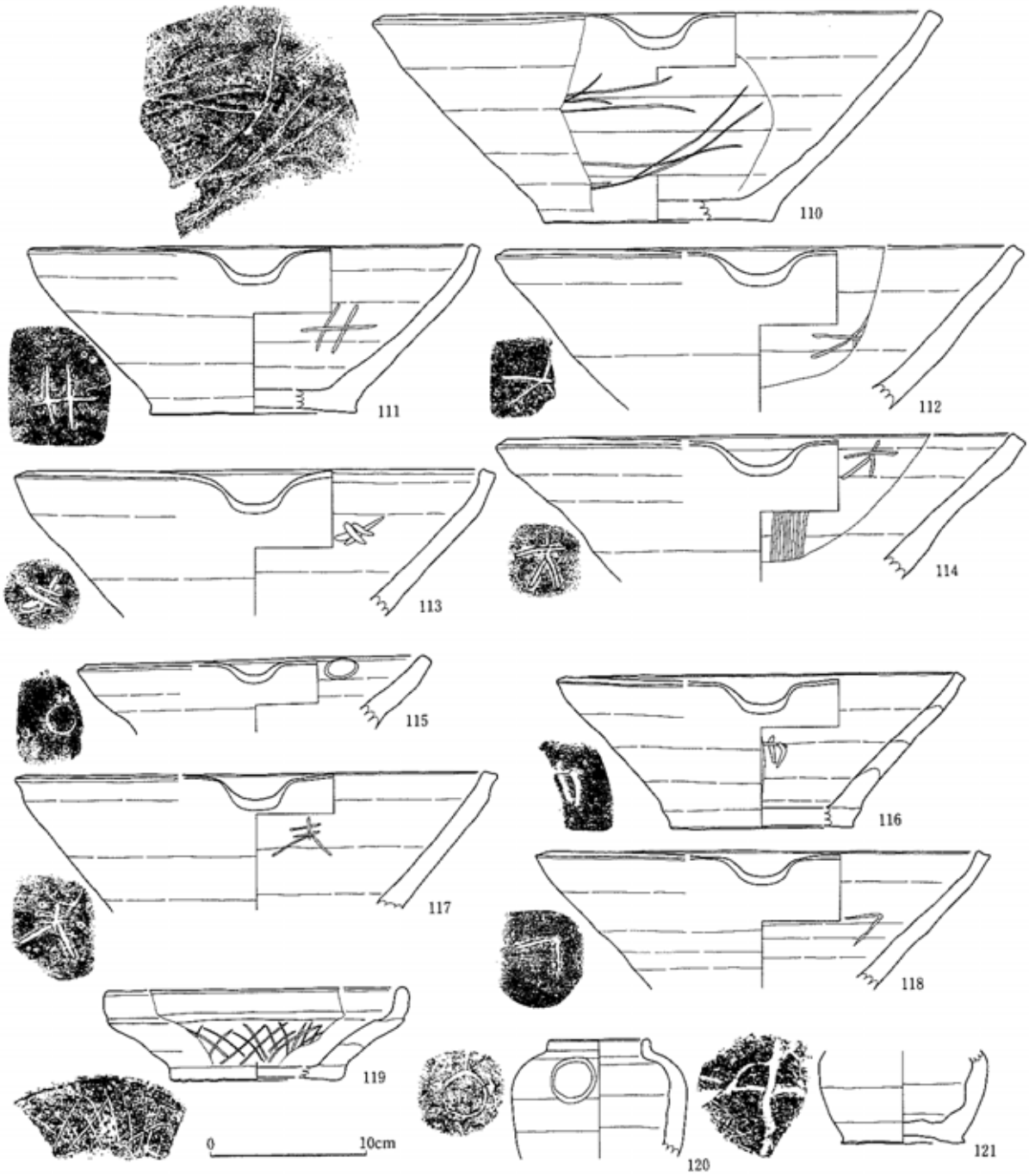
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
87	灰原	擂鉢	28.6	13.0	12.9	II A2	−	2/3	筋目なし 45.5%	07−57
88	1灰5	擂鉢	31.2	12.8	13.2	III B3	−	1/3	筋目なし 41.0%	07−58
89	灰原	擂鉢	31.4	12.2	12.6	III C3	−	1/3	筋目なし 38.9%	07−64
90	1灰5	擂鉢	31.9	12.4	13.0	III C4	−	1/3	底部に方形の凹み 筋目なし 38.9%	07−66
91	灰原	擂鉢	32.0	12.4	13.2	III C5	−	1/3	筋目なし 38.8%	07−67
92	灰原	擂鉢	29.2	12.2	12.0	II A1	−	2/3	筋目なし 41.8%	07−78
93	1灰7〜9	擂鉢	33.6	12.2	14.1	III C2	−	2/3	底部に方形の凹み 筋目なし 36.3%	07−38
94	1灰5	擂鉢	32.8	12.6	14.5	III C2	−	3/4	底部に方形の凹み 筋目なし 38.4%	07−41
95	1灰6	擂鉢	35.4	12.8	15.2	III C2	−	1/3	底部に方形の凹み 筋目なし 36.2%	07−45
96	1灰5〜7	高台		11.0			+	小片	付け高台	07−60
97	1灰5	不明					−	小片	脚部破片（火鉢の脚部？）	07-110
98	1灰5	不明	31.0				−	1/5		07-102
99	1灰9	小壺	5.0	7.4	7.7		−	完形	最大径9.5cm 体部に「○」のヘラ書き	07-111
100	1灰4	無類壺	18.8				−	小片		07-113
101	2焼床	擂鉢	30.8	13.1	14.0	III A1	−	2/3	筋目なし 42.5%	07−12
102	2灰2	擂鉢	18.2	13.0	5.6	I	−	小片	筋目なし	07−98

第55図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　（18）



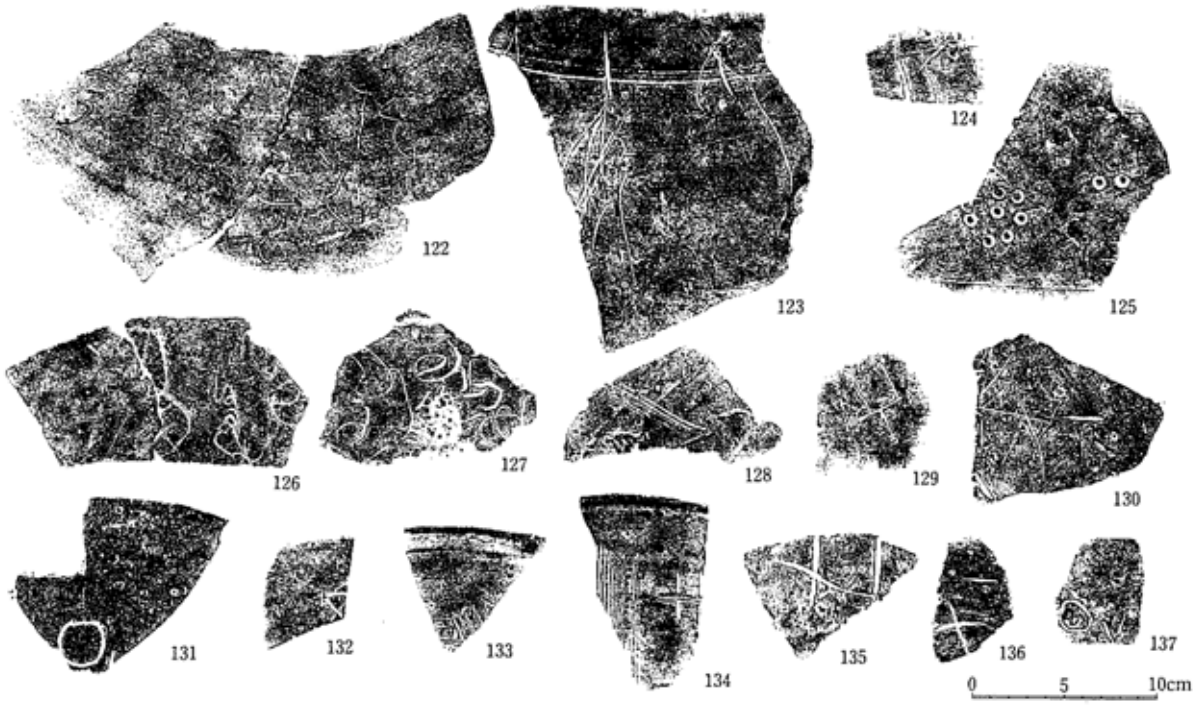
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
103	3燃焼	甕	43.8			IB	−			07-104
104	3燃焼	短頸壺	15.8				−			07-112
105	3燃床	鍋 鉢	30.2	12.7	14.3	III A2	+?	ほぼ完成	筋目なし 42.1%	07−13
106	3燃焼	鍋 鉢	31.3	11.5	12.4	III C3	−	2/3	底部に方形の凹み 筋目なし 36.7%	07−14
107	3燃焼	鍋 鉢	29.6	10.0	14.2	III C3	−	1/2	筋目なし 33.8%	07−16
108	1区5	鍋 鉢	33.3	13.4	14.1	III B4	−	3/4	底部に方形の突出 筋目なし 40.2%	07−17
109	3燃焼	鍋 鉢	31.7	11.4	12.4	III C2	−	2/3	筋目なし 36.0%	07−20

第56図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(19)



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
110	1灰6～9	擂鉢	46.6	14.8	13.5	III B1	－	1/3	40.4%　内面に櫛状のヘラ書き　片口欠損	タ7-02
111	1灰6	擂鉢	29.2	13.2	10.9	III A5	－	1/4	45.2%　内面に「升」のヘラ書き　片口欠損	タ7-H
112	1灰5～6	擂鉢	34.0			III			筋目なし　内面に「大」のヘラ書き　片口欠損	タ7-08
113	灰原	擂鉢	31.0			III			筋目なし　内面に「夫」のヘラ書き　片口欠損	タ16-A
114	1灰5	擂鉢	34.0			III			筋目あり　内面に「大」のヘラ書き　片口欠損	タ7-11
115	1灰5	擂鉢	22.8			II			筋目なし　内面に「○」のヘラ書き　片口欠損	タ7-07
116	1灰5	擂鉢	26.2	11.5	9.9	II A3	－	1/4	筋目なし　内面に「卅」のヘラ書き　片口欠損　50.4%	タ7-10
117	1灰5	擂鉢	31.0			III			筋目なし　内面に「夫」のヘラ書き　片口欠損	タ7-03
118	埋土	擂鉢	29.2			III			筋目なし　内面に「>」のヘラ書き　片口欠損	タ7-04
119	1灰5	擂鉢	19.0	11.2	5.9	I			1本書きの筋目　59.0%	タ7-A
120	灰原9	小壺	6.5			B			体部外面に「○」のヘラ書き	タ7-15
121	灰原9	小壺		8.0		A			底部内面に「＋」のヘラ書き	タ7-02

第57図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(20)



第58図　ＳＲ－07窯跡出土遺物　(21)

ＳＲ－08 窯跡（第 59～63 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では比較的高所(標高約 109m)に位置する。ＳＲ-04・14 と重複しＳＲ-14 を切り、ＳＲ-04 に切られている。また、灰原の部分でＳＲ-07・09 と重複し、こられ 2 基の窯の灰原が形成される以前に本窯跡の灰原の堆積が観察される。しかも、これらの窯の中でＳＲ-07 とＳＲ-04 には重複があり、前者が後者によって切られていることが明らかとなっている。これらのことから新旧関係はＳＲ-14→ＳＲ-08→ＳＲ-07・09→ＳＲ-04 の順となる。

凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。残存状況は悪く前庭部の大部分や焼成部の上半は失われている。天井部はすべて崩落していた。窯体の平面形は紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－47°－Ｅで、また斜面と窯体主軸の角度は 85°あり、窯体は斜面に対してほぼ垂直に作られている。

規模は窯長が約 12.8m、窯幅は最大部分で 3.4mある。焼成面は合計で 8 面あり、その中で大きな作り替えは 3 回認められている。1 次面と最終使用面の 8 次面の標高差は約 1mある。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延びる。先端から灰原に続く部分は削平を受けているが、残存部の規模は長さ約 5.0m、幅 1.8mある。床はいずれの面も貼り床で、1 次面は窯を掘り抜いた際の土でＳＲ-14 を埋め込みその面をそのまま床としている。2 次面以降はそれまでの使用面を埋め戻し(5～40 ㎝)、その面を床としている。床面の傾斜は 5°で分焔柱に向かってわずかに傾斜する。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは約 20 ㎝ある。掘り込み面をそのまま壁としている。

［前庭部の施設］1 次面を除去した段階（掘り方面）で、溝が 1 条検出されている。溝は燃焼部の焚口付近から前庭部の先端まで掘り込まれており、規模は全長 4.6m、幅 20～30 ㎝ある。窯を掘り抜いた際の土で埋め戻されており、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、焚口から分焔柱に向かってわずかに広がる。燃焼部は全長約 1.6mあり、この部分からは木炭が多量に検出されている。

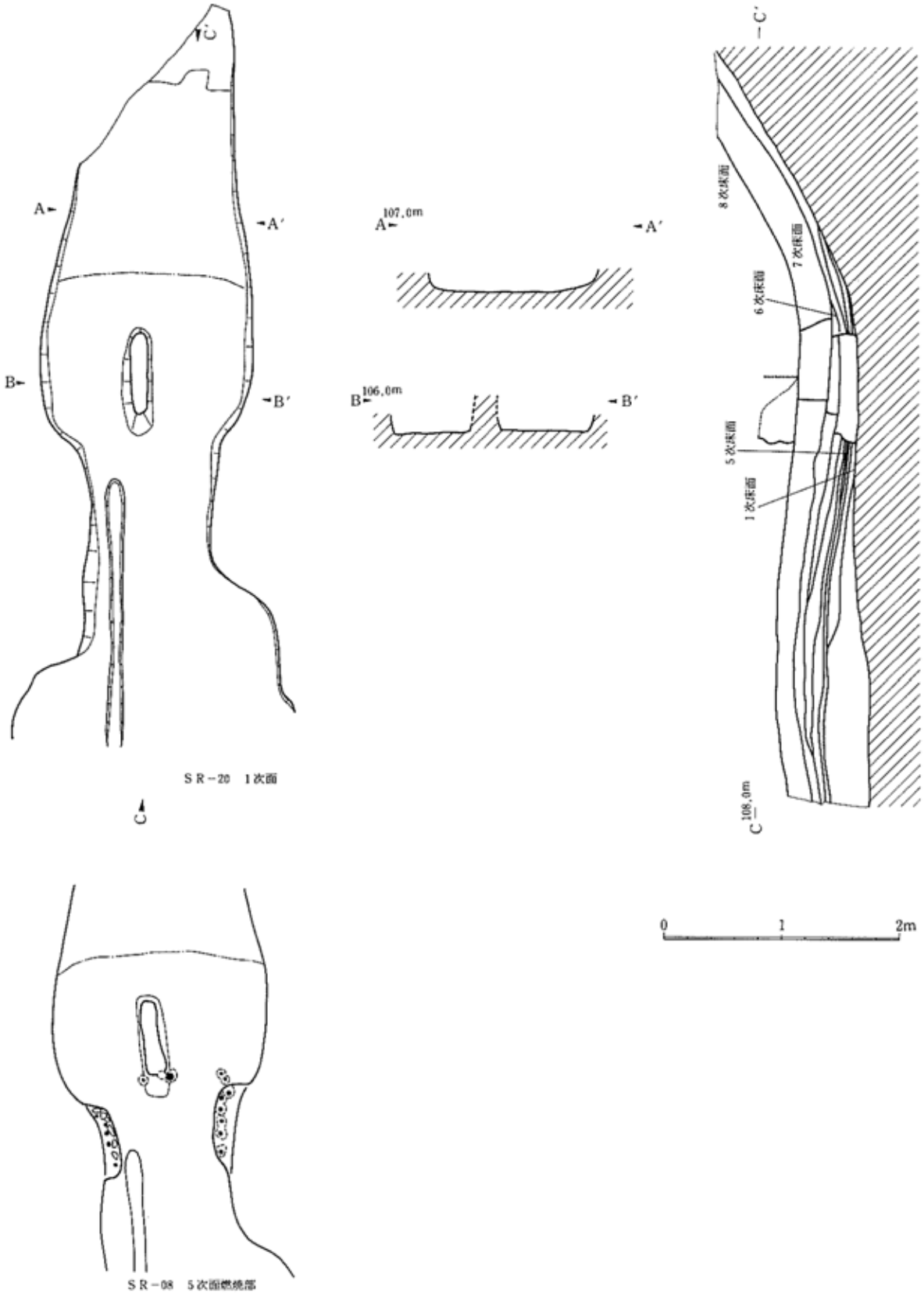
床面は、地山の掘り込み面をそのまま利用しており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい分焔柱の手前で約 80 ㎝ある。焚口部の側壁は基本的には地山をそのまま壁としていると考えられるが、5・6・7 次面では大きな修復が行なわれている。これらの面では修復された窯壁の部分を除去したところ、壁の内部から炭化材が右側壁で 6 個、左側壁で 5 個連続して壁と平行に検出されており、壁の修復方法は、壁際に何本かの杭を打ち込みその部分を芯として粘土を貼りつけたものと考えられる。修復された壁の厚さは 30～40 ㎝あり、左右合わせて 70 ㎝ほどこの部分を狭めている。

［分焔柱］分焔柱は 6・7・8 次面で作り替えや補修が行なわれている。分焔柱の構築方法は 1～5 次面と 6 次面・7 次面に伴う分焔柱は基本的には地山を削り出して作っているが、7 次面のものは先端（焚口側）に杭を打ち込みその部分を芯として粘土を貼り付けて補修が行なわれている。一方、8 次面では大きく作り替えが行なわれ、床面から石や窯壁を積み上げそれを芯として粘土を貼り付けて作られている。残存する部分の高さは比較的残りのよい 7・8 次面のもので約 50 ㎝ある。通焔孔の幅は 8 次面では基底部において焼成部に向かって右側が 84 ㎝、左側が 100㎝ ある。

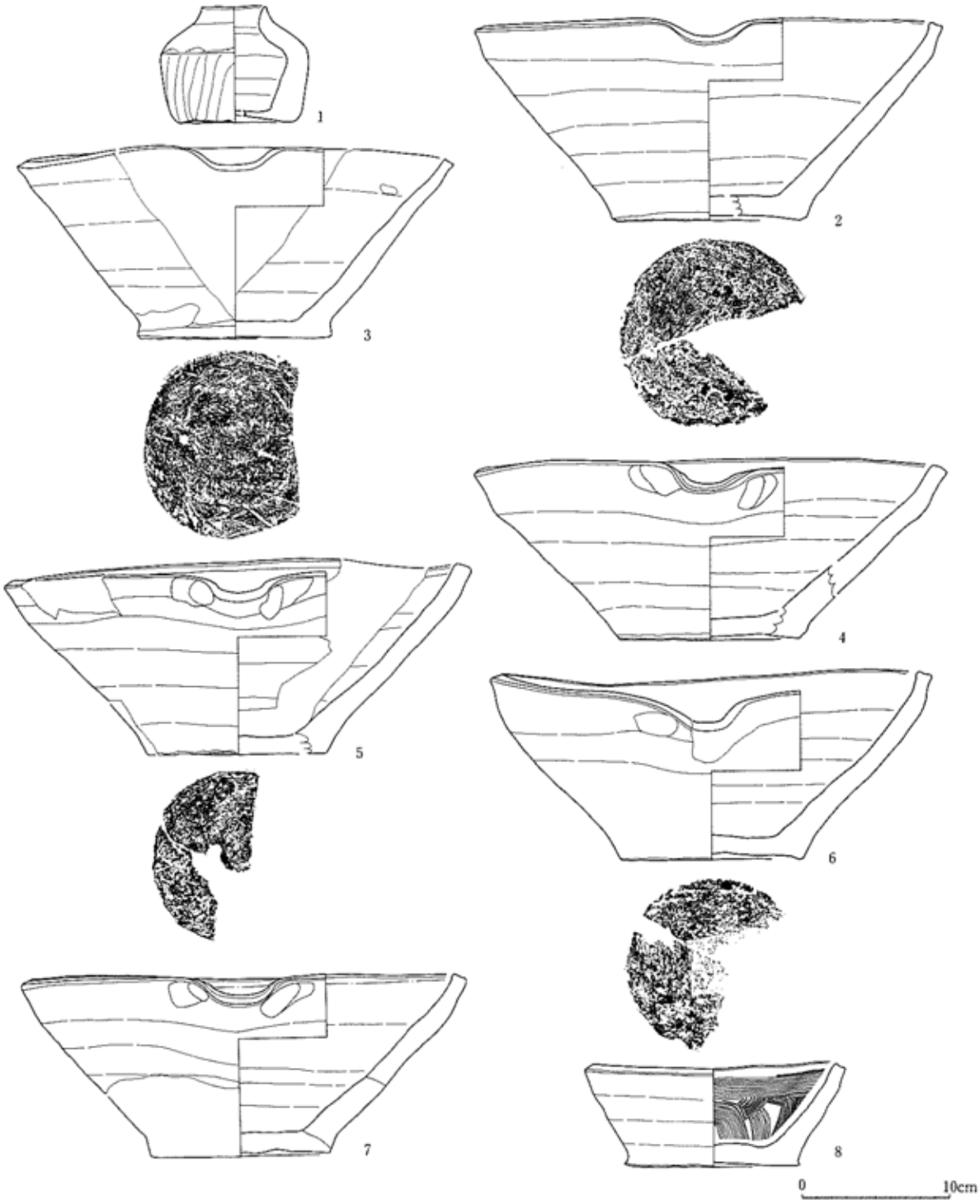
［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から急激に広がり分焔柱の中ほどで最大幅となり、煙道に向かって緩やかにすぼまる。焼成部の残存部の規模は水平距離で約 6.6m、実質的な床面の長さ（斜距離）は 7.4mである。窯壁の最大幅は分焔柱の付近で約 3.4mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分までは緩やかに傾斜し（約 13°）、それよりも奥は約 27° の急角度となっている。床面は 1 次面では、地山の掘り込み面をそのまま床としているが、2 次面以降はすべて貼り床である。貼り床は、焼成部全体に行なわれている場合（6・8 次面）と、傾斜変換線の手前の部分のみが行なわれている場合（2～5・7 次面）があり、8 次面では 7 次面を 60 ㎝ほど埋め戻し、その上に粘土を貼り床面を再生している。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約 60 ㎝ある。

［出土遺物］焼成部や燃焼部の床面から甕・広口壷・小壷・短頸壷・無頸壷・擂鉢・馬爪形焼台が出土しているが、原位置を保っているものはない。図示したものの多くは二次焼成の痕跡が認められ、これらは焼台として再利用されたものと考えられる。

これらの遺物の中で 8-16 は同一の固体の多数の部位（肩部・体部外面・体部内面・底部内面）に楓葉が線書きされている。

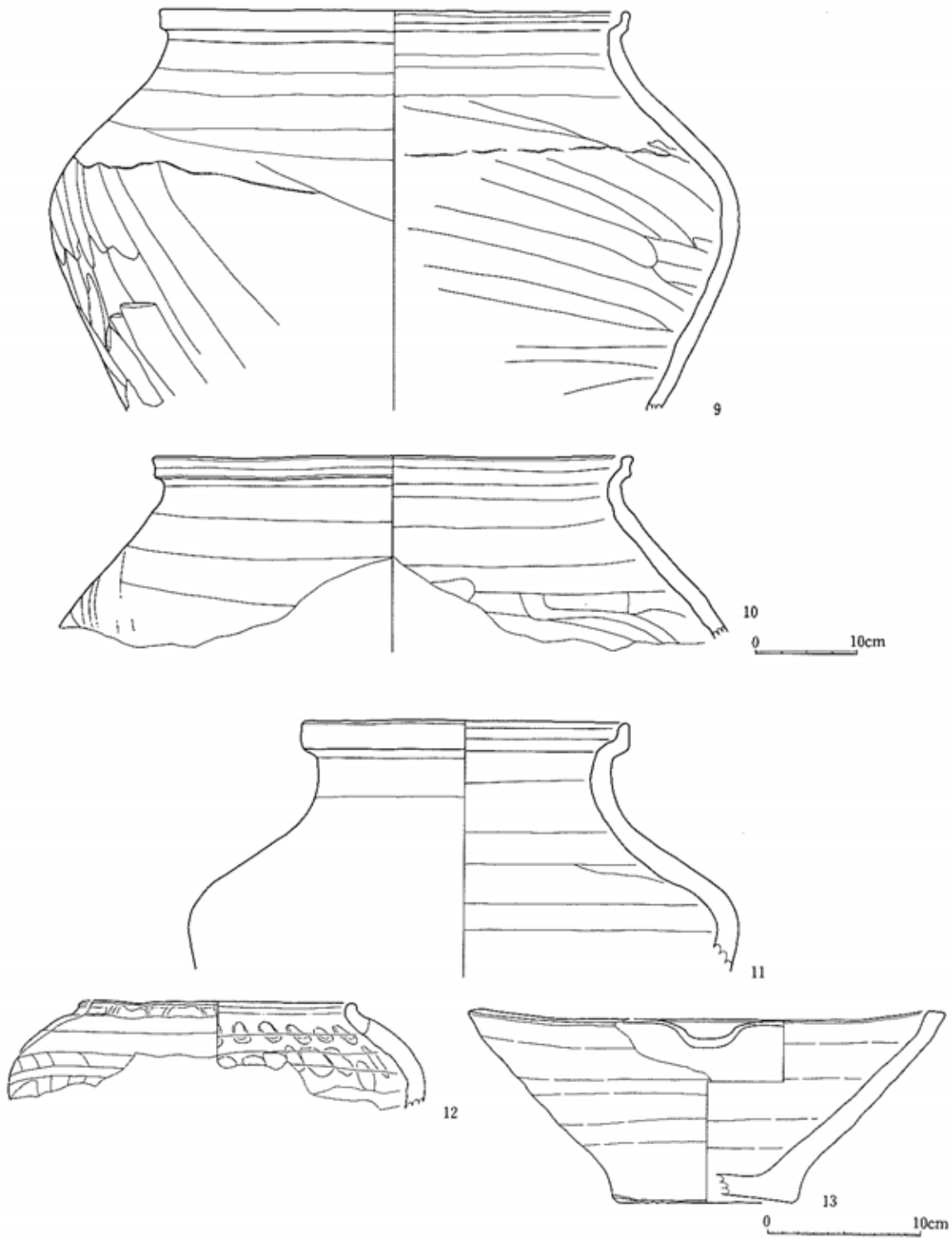

A
A′
B
B′
C
SR－20　1次面
A 107.0m
A′
B 106.0m
B′
C′
8次床面
7次床面
6次床面
5次床面
1次床面
C 108.0m
0
1
2m
SR－08　5次面燃焼部

第59図　ＳＲ－08窯跡



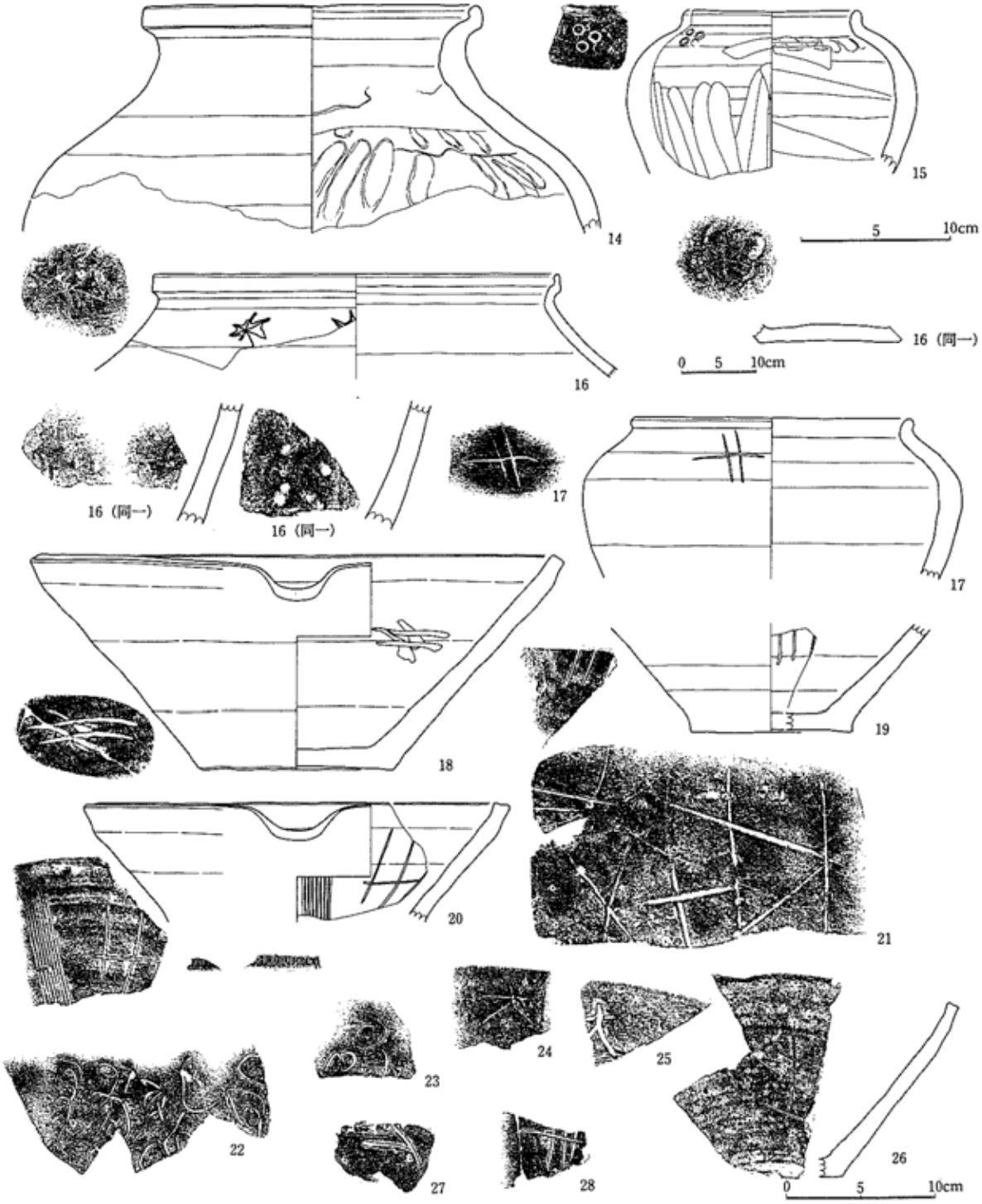
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
1	3灰原	小皿	4.8	7.9	7.9	B	−	1/3		08−15
2	6灰原	擂鉢	31.5	13.1	13.7	Ⅲ A2	+	3/4	筋目なし 41.6%	08−06
3	6灰原	擂鉢	29.4	12.7	12.2	Ⅲ A5	+	1/3	筋目なし 片口欠損 43.2%	08−08
4	6灰原	擂鉢	31.9	12.2	12.3	Ⅲ C2	+	3/4	筋目なし 38.2%	08−04
5	6灰原	擂鉢	30.1	12.0	12.5	Ⅲ B4	+	3/4	筋目なし 39.9%	08−03
6	6・7焼床	擂鉢	29.8	12.0	12.8	Ⅲ B3	+	3/4	筋目なし 底部に方形の凹み 40.6%	08−07
7	6・7焼床	擂鉢	31.6	12.1	12.9	Ⅲ C3	−	2/3	筋目なし 38.3%	08−05
8	7灰原	擂鉢	17.6	11.8	7.1	Ⅰ A1	−	4/5	筋目あり 片口欠損 67.0%	08−01

第60図　ＳＲ－08窯跡出土遺物　（1）



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
9	8焼床	甕	47.0			IIB	−	1/5	口縁部のみ	08−13
10	8焼床	甕	47.6			IIB	−	1/4	口縁部のみ	08−12
11	8前堤	広口壺	21.0			B	−	1/4	口縁部のみ	08−14
12	8灰原	無頸壺	18.2				−	1/5	口縁部のみ	08−10
13	8灰原	鉢	31.2	11.4	12.7	IIIC3	−	1/3	箆目なし　片口欠損　36.5%	08−02

第61図　ＳＲ−08窯跡出土遺物　（２）



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
14	灰原	広口壺	22.6			ⅡC	+	1/2	口縁部のみ	08-09
15	灰原	短頸壺	11.4			A	+	1/5	口縁部のみ	08-11
16	灰原	甕	18.6			A			体部内外面・底部内面に植物のヘラ書き	タ8-17
17	灰原	短頸壺	18.6			A			肩部に「升」のヘラ書き	タ8-14
18	灰原	擂鉢	34.8	12.8	14.4	ⅢC1			体部内面に「#」のヘラ書き 36.5%	タ8-10

第62図　ＳＲ－08窯跡出土遺物　（３）

第63図　ＳＲ－08窯跡出土遺物　（４）

ＳＲ－09 窯跡（第 64～67 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では比較的高所(標高 109～110m)に位置する。

ＳＲ-03 によって切られており、これよりも古い。また灰原の部分でＳＲ-08 と重複しており、堆積層の観察によればこれわりも新しい。したがって新旧関係はＳＲ-08→ＳＲ-09→ＳＲ-03 となる。

凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。天井部は、すべて崩落していた。前庭部から焼成部の下半にかけての保存状態は良好であるが、焼成部の上半以降はＳＲ-03 によって失われている。窯体の平面形は残存する部分からほぼ紡錘形と考えられる。窯体の主軸線の方向はＮ－43°－Ｅ、また斜面と窯体主軸の角度は 80°で、窯体は斜面に対して尾根側に偏って作られている。残存部の規模は窯長が約 9.0m、窯幅は最大部分で 2.8mある。作り替えや修復は認められていない。

［前庭部］前庭部は、焚口部から 1.5mほどは緩やかにすぼまり、その前方は撥状に広がる。大きく開いた部分の床面はほぼ平坦で、ちょうど前庭部の先端に平場が取りつくような形状になっている。規模は全長約 3.0m、幅は最もすぼまった部分で 0.9mある。

地山の掘り込み面をそのまま床としている。床面は、先端ではほぼ平坦であるが、焚口部に向かって緩やかに下がり、角度は約 9°ある。

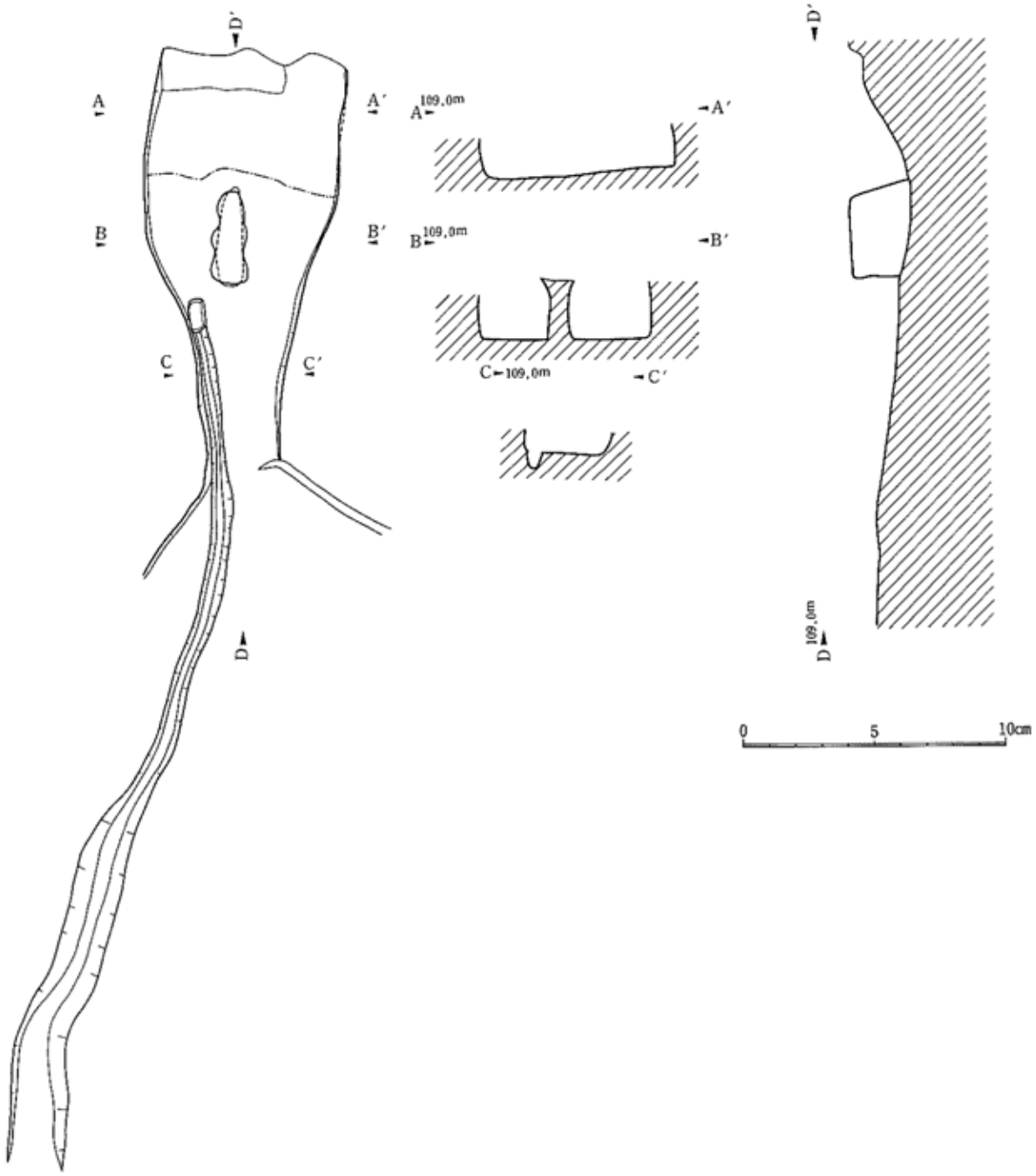
［前庭部の施設］床面を除去した段階（掘り方面）で、左側壁に沿って溝が 1 条検出されている。溝は焚口部から前庭部のはるか前方まで掘られ、底面は先端に向かって緩やかに傾斜している。規模は全長 13.4m、幅 30 ㎝あり、先端では約 80㎝ほどの広さになっている。また、溝は陶器片や焼台・窯を掘り抜いた際の土で埋め戻されていることから、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

［焚口・燃焼部］燃焼部は撥状を呈し、前庭部から焚口にかけてはすみやかに推移する。

燃焼部は全長約 1.4mある。床面は、地山の掘り込み面をそのまま利用しており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい分焔柱手前では約 60 ㎝ある。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られている。分焔柱の残存状況は良好で、天井部に近いところまで残存している。通焔孔の大きさは右側が直径 86 ㎝、左側が直径 70㎝である。分焔柱の平面形は細長く隅の丸い長方形を呈し、規模は基底部で餐さ 1.5m、幅 0.4mある。

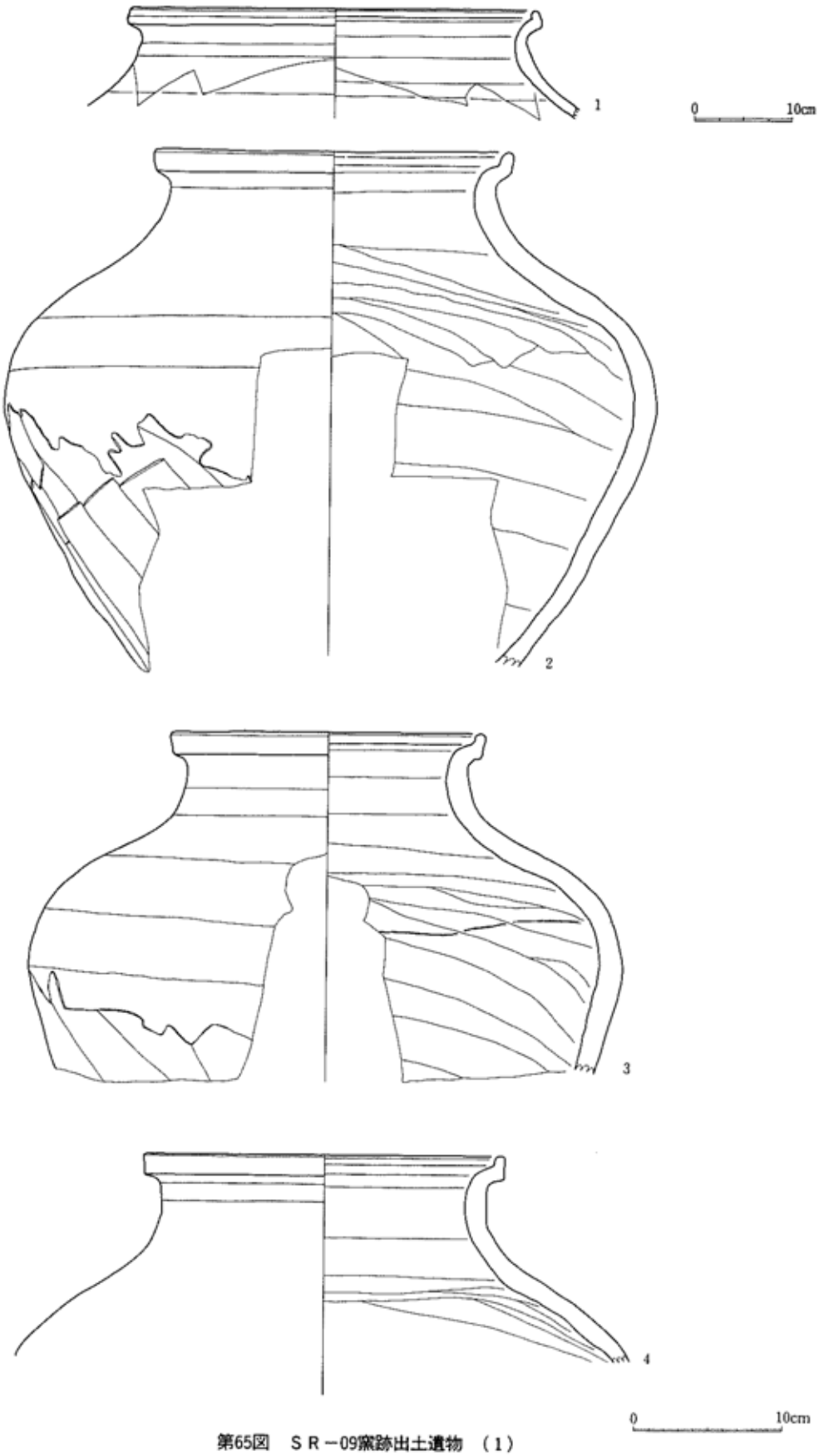
［焼成部］焼成部の上半はＳＲ-03 の構築の際に失われているが、残存する部分から平面形は細長い鶏卵形を呈すると考えられる。窯壁は通焔孔の付近から緩やかに膨らみ傾斜変換線の部分で最大幅となり、煙道に向かって徐々にすぼまる。残存する部分の規模は水平距離で約 3.6mあるが、実質的な床面



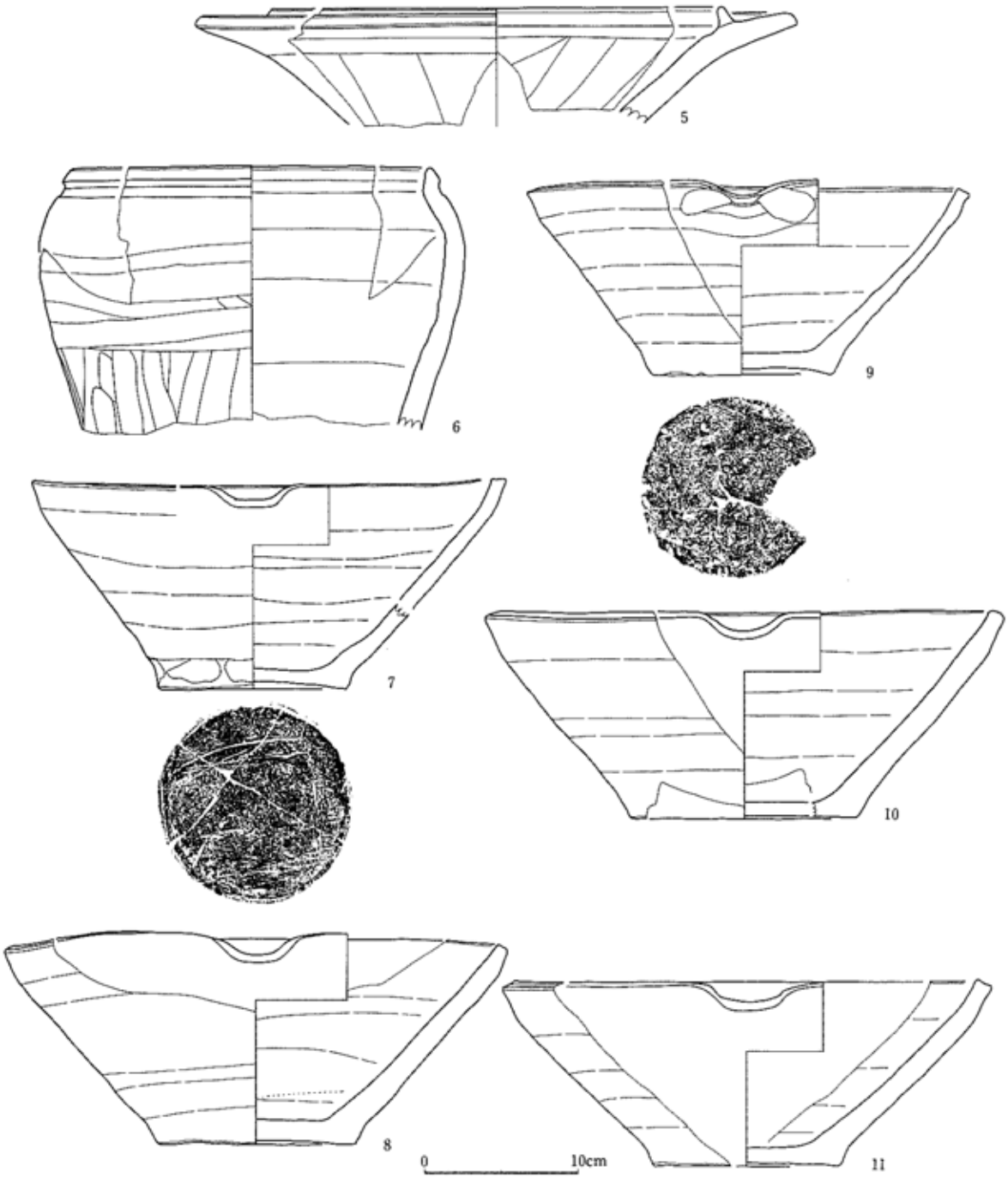
第64図　ＳＲ－09窯跡

の長さ（斜距離）は3.8mある。幅は傾斜変換線付近で最大となり約2.8mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分までは約 7°の角度で緩やかに下がるが、それよりも奥は約 25°の急角度で立ち上がる。地山の掘り込み面をそのまま床面としており、側壁は床面から内湾気味に立ち上がる。側壁の最も保存のよい部分の高さは約80㎝ある。

［出土遺物］燃焼部の床面や排水溝の埋土、灰原から甕・広口壷・短頸蓋・擂鉢・火鉢・馬爪形焼台が出土しているが、原位置を保っているものはない。これらの中で燃焼部の床面から出土しているものの多くは焼台として使用されたものである。

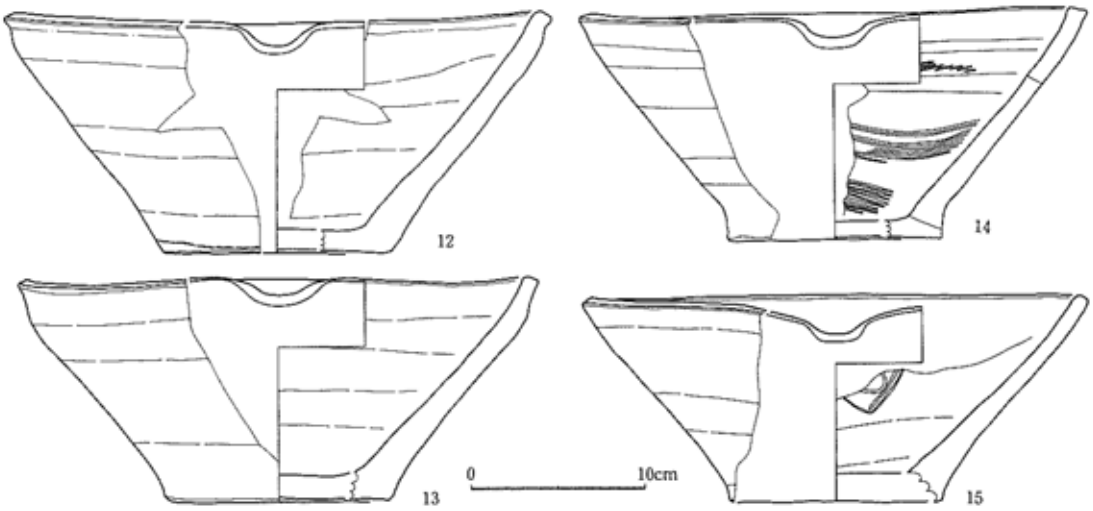


第65図　ＳＲ－09竈跡出土遺物　（１）



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	胴焼	残形	特徴	登録
1	沃3	甕	41.2			B	−			09−13
2	沃原	広口壺	24.3			II C	−		最大径43.6cm	09−12
3	焼床	広口壺	20.8			II C	−		最大径49.1cm	09−15
4	沃原	広口壺	23.8			II B	−			09−14
5	沃原1	火鉢	29.6			I	−	1/5	口縁部のみ	09−11
6	沃原1	短頸壺	23.1				−	1/4	最大径27.6cm	09−10
7	鉄溝埋	鍋鉢	31.1	12.2	13.8	III B4	−	1/3	片口欠損　底部に方形の凹み　筋目なし　39.2%	09−01
8	焼床	鍋鉢	33.0	13.0	13.5	III B2	−	1/4	片口欠損　筋目なし　39.4%	09−02
9	焼埋	鍋鉢	29.0	11.6	12.8	III B3	−	3/4	筋目なし　40.0%	09−09
10	鉄溝埋	鍋鉢	34.0	14.4	3.7	III A3	−	2/5	片口欠損　筋目なし　42.3%	09−05
11	沃原	鍋鉢	32.0	12.0	12.2	III C4	−	1/5	片口欠損　筋目なし　37.5%	09−07

第66図　ＳＲ－09竈跡出土遺物　（２）



№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
12	排溝埋	甕 鉢	31.6	13.2	14.0	Ⅲ A3	+	1/4	片口欠損 筋目なし 41.8%	09−03
13	灰原	甕 鉢	30.0	12.6	13.1	Ⅲ A3	−	1/3	片口欠損 筋目なし 42.0%	09−06
14	灰原	甕 鉢	29.3	12.2	13.3	Ⅲ A4	−	1/5	片口欠損 筋目あり 41.6%	09−08
15	灰原	甕 鉢	29.2	11.8	11.8	Ⅲ B3	−	1/5	片口欠損 内面にヘラ書き 筋目なし 40.5%	09−04

第67図　ＳＲ－09窯跡出土遺物　（３）

ＳＲ－10 窯跡（第 69～72 図）

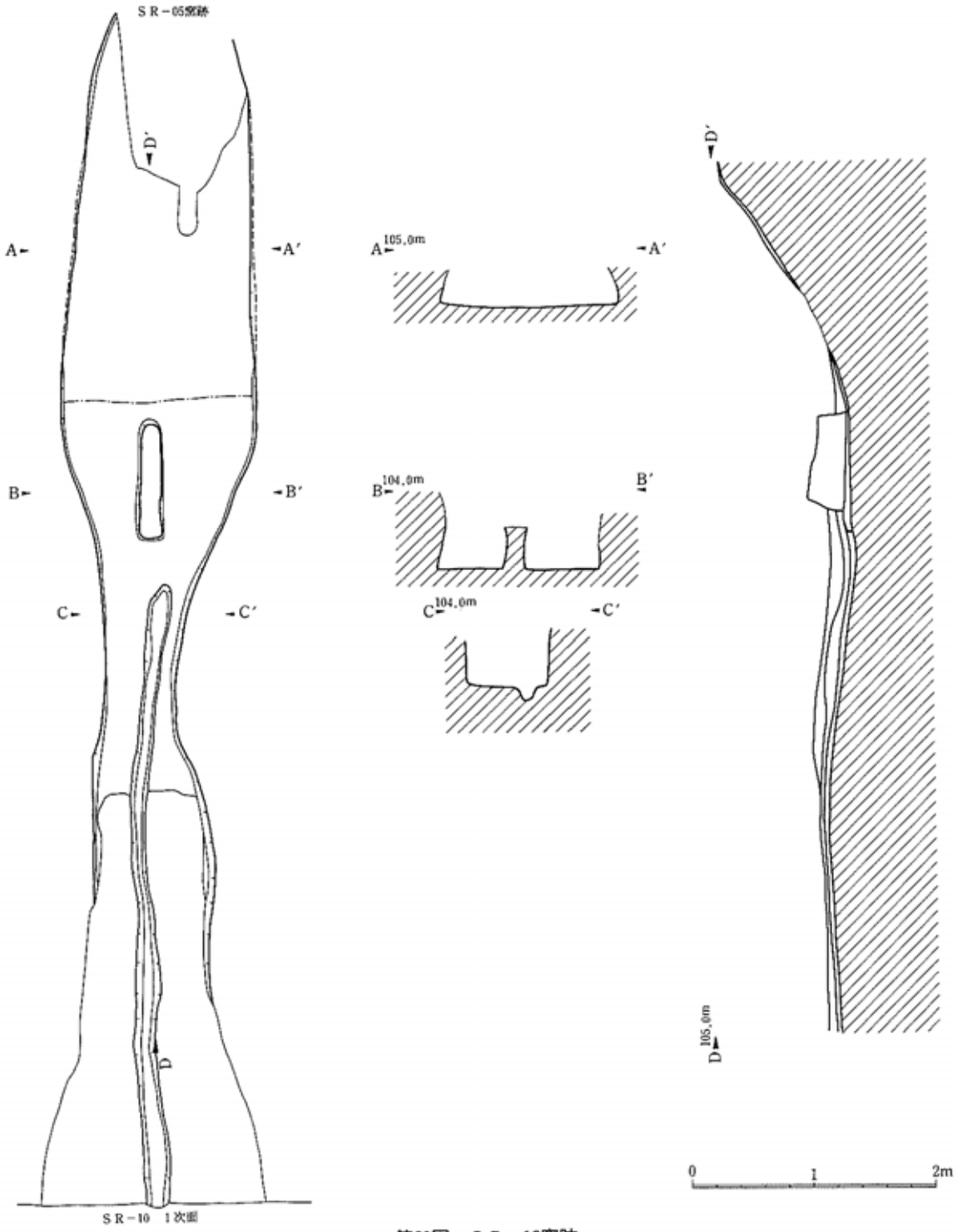
［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では中位(標高 105～108m)に位置する。ＳＲ-05・18 と重複しＳＲ-18 を切り、ＳＲ-05 に切られている。したがって新旧関係はＳＲ-18→ＳＲ-10→ＳＲ-05 となる。

凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。前庭部から焼成部の下半にかけての保存状態は良好であるが、焼成部の上半から煙道部にかけてはＳＲ-05 の構築の際に失われている。天井部はすべて崩落していた。窯体の平面形は紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－48°－Ｅであり、斜面と窯体主軸の角度は約 80°であり、窯体は斜面に対して若干谷側に偏って作られている。規模は窯長が約 19.8m、窯幅は最大部分で 3.2mある。合計 3 回の作り替えが認められており、1 次繭と 4 次面の標高差は約 40 ㎝ある。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延び、先端部で緩やかに開く。規模は長さ約 9.8m、幅は最も狭ばまった部分で約 1.0mある。1 次面では、地山の掘り込み面をそのまま床面としており、2 次面以降はそれまでの使用面を約 10㎝埋め、その面を床としている。底面の斜面は焚口から前方に向かって約 8°の角度をもって緩やかに上がり、先端部で開く部分はほぼ平坦となる。

［前庭部の施設］床面を除去した段階（掘り方面）で、右側壁付近から溝が 1 条検出されている。溝は、燃焼部の焚口付近から掘り込まれており、前庭部の先端部よりもさらに延びている。規模は全長 10.2m以上、幅 25～40 ㎝ある。溝の底面は先端に向かって緩やかに傾斜している。また、溝は窯を掘り抜いた際の土で埋め戻されており、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

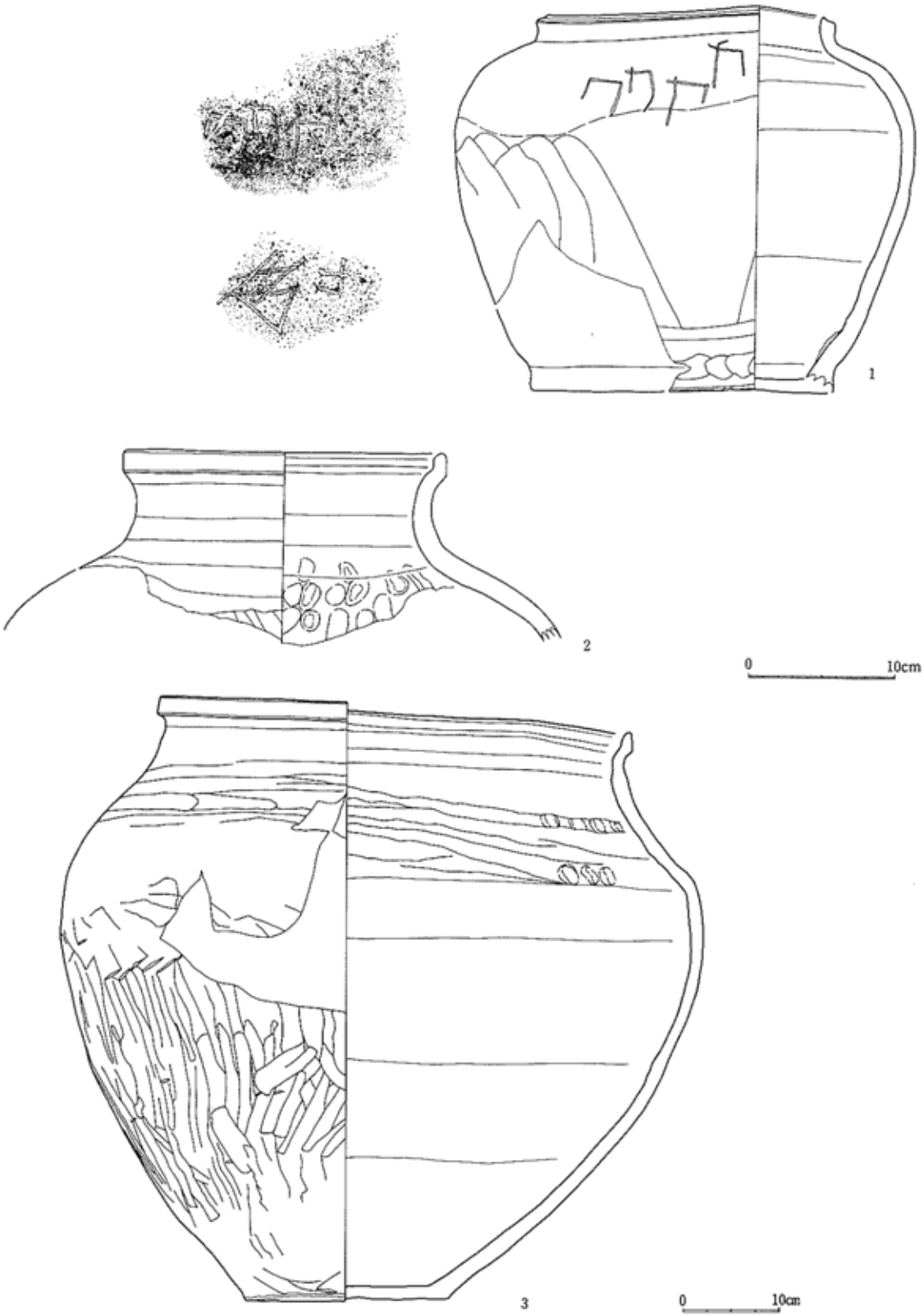
［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、燃焼部は撥状を呈して焚口から分焔柱に向かって緩やかに広がる。燃焼部は全長約 1.3mある。この部分からは木炭が多量に検出



第68図　ＳＲ－10窯跡

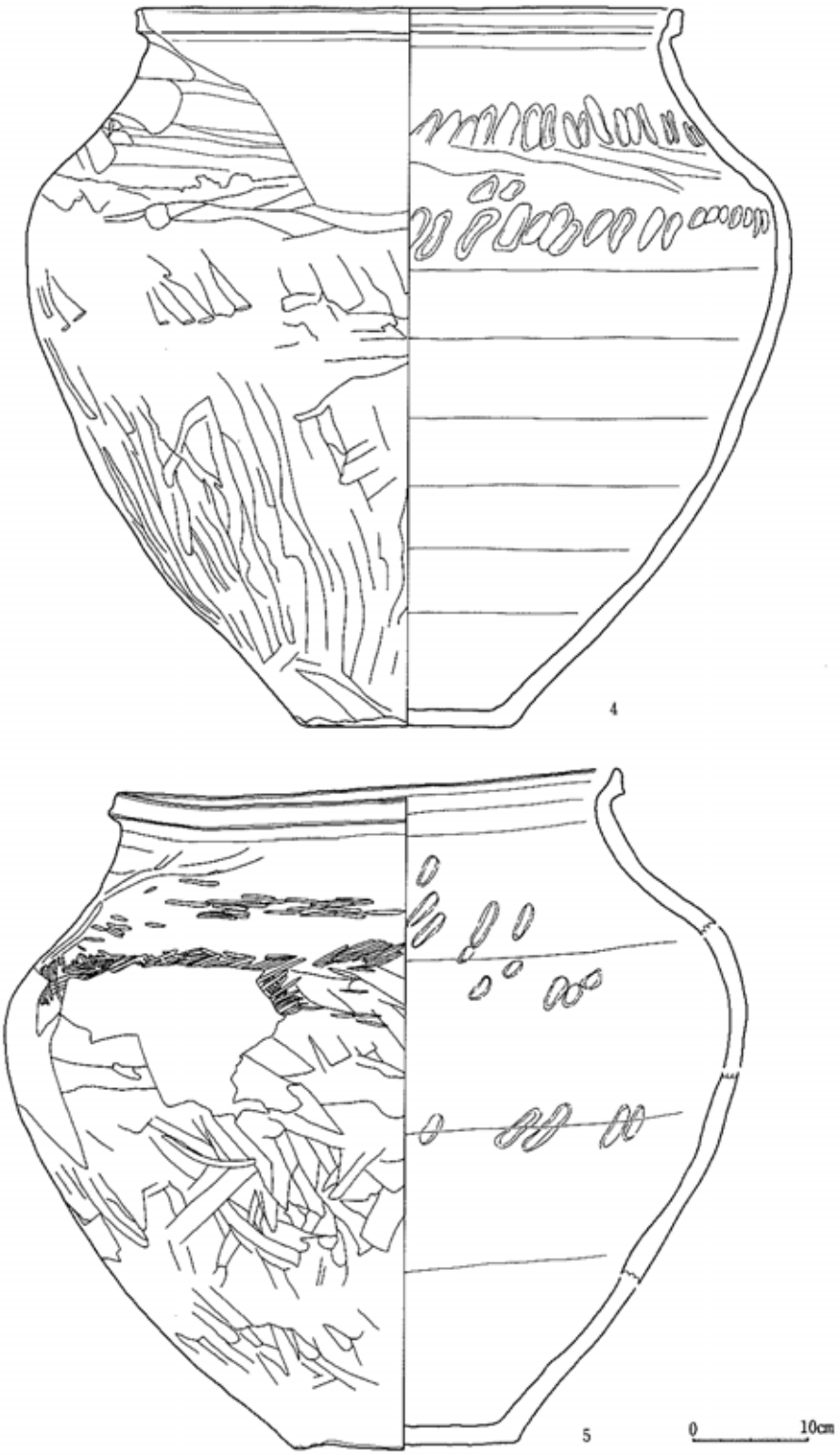
されている。床面は地山の掘り込み面をそのまま使用しており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、分焔柱に近づくにつれて内湾する。残存部の壁の高さは保存のよい分焔柱の手前で約 90 ㎝ある。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られており、作り替えが 1 回認められる。1・2 次面の分焔柱は平面形が細長い隅丸長方形を呈し、規模は基底部で長さ 2.0m、幅 40 ㎝あり、約 70 ㎝の高さまで



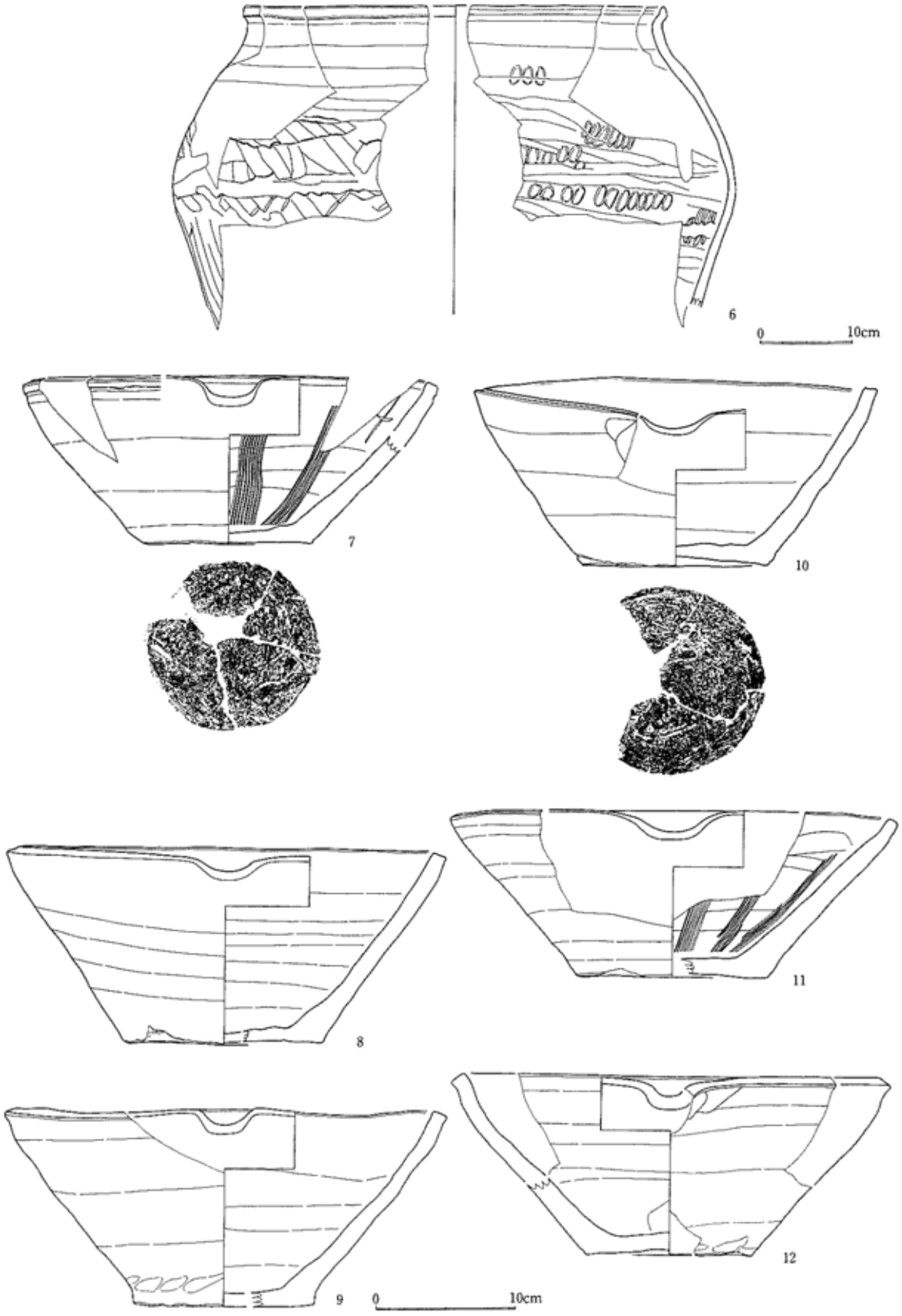
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
1	4灰原	短頸壺	20.4	20.6	20.6	B	−	3/5	体部外面にヘラ書き	10−11
2	4軒床	広口壺	22.2			IIC	+	1/5		10−08
3	5焼床	壺	48.6	21.1	63.2	IIB	−	完形	最大径66.9cm	10−05

第69図　ＳＲ－10窯跡出土遺物　（１）

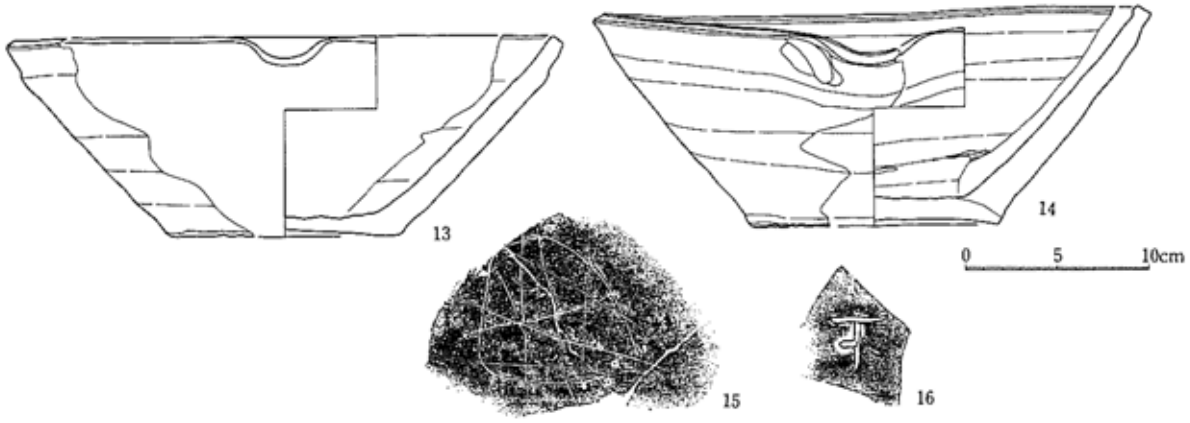


No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
4	4焼床	甕	46.6	18.0	63.2	ⅠB	－	完形	最大径66.4cm	10－06
5	5灰原	甕	32.5	14.1	13.7	ⅡA	－	完形	最大径64.6cm SR-15と接合	10－07

第70図　ＳＲ－10竈跡出土遺物　（２）



第71図　ＳＲ－10窯跡出土遺物　（３）



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
6	5灰原	甕	60.0			II B	−	1/8		05-19
7	5前床	擂鉢	29.8	12.0	12.2	IIIB2	−	1/4	筋目あり 40.2% 「＋」のへラ書き	10-10
8	5燃床	擂鉢	31.4	14.3	14.2	IIIA1	−	1/2	筋目なし 片口欠損 45.5%	10-01
9	5燃床	擂鉢	31.4	12.1	13.2	IIIB2	−	1/3	筋目なし 38.5%	05-09
10	5燃床	擂鉢	28.8	13.2	13.7	IIIA1	−	2/3	筋目なし 45.8%	10-03
11	5前床	擂鉢	32.0	13.6	12.3	IIIA1	−	2/3	筋目あり 42.5%	10-04
12	5灰原	擂鉢	31.7	12.8	14.4	IIIB4	−	1/2	筋目なし 40.3%	05-11
13	5灰原	擂鉢	30.2	12.4	11.0	IIIB2	−	1/4	筋目なし 片口欠損 41.0%	05-10
14	5灰原	擂鉢	30.3	13.2	12.9	IIIA1	−	2/3	筋目なし 43.5% 重ね焼痕残る	10-02

第72図　ＳＲ－10窯跡出土遺物　（４）

残存している。3 次面を構築する際に作り替えが行なわれており、当初のものよりも長さを縮めて(長さ 1.5m) 作られている。1 次面の通焔孔の幅は基底部で焼成部に向かって右側が 80 ㎝、左側が 64㎝ ある。

［焼成部］焼成部の平面形は細長い砲弾形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から徐々に広がり傾斜変換線の部分で最大幅となり、しばらく直線的に続いたあと煙道部付近で緩やかにすぼまる。焼成部の規模は水平距離で約 8.7mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は 9.6mである。窯壁の幅は傾斜変換線付近で最大となり約 3.2mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まではほぼ水平であるが、それよりも奥は約 32°の急角度になっている。床面は 1 次面では、地山の掘り込み面をそのまま床としているが、2 次面以降はすべて貼り床である。貼り床は、焼成部全体に行なわれている場合（4 次面）と、傾斜変換線から手前の部分のみが行なわれている場合（2・3 次面）があり、4 次面では 3 次面を 10 ㎝ほど埋め、その上に粘土を貼り新たな床面としている。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約 40 ㎝ある。

［出土遺物］焼成部や燃焼部、前庭部の床面および灰原から甕・短頸壷・広口壷・擂鉢・馬爪形焼台が出土しているが、原位置を保っているものはない。また、焼成部や燃焼部の床面から出土しているものの中には焼台として使用されたものが多く含まれる。これらの中で 1 次面の灰原から出土した

10-05 はＳＲ-15 の灰原から出土したものと接合関係がみとめられた。

ＳＲ－11 窯跡（第 73～77 図）

［概要］尾根の北斜面にあり、本窯跡群の中では最も高所（標高約 109～112m）に位置する窯のひとつである。ＳＲ－12 と重複しこれを切っている。したがって新旧関係はＳＲ-12→ＳＲ-11 となる。

凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。天井部はすべて崩落しているが、残存状況は良好で前庭部から煙道部まで全体構造の判明する数少ない窯のひとつである。窯の平面形は紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－70°－Ｅで、斜面と窯主軸の角度は約 67°であり、窯体は斜面に対して谷側に偏って作られている。規模は窯長が約 17.4m、窯幅は最大部分で 3.8mある。焼成面は合計で 9 面認められ、1 次面と最終使用面の 9 次面の標高差は最大で約 1.8mある。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延びる。規模は長さ約 5.6m、幅は 1.4～1.9mある。床は 1 次面は地山面をそのまま床面としているが、2 次面以降はすべてそれまでの使用面を埋め戻し(20～60 ㎝)、その面を床としている。床面の傾斜は 12°で分焔柱に向かって比較的急角度で下る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは約 70 ㎝ある。掘り込み面をそのまま壁としている。

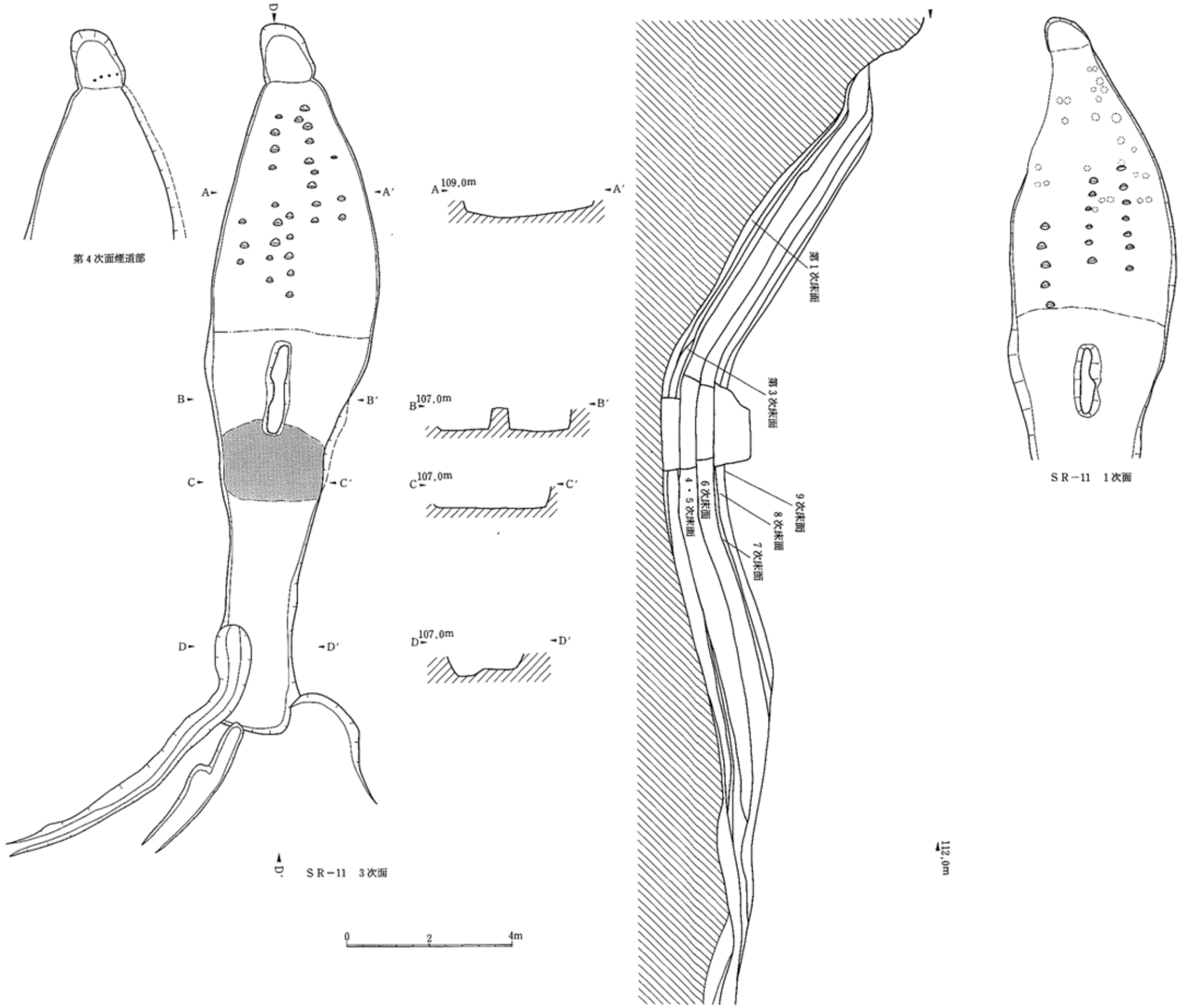
［前庭部の施設］1 次面を除去した段階（掘り方面）で、溝が 2 条検出されている。溝 1 は前庭部の先端部のほぼ中央から、溝 2 は先端部から 2.5mほど奥まったところから掘り込まれており、規模は溝 1 が全長 3.8m、幅 50 ㎝、溝 2 が全長 8.4m、幅 60～70 ㎝ある。焼き歪んだ陶器や焼台、くずれた窯壁などで埋め戻されており、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、焚口から分焔柱に向かっては緩やかに広がる。燃焼部は全長約 2.0mあり、この部分からは木炭かせ多量に検出されている。

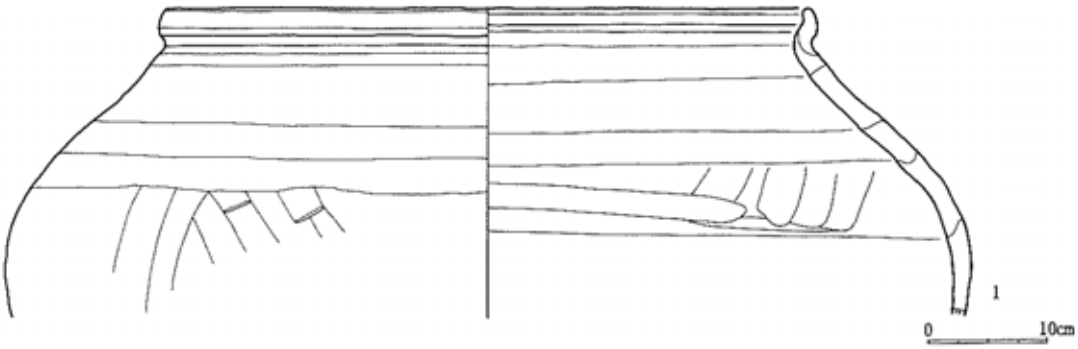
床面はすべて貼り床で、1 次面は地山の掘り込み面を、2 次面以降はそれまでの使用面を 20～60 ㎝埋め戻し、その面に薄く粘土を貼って床としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい分焔柱の手前で約 1mある。焚口部の側壁は基本的には地山をそのまま壁としていると考えられるが、4・6 次面では窯壁の崩れた部分に石や焼台・陶器片などを積み上げ、その上に粘土を貼り壁としている。

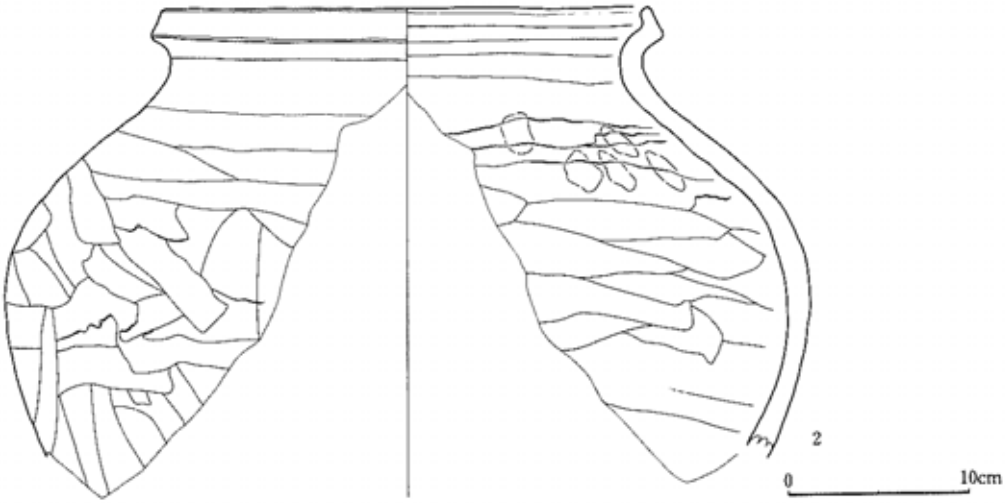
［分焔柱］分焔柱は地山を削り出して構築しており、5・6・7 次面で作り替えが行なわれている。平面形が細長い丸長方形を呈し、図示した 3 次面の分焔柱は基底部で長さ 2.3m、幅 60 ㎝あり、約 45 ㎝の高さまで残存している。通焔孔の幅は基底部で焼成部に向かって右側が 108 ㎝、左側が 96 ㎝ある。

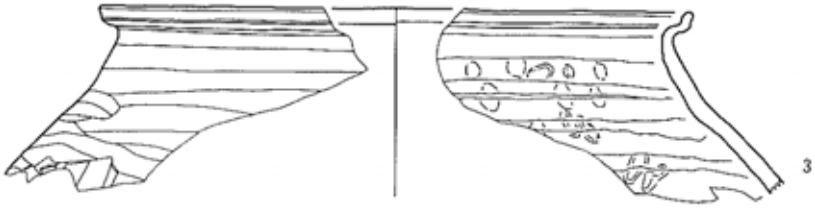
［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から緩やかに広がり分焔柱の後の傾斜変換線の付近で最大幅となり、煙道に向かって緩やかにすぼまる。焼成部の規模は水平距離で約 8.2m、実質的な床面の長さ(斜距離)は 9.8mである。窯壁の最大幅は傾斜変換線付近で 3.8mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まではほぼ水平であるが、それよりも奥は約 35°の急角度となっている。床面はすべて貼り床で、1 次面は地山の掘り込み面を、2 次面以降はそれまでの使用面を埋め戻しその面に薄く粘土を貼って床としている。貼り床の行なわれている範囲は、焼成部

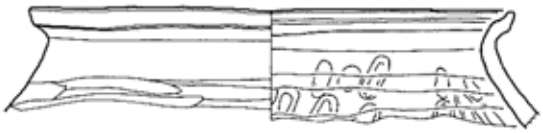

第4次面煙道部
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
A 109.0m
B 107.0m
C 107.0m
D 107.0m
SR−11 3次面
0
2
4m
第1次床面
第3次床面
9次床面
8次床面
7次床面
6次床面
4・5次床面
112.0m
SR−11 1次面

第73図 SR−11窯跡

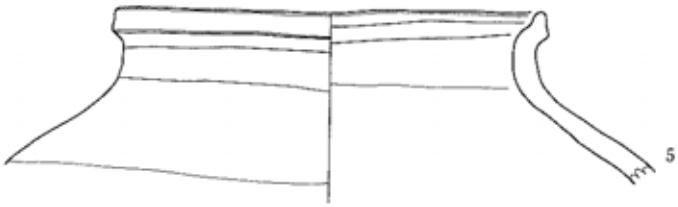








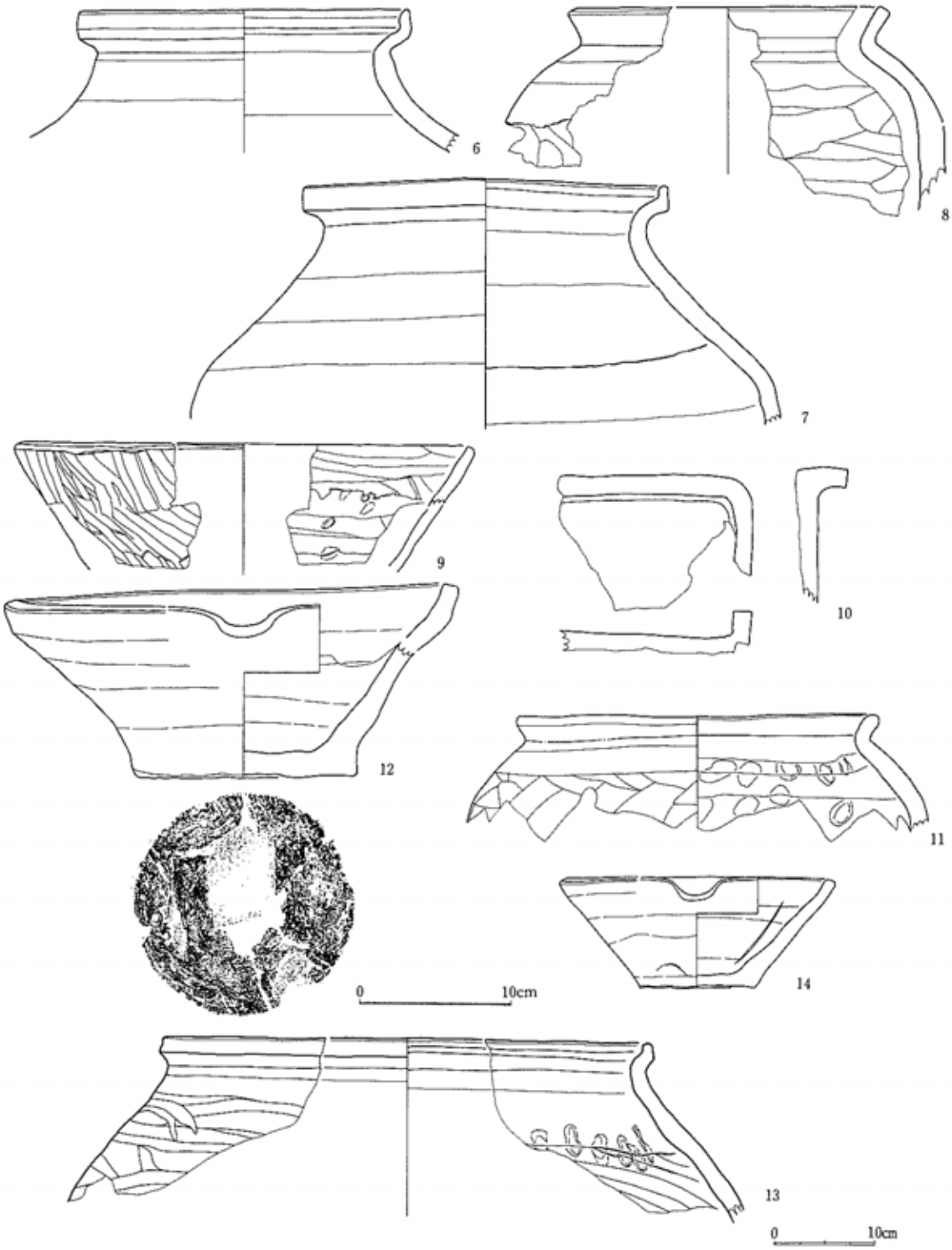
0 10cm



0 10cm

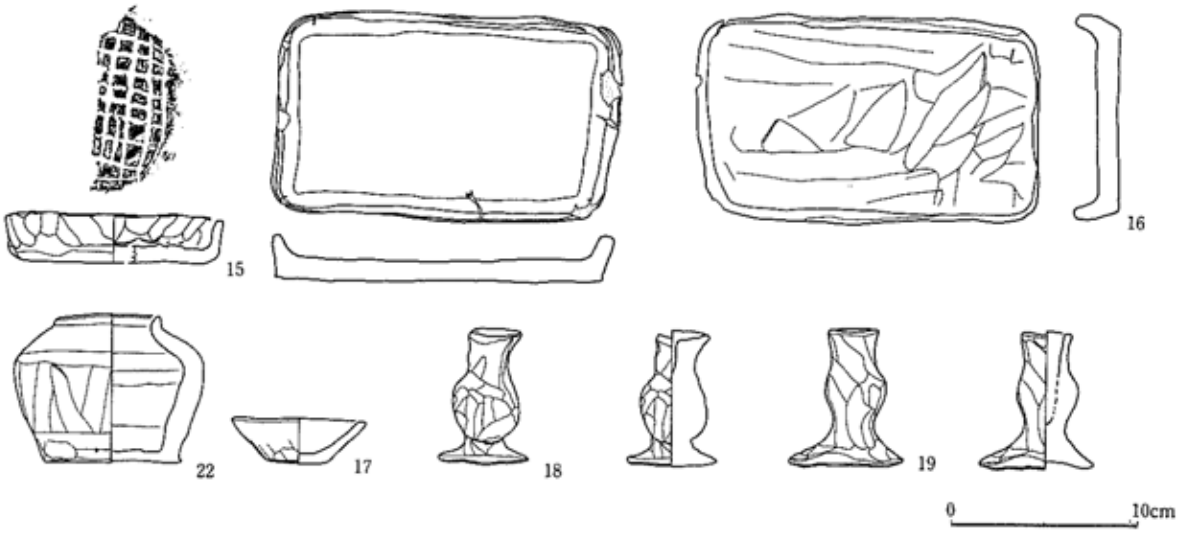
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
1	3焼床	壺	53.8			ⅡB	−	1/5		11−27
2	4灰原	広口壺	26.8			ⅡA	−	1/8	最大径44.6cm	11−19
3	5灰原	壺	49.6			A	−	1/5	口縁部のみ	11−21
4	5灰原	壺	42.0			B	−	1/3	口縁部のみ	11−20
5	5灰原	広口壺	23.2			ⅡC	−	1/4	口縁部のみ	11−18

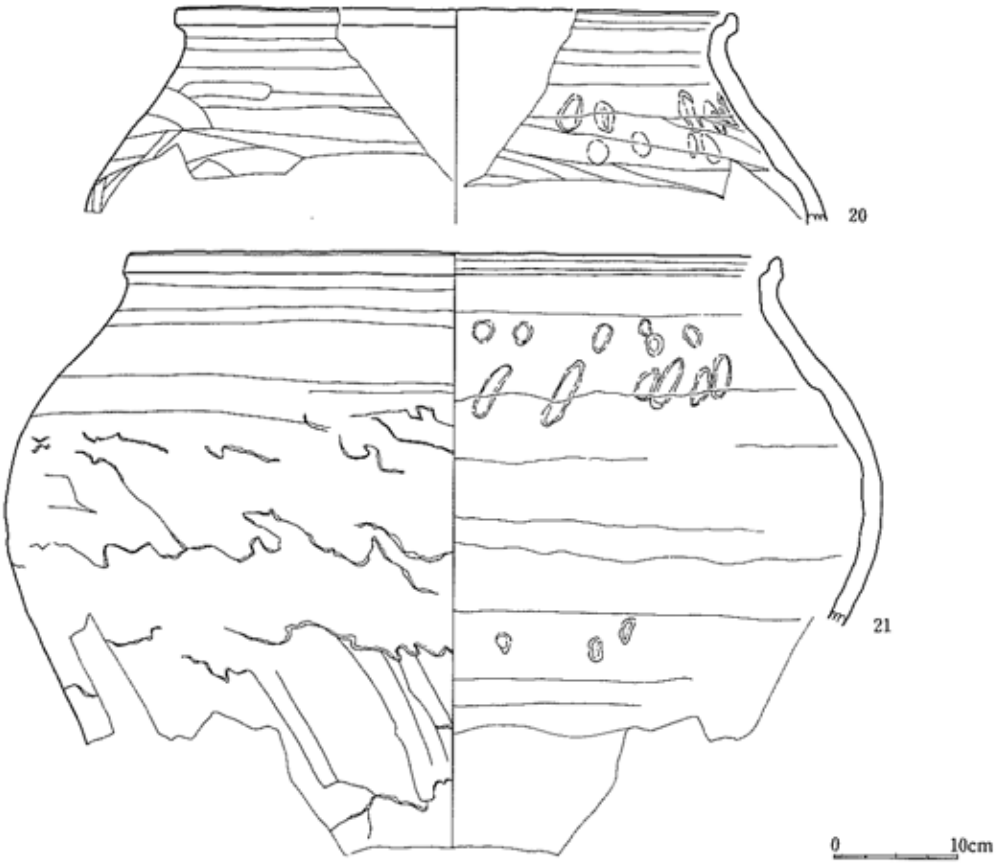
第74図　ＳＲ−11窯跡出土遺物　（１）



№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
6	5灰原	広口壺	21.5			A	−	1/4		11−25
7	5灰原	広口壺	23.8			ⅡB	+	1/3		11−26
8	5灰原	短頸壺	22.0			B	−	1/6		11−16
9	5焼床	不明	61.0				+	1/5		11−24
10	5前床	不明					+	小片		11−15
11	6灰原	短頸壺	23.4			A	−	1/3		11−17
12	6灰原	壺鉢	30.1	14.5	12.9	類A5	−	2/3	底部に方形の凹み　片口欠損　48.2%	11−13
13	7焼床	甕	49.0				+	1/5	口縁部のみ	11−22
14	7焼床	壺鉢	18.2	7.6	17.4	ⅠA1	−	2/3	「Ⅰ」のヘラ書き　片口欠損　41.7%	11−14

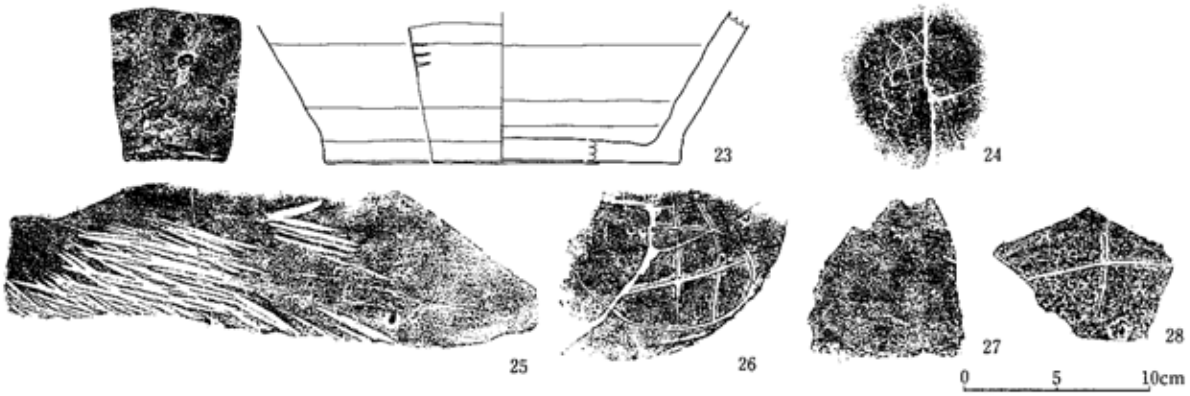
第75図　ＳＲ－11窯跡出土遺物　（２）





No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
15	7焼床	郭	11.8	10.4	2.7		+	1/3		11−05
16	7焼床	不明	18.3	11.1	2.5		−	完形		11−06
17	7焼理	小皿	7.1	3.3	2.4		−	完形		11−04
18	7焼理	仏花瓶	2.6	4.7	7.3		−	完形		11−02
19	7焼理	仏花瓶	2.5	6.0	7.5		−	完形		11−03
20	7,8床	壺	45.2			IIB	+	1/5	口縁部のみ	11−23
21	9焼床	壺	52.9			IIB		3/5	口縁部〜体部	11−07
22	9焼床	小壺	5.5	7.4	8.1	B		完形		11−22

第76図　ＳＲ－11窯跡出土遺物　（３）



第77図　ＳＲ－11窯跡出土遺物　（４）

全体に行なわれている場合（1・5～8 次面）と、傾斜変換線の奥（斜面の部分）のみが行なわれている場合（2・4 次面）、傾斜変換線の手前の部分のみが行なわれている場合（3 次面）の 3 通りがある。貼り床の厚さは各面によって大きな差異がみられ、最も厚い 6 次面では 44 cmほどある。焼成部の側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約 60cm ある。

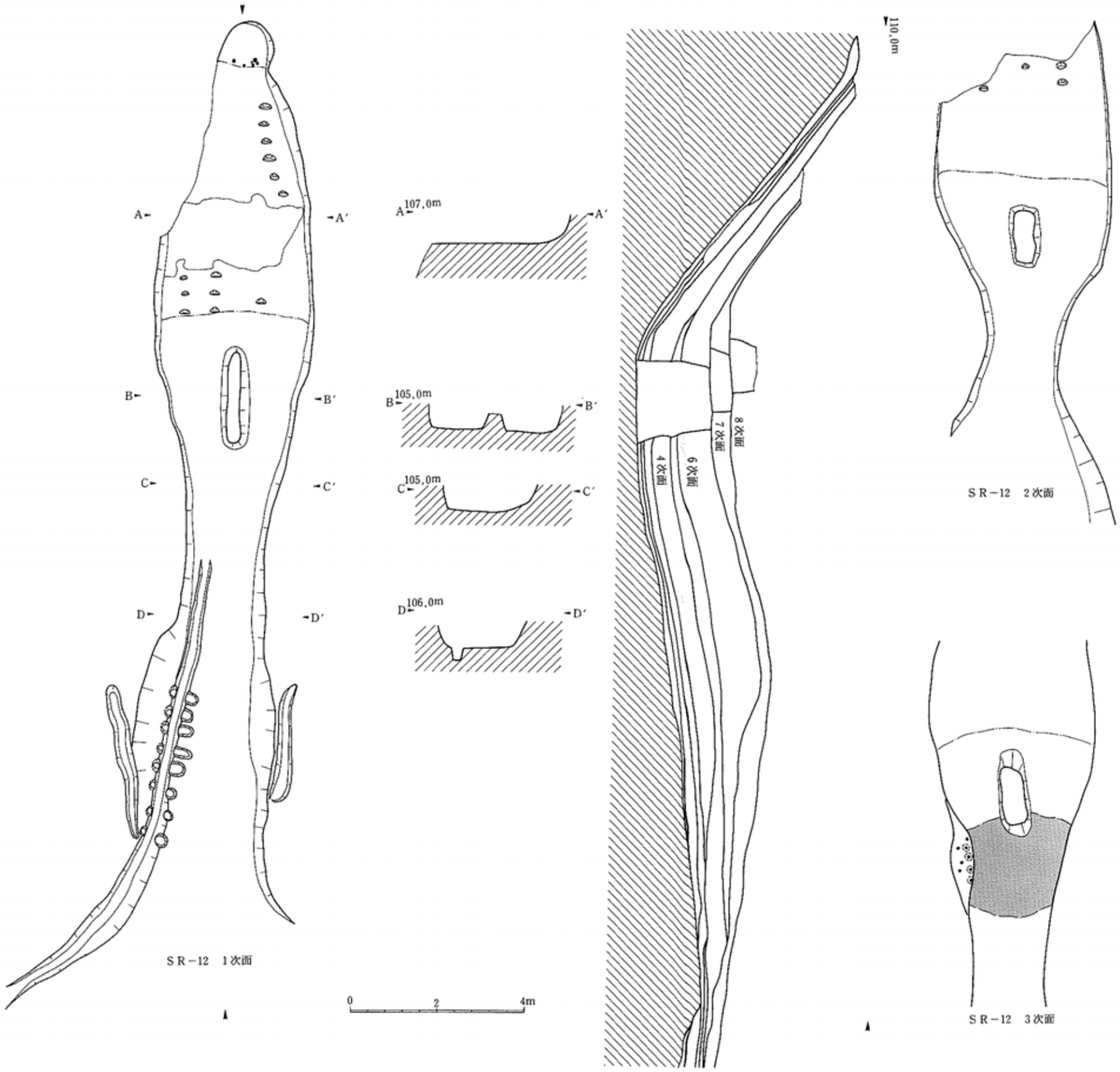
［焼成部の施設］足場穴がすべての面から、焼台の痕跡が 1 次面から検出されている。

足場穴はすべての焼成面の斜面部に認められ、窯の軸線に沿って 60～90 cm間隔で 3～4 条作られている。穴の大きさは幅 20～35cm、深さ 5 cmで、50～60cm の間隔で掘られている。

焼台の痕跡は 1 次面の斜面部の上半で合計 26 個(その中で 2 個 1 対のものが 7 対)認められた。焼台の配置は残存する部分から、窯幅の広い部分では 4 列程度並び、列間は約 70 cm間隔、上下は約 60 cm間隔で規則的に分布していたものと考えられる。焼台の痕跡は円形を呈し、直径は 13～20 cmある。

［煙道部］焼成部から煙道部へは窯体のくびれと床面の傾斜の変換によって推移する。煙道部の平坦部は馬蹄形を呈し、規模は幅 90cm 長さ 70 cmある。1 次面に伴う煙道部の傾斜変換線の内側からは直径 8 cmほどの炭化物を充満したピットが 4 個横に並んで検出されており、ダンパー棒の痕跡と考えられる。

［出土遺物］最も多くの器種の製品を焼成している窯で甕・広口壷・短頸壷・小壷・擂鉢・仏花瓶・卸皿・小咄・盤？などが焼かれている。これらの遺物は焼成部や燃焼部、前庭部の床面および灰原から出土しているが、原位置を保っているものはない。また、焼成部や燃焼部の床面から出土しているものの中には 2 次焼成の痕跡が認められるものがあり、これらは焼台として再利用されたものと考えられる。


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
A 107.0m
B 105.0m
C 105.0m
D 106.0m
110.0m
8次面
7次面
6次面
4次面
SR－12　1次面
SR－12　2次面
SR－12　3次面
0
2
4m

第78図　SR－12竈跡

ＳＲ－12 窯跡（第 78～85 図）

［概要］尾根の北斜面にあり、本窯跡群の中では最も高所（標高約 108～111m）に位置する窯のひとつである。ＳＲ-11 と重複しこれに切られている。したがって新旧関係はＳＲ-12→ＳＲ-11 となる。

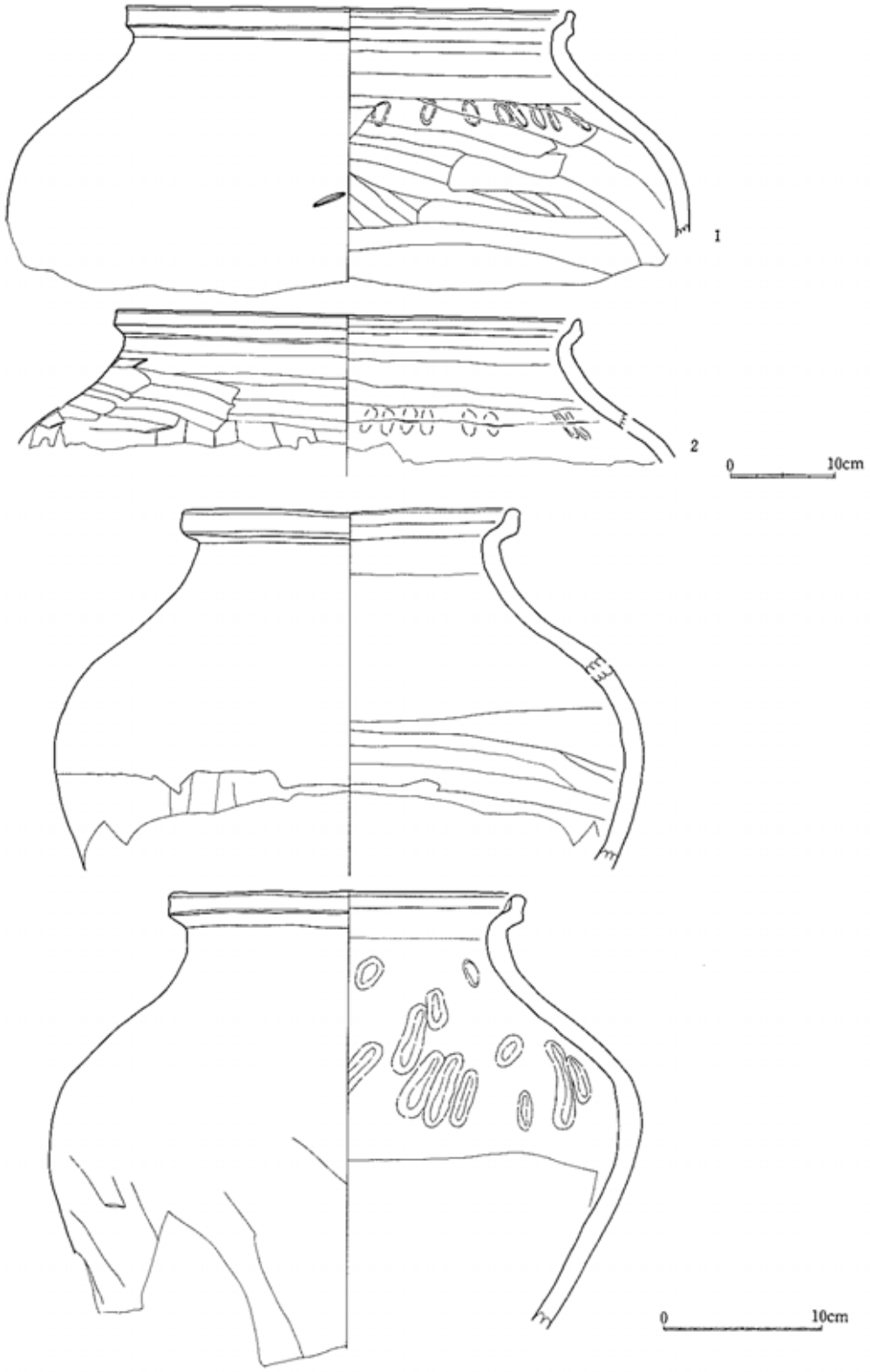
基盤となる凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。天井部はすべて崩落しているが、残存状況は比較的良好で、前庭部から煙道部まで全体構造の判明する数少ない窯のひとつである。窯の平面形は紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－78°－Ｅ、また斜面と窯主軸の角度は約 57°あり、窯体は斜面に対して大きく谷側に偏って作られている。規模は窯長が約 20.8m、窯幅は最大部分で 3.2mある。焼成面は合計で 8 面認められ、1 次面と最終使用面の 8 次面の標高差は最大で約 2.4mある。

［前庭部］前庭部は撥状を呈し、先端部に向かってゆるやかに開く。規模は長さ約 9.0m、幅は 1.4～2.6mある。床は 1 次面は地山面をそのまま床面としているが、2 次面以降はすべてそれまでの使用面を埋め戻し（10～100 ㎝）、その面を床としている。床面の傾斜は 15°で分焔柱に向かって緩やかに下る。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは約 50 ㎝ある。掘り込み面をそのまま壁としている。

［前庭部の施設］1 次面を除去した段階（掘り方面）で、右側壁に沿って溝が 1 条検出されている。溝は、燃焼部の焚口付近から掘り込れており、前庭部の先端部よりもさらに前方に延びている。規模は全長 11.6m、幅 25～70 ㎝ある。溝の底面は先端に向かって緩やかに傾斜している。また、溝は焚口から前庭部の中ほどまでの部分は窖を掘り抜いた際の土で埋め戻しているほか、この部分から前庭部の先端付近までは、溝に直交するように長円形の浅いピットが連続して 8 個掘られており、さらにこのピットの中から溝を覆うような状態で炭化した材が検出されている。さらにここから先については焼き歪んだ陶器や焼台、くずれた窯壁などで埋め戻されており、窯の機能時には開口していない状況（暗渠）だったと考えられる。

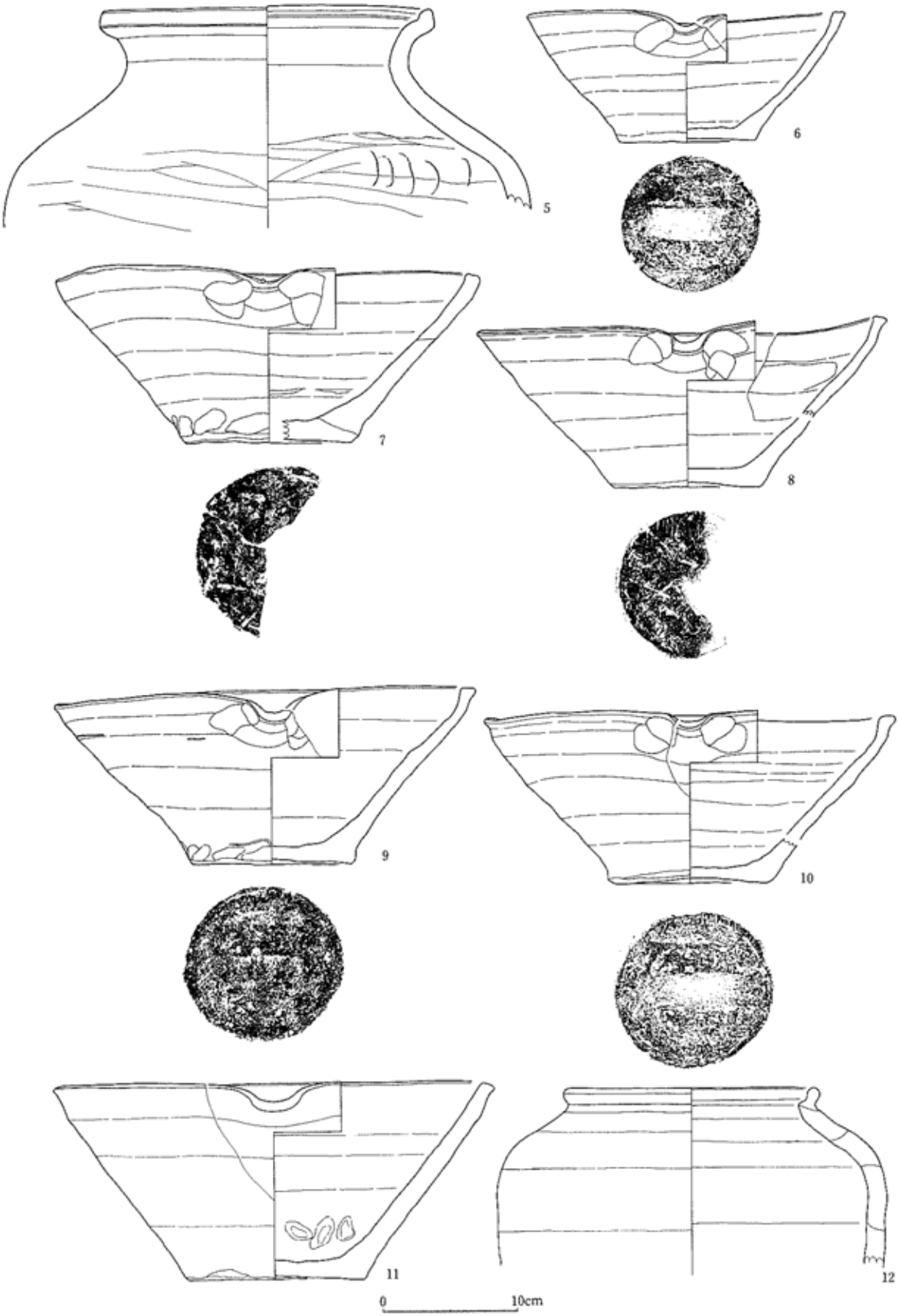
［焚口・燃焼部］前庭部のもっとも狭まる付近から分焔柱にかけては木炭が多量に検出されており、この部分が燃焼部と考えられる。平面形は撥状を呈し、焚口から分焔柱に向かってゆるやかに開く。床は 1 次面が地山面をそのまま床面としている他はすべて貼り床で、2 次面以降はすべてそれまでの使用面を梅戻し（10～100㎝）、その面に薄く粘土を貼って新たな床としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい分焔柱の手前で約 70 ㎝ある。焚口部の側壁は基本的には地山をそのまま壁としているが、4 次面を構築する際に左側壁では大きな修復が行なわれている。この部分の窯壁を除去したところ、壁の内部から炭化材が充満した直径 5～15 ㎝ほどの穴が壁と平行して 5 個検出されており、壁の修復方法は崩れた部分の壁際に杭を打ち込みその部分を芯として焼台や陶器片を積み上げ、その土に粘土を貼りつけたものと考えられる。

［分焔柱］分焔柱は地山を削り出して構築しており、最も残りのよい 6 次面では約 70 ㎝の高さまで残存している。平面形は細長い隅丸の長方形を呈し、図示した 1 次面の分焔柱は基底部で長さ 2.4m、幅 68 ㎝ある。6・7・8 次面でそれぞれ作り替えが行なわれており、7 次面のものはそれまでのものより 40 ㎝後方に、8 次面のものはこれよりもさらに 50 ㎝後方にずらして作られている。通焔孔の幅は基底部で左右ともに 84㎝ある。

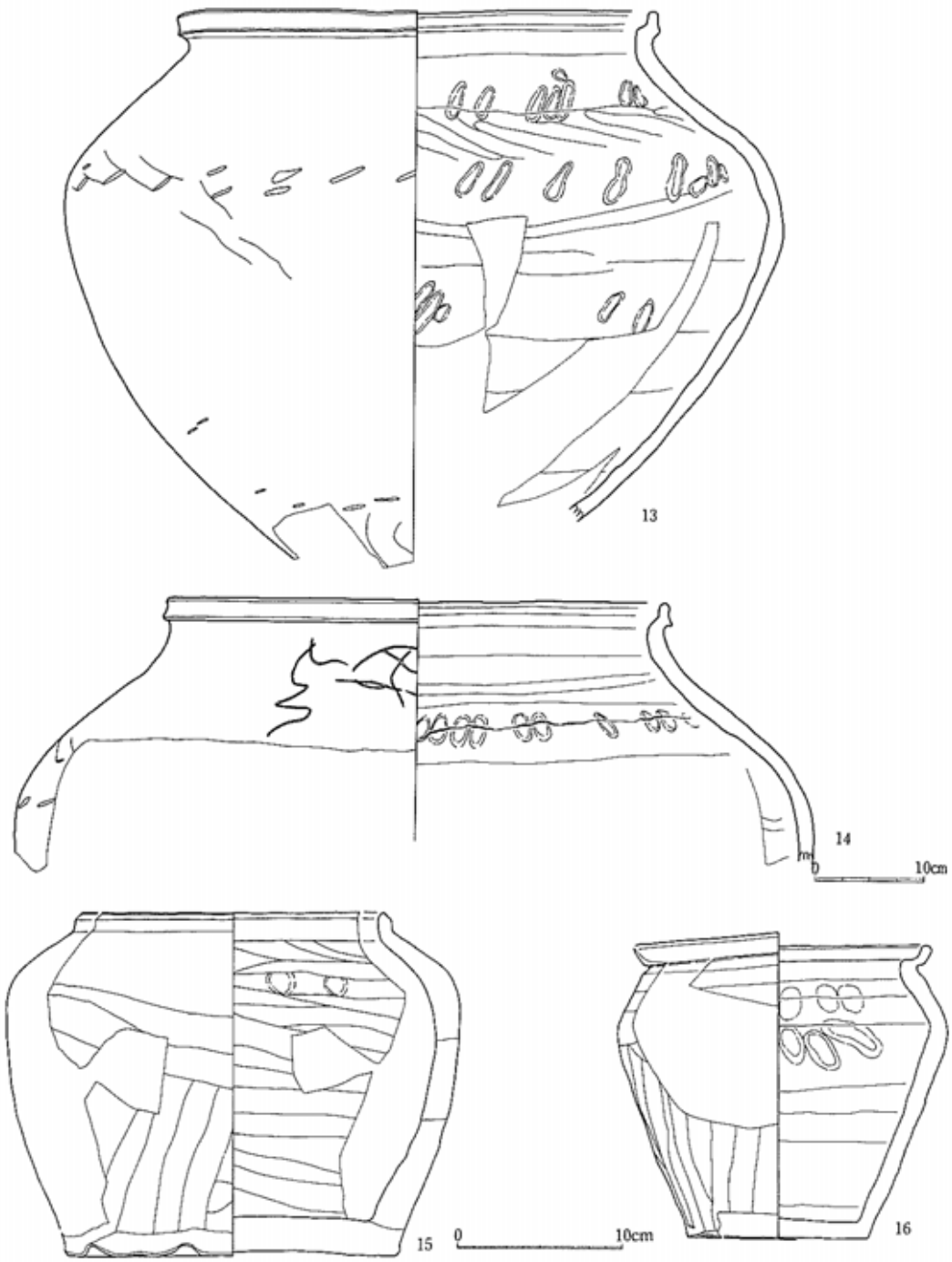


No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
1	掘構埋	壺	42.8			ⅡB	−	1/8		12−23
2	掘構埋	壺	44.8			B	+			12−32
3	掘構埋	広口壺	20.6			ⅡC	−	1/3	最大径37.4cm	12−06
4	掘構埋	広口壺	21.9			ⅠC	−	1/3	最大径37.4cm	12−07

第79図　ＳＲ－12窯跡出土遺物　（１）

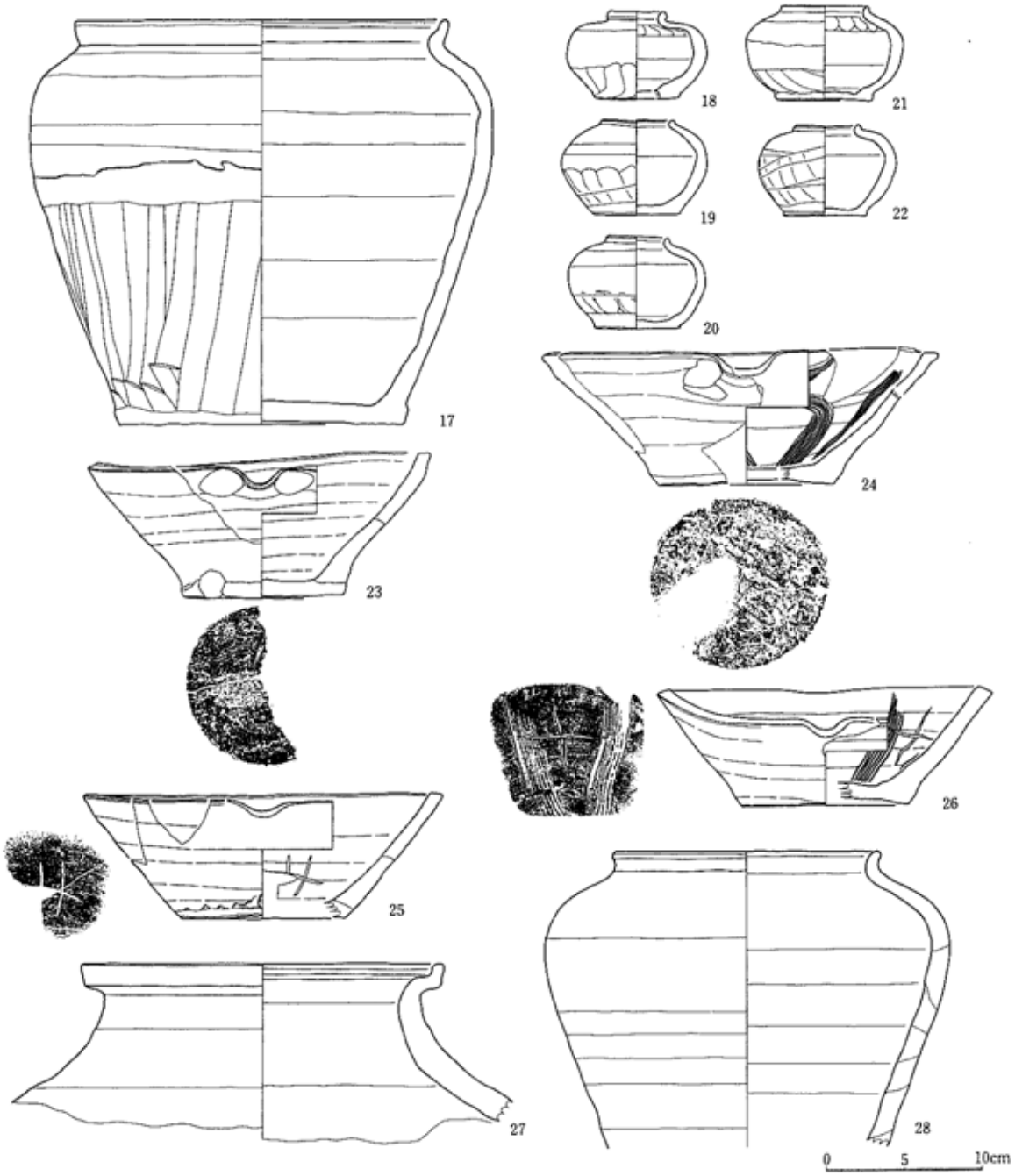


第80図　ＳＲ－12竈跡出土遺物　（２）



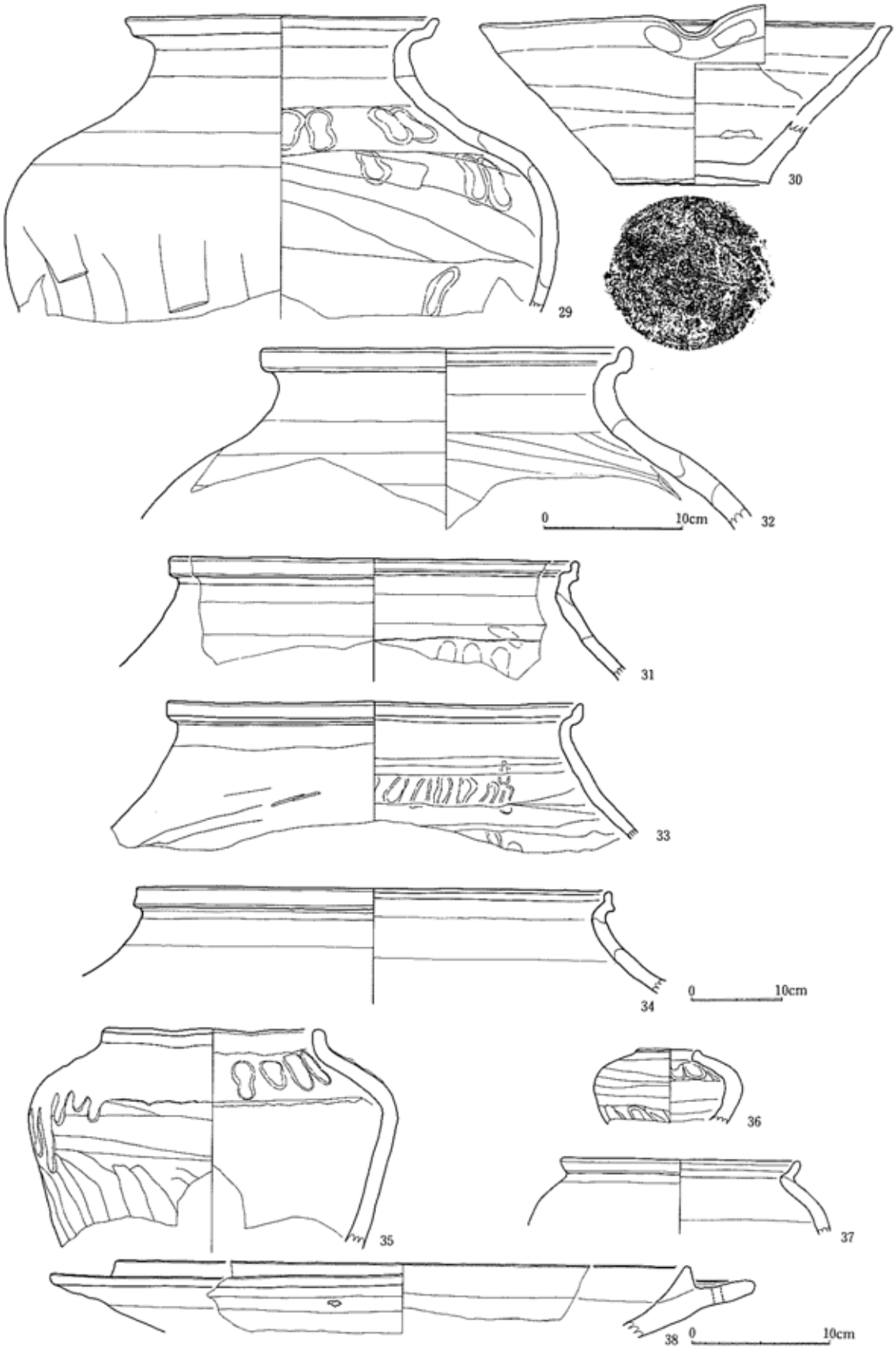
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
5	排溝埋	広口壺	24.8			ⅡC	+			12−21
6	排溝埋	擂鉢	23.5	10.0	9.9	ⅡA3	−	1/2	筋目なし　底部に方形の凹み　42.5%	12−12
7	排溝埋	擂鉢	31.4	12.2	13.4	ⅢC2	−	1/2	筋目なし　底部に方形の凹み　38.9%　重ね焼き痕	12−25
8	排溝埋	擂鉢	30.7	10.8	12.7	ⅢC1	−	1/3	筋目なし　35.2%	12−27
9	排溝埋	擂鉢	31.3	11.7	13.3	ⅢC3	−	完形	筋目なし　底部に方形の突出　37.4%　重ね焼き痕	12−24
10	排溝埋	擂鉢	30.4	11.2	12.9	ⅢC3	+	2/3	筋目なし　底部に方形の突出　35.8%	12−26
11	排溝埋	擂鉢	32.6	13.2	14.7	ⅢB1	−	1/2	筋目なし　40.5%	12−28
12	4前床	短頸壺	18.3			C	−	1/8		12−40
13	5燃床	甕	43.5			ⅡB	−	2/3	最大径66.1cm	12−03
14	5灰原	甕	45.4			ⅡA	−	1/6	最大径67.4cm　肩部にヘラ書き	12−04
15	5灰原	短頸壺	16.2	20.0	21.0	B	−	3/4		12−02
16	5灰原	短頸壺	17.9	10.9	18.6	C	−	3/4		12−05

第81図　ＳＲ－12窯跡出土遺物　（３）

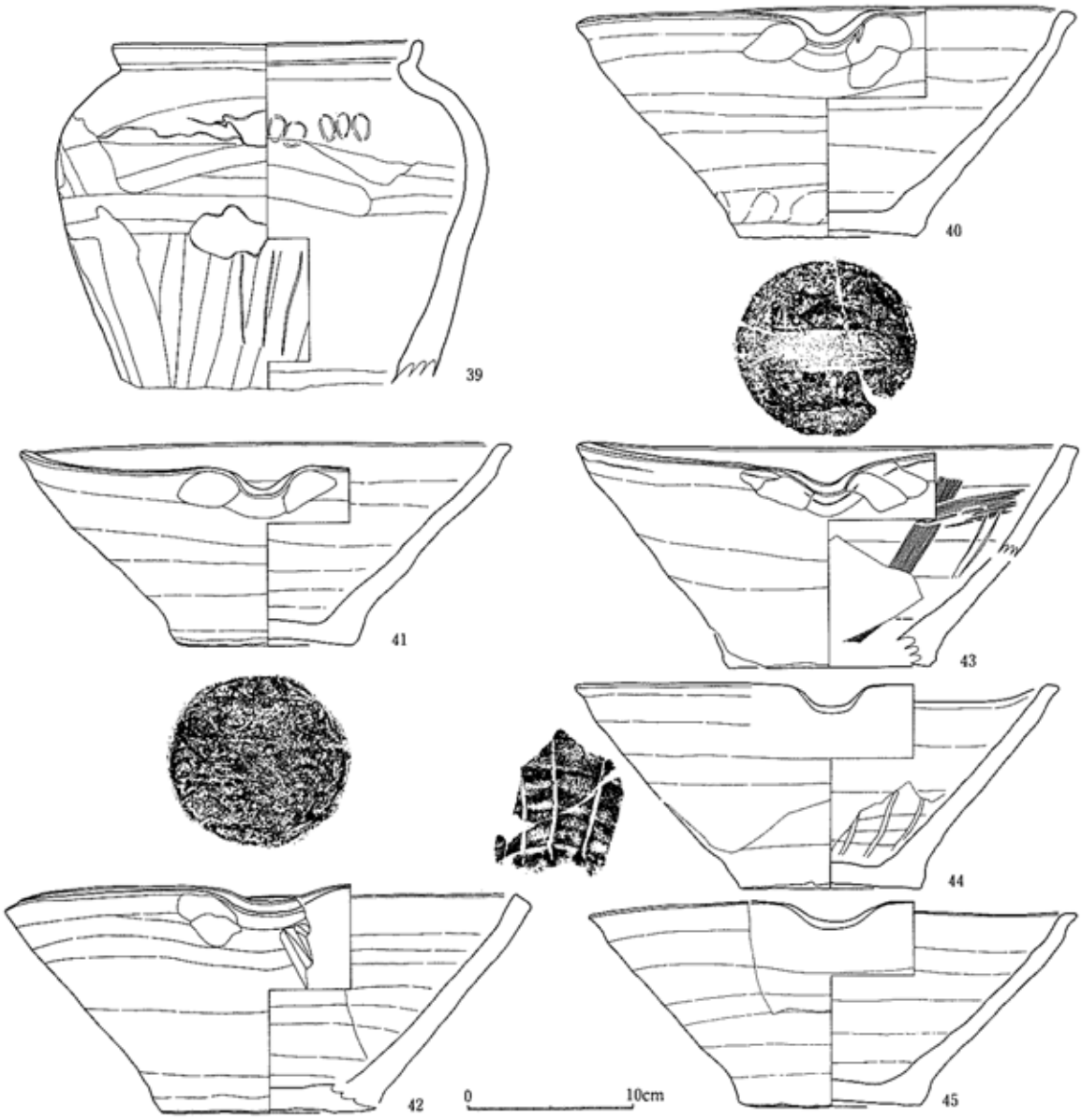


No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
17	5燃床	短頸壺	23.5	17.9	26.1	C	−	3/4		12-01
18	5燃床	小壺	3.4	5.4	5.7	A	−	1/2	最大径8.8cm	12-38
19	5燃床	小壺	4.4	5.6	6.1	A	−	完形	最大径9.3cm	12-09
20	5燃床	小壺	3.8	5.5	6.0	A	−	1/3	最大径8.2cm	12-10
21	5燃床	小壺	5.4	6.0	6.1	A	−	2/3		12-37
22	5燃床	小壺	4.1	5.3	5.8	A	+	2/3	最大径8.8cm	12-08
23	5前床	鉢	21.9	10.3	9.4	IIA3	−	1/2	底部に方形の凹み　筋目なし47.0%	12-17
24	5排埋	鉢	25.8	11.0	13.8	IIA3	−	2/3	底部に方形の凹み　筋目あり42.6%	12-15
25	5灰原	鉢	23.0	10.5	8.1	IA1	−	2/3	内面に「井」のヘラ書き　筋目なし45.7%	12-19
26	5灰原	鉢	21.4	10.6	7.6	IA1	−	2/3	内面に「十」のヘラ書き　筋目あり　49.5%	12-18
27	56前床	広口壺	23.2			B	−			12-35
28	56燃床	短頸壺	17.2			B	−	1/3		12-39

第82図　ＳＲ－12窯跡出土遺物　（４）

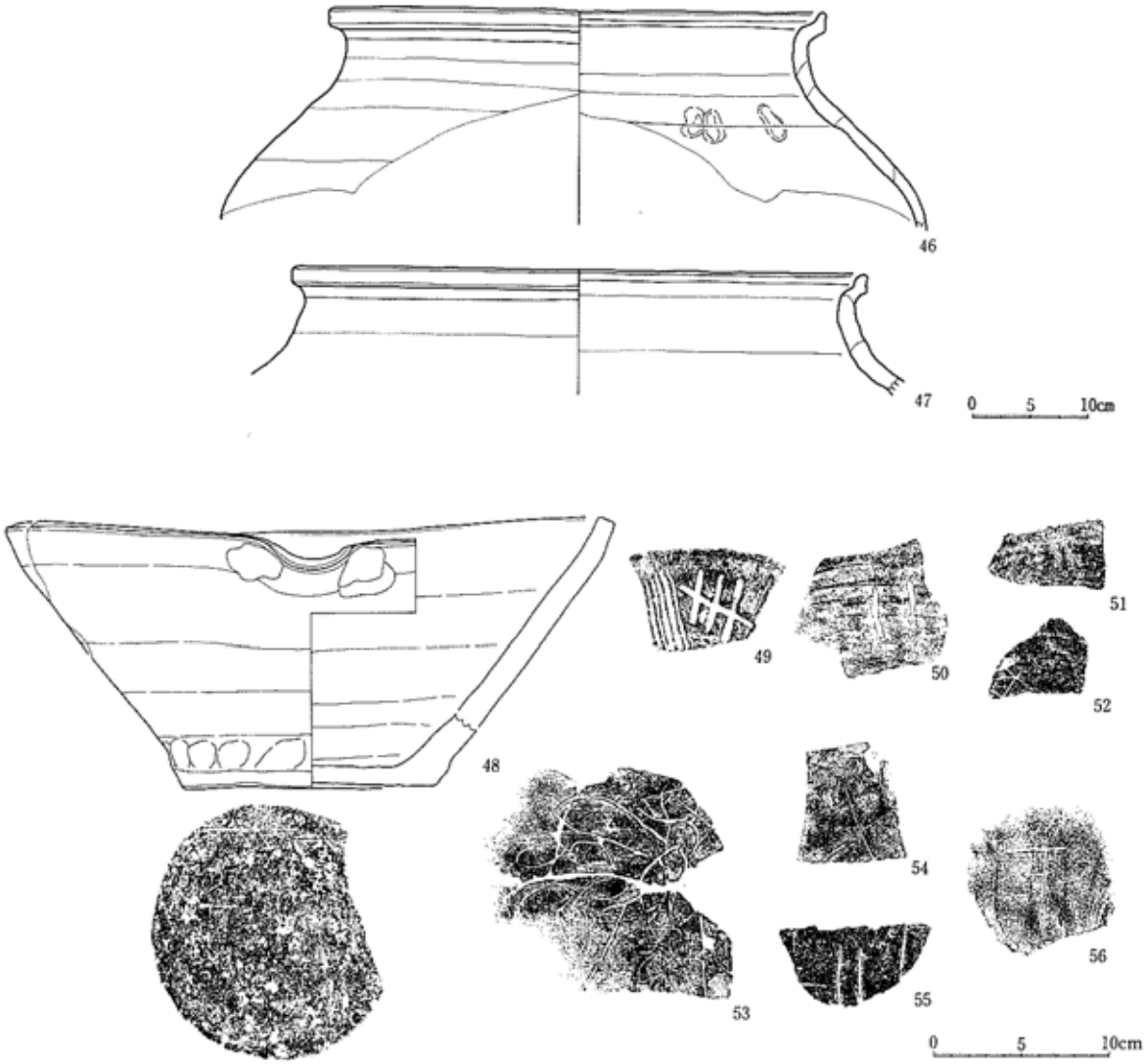


第83図　ＳＲ－12竈跡出土遺物　（５）



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
29	6 前床	広口壺	22.3			II C	−	1/2		12−36
30	6 燃床	擂鉢	29.9	10.6	13.2	II C1	−	1/4	筋目なし35.5%	12−30
31	7 灰原	甕	44.8			A	−			12−44
32	7 灰原	広口壺	26.4			C	−			12−45
33	7 灰原	甕	45.6			C	−			11−68
34	7 灰原	甕	52.0			A	−			12−42
35	7 灰原	短頸壺	15.5			A	−	1/4		11−69
36	7 灰原	小壺	4.6			A	−	3/4		12−22
37	7 灰原	短頸壺	17.2			C	−	1/6		12−41
38	7 燃床	火鉢	41.8			I	−	1/8		12−34
39	7 灰原	短頸壺	17.2			C	−	1/6		11−10
40	7 灰原	擂鉢	30.3	10.8	14.0	III C3	−	完形	筋目なし 35.6% 筋目なし	12−29
41	7 灰原	擂鉢	29.7	10.3	12.4	III C4	+	2/3	底部に方形突出 筋目なし 34.7%	12−16
42	7 灰原	擂鉢	32.0	13.1	13.9	III B1	−	1/3	筋目なし 40.9%	11−11
43	7 灰原	擂鉢	30.5	12.4	13.9	III B2	−	2/3	筋目あり 「ﾊ」のヘラ書き 40.9%	11−12
44	7 灰原	擂鉢	29.3	11.0	12.5	III C4	−	1/3	筋目なし 「ﾊ」のヘラ書き 胴口欠損 37.5%	12−13
45	7 灰原	擂鉢	29.5	10.9	12.6	III C4	−	1/3	筋目なし 胴口欠損 36.9%	12−14

第84図　ＳＲ－12窯跡出土遺物　（６）



№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
46	8燃埋	甕	42.6			IIB	−	1/8	口縁部のみ	12-46
47	8燃埋	甕	49.2			B	−	1/8	口縁部のみ	12-43
48	8灰原	鉢	34.8	14.3	15.4	IIIAI	−	1/4	筋目なし 43.6%	12-31

第85図　ＳＲ－12窯跡出土遺物　（７）

［焼成部］焼成部の平面形は細長い鶏卵形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から緩やかに広がり分焔柱の約 1m後方の傾斜変換線の付近で最大幅となり、煙道に向かって緩やかにすぼまる。燃成部の規模は水平距離で約8.4m、実質的な床面の長さ(傾距離)は10.2mである。窯壁の最大幅は傾斜変換線付近で3.2mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まではほぼ水平であるが、それよりも奥は約38°の急角度となっている。床面は1次面が地山面をそのまま床面としている他はすべて貼り床で、2 次面以降はそれまでの使用面を埋め戻しその面に薄く粘土を貼って床としている。貼り床の行われている範囲は、6 次面を除くすべての面では焼成部全体に行なわれているが、6 次面では傾斜変換線付近から手前の部分のみが行なわれている。貼り床の厚さは各面によって大きな差異がみられ、最も

厚い5次面や7次面では約40㎝もある。焼成部の側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約1.2mある。

［焼成部の施設］1次面と6次面を除く焼成部の斜面から足場穴が検出されている。足場穴は窯の軸線に沿って70～100㎝間隔で3条作られており、最も残りのよい4次面では10段認められた。

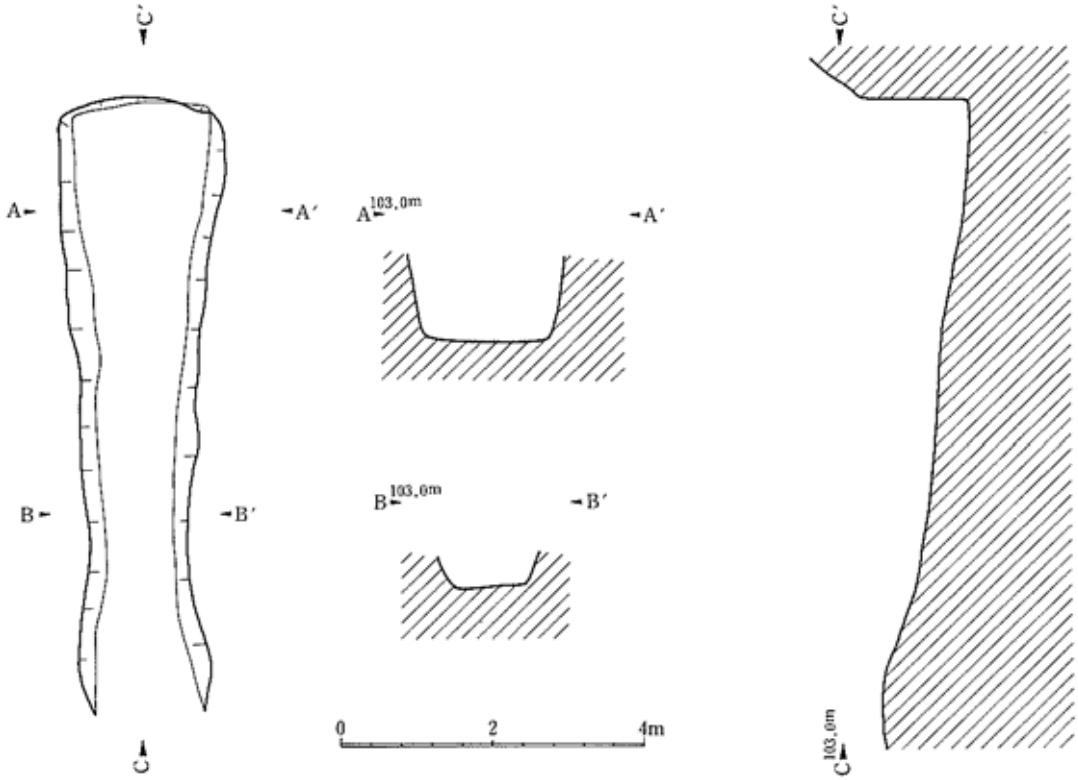
穴の大きさは幅20～30㎝、深さ5㎝で、30～40㎝間隔で掘られている。

［煙道部］焼成部から煙道部へは窯体のくびれと床面の傾斜の変換によって推移する。煙道部の平坦部は馬蹄形を呈し、規模は幅120㎝、長さ100㎝ある。7次面に伴う煙道部の傾斜変換線の内側からは直径8㎝ほどの炭化物を充満したピットが6個横に並んで検出されており、ダンパー棒の痕跡と考えられる。

［出土遺物］甕・広口壷・短頸蓋・小壷・擂鉢・火鉢などが焼かれている。これらの遺物は焼成部や燃焼部、前庭部の床面、排水溝の埋土および灰原から出土しているが、原位置を保っているものはない。また、焼成部や燃焼部の床面から出土しているものの中には焼台として使用されたものが多く含まれる。これらの中で5次面に対応する灰原から出土した火鉢はＳＲ-02から出土したものと接合関係がみとめられた（第12図2）。

ＳＲ－13窯跡（第86図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では比較的下位（標高103～104m）に位置する。凝灰岩

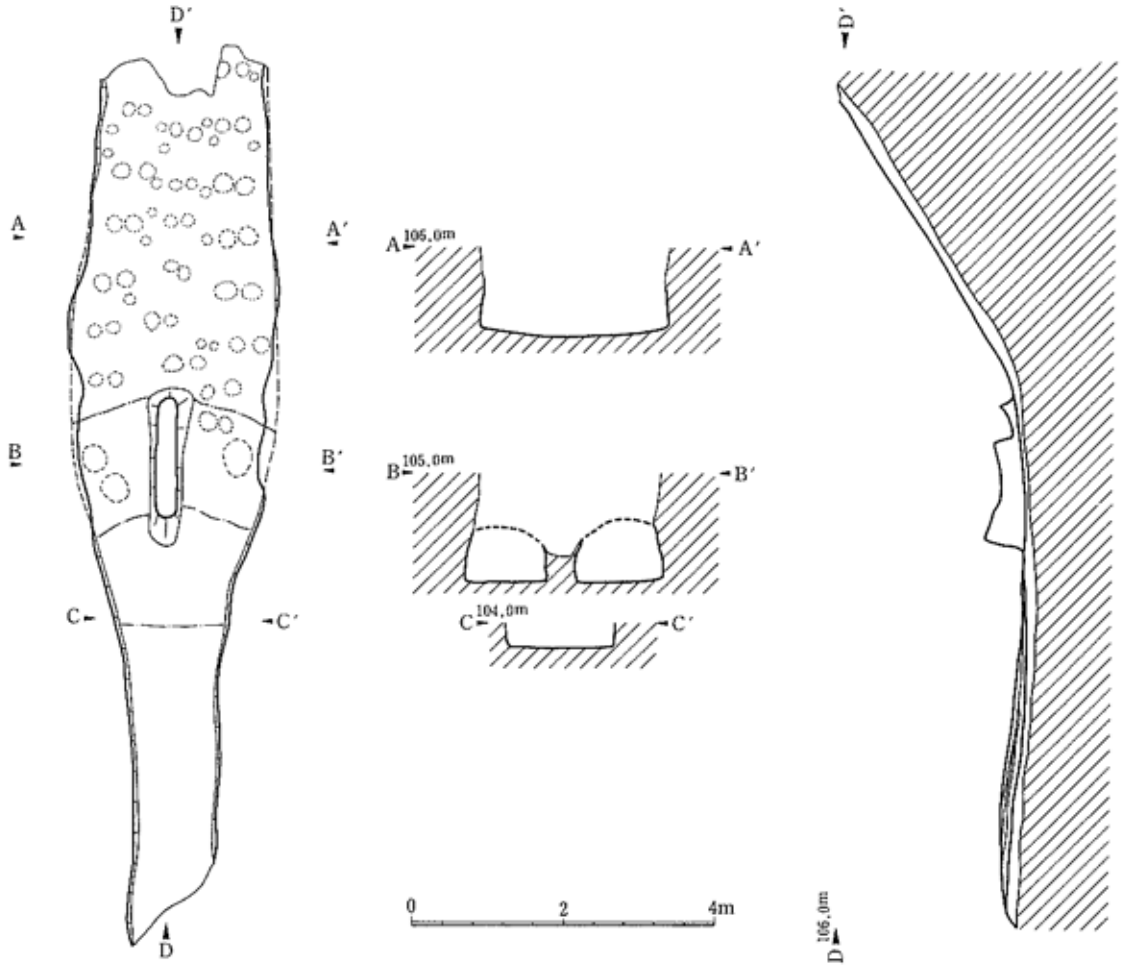


第86図　ＳＲ－13窯跡

の地山を通路状に掘り込んだもので、前庭部の部分のみ構築し、掘り込みを中止した未完成の窯と考えられる。主軸線の方向はN－50°－E、また斜面に対する主軸の角度は88°で、斜面に対してほぼ垂直に作られている。平面形は、最も奥まった部分から前方に向かってゆるやかにすぼまり、そこから先端にかけて緩やかに開く。規模は長さ約8.1m、幅は1.0～1.9mある。底面の傾斜は奥の部分はほぼ平坦で、前方に向かって約9°の角度をもって緩やかに上がる。

ＳＲ－14窯跡（第87・88図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では中位（標高105～109m）に位置する。ＳＲ-08と重複しこれに切られている。したがって新旧関係はＳＲ-14→ＳＲ-09の順となる。凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。分焔柱付近の保存状態は良好であるが、焼成部の上半から煙道部にかけてはＳＲ-08の構築の際に、前庭部は林道造成の際に削平されている。天井部は分焔柱付近がアーチ状に残存していた他はすべて崩落していた。窯体の平面形は紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はN－40°－E、また斜面と窯主軸の角度は66°あり、窯体は斜面に対



第87図　ＳＲ－14窯跡

して尾根側に偏って作られている。残存部の規模は窯長が約 11.8m、窯幅は最大部分で約 2.8mある。大きな作り替えは行なわれていないが、分焔柱の一部などに補修が加えられている。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延びる。規模は長さ約 4.3m、幅は 1.0～1.4mある。床は貼り床で、一旦掘り下げた地山面を 10 ㎝ほど埋め戻し、その面を床としている。床面の傾斜は 5°ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは約 30㎝ ある。掘り込み面をそのまま壁としている。

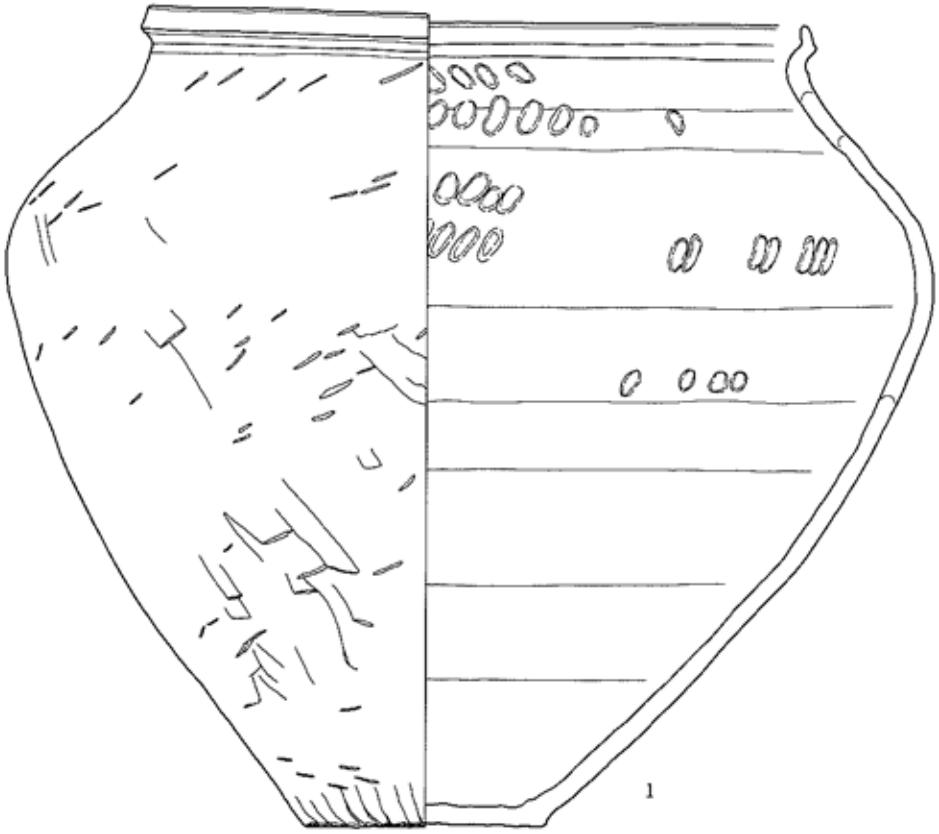
確認された焼成部は 1 面のみであるが、前庭部を掘り下げたところ掘り方面までの間に焼土層と炭化物層が合計 5 枚認められた。

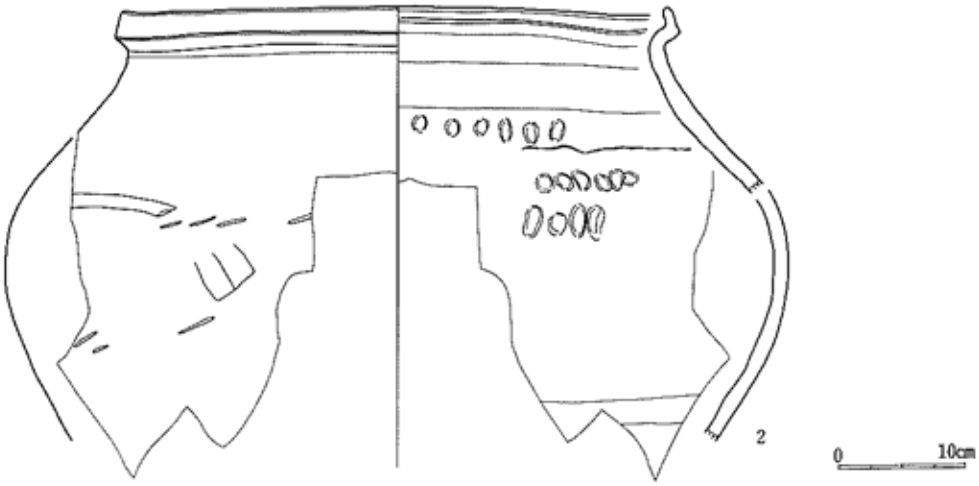
［分焔柱］分焔柱は地山を削り出して構築している。大きな作り替えは行なわれていないが、基部の一部に補修が加えられている。分焔柱の残存状況は良好で、通焔孔の天井部がアーチ状に残存している。通焔孔の幅は焼成部に向かって右側が直径 100 ㎝、高さ 70 ㎝、左側が直径 116 ㎝、高さ 64 ㎝ある。分焔柱の平面形は細長い隅丸長方形を呈し、規模は基底部で 2.0m、幅 0.5mある。

［焼成部］焼成部の平面形は細長い砲弾形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から徐々に広がり分焔柱の後端付近の傾斜変換線の部分で最大幅となり、しばらく直線的に続く。焼成部の規模は水平距離で約 5.8m、実質的な床面の長さ（斜距離）は 6.4mである。窯跡の最大幅は傾斜変換線付近で約 3.1mある。床面の傾斜は分焔柱付近約 5°とほぼ平坦であるが、傾斜変換線より奥は約 33°の急角度となっている。床面は貼り床で、地山の掘り込み面を 10～15 ㎝埋め戻し、その上に薄く粘土を貼って床としている。

［焼成部の施設］焼成部の床面から焼台の痕跡が検出されている。全体の床面は直接炎のあたった部分は酸化状態となり赤変しているのに対して、焼台を置いた部分は火陰となるため還元状態となり青色ないし青灰色を呈している。焼台の痕跡はすべて円形を呈し、2 個 1 対で合計 21 対検出され、それ以外に単独で存在するものが 16 個認められている。焼台の配置は左右の側壁に沿って規則的に配列するのと、その間をうめるように配置されたものとがあり、右側の列では 70 ㎝間隔で 8 段、左側の列では 70 ㎝間隔で 6 段の痕跡が認められた。焼台痕跡の大きさは直径 25 ㎝前後の大形ものと直径 15 ㎝前後の小形ものの大小 2 種類認められた。側壁に沿って配列するものはすべて大形のもので、その間をうめるものは大小混在し、単独のものはすべて小形のものである。また、分焔柱付近の平坦面では焼台の痕跡は認められないものの直径 40 ㎝の青変したところが分焔柱の左右に 2 個づつ検出された。平坦部で焼台が必要のない部分に置かれた製品の底部の痕跡と考えられる。

［出土遺物］焼成部の床面や灰原から甕・擂鉢・広口壷が出土しているが、図示できたものは甕が 2 点のみである。この中で 14-02 は、2 次焼成痕が認められることから焼台として再利用されたものと考えられる。





No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
1	1燃床	甕	51.8	19.1	65.3	ⅠA	－	完形	最大径 73.4cm	14－01
2	1燃床	甕	43.1			ⅡA	－	1/6	最大径 62.0cm	14－02

第88図　ＳＲ－14竈跡出土遺物　（1）

ＳＲ－15 窯跡（第 89～92 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では比較的低位（標高約 104～107m）に位置する。ＳＲ-19 と重複しこれを切っている。したがって新旧関係はＳＲ-19→ＳＲ-15 となる。

凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。残存状況は比較的良好で、前庭部から煙道部まで全体構造の判明する数少ない窯のひとつである。分焔柱付近の天井部が一部残存していたが、窯壁はすべて崩落していた。窯の平面形は細長い紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－50°－Ｅ、また斜面と窯主軸の角度は 82°あり、窯体は斜面に対してほぼ直角に作られている。規模は窯長が約 17.0m、窯幅は最大部分で 2.8mある。焼成面は合計で 9 面認められ、1 次面と最終使用面の 9 次面の標高差は最大で約 80 ㎝ある。

［前庭部］前庭部はそれぞれの面で大きく形が異なっており、1・2 次面では焚口部から先端部に向かって直線的に続く通路状を呈するが、3 次面では先端部を撥状に広げ、さらに 7 次面では左側壁を 20～35 ㎝拡幅している。規模は長さ約 5.0m、幅は 1.0～2.2mある。床は 1 次面では地山面をそのまま床面としているが、2 次面以降はすべて貼り床となっており、それまでの使用面を 5～10 ㎝埋め戻し、その面を床としている。床面の傾斜は 8°で先端部に向かって緩やかに上がる。壁は掘り込み面をそのまま利用しており、床面から垂直に立ち上がる。壁高は保存状況のよい焚口付近で約 50 ㎝ある。

［前庭部の施設］溝 3 条（ＳＤ-01～03）と土壙 1 基（ＳＫ-01）が検出されている。ＳＤ-01 は左側壁の外側に壁に沿って掘られた溝で、溝の先端部はＳＫ-01 に接続する。これらを直接覆う炭化物層が 3 次面に起因することから、これ以前に掘られたものと考えられる。溝の規模は全長 2.0m、幅 25 ㎝、深さは 15～25 ㎝ある。ＳＫ-01 は前庭部の前方に掘られた土壙で、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸 2.2m、短軸 1.8m、深さ 50～70 ㎝ある。ＳＤ-02 は前庭部の先端に壁に直交して掘られた溝で、2 次面を検出した段階で確認された。右側壁から左側壁にかけて掘られており、長さ 1.5m、幅 20 ㎝深さ 5 ㎝ある。ＳＤ-03 は 3～7 次面に伴う面で検出された。左側壁際に沿って掘られており、先端部はＳＫ-01 に接続する。溝の規模は全長 2.6m、幅 20 ㎝、深さは 10～30 ㎝ある。

［焚口・燃焼部］前庭部のもっとも狭まる付近から分焔柱にかけて木炭が多量に検出されており、この部分が燃焼部と考えられる。平面形は撥状を呈し、分焔柱の先端付近で大きく開く。床はすべて貼り床で、1 次面では掘り方面を 2 次面以降はそれまでの使用面を埋め戻し（5～15 ㎝）、その上に薄く粘土を貼って新たな床としている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい部分で約 70 ㎝ある。燃焼部の側壁は基本的には地山をそのまま壁としているが、7 次面を作る際に左側壁では大きな修復が行なわれている。この部分の窯壁を除去したところ、壁の内部から炭化材が充満した直径 5 ㎝ほどの穴が壁と平行して 2 個検出されており、壁の修復方法は崩れた部分の壁際に杭を打ち込みその部分を芯として焼台などを積み上げ、その上に粘土を貼りつけたものと考えられる。

［分焔柱］分焔柱は地山を削り出して構築しており、最も残りのよい 7 次面では約 70 ㎝の高さまで残存している。平面形は細長い長方形を呈し、図示した 2 次面の分焔柱は基底部で長さ 2.5m、幅 50 ㎝ある。7 次面で大きな作り替えが行なわれており、後端の位置を変化させずに前端の部分を 70㎝ 後方にずらして作られている。また、同時に左側壁では補修も行なわれており、崩れた部分に石を積み上げ、

その外側には塊状にした粘土を貼り付けている。通焔孔の幅は基底部で右側76㎝、左側68㎝で、いずれの面でも大きな変化はみられない。

［焼成部］焼成部の平面形は細長い砲弾形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から急激に広がり分焔柱の付近で最大幅となり、そのまま直線的に続いたのち煙道に向かって緩やかにすぼまる。焼成部の規模は水平距離で約8.8m、実質的な床面の長さ(斜距離)は9.8mである。窯壁の最大幅は2.8m（拡張された7次面では3.1m）ある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線の部分まではほぼ水平で、それよりも奥は約31°の急角度となっている。床面は1次面が上半は掘り方面を埋め戻してその上に粘土を貼った貼り床で、下半は地山面をそのまま床面としている。2次面以降はすべて貼り床で、それまでの使用面を5～20㎝埋め戻しその面に薄く粘土を貼って床としている。貼り床の行なわれている範囲は、2・5・7・9次面では焼成部全体に行なわれているが、3・4・6・8次面では傾斜変換線付近から手前の部分のみが行なわれている。焼成部の側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約30㎝ある。

［焼成部の施設］4・6・8次面の焼成部の斜面から焼台痕跡が検出されている。8次面では合計95個の焼台痕跡がみとめられ、その中の80個については2個1対（40対）検出されている。同様に6次面では合計2個1対、4次面では合計44個で13対が検出されている。

［煙道部］焼成部から煙道部へは窯体のくびれと床面傾斜の変換によって推移する。煙道部の平面形は馬蹄形ないしは「V」字形を呈している。平坦部の長さは約90㎝あり、奥壁は72°の急角度で立ち上がっている。

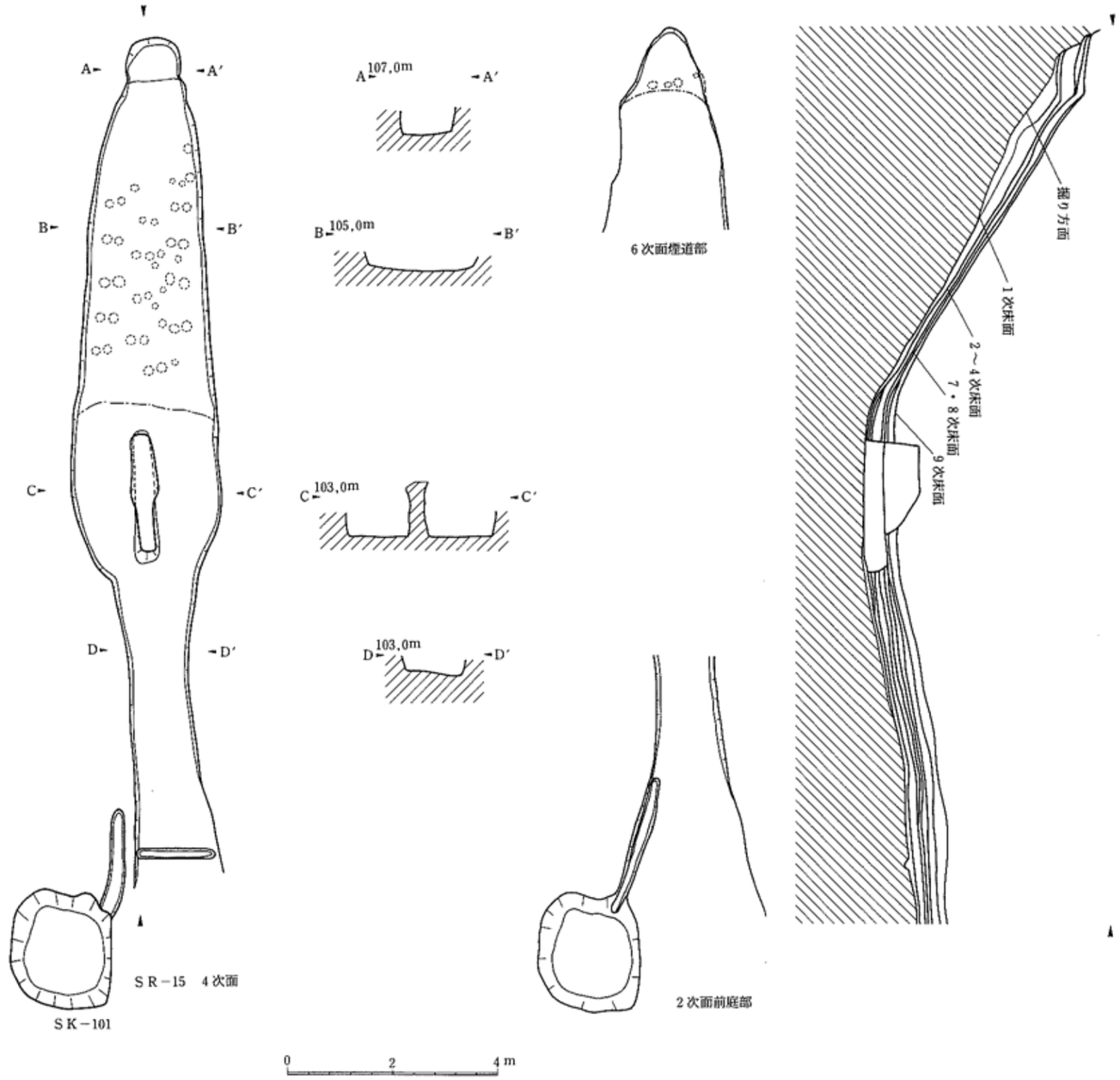
また、6次面では傾斜変換線の付近から横に並んだ径8㎝ほどのピットが4個検出された。このピットの中には炭化材が充満しており、ダンパー棒の痕跡と考えられる。

［出土遺物］焼成部の床面や灰原から甕・広口壷・短頸壷・擂鉢・小壷・小瓶・玉縁口縁壷など多くの器種が出土しているが、後2者は1点ずつ出土しているにすぎない。この中で小瓶（15-03）には肩部に松樹文が3単位描かれており、その中の1つは根の部分まで描かれている。遺物の中で、焼成部から出土したものの中には2次焼成の認められるものが多くあり、これらは焼台として再利用されたものと考えられる。また、15-03はＳＲ-07の灰原7層出土のものと、15-12はＳＲ-19の灰原出土のものと接合関係が認められた。

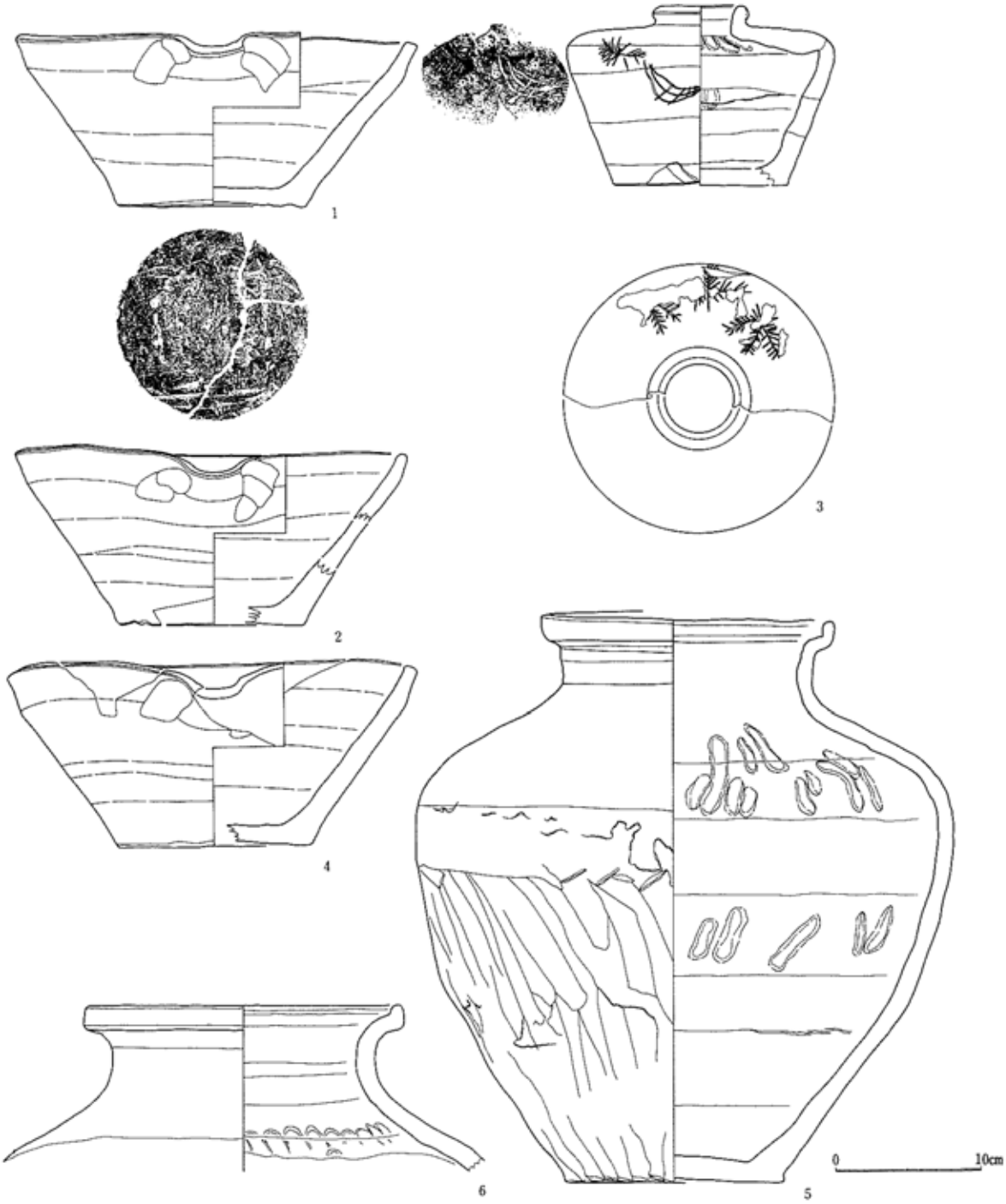
ＳＲ－16窯跡（第93図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では(標高106～109m)に位置する。ＳＲ-20やＳＲ-07と重複し前者を切り、後者に切られている。したがって、新旧関係はＳＲ-20→ＳＲ-16→ＳＲ-07の順となる。凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。分焔柱付近の保存状態は良好であるが、焼成部の上半から煙道部にかけてＳＲ-07の構築の際に削平されている。天井部はすべて崩落していた。窯体の平面形は紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－36°－Ｅ、また斜面と窯主軸の角度は90°で、窯体は斜面に対して直角に作られている。

残存部の規模は窯長が約15.1m、窯幅は最大部分で約2.6mある。燃焼部と焼成部のいずれにも火熱

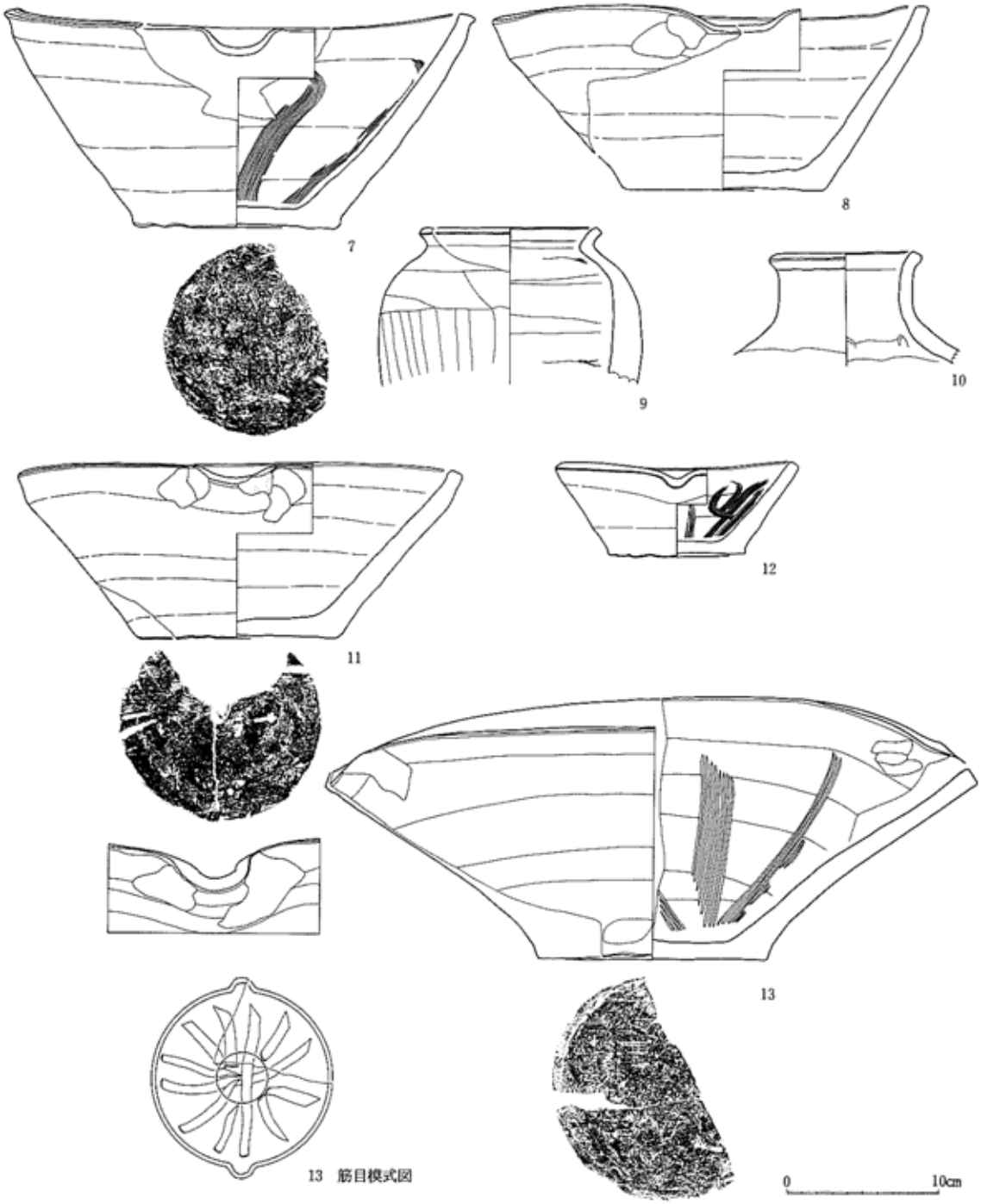

A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
A 107.0m
B 105.0m
C 103.0m
D 103.0m
6次面煙道部
掘り方面
1次床面
2～4次床面
7・8次床面
9次床面
SR－15　4次面
SK－101
2次面前庭部
0
2
4 m

第89図　SR－15竈跡



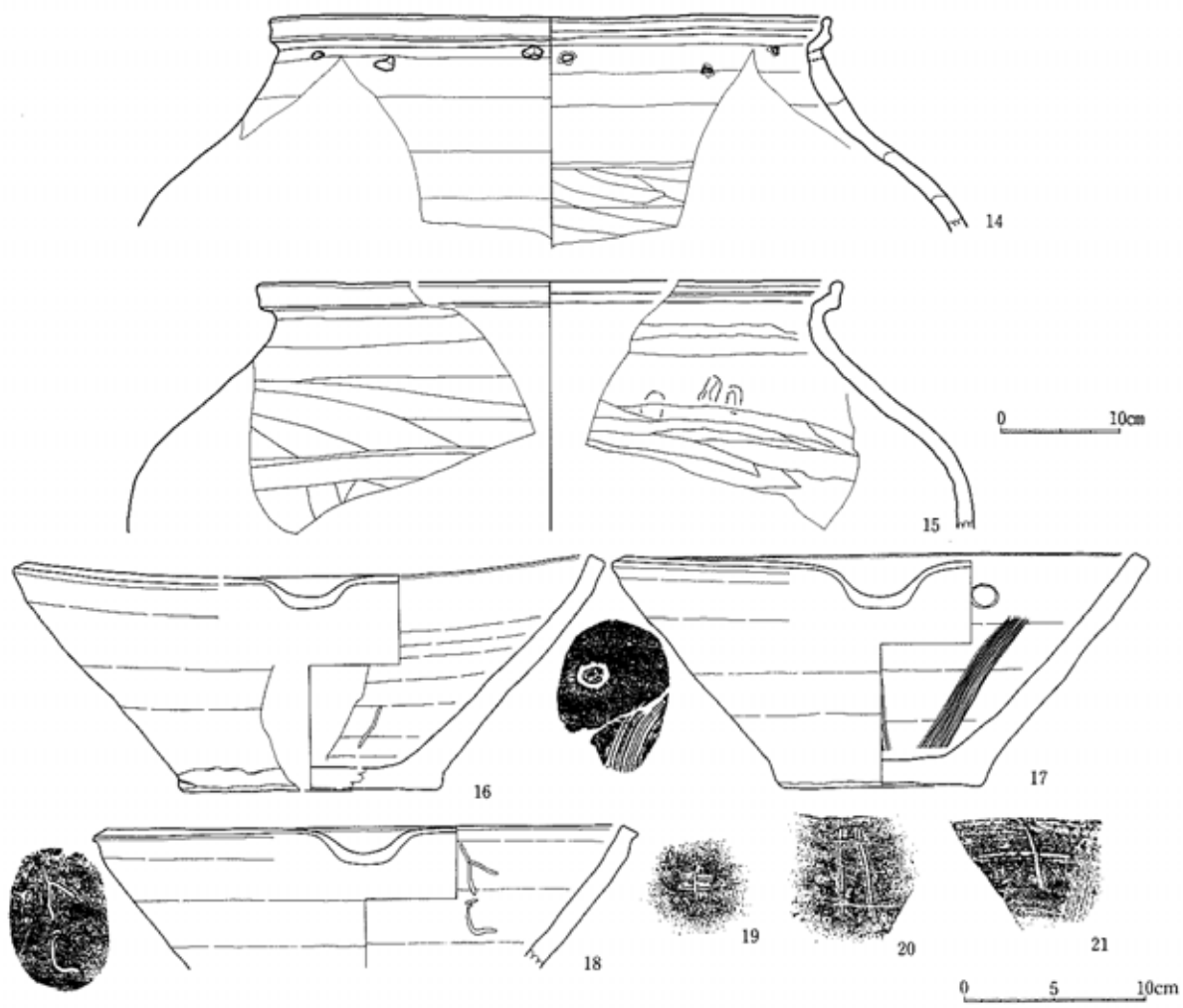
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
1	1焼座	鉢	28.1	13.0	12.3	III A2	−	完形	底部に方形突出　筋目なし　46.2%	15−05
2	26焼座	鉢	27.4	12.7	12.7	II A2	−	5/6	筋目なし　44.1%	15−09
3	47焼座	小瓶	5.6	12.2	12.6		−	1/2	肩部に松葉文のヘラ書き SR-07 出土のものと接合	15−14
4	47前床	鉢	28.6	13.4	13.1	III A2	−	1/3	筋目なし　46.8%	15−08
5	6焼床	広口壺	20.1	15.0	40.1	I B	−	4/5		15−01
6	7焼床	広口壺	21.6			C	−			15−02

第90図　ＳＲ－15窯跡出土遺物　（１）



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2次	残率	特徴	登録
7	6灰原	擂鉢	31.0	13.0	14.4	Ⅲ A1	－	1/2	筋目あり 片口欠損 41.9%	15－10
8	7前床	擂鉢	28.7	13.2	12.4	Ⅲ A1	－	1/2	筋目なし 45.9%	15－07
9	8燃壁	短頸壺	11.4			B	－	1/3		15－04
10	8燃壁	玉縁口縁壺	10.1				－	小片		15－03
11	8燃壁	擂鉢	29.3	13.1	11.7	Ⅲ A1	－	4/5	筋目なし 44.7%	15－06
12	8灰原	擂鉢	14.6	7.6	6.0	Ⅰ A1	－	1/3	筋目あり 52.0% SR-19出土のものと接合	15－12
13	8燃床	擂鉢	34.4	15.2	16.5	Ⅲ A3	－	1/3	双口 筋目あり 44.1%	15－11

第91図　ＳＲ－15窯跡出土遺物　（２）



№	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
14	8燃床	甕	46.6			A	−		頸部と縁帯の境界に連続して貫通孔	15-13
15	8燃床	甕	48.4			A	−			101-02
16	8灰原	擂鉢	33.3			III A2	−	1/4	筋目なし　内面に「｜」のヘラ書き　43.0%	101-01
17	8灰原	擂鉢	29.4	11.2	12.8	III B1	−	2/3	筋目あり　内面に「○」のヘラ書き　38.1%	タ15-05
18	8灰原	擂鉢	29.0			III	−	1/3	筋目なし　内面に花押状のヘラ書き	タ15-01

第92図　ＳＲ－15窯跡出土遺物　（３）

を受けた痕跡が認められず、使用される以前に廃棄された窯と考えられる。

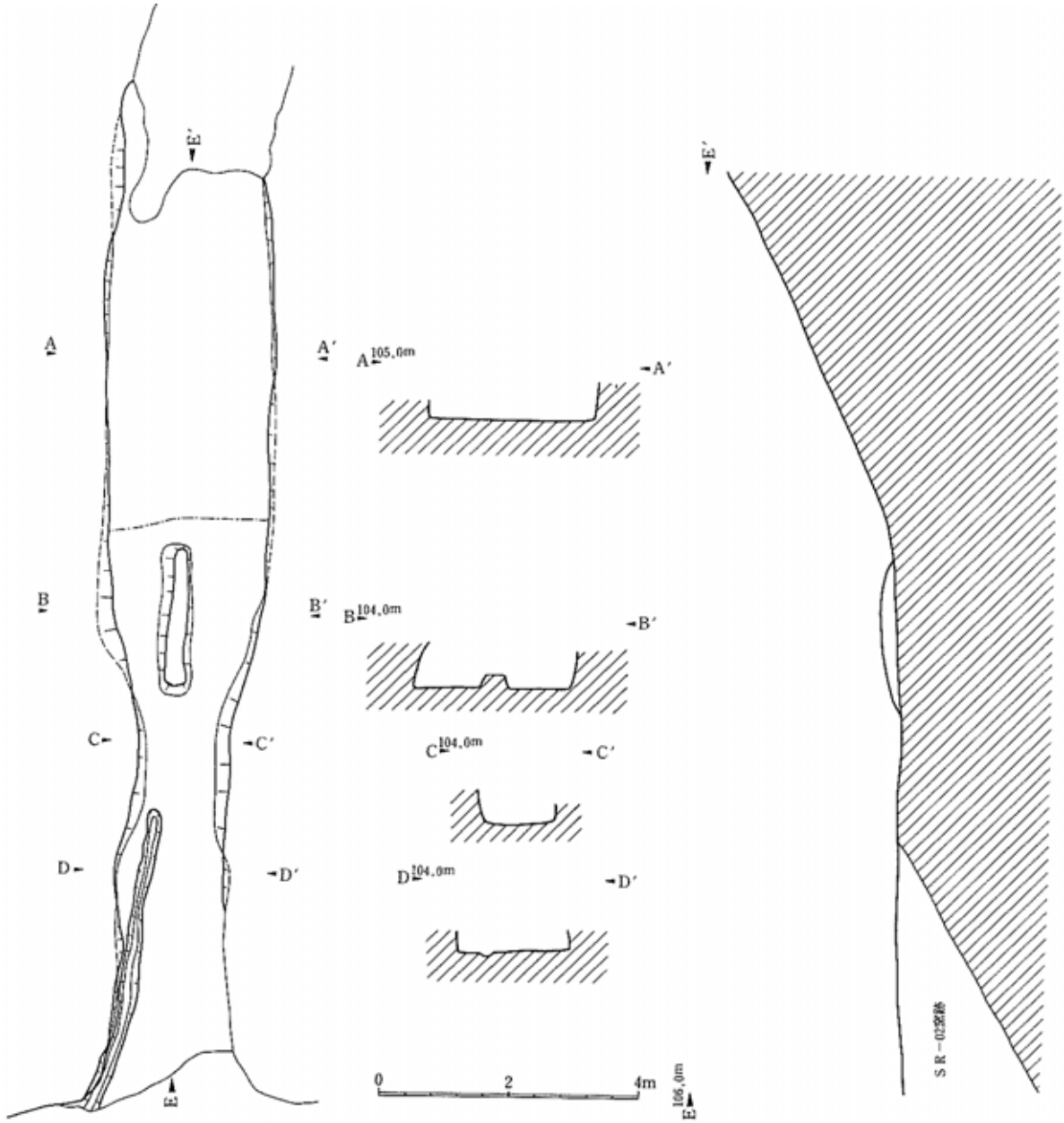
［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延びる。規模は長さ約5.6m、幅は1.1～1.7mある。ＳＲ-20の焼成部から掘り込まれており、本窯とＳＲ-20の中軸線は一直線上にのる。

窯を掘り抜いた土でＳＲ-20を埋め込み、その面をそのまま床としている。床面はほぼ平坦である。

［前庭部の施設］左側壁に沿って溝が１条検出されている。溝は前庭部の最もすぼまった付近から掘り込まれており、先端部は前庭部よりもさらに前方に延びる。規模は全長4.6m、幅20～30㎝あり、底面は先端に向かって緩やかに傾斜する。

［焚口・燃焼部］前庭部のもっとも狭まる付近から分焔柱にかけてが燃焼部であると考えられる。平面形は撥状を呈し、側壁は分焔柱の先端から中ほどにかけて大きく開く。掘り方面をそのまま床としており、ほぼ平坦である。

［分焔柱］分焔柱は地山を削り出して構築している。残存状況はあまり良好ではなく、基部からわず



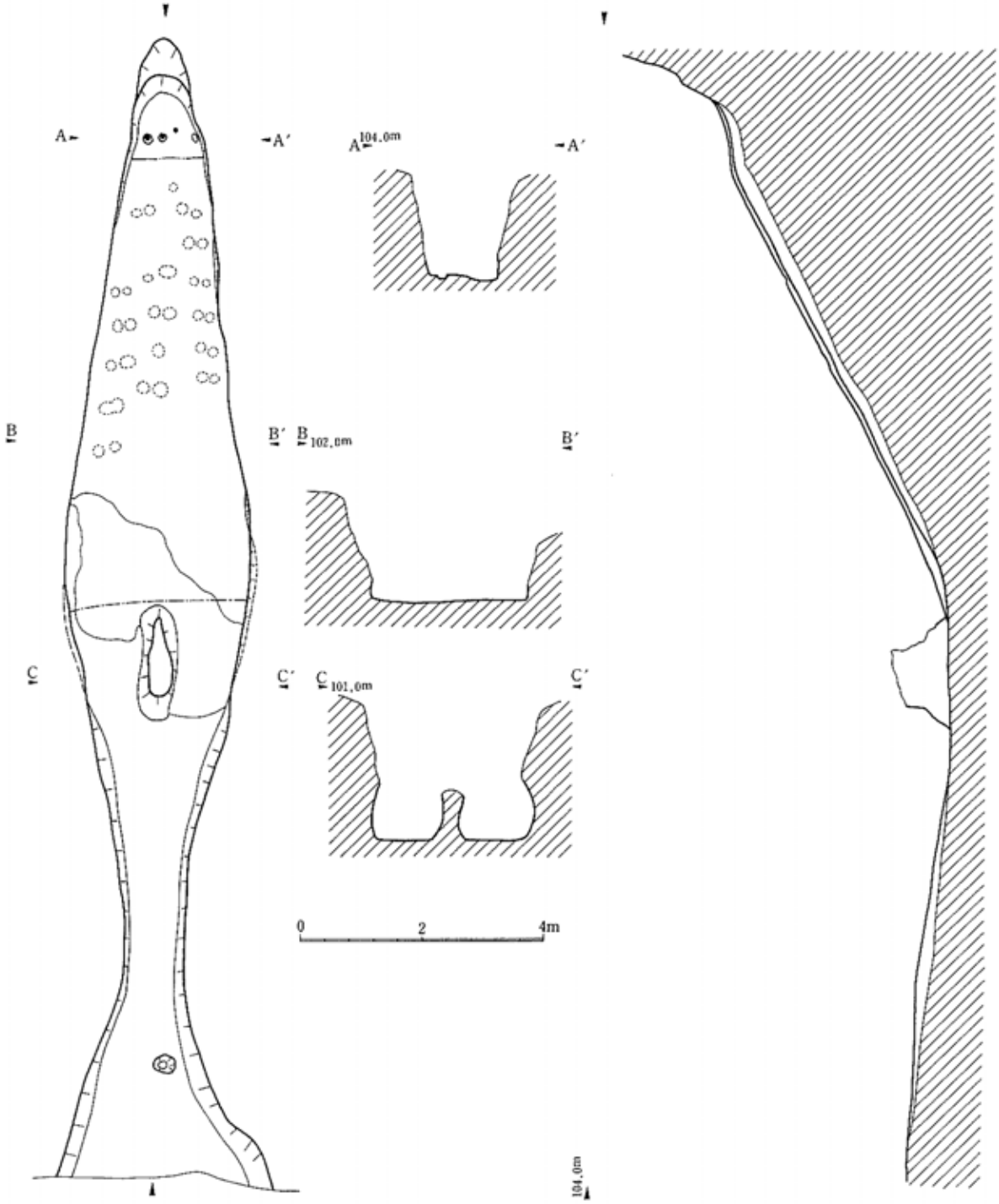
第93図　ＳＲ－16窯跡

か30 cmほど残っているにすぎない。通焔孔の幅は基底部で焼成部に向かって右側が64 cm、左側が44 cmある。分焔柱の平面形は細長い長方形を呈し、規模は基底部で2.3m、幅52 cmある。

［焼成部］焼成部の上端は失われているが、残存する部分から平面形は細長い砲弾形を呈すると考えられる。窯壁は通焔孔の付近から徐々に広がり分焔柱の中ほどで最大幅となり、そのまま直線的に続く。残存する焼成部の規模は水平距離で約9.2m、実質的な床面の長さ（斜距離）は10.5mである。

窯壁の最大幅は約 2.6mある。床面の傾斜は分焔柱付近はほぼ平坦であるが、傾斜変換線より奥は約24°の急角度となっている。

［出土遺物］天井部の崩落土などから、甕や鉢の破片が出土しているが図示できるものはない。本窯には操業の痕跡が認められないことから、これらの遺物は他の窯からの流入と考えられる。



第94図　ＳＲ－17窯跡

ＳＲ－17 窯跡（第 94～98 図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も低位（標高 100～104m）に位置する。

基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。天井部は分焔柱の部分で残存していた他は、すべて崩落していた。他の遺構との重複もなく全体的に保存状態は良好である。窯体の平面形は細長い紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－

39°－Eあり、また斜面と窯体主軸の角度は87°で、窯体は斜面に対してほぼ垂直に作られている。窯の規模は全長が約17.7m、窯幅は最大部分で3.1mある。作り替えが1回認められる。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部からほぼ直線的に延び、先端部に向かって撥状に広がる。規模は全長約6.2mで幅1.0～1.2m、先端部の幅は約2.7mある。床面は貼り床で、地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約10㎝ほど埋め込み床面としている。底面の傾斜は約8°で焚口に向かって緩やかに下る。

［前庭部の施設］前庭部の先端部付近の床面からピットが1個検出されている。ピットは長軸40㎝、短軸30㎝の楕円形を呈し深さは約15㎝ある。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、焚口から分焔柱に向かっては撥状に広がる。この部分からは木炭が多量に検出されている。燃焼部は全長約1.4mある。

床面は、地山の掘り込み面をそのまま利用しており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい部分では約50㎝ある。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られている。分焔柱の残存状況は良好で、通焔孔の左側の天井部がアーチ状に残存していた。通焔孔の規模は焼成部に向かって右側が直径116㎝、高さ96㎝、左側が直径104㎝、高さ96㎝ある。分焔柱の平面形は細長い楕円形を呈し、規模は基底部で長さ2.2m、幅56㎝ある。大きな作り替えは行なわれていないが、2次面に伴う分焔柱は左側壁の崩れた部分に塊状にした粘土を貼りつけて補修されている。

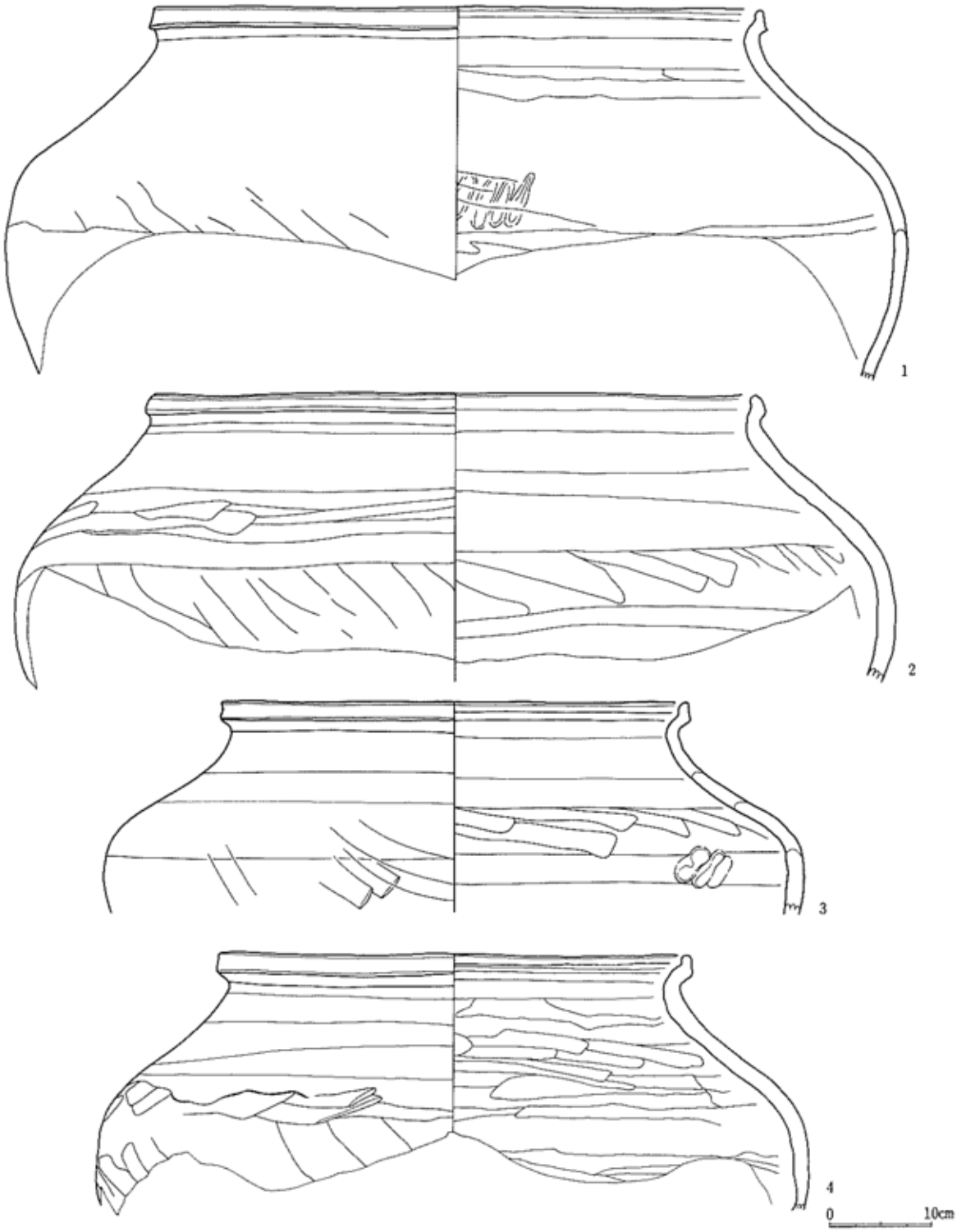
［焼成部］焼成部の平面形は細長い紡錘形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から広がり傾斜変換線の約1mほど後で最大幅となり、煙道に向かって緩やかにすぼまる。焼成部の規模は水平距離で約8.7mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は9.8mある。窯幅は傾斜変換線から1mほど奥まった付近で最大となり約3.1mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線付近まではほぼ平坦であるが、それよりも奥は約27°の急角度になっている。

床面は大部分が貼り床であるが、1次面では傾斜変換線の手前の部分については掘り方面をそのまま床としている。貼り床は、1次面では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約10㎝ほど埋め戻しその上に粘土を貼り、2次面では焼けた1次面を除去してその上に粘土を貼って構築している。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約40㎝ある。

［焼成部の施設］2次面の焼成部の斜面から焼台痕跡が検出されている。痕跡が確認されたのは斜面上半部のみで、2個1対で合計16対(32個)ある。焼台跡は3列認められ、列間は約65㎝間隔、焼台の上下間隔は70㎝間隔と規則的に配置されている。焼台痕は円形を呈し直径は15～25㎝である。

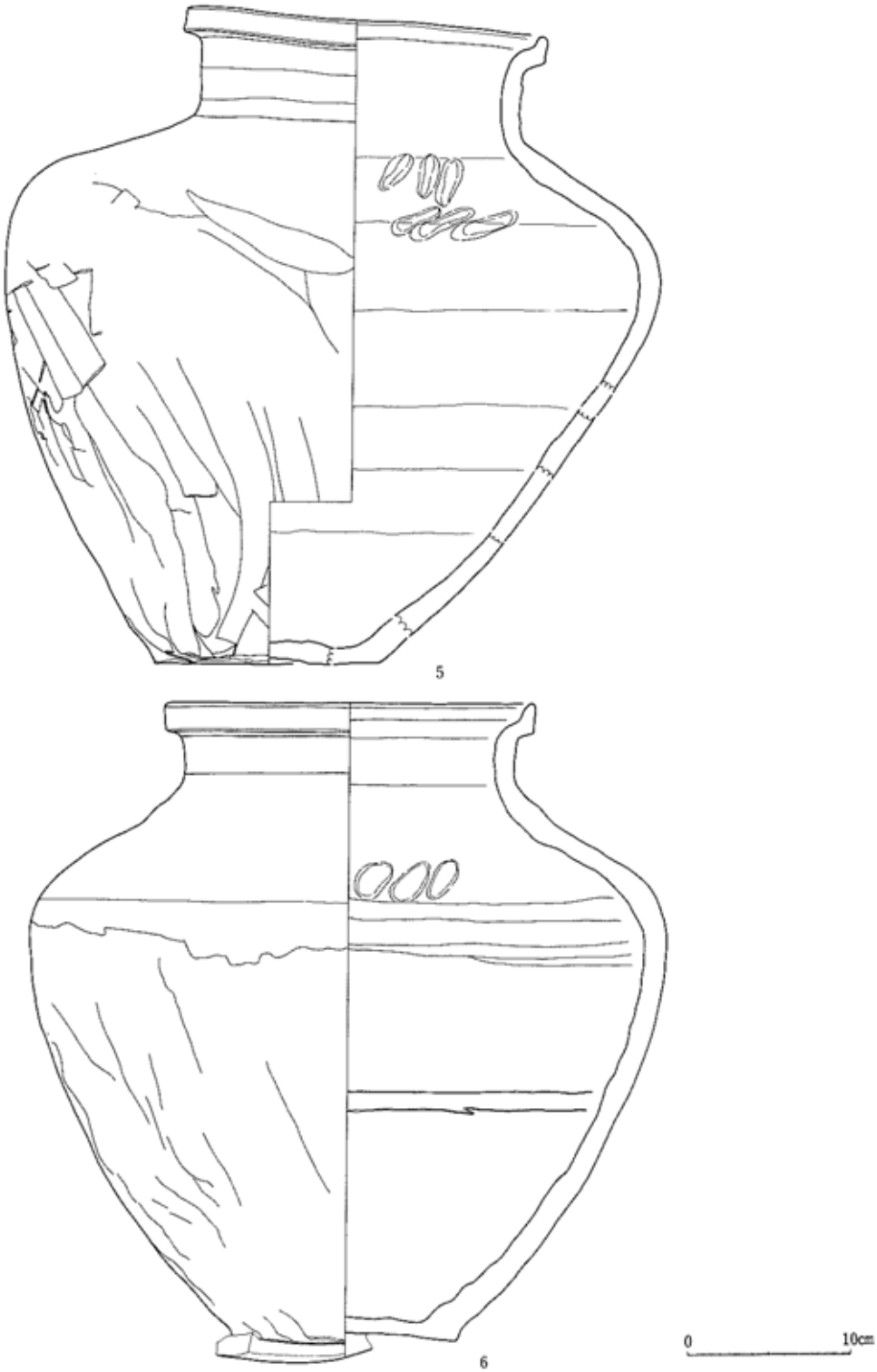
［煙道部］焼成部から煙道部へは床面傾斜角の変換によって移行する。煙道部の平面形は馬蹄形ないしは「V」字形を呈している。平坦部の長さは1.1m、幅1.1mあり、奥壁が約60°の急角度で立ち上がっている。また、2次面では傾斜変換線の約20㎝ほど奥まった付近から横に並んだ直径10㎝ほどのピットが4個検出された。このピットの中には炭化材が充満しており、この位置にダンパー棒が設置されていたものと考えられる。

［出土遺物］窯の埋土や焼成部の床面から甕・壷・擂鉢などが多量に出土しているが、窯詰めの状態



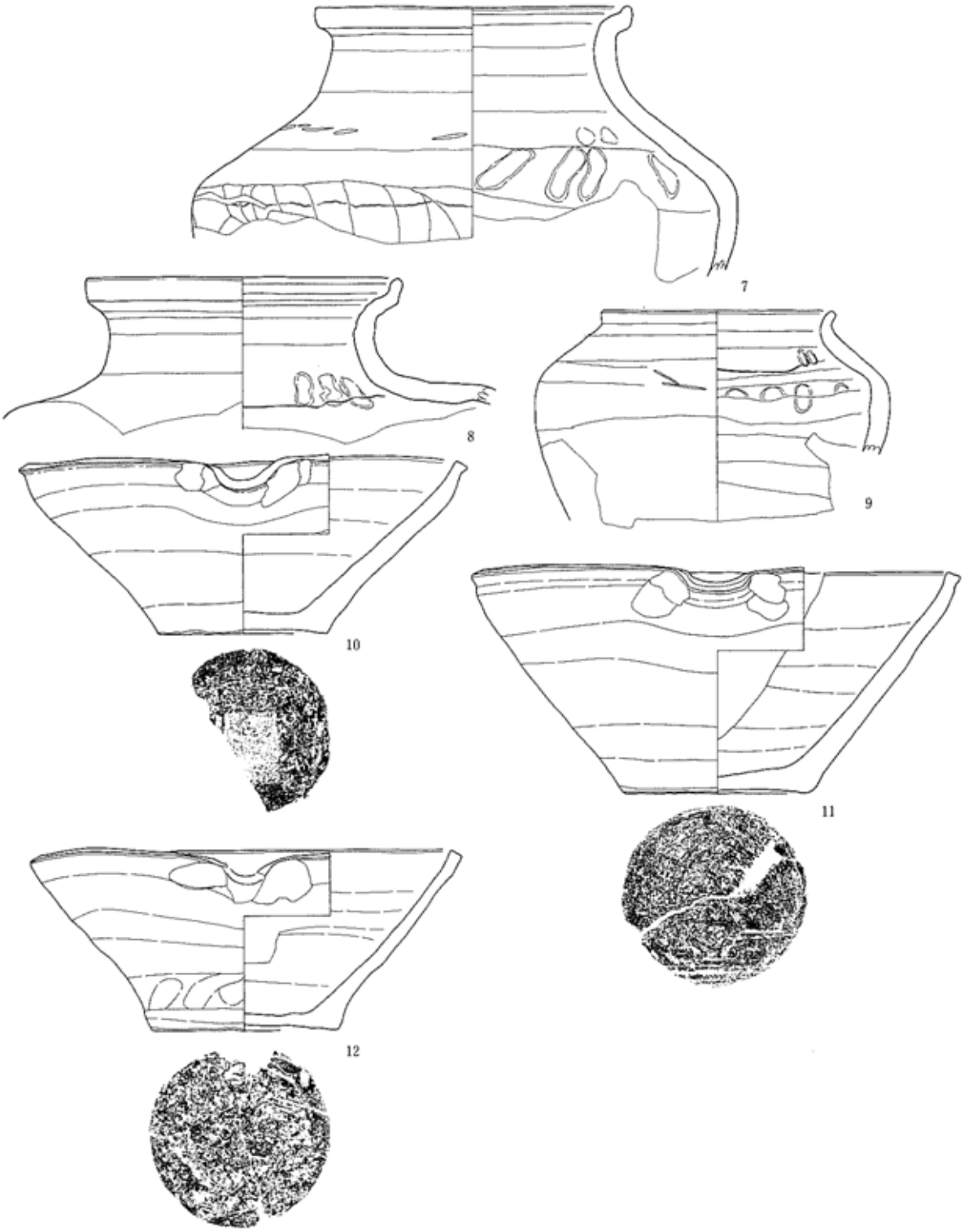
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
1	埋土	甕	59.4			ＩＡ	－		最大径88.8cm	17－13
2	焼埋	甕	59.0			ＩＢ	－		最大径85.0cm	17－15
3	焼埋	甕	45.6			ＩＡ	－		最大径67.8cm	17－16
4	焼埋	甕	45.8			ＩＢ	－		最大径70.2cm	17－14

第95図　ＳＲ－17窯跡出土遺物　（１）



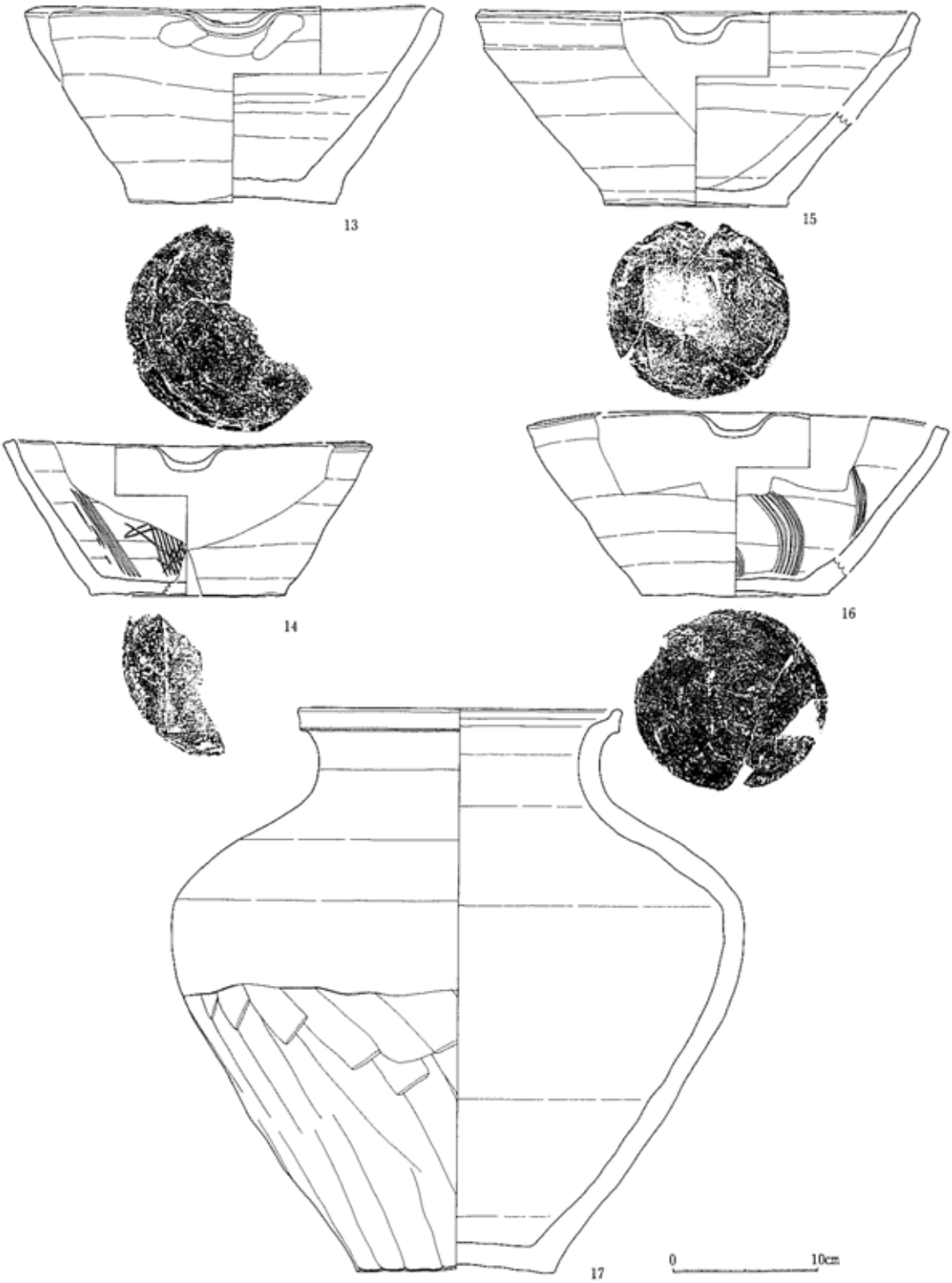
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
5	焼壁	広口壺	21.8	13.9	49.5	ⅠB		3/5	最大径40.2cm	17−01
6	焼壁	広口壺	22.4	13.7	39.4	ⅠB		1/2	最大径39.2cm 底部に陶器片付着	17−12

第96図　ＳＲ－17窯跡出土遺物　（２）



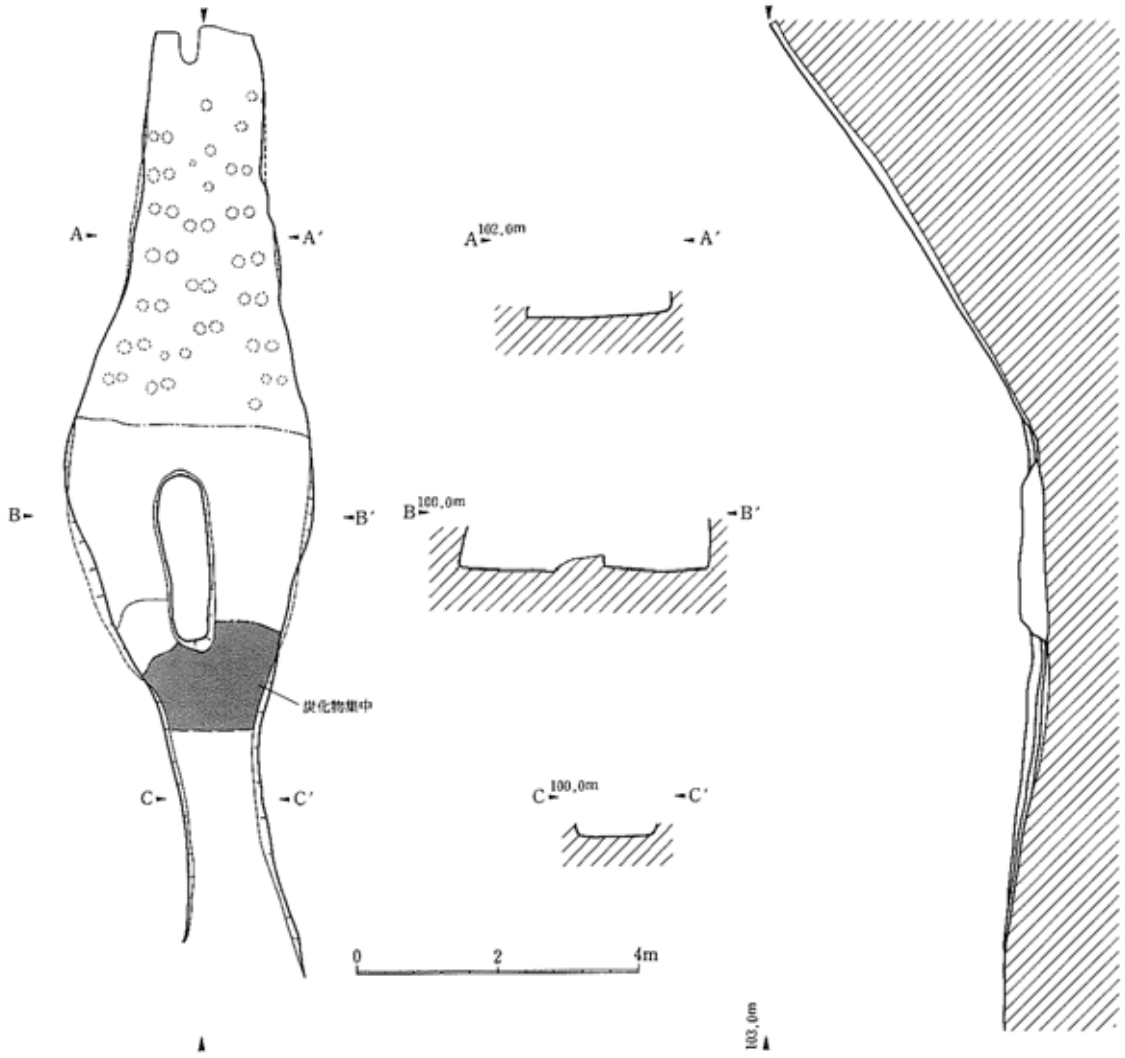
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
7	焼埋	広口壺	21.6			I C	−			17−09
8	焼床	広口壺	21.6			B	−		最大径37.4cm	17−10
9	焼埋	短頸壺	16.0			A	−		最大径24.8cm　体部外面にヘラ書き	17−11
10	焼埋	鉢	31.2	11.6	12.5	III C3	−	1/2	37.8%	17−02
11	焼埋	鉢	33.9	12.8	16.1	III C2	−	ほぼ完形	37.8%	17−04
12	焼埋	鉢	30.0	13.0	12.9	III A3	＋？	1/2	43.3%	17−06

第97図　ＳＲ－17窯跡出土遺物　（３）



No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
13	埋土	擂鉢	29.0	14.2	13.6	III A4	−	2/3	49.6%	17−05
14	燃焼	擂鉢	25.6	13.6	10.8	II A1	−	1/4	片口欠損　底部に方形の凹み　筋目あり　53.1%	17−08
15	埋土	擂鉢	30.6	12.4	13.6	III B2	−	1/3	片口欠損　底部に方形の凹み　40.5%	17−03
16	焼床	擂鉢	29.0	13.0	12.7	III A1	−	1/4	片口欠損　筋目あり　44.4%	17−07
17	埋土	広口壺	22.0	13.6	39.0	I C	−	1/4	最大径39.6cm	17−17

第98図　ＳＲ−17竈跡出土遺物　（４）



第99図　ＳＲ－18窯跡

を保っていたものはない。これらの中で図示できたものは甕４点・広口壷５点・短頸壷１点・擂鉢７点である。遺物の中には歪みの著しいものや、２ 次焼成痕の認められるものがあり、後者は焼台として再利用されたものと考えられる。

ＳＲ－18 窯跡（第 99・100 図）

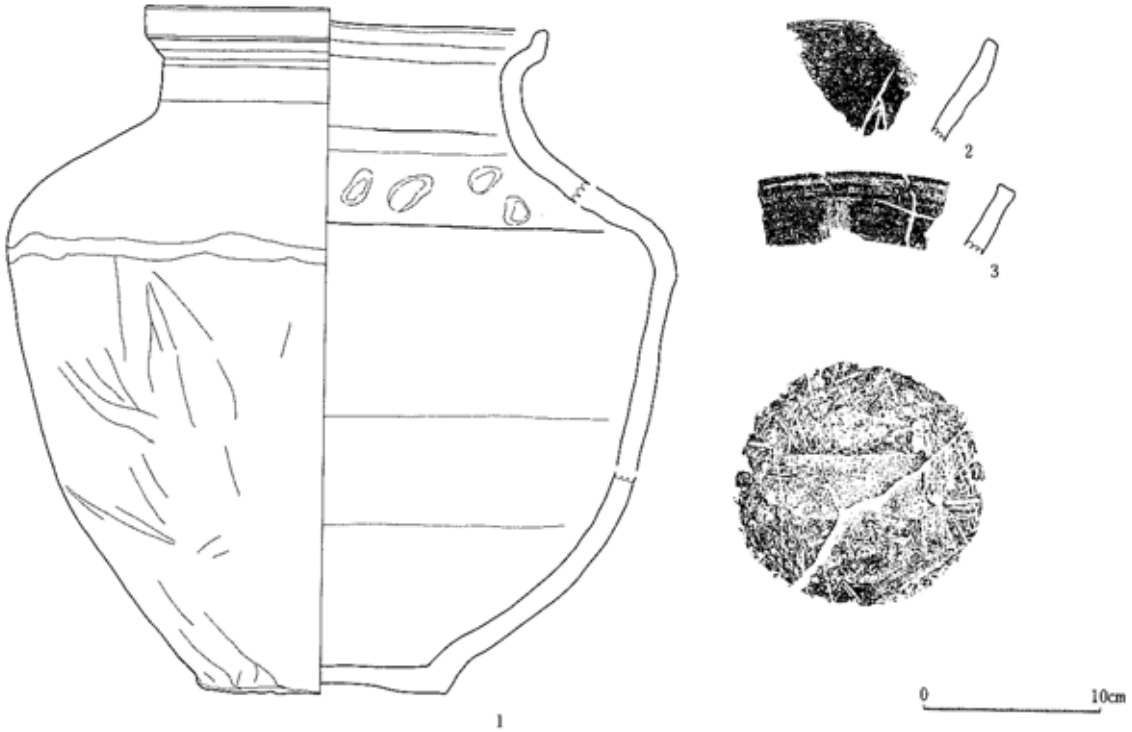
［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も低位(標高 100～104m)に位置する。ＳＲ-10 と重複しこれに切られている。したがって新旧関係はＳＲ-18→ＳＲ-10 となる。基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。前庭部から焼成部の下半にかけての保存状態は良好であるが、焼成部の上端から煙道部にかけてはＳＲ-10 によって失われている。天井部はすべて崩落していた。窯の主軸線の方向はＮ－47°－Ｅ、また斜面と窯体主軸の角度は 89° あり、窯体は斜面に対してほぼ直角に作られている。窯体の平面形は紡錘形で、残存する部分の規模は窯長が約 13.0m、窯幅は最大部分で 3.5mある。大きな作り替えは行なわれていないが、使用面は３面認められる。

［前庭部］前庭部は撥状を呈し、焚口部から先端部に向かって緩やかに広がる。規模は全長約3.4mで幅1.0〜1.2m、先端部の幅は約2.7mある。床面は貼り床で、地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約5㎝ほど埋め込み床面としている。底面の傾斜は約7°で焚口に向かって緩やかに下る。

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけては比較的直線的であるのに対して、焚口から分焔柱に向かっては撥状を呈し大きく広がる。この部分からは木炭が多量に検出されている。燃焼部は長さ約1.5mある。燃焼部の床面は、地山の掘り込み面をそのまま利用しており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい部分では約60㎝ある。

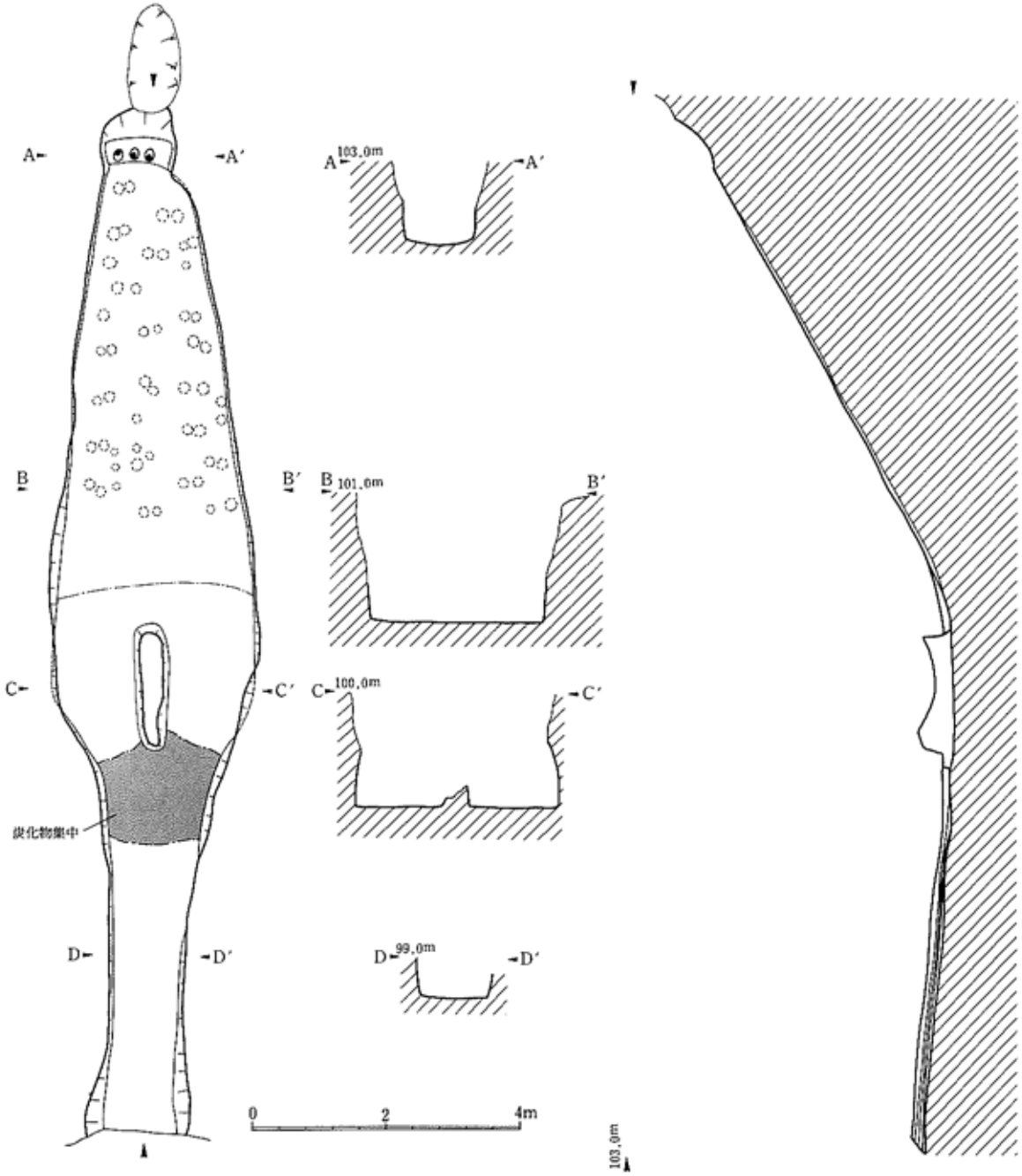
［分焔柱］分煙柱は地山から削り出して作られている。分焔柱の残存状況はあまり良くなく、約30㎝の高さまで残存しているにすぎない。通焔孔の大きさは基底部で右側100㎝、左側が76㎝ある。
分焔柱の平面形は細長い隅丸の長方形を呈し、規模は基底部で長さ2.6m、幅56〜68㎝ある。作り替えや補修は行なわれていない。

［焼成部］焼成部の平面形は分焔柱付近で大きく胴の張った細長い紡錘形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から広がり分焔柱の後端付近で最大幅となり、傾斜変換線の1.7mほど奥まった部分までは急激にすぼまり、さらに煙道に向かって緩やかに推移する。残存焼成部の規模は水平距離で約8.5mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は9.6mある。幅は分焔柱の後端付近で最大となり約3.5mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線付近まではほぼ平坦であるが、それよりも奥は約33°の急角度になっている。床面は、1次面の斜面の部分では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約10㎝ほど埋め戻しその上に粘土を貼り構築しているが、傾斜変換線の手前については掘り方面をそのまま使用してい



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
1	埋土	広口壺	22.5	13.8	39.5	1B	−	1/2	最大径37.8cm	18−01

第100図　ＳＲ−18窯跡出土遺物　（1）



第101図　ＳＲ－19窯跡

る。2 次面以降の床は、斜面の部分は 1 次面を継続して使用しているが、傾斜変換線の手前の部分はそれまでの使用面の上に粘土を貼って新たな床としている。

［焼成部の施設］3 次面の焼成部の斜面から焼台痕跡が検出されている。痕跡は合計 43 個確認されており、この中の 36 個については 2 個 1 対（合計 18 対個）で検出されている。焼台痕は 3 列認められ、列間は約 70 ㎝間隔、焼台の上下間隔は 60 ㎝間隔と規則的に配置されている。焼台痕は円形を呈し直径は 15～25㎝ である。

［出土遺物］窯の埋土や焼成部の床面から甕・広口壷・擂鉢などが出土しているが、図示できたものは広口壷１点のみである。

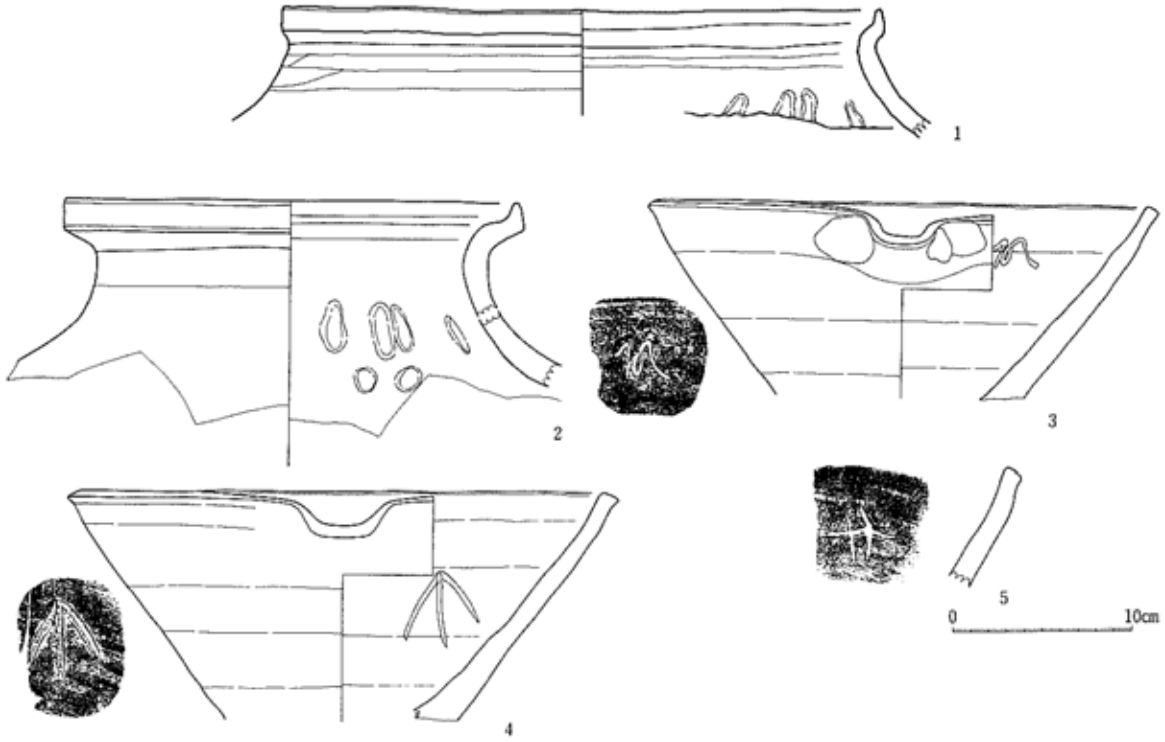
ＳＲ－19 窯跡（第 101・102 図）

［概要］屋根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も低位(標高 99～104m)に位置する。ＳＲ-15 と重複しこれに切られている。したがって新旧関係はＳＲ-19→ＳＲ-15 となる。

基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部・煙道部からなる。全体的に保存状態は良好であるが、天井部はすべて崩落していた。窯体の平面形は細長い紡錘形を呈する。窯体の主軸線の方向はＮ－44°－Ｅあり、また斜面と窯体主軸の角度は 87°で、窯体は斜面に対してほぼ垂直に作られている。窯の規模は全長が約 15.3m、窯幅は最大部分で 3.1mある。大きな作り替えは行なわれていないが、使用面は２面認められる。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部から先端部に向かってほぼ直線的に延びる。規模は全長約 4.3mで幅 1.0～1.4mある。床面は１次面では窯の掘り込み面をそのまま使用し、２次面では１次面を約 10cm ほど埋め込みその面を床としている。また、1 次面では床面上に炭と焼土の層と地山の小ブロックの層が互層をなして堆積している様子が認められ、炭の層は５枚確認された。

床面の傾斜は約 6°で焚口に向かってわずかに下る。



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
1	焼床	甕	50.4			A	－			19－01
2	焼床	広口壺	25.0			A	＋			19－02
3	焼床	擂鉢	28.5			Ⅲ1	－	1/2	内面に花押状のヘラ書き	タ19-2
4	焼床	擂鉢	30.4			Ⅲ1			内面にヘラ書き　片口欠損	タ19-1

第102図　ＳＲ－19窯跡出土遺物　（１）

［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけてはほぼ直線であるのに対して、焚口から分焔柱に向かっては撥状に広がる。この部分からは木炭が多量に検出されている。燃焼部は全長約1.5mある。

床面は、地山の掘り込み面をそのまま利用しており、ほぼ平坦である。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい部分では約1.1mある。

［分焔柱］分焔柱は地山から削り出して作られている。分焔柱の残存状況はあまり良くなく、約40㎝の高さまで残存しているにすぎない。通焔孔の大きさは基底部で、右側が80㎝、左側が64㎝ある。

分焔柱の平面形は細長い楕円形を呈し、規模は基底部で長さ2.0m、幅48㎝ある。大きな作り替えは行なわれていないが、2次面に伴う分焔柱は長さを20㎝ほど縮めて作っている。

［焼成部］焼成部の平面形は細長い紡錘形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から急激に広がり、分焔柱の中央部付近で最大値となり、煙道に向かって緩やかにすぼまる。焼成部の規模は窯長が水平距離で約8.8mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は9.5mある。窯幅は分焔柱の中央部付近の最大となり約3.1mある。

床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線付近まではほぼ平坦であるが、それよりも奥は約29°の急角度になっている。床面は、1次面斜面の部分では地山の掘り込み面を窯を掘り抜いた土で約5㎝ほど埋め戻しその上に粘土を貼り構築しているが、傾斜変換線の手前については掘り方面をそのまま使用している。2次面では、斜面の部分は1次面をそのまま継続して使用しているが、傾斜変換線の手前部分はそれまでの使用面の上に貼って新たな床としている。側壁は床面から内湾気味に立ち上がり最も保存のよい部分で約80㎝ある。

［焼成部の施設］2次面の焼成部の斜面で、原位置を保ったまま貼りついている馬爪形の焼台6個と焼台の剥がれた痕跡52個（その中で2個1対のもの合計16対）が検出されている。また対で検出されたものの中には、焼台の10㎝ほど上方に直径10㎝ほどの青灰色に変色した部分も検出されており、製品が置かれていた痕跡と考えられる。焼台痕は3列認められ、列間は約80㎝間隔、焼台の上下の間隔は60～80㎝である。焼台痕は円形を呈し直径は10～20㎝である。

［煙道部］焼成部から煙道部へは床面傾斜角の変換と窯壁のくびれによって移行する。煙道部の平面形は馬蹄形を呈し、平坦部の規模は幅1.0m、奥行35㎝あり、奥壁が約45°の急角度で立ち上がっている。また、傾斜変換線付近でこれと平行して並んだ直径10㎝ほどのピットが3個検出された。このピットの中からは炭化材が検出されており、この位置にダンパー棒が設置されていたものと考えられる。

［出土遺物］窯の埋土や焼成部の床面から甕・広口壷・擂鉢などが出土しているが、図示できたものは甕・広口壷が各1点と擂鉢が2点あるにすぎない。原位置を保っているものはない。これらの中で19-02は二次焼成の痕跡が認められることから、焼台として使用されたものと考えられる。

ＳＲ－20窯跡（第103～113図）

［概要］尾根の南斜面にあり、本窯跡群の中では最も低位（標高101～106m）に位置する。ＳＲ-16と重複しこれに切られている。したがって新旧関係はＳＲ-20→ＳＲ-16となる。基盤の凝灰岩を掘り抜いて構築している地下式窖窯で、前庭部・焚口・燃焼部・焼成部からなる。前庭部から焼成部の下半にかけての保存状態は非常に良好である。焼成部の分焔柱の後端付近から約2.5mの範囲で製品が原位置

を保った状態（窯詰めの状態）で検出されている。これらの遺物はすべて赤褐色を呈し完全に焼き上がった状態ではないことから、この窯は操業中にこの部分の天井部が崩落したものと考えられる。

また、この部分以外の焼成部からは遺物は検出されておらず、天井部が崩落しなかった部分については製品が運び出されたものと考えられる。窯体の主軸線の方向はN－36°－E、また斜面と窯体主軸の角度は 87° あり、窯体は斜面に対してほぼ直角に作られている。窯体の平面形は紡錘形を呈し、規模は窯長が約 12.9m、窯幅は最大部分で 3.3mある。大きな作り替えは行なわれていないが、使用面が 3 面、分焔柱の補修が 3 回認められる。

［前庭部］前庭部は通路状を呈し、焚口部から先端部に向かってほぼ直線的に延びる。規模は全長約 5.2mで幅 1.0～1.4mある。床面は 1 次面では窯の掘り込み面をそのまま使用し、2 次面では 1 次面を約 5cm ほど埋め込みその面を床としている。床面の傾斜は約 8° で焚口に向かって緩やかに下る。

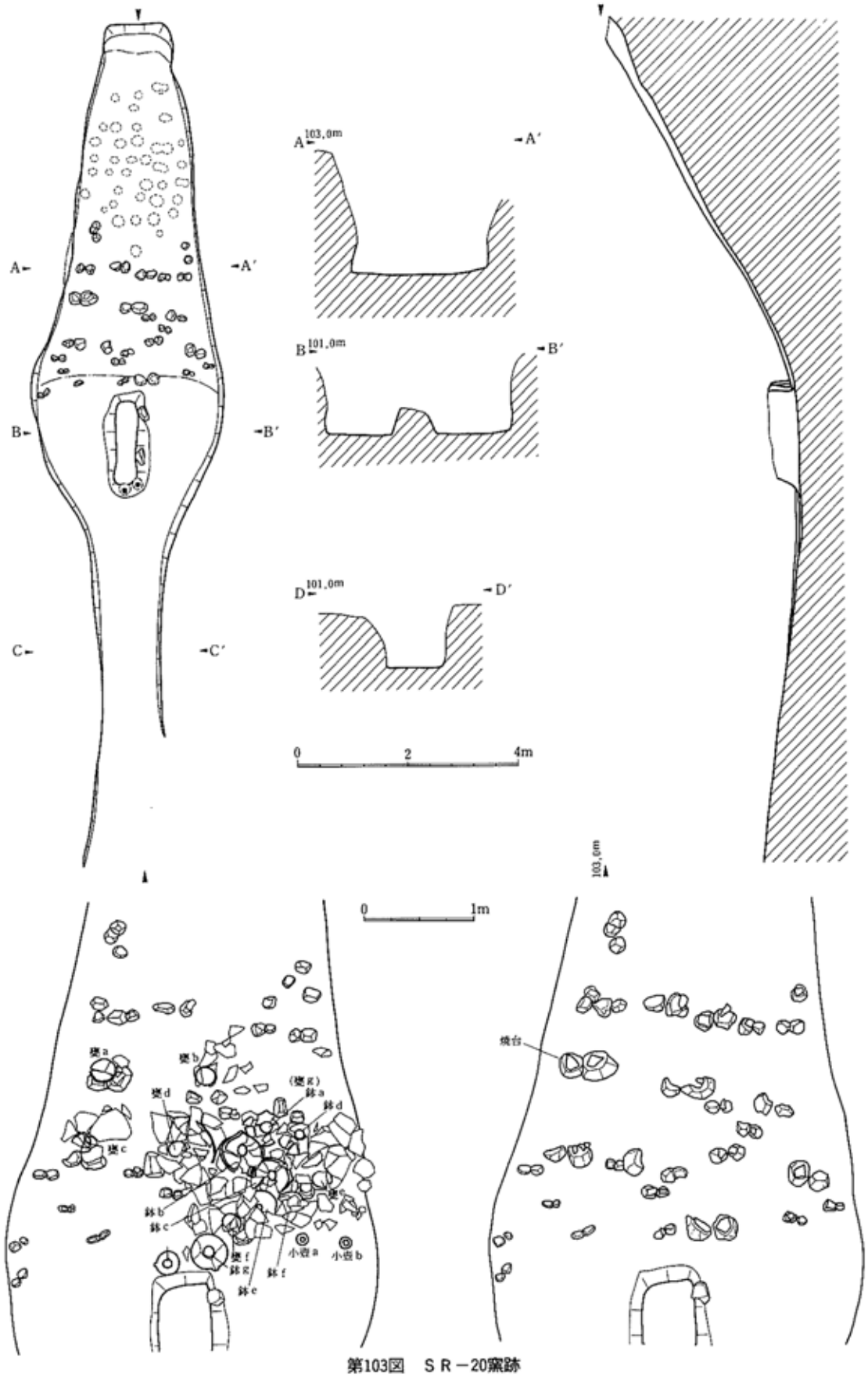
［焚口・燃焼部］前庭部から焚口にかけては比較的直線的であるのに対して、焚口から分焔柱に向かっては撥状を呈し大きく広がる。この部分からは木炭が多量に検出されている。燃焼部は長さ約 1.6m ある。床面は貼り床で、地山の掘り込み面を 5cm ほど埋めて使用している。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存のよい部分では約 80 cmある。

［分焔柱］分焔柱は基本的には地山から削り出して作られているが、2 次面に伴うものは大きく補修が行なわれている。分焔柱の平面形はいずれの面のものも細長い楕円形を呈し、規模は 1 次面のものが基底部で長さ 117m、幅 40 cm、2 次面のものは長さ 1.9m、幅 80cm ある。通焔孔の大きさは基底部で右側が 90 cm、左側が 65cm ある。分焔柱の前端に 1 回、後端に 2 回の補修が加えられている。前端部の補修は崩れた部分に杭を打ち込みそれを芯にして粘土を貼り付けている。また、後端部の補修は崩れた部分に粘土を貼りつけたのみの補修である。

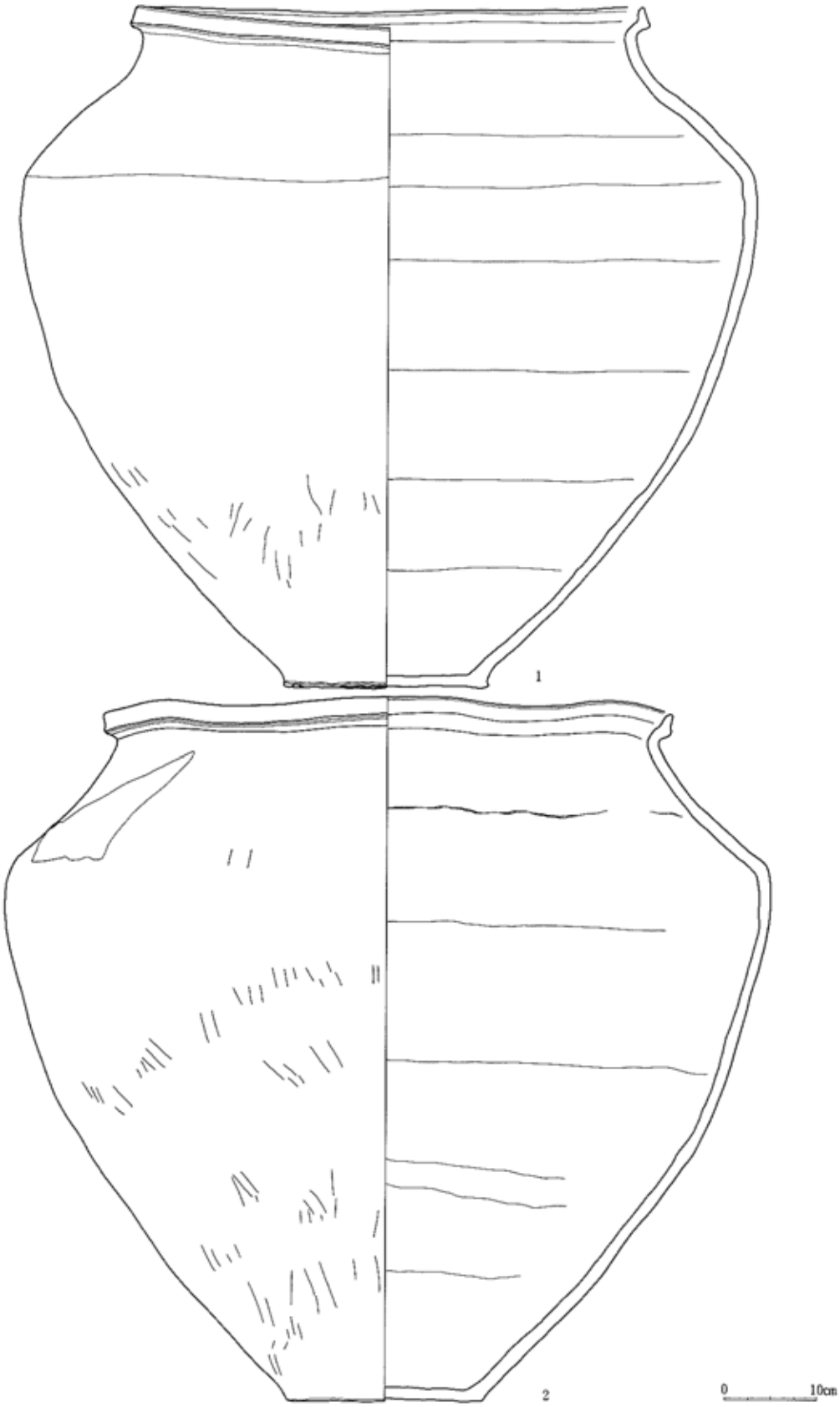
［焼成部］焼成部の平面形は分焔柱付近で大きく胴の張った細長い紡錘形を呈する。窯壁は通焔孔の付近から広がり傾斜変換線付近で最大幅となり、傾斜変換線の 2mほど奥まった部分までは急激にすぼまり、さらに煙道に向かって緩やかに推移する。焼成部の規模は水平距離で約 8.0mあるが、実質的な床面の長さ（斜距離）は約 8.8mある。幅は傾斜変換線付近で最大となり約 3.3mある。床面の傾斜は分焔柱から傾斜変換線付近まではほぼ平坦であるが、それよりも奥は約 30° の急角度になっている。床面は、1 次面では地山の掘り込み面をそのまま、2 次面では 1 次面を約 10 cmほど埋め戻しその上に粘土を貼り使用している。また、この 2 次面に伴う分焔柱には補修が 2 回認められることから、2 次面では最低 3 回の焼成が行なわれたものと考えられる。

［焼成部の施設］焼成部からは床面に貼りついた状態の焼台が 40 箇所（のべ 74 個）と、焼台が床面から剥がれた痕跡 45 個が検出された。検出された焼台はすべて馬爪形を呈するもので、斜面と接着する部分は円形を呈し、上面には製品と直接接触しないようにあいだに陶器片が挟み込まれている。

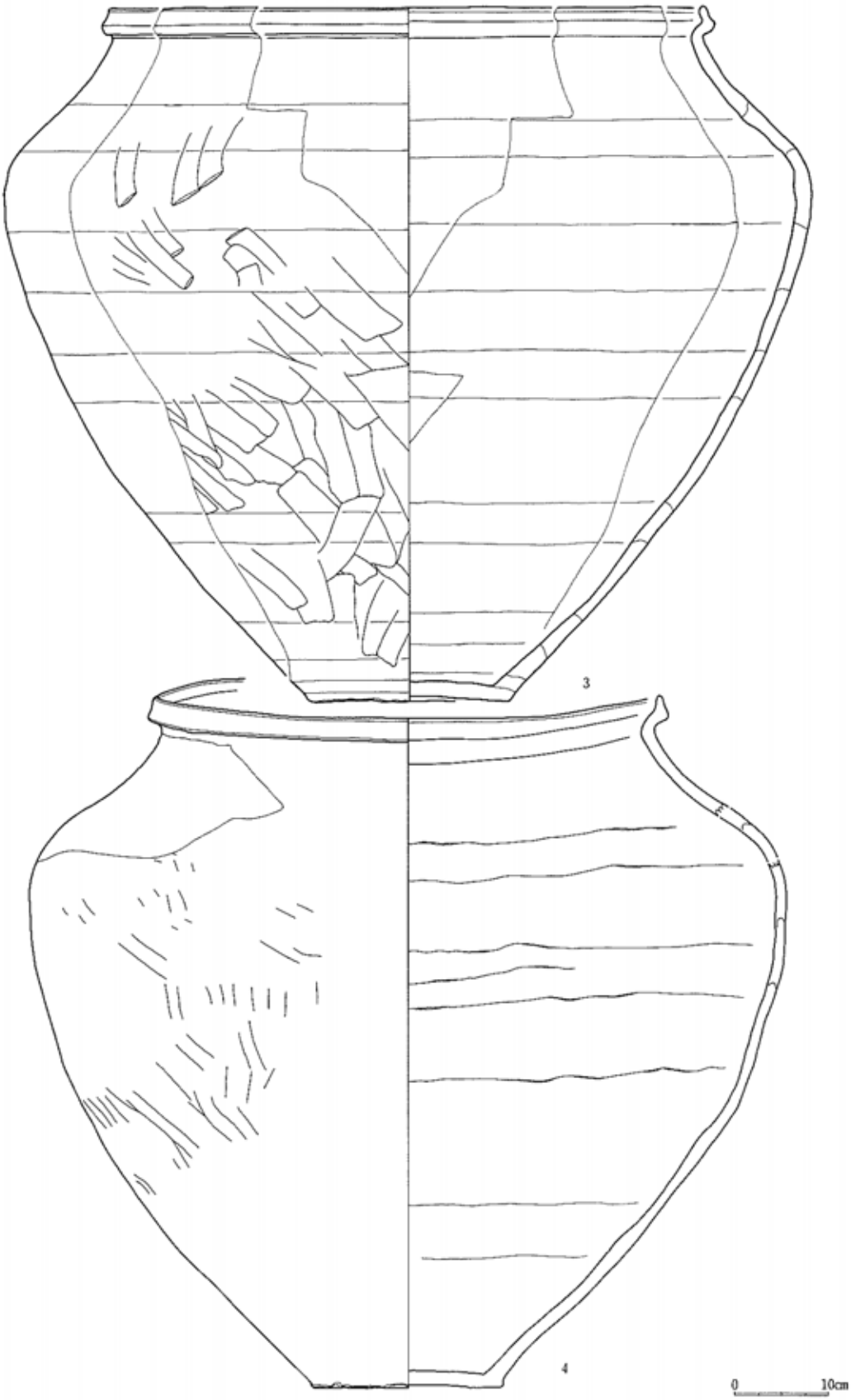
［出土遺物］図示した遺物には大甕 8 個、鉢 32 個、小壷 3 個があり、焼成部の前半部から集中して出土している。出土した遺物は斜面部のものは底部が焼台の上にきちんと乗ったままで、また傾斜変換線の手前の平坦部のものは床面に直接底部を着けた状態で出土していることから、窯詰めされた状態を保っているものと考えられる。詳しい出土状況については考察の中で述べていくこととする。



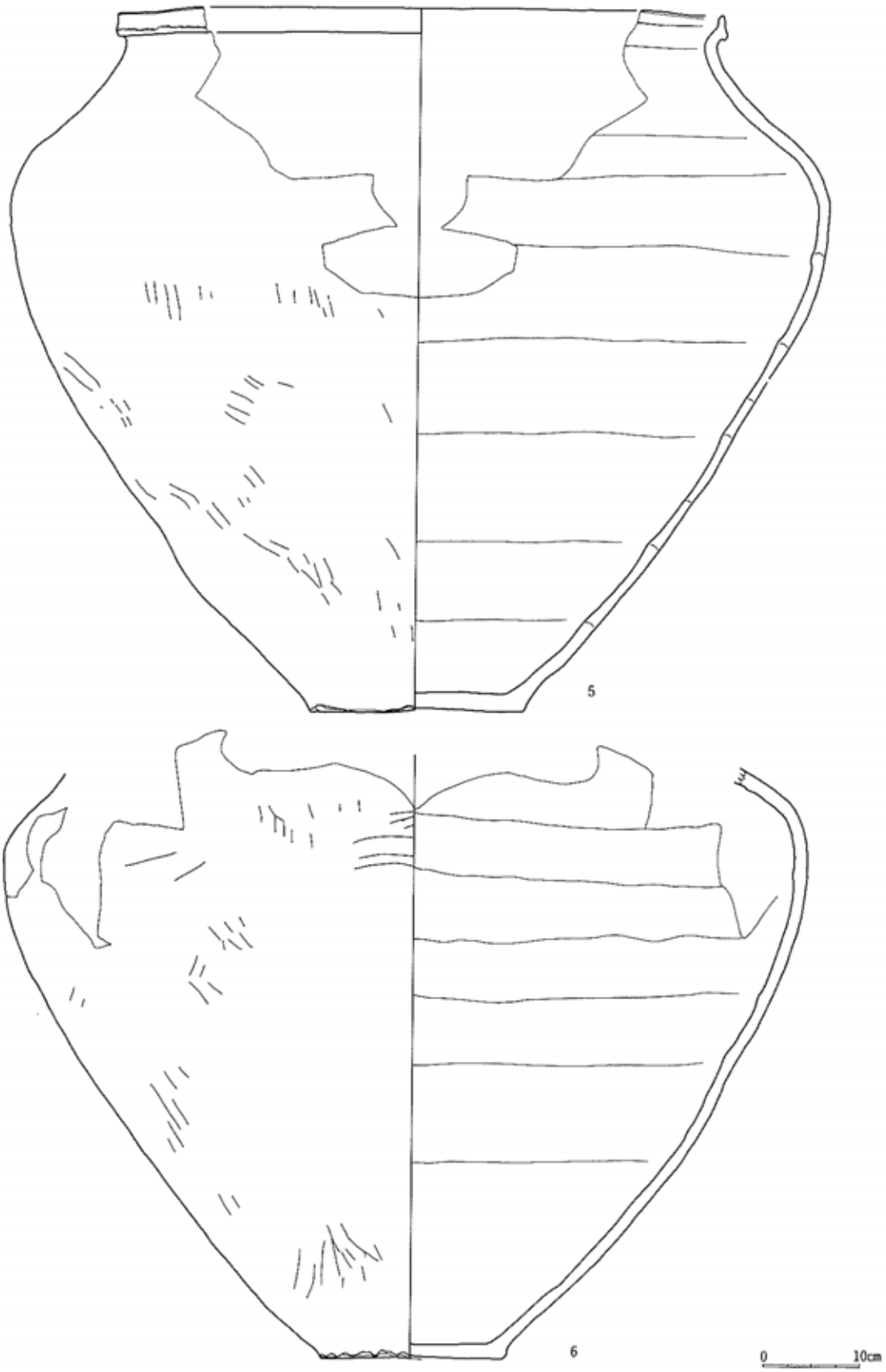
第103図　ＳＲ－20窯跡



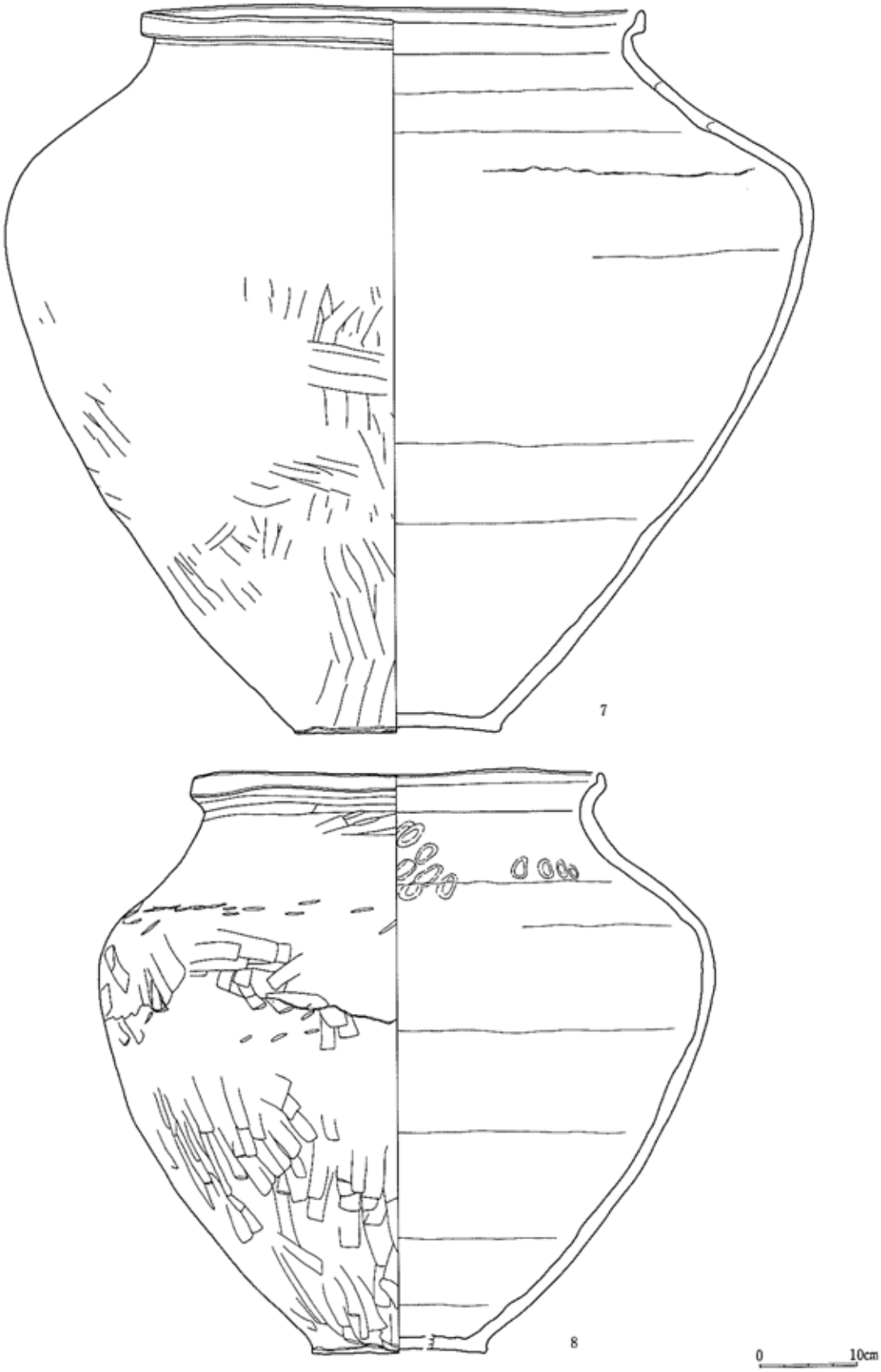
第104図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（１）



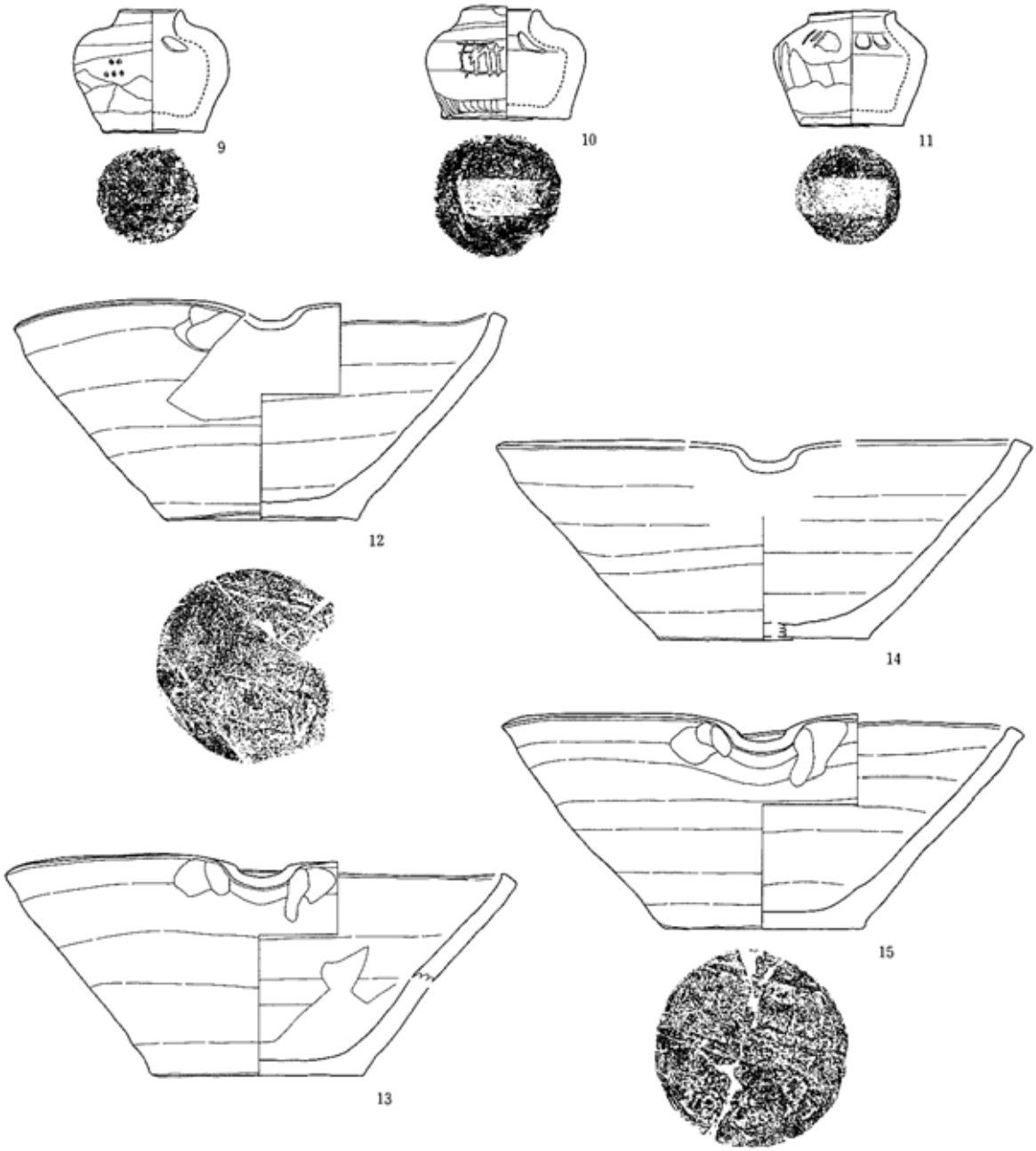
第105図　ＳＲ－20窯跡出土遺物（２）



第106図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（３）

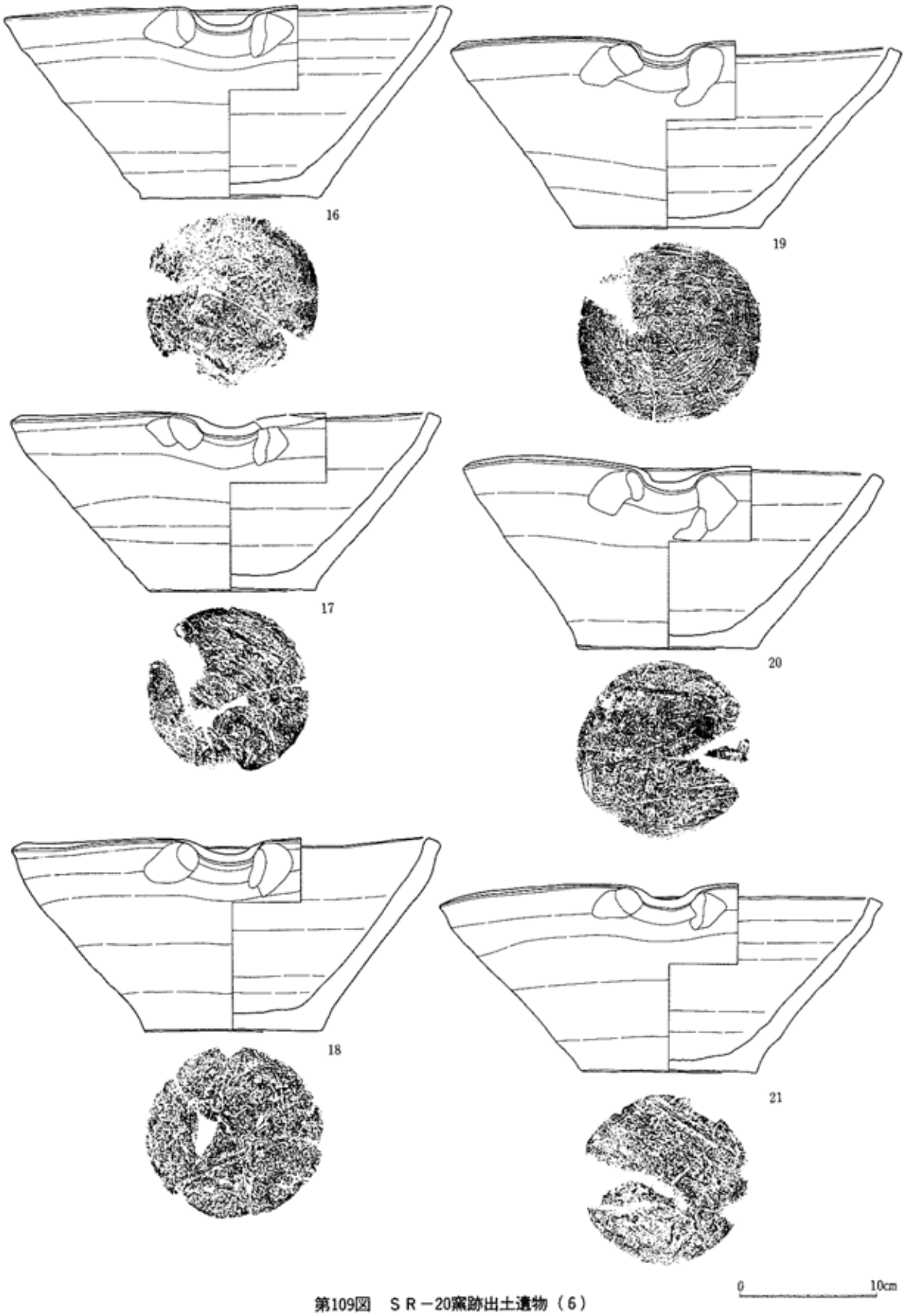


第107図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（４）

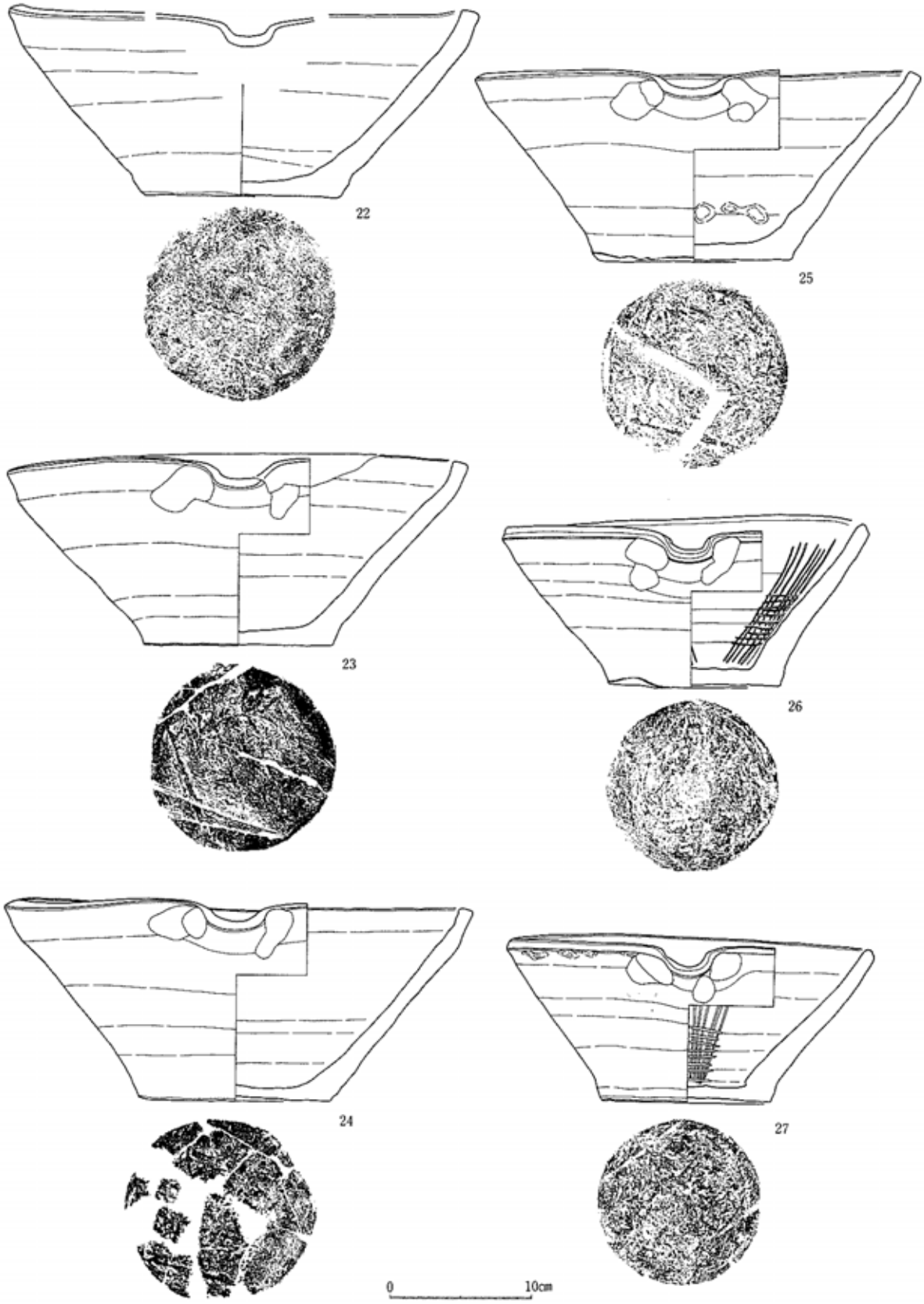


No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
1	焼床	甕	55.0	22.4	74.8	ⅠA	－	1/3	最大径60.4cm	20－01
2	焼床	甕	61.8	21.0	77.0	ⅠA	－	1/2	最大径83.4cm	20－05
3	焼床	甕	63.0	21.4	74.9	ⅠA	－	1/3	最大径85.5cm 甕a	20－43
4	焼床	甕	54.0	19.8	76.5	ⅠA	－	3/5	最大径81.4cm	20－04
5	焼床	甕	63.2	22.3	73.9	ⅠA	－	2/5	最大径85.7cm	20－06
6	焼床	甕		19.4			－	1/2	最大径84.3cm	20－07
7	焼床	甕	51.3	22.4	74.8	ⅠA	－	1/2	最大径83.2cm	20－02
8	焼床	甕	41.6	17.7	60.4	ⅠB	＋？	1/2	最大径63.5cm	20－03
9	焼床	小壺	3.8	7.4	7.9	B	－	完形	最大径9.9cm 壺a 外面に竹管の刺突	20－40
10	焼床	小壺	5.0	8.3	7.2	B	－	完形	最大径10.2cm 壺b 外面にヘラ書き	20－41
11	焼床	小壺	5.4	6.6	7.4	B	－	完形	最大径9.8cm 外面に「田」のヘラ書き	20－42
12	焼床	擂鉢	31.4	12.4	14.2	ⅢB2	－	4/5	鉢b1 39.5%	20－29
13	焼床	擂鉢	32.5	13.2	14.2	ⅢB2	－	4/5	鉢b2 40.6%	20－33
14	焼床	擂鉢	34.0	13.4	12.8	ⅢB1	－	1/2	鉢b2 39.4%	20－36
15	焼床	擂鉢	33.2	12.6	13.7	ⅢA1	－	完形	鉢b3 41.2%	20－39

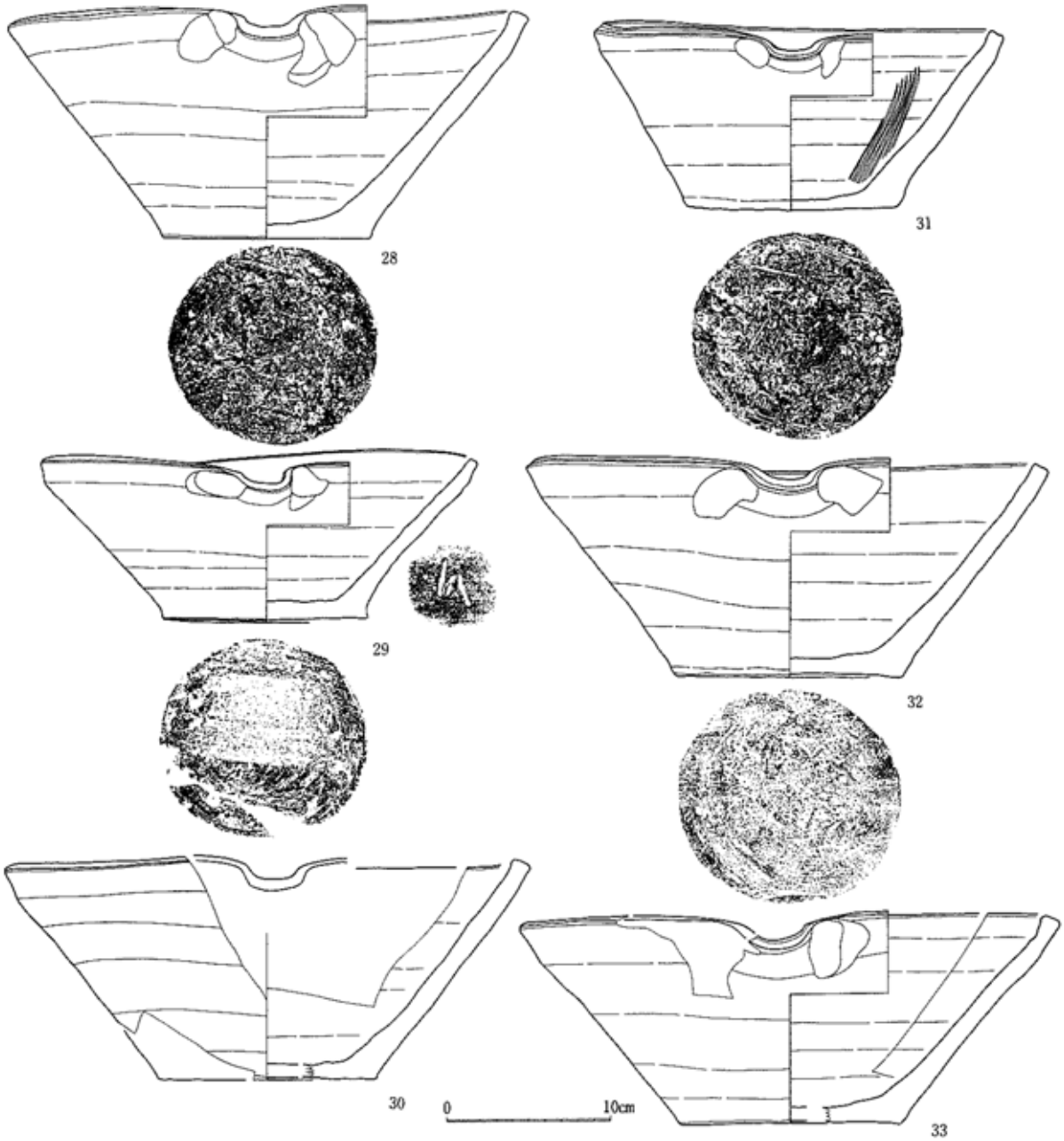
第108図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（５）



第109図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（６）

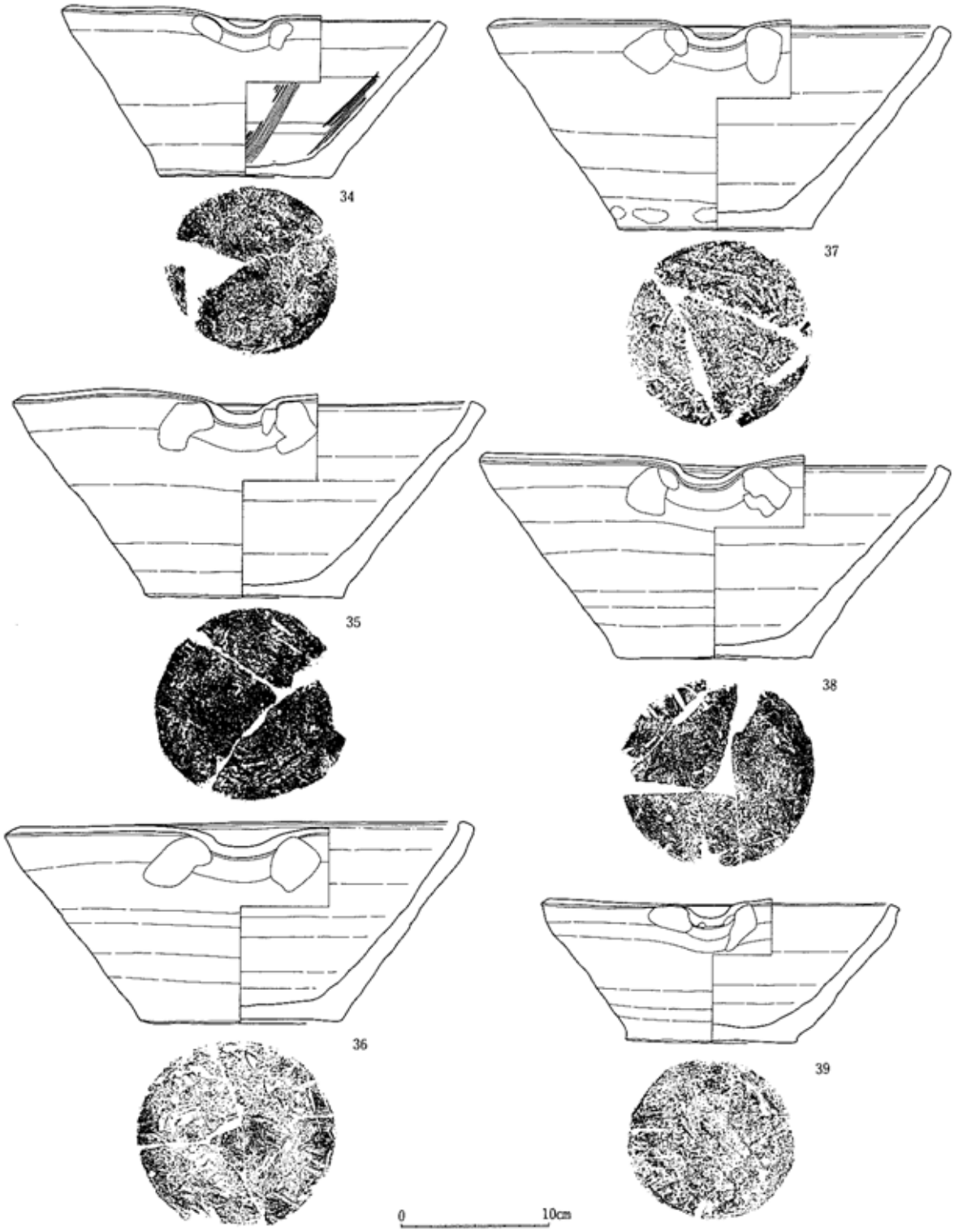


第110図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（７）



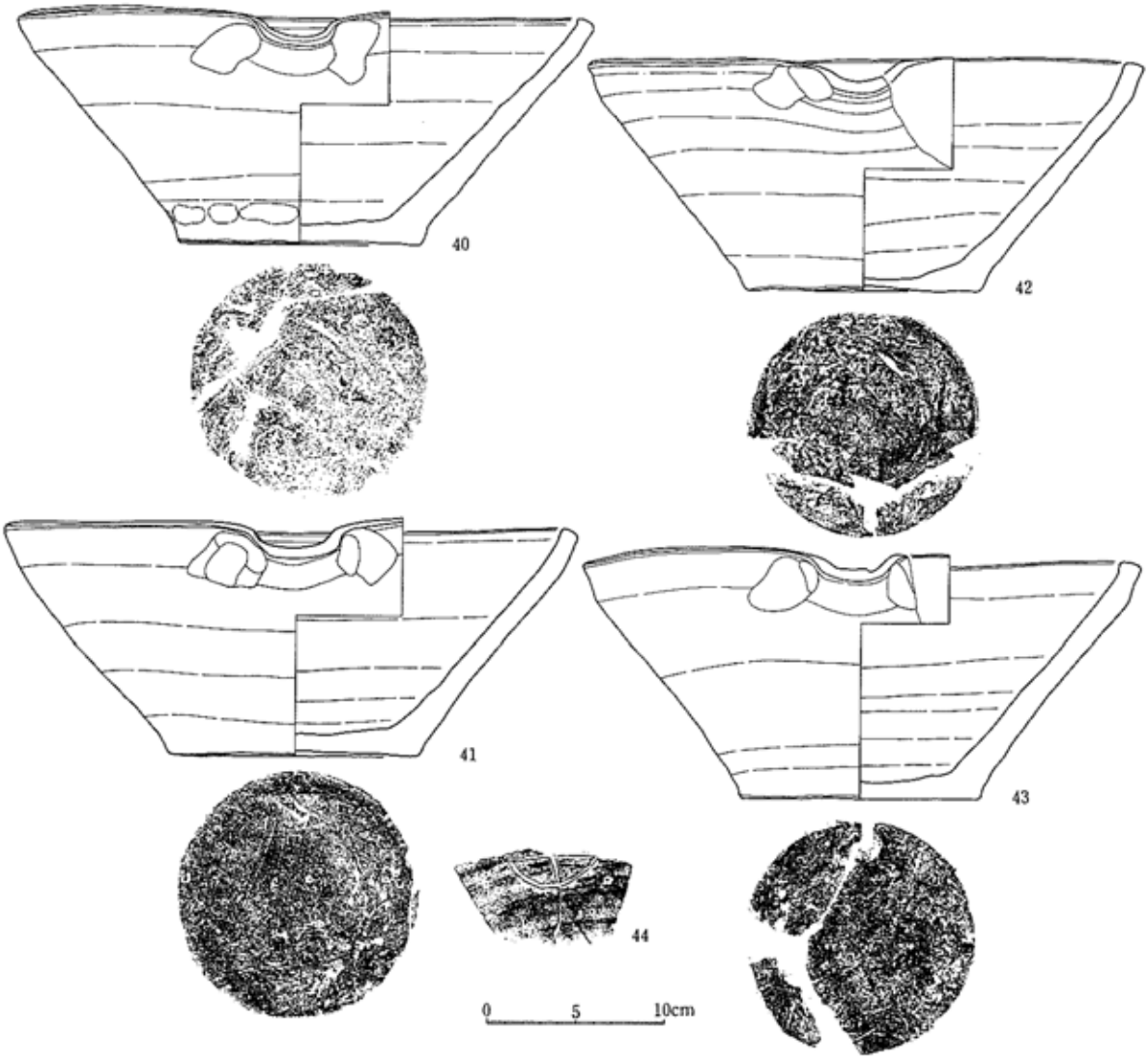
No.	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
16	焼床	擂鉢	32.8	13.1	14.2	Ⅲ B1	−	完形	鉢 b4　40.0%	20−17
17	焼床	擂鉢	31.6	12.1	13.2	Ⅲ B2	−	完形	鉢 b6　38.3%	20−10
18	焼床	擂鉢	31.4	12.9	14.2	Ⅲ C2	−	完形	鉢 c2　41.1%	20−34
19	焼床	擂鉢	32.9	13.4	14.2	Ⅲ C2	−	完形	鉢 b5　40.7%	20−12
20	焼床	擂鉢	30.7	13.0	14.3	Ⅲ B1	−	完形	鉢 c1　42.3%	20−27
21	焼床	擂鉢	32.5	12.7	13.9	Ⅲ A1	−	完形	鉢 c3　39.1%	20−13
22	焼床	擂鉢	33.4	13.6	13.5	Ⅲ B2	−	2/3	鉢 c4　40.7%	20−37
23	焼床	擂鉢	32.6	13.4	13.6	Ⅲ B4	−	ほぼ完形	鉢 d1　41.1%	20−26
24	焼床	擂鉢	33.3	13.5	14.4	Ⅲ B2	−	4/5	鉢 f　40.5%	20−19
25	焼床	擂鉢	31.5	13.6	13.7	Ⅲ A1	−	完形	鉢 c5　43.2%	20−22
26	焼床	擂鉢	26.1	12.2	12.4	Ⅲ A1	−	完形	鉢 e　46.7%	20−09
27	焼床	擂鉢	26.0	11.9	11.9	Ⅲ A1	−	完形	鉢 f　45.8%　重ね焼痕残る	20−28
28	焼床	擂鉢	31.6	12.6	14.3	Ⅲ B1	−	完形	鉢 g1　39.9%	20−38
29	焼床	擂鉢	26.7	12.6	10.6	Ⅲ A4	−	完形	内面に草書体のヘラ書き　47.2%	20−14
30	焼床	擂鉢	32.1	13.2	14.7	Ⅲ B1	−	1/2	41.1%	20−32
31	焼床	擂鉢	24.9	12.8	11.8	Ⅱ A1	−	完形	鉢 h　内面に「大」のヘラ書き　51.4%	20−08
32	焼床	擂鉢	31.0	13.8	13.6	Ⅲ A1	−	完形	鉢 g2　44.5%	20−11
33	焼床	擂鉢	33.0	13.4	12.9	Ⅲ B1	−	1/2	40.6%	20−35

第111図　ＳＲ−20窯跡出土遺物（８）



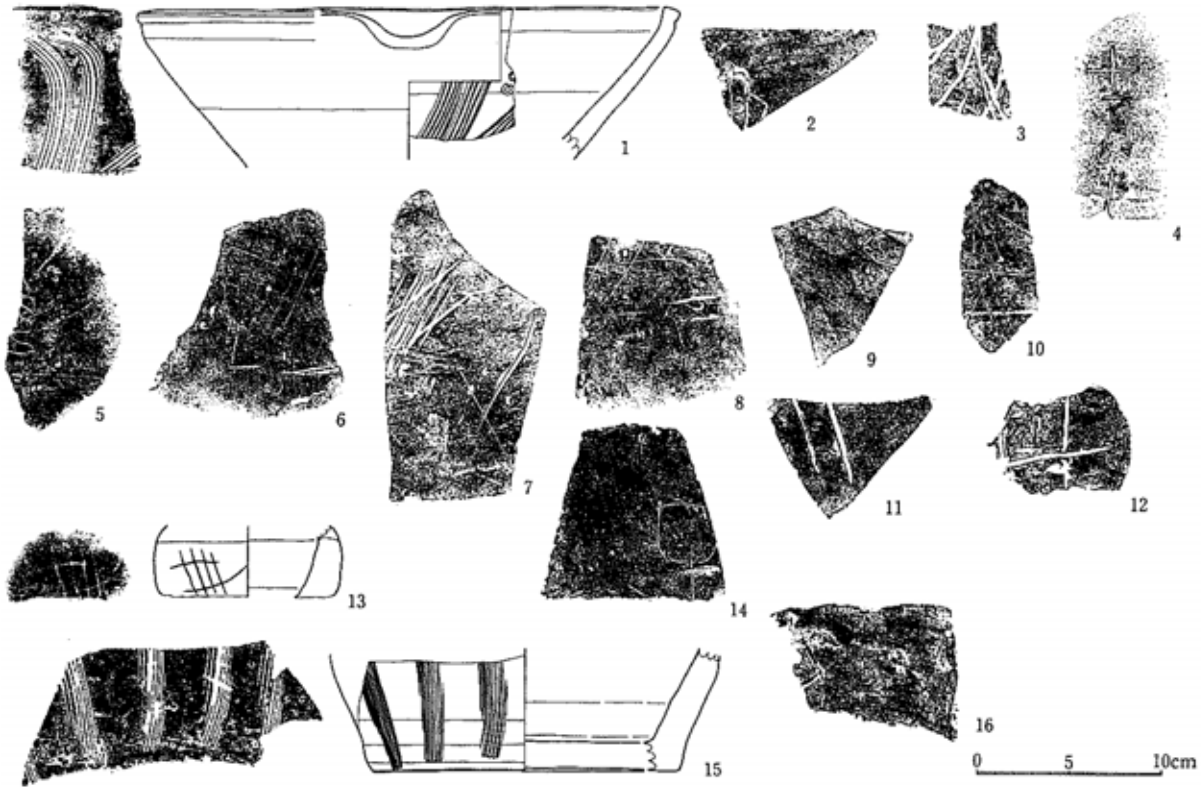
No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	2焼	残率	特徴	登録
34	焼床	擂鉢	26.1	11.5	11.5	II A1	−	4/5	「大」のヘラ書き 44.1%	20−15
35	焼床	擂鉢	32.0	13.1	14.2	III B2	−	完形	40.9%	20−16
36	焼床	擂鉢	31.8	13.5	13.8	III A1	−	完形	42.5%	20−18
37	焼床	擂鉢	31.4	13.1	14.4	III A1	−	4/5	41.7%	20−20
38	焼床	擂鉢	32.0	13.1	14.0	III B1	−	完形	40.9%	20−24
39	焼床	擂鉢	24.3	11.4	9/8	III A2	−	4/5	46.9%	20−21

第112図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（９）



No	層位	器種	口径	底径	器高	分類	再焼	残率	特徴	登録
40	焼床	擂鉢	32.7	13.7	13.5	IIIA1	—	完形	41.9%	20-23
41	焼床	擂鉢	32.5	14.1	13.7	IIIA1	—	完形	43.4%	20-25
42	焼床	擂鉢	31.4	13.0	13.2	IIIA2	—	3/4	41.4%	20-30
43	焼床	擂鉢	31.6	13.4	14.3	IIIA2	—	3/4	42.4%	20-31

第113図　ＳＲ－20竈跡出土遺物（10）



第114図　表土出土遺物

III. 考察

1. 遺構について

(1) 窯跡の変遷

窯跡は、東から西に延びる尾根の、標高約98mから115m、東西約60m、南北約45mの範囲に分布しており、尾根を挟んで南斜面に18基、北斜面に2基の合計20基が構築されている。これらの窯跡の中には、前庭部のみが掘られたまま未完成であるＳＲ−13 窯跡や、製品を焼成することなく廃棄されたＳＲ−16 窯跡の2基も含まれており、実際に操業した窯跡は18基である。いずれの窯跡も等高線に対してほぼ垂直に構築されており、標高の低い部分から掘り込まれている。これらの中には重複するものが多く見られ、すべて上位にあるものが下位のものより新しい。ＳＲ−20・16・07・04 窯跡ではそれぞれ連続して重複が見られ、新しい時期の窯跡はそれ以前の窯跡の焼成部から新たに掘り込んで構築されている。

これらの窯跡は、尾根上に無秩序に存在するのではなく、ほぼ同じ標高に数基ずつ横並びに分布しており、分焔柱の標高によって、分焔柱が標高102〜103mにある最も低位のもの（Ⅰ群、ＳＲ−17・18・19・20 窯跡）、106m付近にある比較的低位のもの（Ⅱ群、ＳＲ−10・14・15・16 窯跡）、109m付近にある比較的高位のもの（Ⅲ群、ＳＲ−05・06・07・08・09 窯跡）、110〜111mにある最も高位のもの（Ⅳ群、ＳＲ−01・02・03・04・11・12 窯跡）の4群に分けられる。これらの群間の重複をみると、Ⅰ群とⅡ群間ではＳＲ−19 窯跡（古）→ＳＲ−15 窯跡（新）（以下同じ）、ＳＲ−18 窯跡→ＳＲ−10 窯跡、ＳＲ−20 窯跡→ＳＲ−16 窯跡が、Ⅱ群とⅢ群間ではＳＲ−10 窯跡→ＳＲ−05 窯跡、ＳＲ−16 窯跡→ＳＲ−07 窯跡、ＳＲ−14 窯跡→ＳＲ−08 窯跡が、Ⅲ群とⅣ群間ではＳＲ−07 窯跡→ＳＲ−04 窯跡・ＳＲ−09 窯跡→ＳＲ−03 窯跡がそれぞれ切りあっている。このことから各群間には時間差が認められ、Ⅰ群→Ⅱ群→Ⅲ群→Ⅳ群と推移していったものと考えられ、数基ずつが一つの単位となって尾根の下位から上位に移行しながら操業されていったと考えられる。

なお、ＳＲ−13 窯跡についてはⅠ群のＳＲ−18 窯跡やＳＲ−20 窯跡などとほぼ同じ標高から掘り込まれていることから、これらと同じ群に属するものと考えられる。

このように窯跡の大きな推移としてはこのような群間の変遷として理解することができるが、一方で個々の群内でも重複関係が認められるものもあり、さらに細かな変遷をつかむことができる。

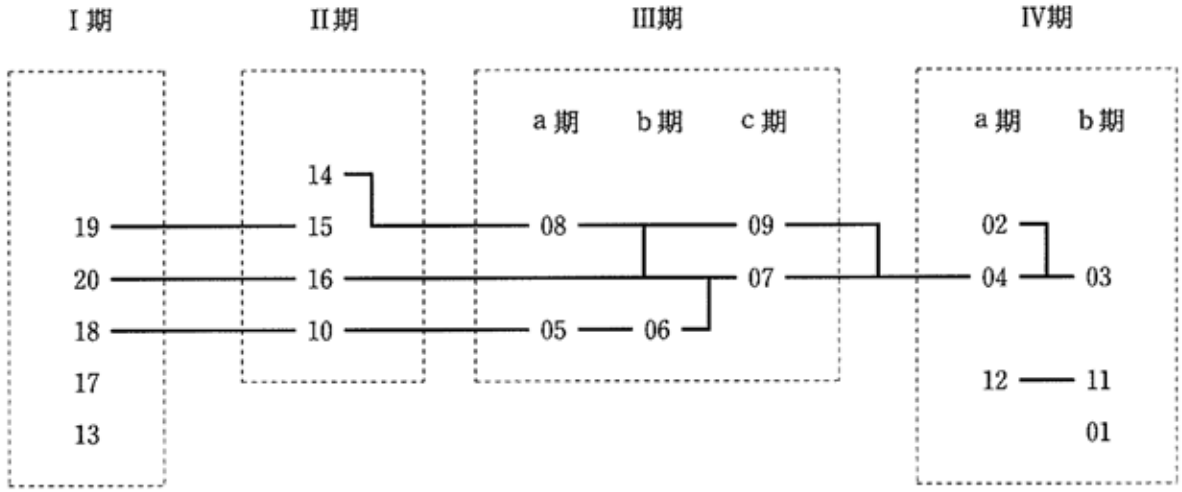
まずⅢ群では、直接の窯体同士の重複ではＳＲ−05 窯跡→ＳＲ−06 窯跡が認められ、灰原での堆積状況からはＳＲ−05 窯跡→ＳＲ−06 窯跡→ＳＲ−07 窯跡、ＳＲ−08 窯跡→ＳＲ−07 窯跡、ＳＲ−08 窯跡→ＳＲ−09 窯跡の新旧関係が認められる。したがって、少なくとも、a：ＳＲ−05 窯跡→b：ＳＲ−06 窯跡→c：ＳＲ−07 窯跡という3期の変遷が考えられる。ＳＲ−08 窯跡はa、b期のいずれかに、ＳＲ−09 窯跡はa〜c期のいずれかに属すると思われるが決定できない。

次に、Ⅳ群では、直接の窯体同士の重複からＳＲ−02・04 窯跡→ＳＲ−03 窯跡、ＳＲ−12 窯跡→ＳＲ−11 窯跡という関係が認められており、少なくともa：ＳＲ−02・04・12 窯跡→b：ＳＲ−03・11 窯跡という

2 期の変遷が考えられる。また、他の窯跡と重複が認められないＳＲ-01 窯跡については以下の様に考えてみる。Ⅳ群の中で窯跡の位置関係をみると、a 期のＳＲ-02・04・12 窯跡が側壁間に 5mほどの距離を保って等間隔に並ぶのに対して、ＳＲ-01 窯跡はｂ期のＳＲ-03 窯跡とは適度の間隔を保ってはいるが、古い時期のＳＲ-02 窯跡とは近接している。したがって、ＳＲ-01 窯跡はｂ期に属する可能性が考えられる。

なお、重複状況のないＩ群内でも、ＳＲ-18・19 窯跡はやや近接しており、同時に操業していなかった可能性が考えられる。

これらの窯跡の重複関係や変遷をまとめたのが下の表である。



(2) 窯跡の構遺と特徴

使用された窯跡にはすべてに分焔柱が残っていた。また、ＳＲ-05・06・15 窯跡には基盤の凝灰岩の天井部が残存しており、その他の窯跡についても、崩落した天井部はすべて凝灰岩のブロックでありスサ入り粘土などの窯壁は全く検出されなかった。したがって、窯跡の基本構造は、基盤となる凝灰岩を直接掘りぬいた分焔柱を有する地下式の窖窯だったと考えられる。

20 基の窯跡の中で全体の規模が判明するものは 10 基である。全長は最も短いＳＲ-20 窯跡で約 12.9 m、最も長大なＳＲ-05 窯跡で 22.4m以上あるが、多くのものは 15～17mの範囲に収まる。全体の長さの差異については燃焼部から焼成部にかけての長さが窯跡ごとに大きく変わらないことから、前庭部の長さのバラツキに起因するものと考えられる。

以下、それぞれの部位ごとに特徴をまとめる。

【前庭部】

平面形は通路状を呈しほぼ直線的なものと、前方に向かって撥状に広がるものとがある。長さは、ＳＲ-05窯跡が11.6m、ＳＲ-10窯跡が9.8mと非常に長大であるが、これはそれ以前の重複する窯跡の焼成部の窪みをそのまま前庭部として利用しているためで、他の窯跡については概ね 5m程度である。

前庭部の傾斜は5～20°であり、焚口に向かって下がる。時期ごとの傾斜の平均は、Ⅰ群:約8°、Ⅱ群:約7°、Ⅲ群:約8°と、Ⅰ～Ⅱ群ではほとんど同じであるが、Ⅳ群では約17°と急角度になっている。床面は最も古い1次面では、地山をそのまま床面としている窯跡(ＳＲ-01・04・05・06・07・09・10・11・12・15・19・20窯跡)と、地山を10cm程度埋め戻して床面としている窯跡(ＳＲ-02・03・08・14・17・18窯跡)とがある。

［前庭部の施設］

11基の窯跡から溝跡が検出されている。これらの溝跡は、すべて前庭部の床面下（地山の掘り込み面）から検出されており、窯構築時に作られたものである。燃焼部の焚口付近から掘り込まれ、前庭部の先端よりさらに前方まで延びていることや、底面がほぼ水平か先端に向かって緩やかに下がっていくことなどから、排水溝であったと考えられる。また、ＳＲ-07窯跡では扁平な石で、ＳＲ-12窯跡では材を渡して溝跡を覆っており、それ以外の窯跡についても陶器片や焼台などで埋め戻していることから、暗渠であったと思われる。

【燃焼部】

前庭部の最もすぼまる付近が焚口となっており、この部分から分焔柱の先端部にかけてが燃焼部となっている。平面形はいずれも分焔柱に向かって広がる撥状を呈し、長さは1.3～2.2mある。壁は基本的には地山をそのまま使用しているが、崩落した部分については粘土を貼りつけて補修している窯跡もある。補修の方法は2通り認められ、ＳＲ-01・02・04・11窯跡では崩れた部分に石や焼台・陶片を積み上げてその上に粘土を貼るという方法が、ＳＲ-08・12・15窯跡では崩れた部分に木の杭を打ち込み、それを芯にして粘土を貼るという方法がとられている。

【分焔柱】

分焔柱はすべての窯跡から検出されており、基本的には地山を削り出して作られている。ほとんどの窯跡では上部が崩落しており床面から50～70cm残存しているにすぎないが、ＳＲ-06・14・17窯跡では天井部がアーチ状に残っているものも認められた。基底部の平面形は長方形を基調(ＳＲ-01～03・05～09・15・16窯跡)としているが、やや隅の丸い隅丸方形のもの(ＳＲ-04・10～12・14・18窯跡)やさらに隅の丸い長楕円形のもの(ＳＲ-17・19・20窯跡)などがある。基底部の規模は、幅が40～70cm、長さは150～260cmと非常に縦長である。

分焔柱についても崩れた部分に補修が加えられているものもあり、補修の方法には2通り認められる。ＳＲ-05窯跡やＳＲ-08窯跡の7次面では崩れた部分に礫や崩れた窯壁を積み上げてその上に粘土を貼り付けるという方法が、ＳＲ-08窯跡の8次面やＳＲ-20窯跡では杭を打ち込みそれを芯として粘土を貼りつけるという方法がとられている。

なお、ＳＲ-15・17窯跡では分焔柱の側面に塊状にした粘土を5～10cmの厚さで貼りつけている部分が認められるが、これらについては補修として理解するよりも大甕などを窯詰めする際にあらかじめ通焔孔を広めに作っておき、窯詰めが終わった段階で通焔孔を狭めたものとも考えられる。

【焼成部】

平面形は窯跡により差異がみられ、最大幅の位置や先端部のすぼまり方から大きく次の 3 つに分類することができる。

1 類．燃焼部から焼成部に向かって緩やかに膨らみ、傾斜変換線付近で最大幅となり、煙道部に向かって緩やかにすぼまるもの（ＳＲ-01～04・07・11・12 窯跡）。

2 類．燃焼部から焼成部に向かって急激に膨らみ、傾斜変換線より手前の分焔柱後端付近で最大幅となり、そこから煙道部に向かって比較的急激にすぼまるもの（ＳＲ-17～20 窯跡）。

3 類．燃焼部から焼成部に向かって急激に膨らみ、分焔柱付近で最大幅となり、緩やかにすぼまった後煙道部付近で急激にすぼまるもの（ＳＲ-05・06・08・09・10・14・15・16 窯跡）。

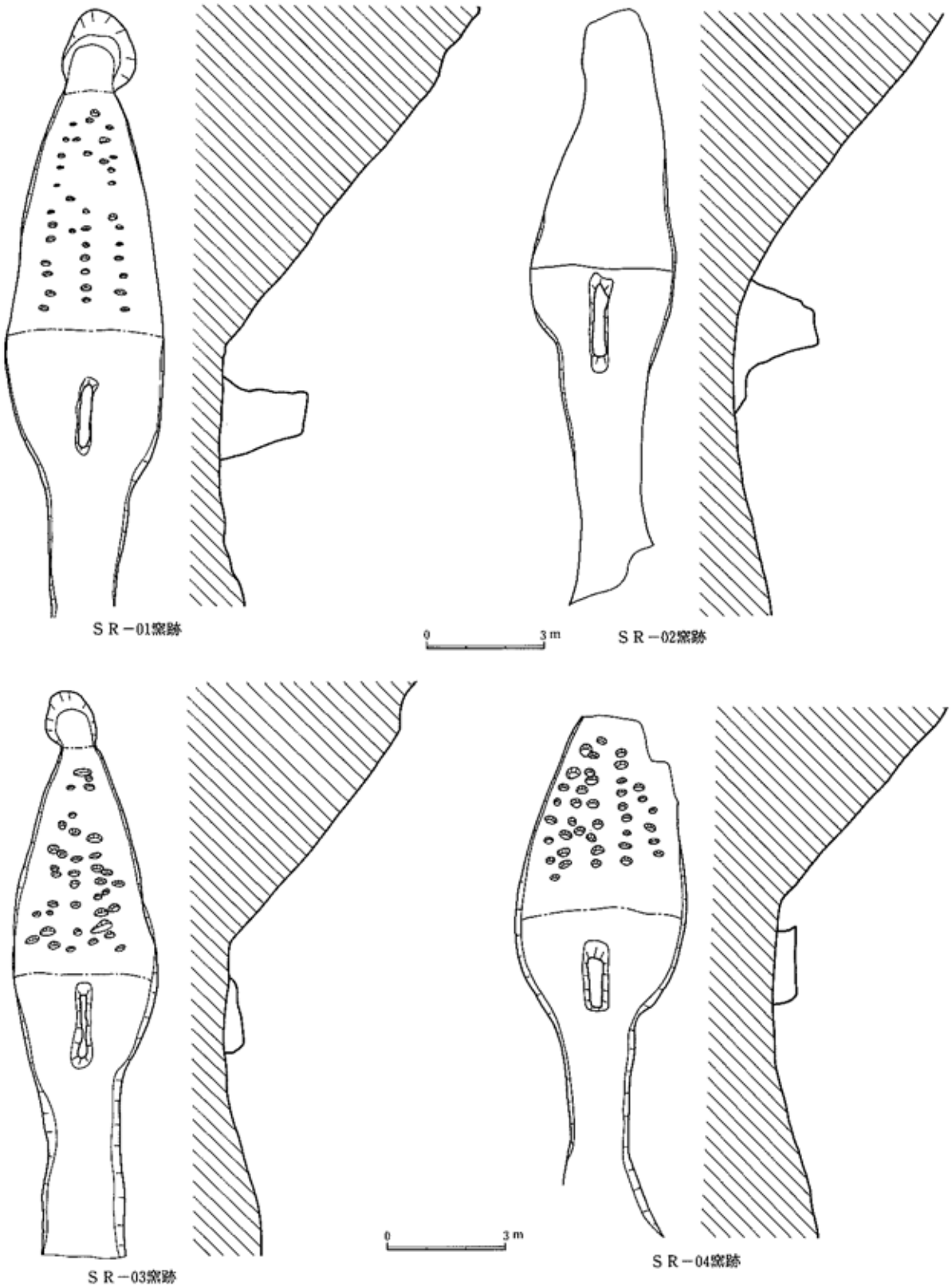
ここでは、それぞれの形状から便宜的に 1 類を長卵形、2 類を紡錘形、3 類を砲弾形と呼ぶこととする。窯跡の時期ごとにみるとⅠ群はすべて紡錘形、Ⅱ群はすべて砲弾形、Ⅲ群は砲弾形と長卵形、Ⅳ群はすべて長卵形となっており、同じ時期には同じタイプの窯跡が構築されており、紡錘形→砲弾形→長卵形と変化したことがわかる。

長さは 8.0～9.6mであり、各時期に大きな変化はみられないが、最大幅は 2.6～4.3mと長さに比べかなりバラツキがみられる。幅について各時期の平均をみると、Ⅰ群は3.2m、Ⅱ群は2.9m、Ⅲ群は3.2mでありほぼ同程度であるが、Ⅳ群では3.8mと急激に幅を増す。したがって、焼成部の長さと最大幅の比率もこれに合わせて変化しており、Ⅰ群では2.7：1、Ⅱ群では3.3：1 であるものがⅣ群では2.2：1 とかなり寸詰まりなものへと変化している。また、焼成部の床面積も最大幅の変化に比例して変化しており、Ⅳ群になると増大している。

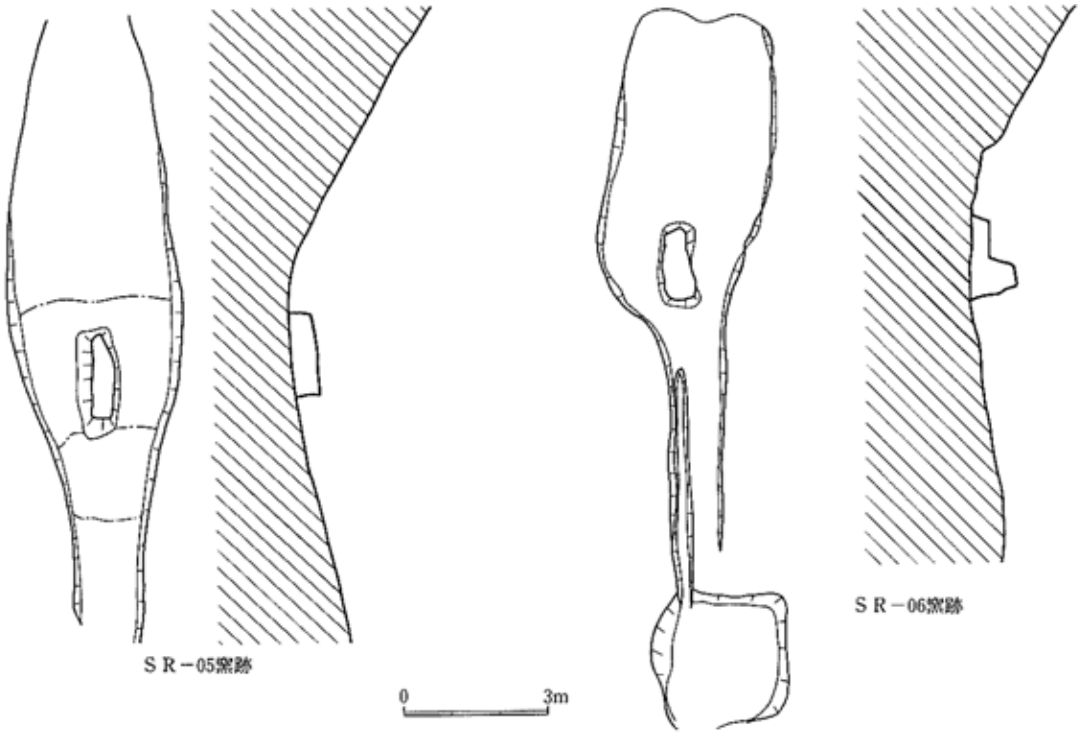
次に、焼成部の床面の傾斜についてみると、分焔柱の奥 1m付近まではほぼ水平であるのに対して、その後は25～40°の急斜面となっている（境界が傾斜変換線）。また、斜面部の角度の平均は、Ⅰ～Ⅱ群では 30°程度であるのに対して、Ⅳ群では 38°と急傾斜になっており、窯体の最大幅の変化と同様である。

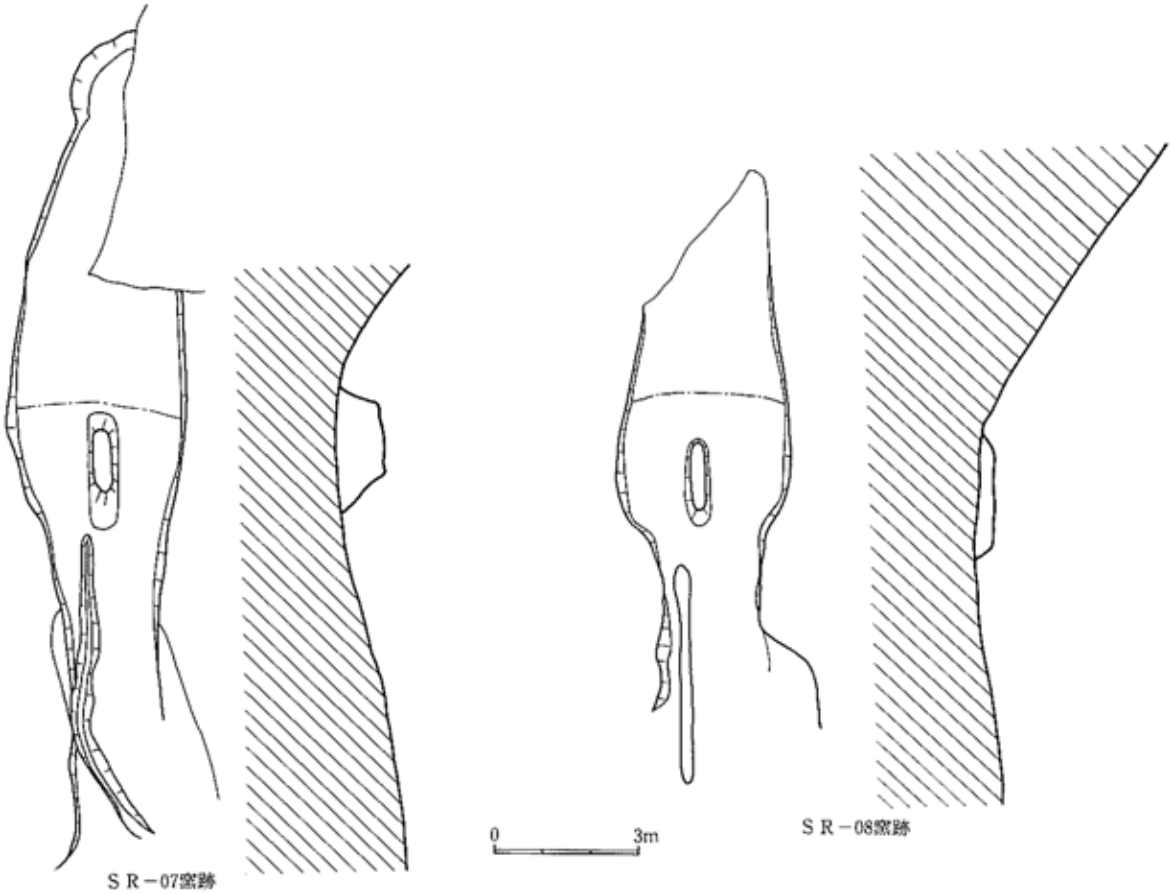
床面の作り方は 1 次面と 2 次面以降では異なっている。1 次面では地山の掘り込み面をそのまま利用しているもの（ＳＲ-04・07～12・20 窯跡）と、掘り込み面をいくぶん埋め戻してその土に粘土を貼って床面としているもの（ＳＲ-01～03・05・06・14・17～19 窯跡）とがある。2 次面以降はすべて貼り床で、窯を更新する際の天井などを崩した土でそれまでの使用面を埋め、その上に粘土を貼って新たな床面としている。このことにより更新された床面は、以前のものよりしだいに高くなり、ＳＲ-12 窯跡では 1 次と最終使用面の標高差は2.4mにも及んでいる。

焼成部の使用面は少ないもので1面（ＳＲ-06 窯跡）、多いものでは10 面（ＳＲ-02・04 窯跡）認められ、時期が新しくなるにつれて使用面が増加する傾向がみられる。このことは、窯跡の掘られている基盤に関連するものと考えられる。すなわち、窯跡の掘られている尾根は全体が凝灰岩からなっているが、岩質は標高によってかなり相違がみられ、Ⅰ群が掘られた標高 100m付近は粘土化が進み非常に軟弱でスコップで掘れるほどであるのに対し、Ⅱ群以降の窯跡が掘られた標高 106mより高い地点では非常に堅緻である。このような岩質の違いが窯跡の耐久性に反映され、使用面の増加につながったものと考

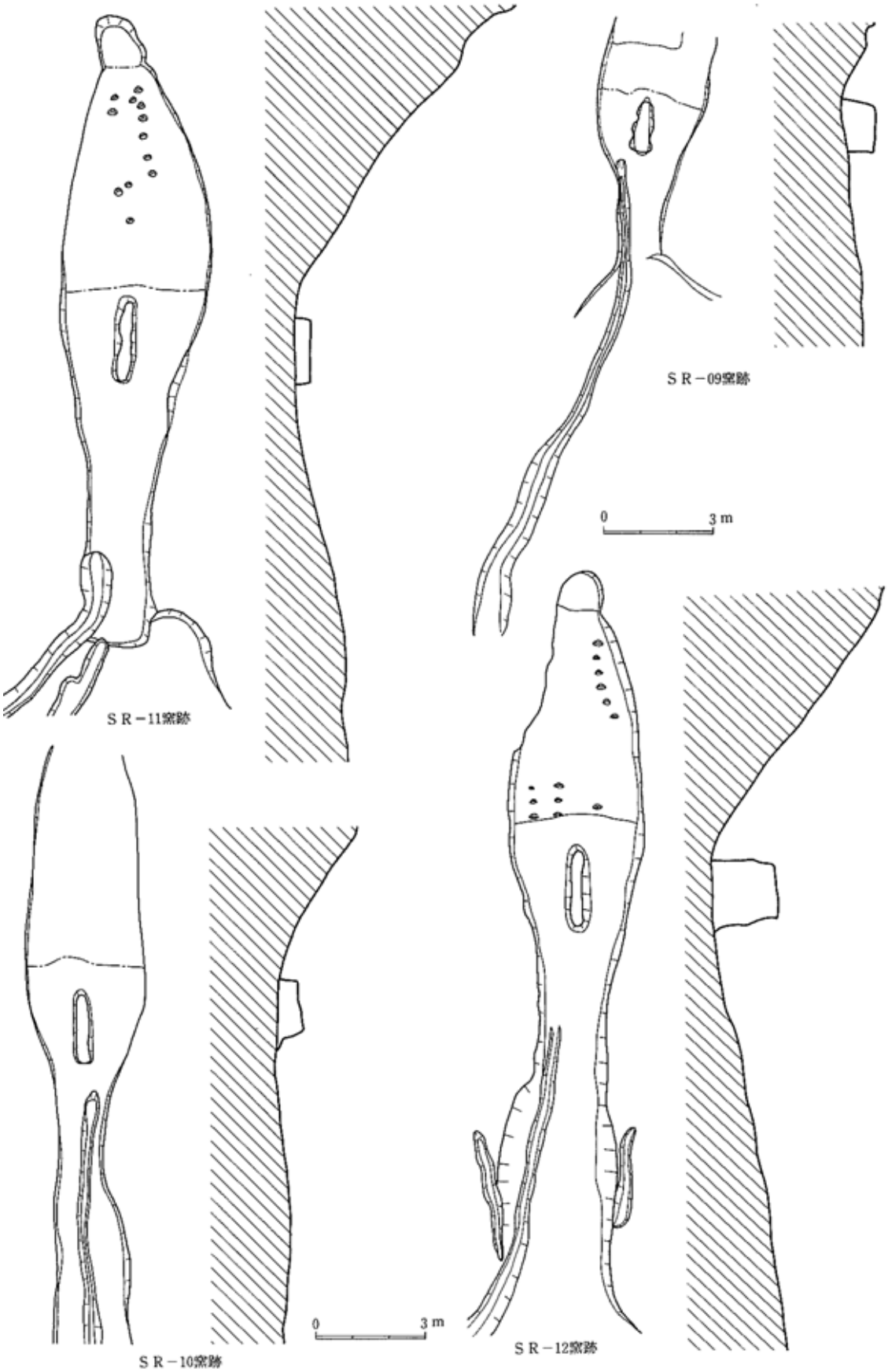


第115図　一本杉窯跡　平面図・断面図（１）

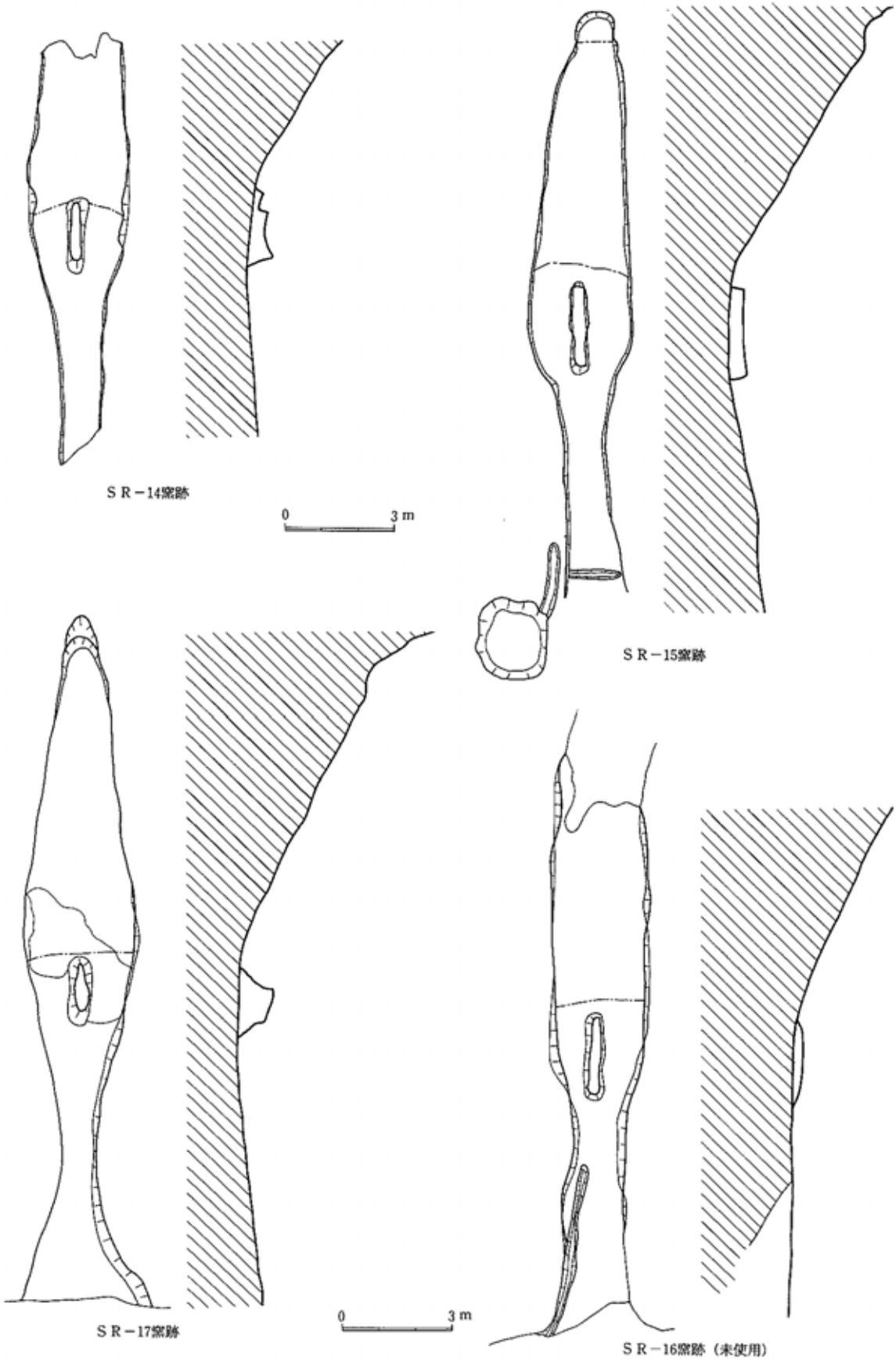




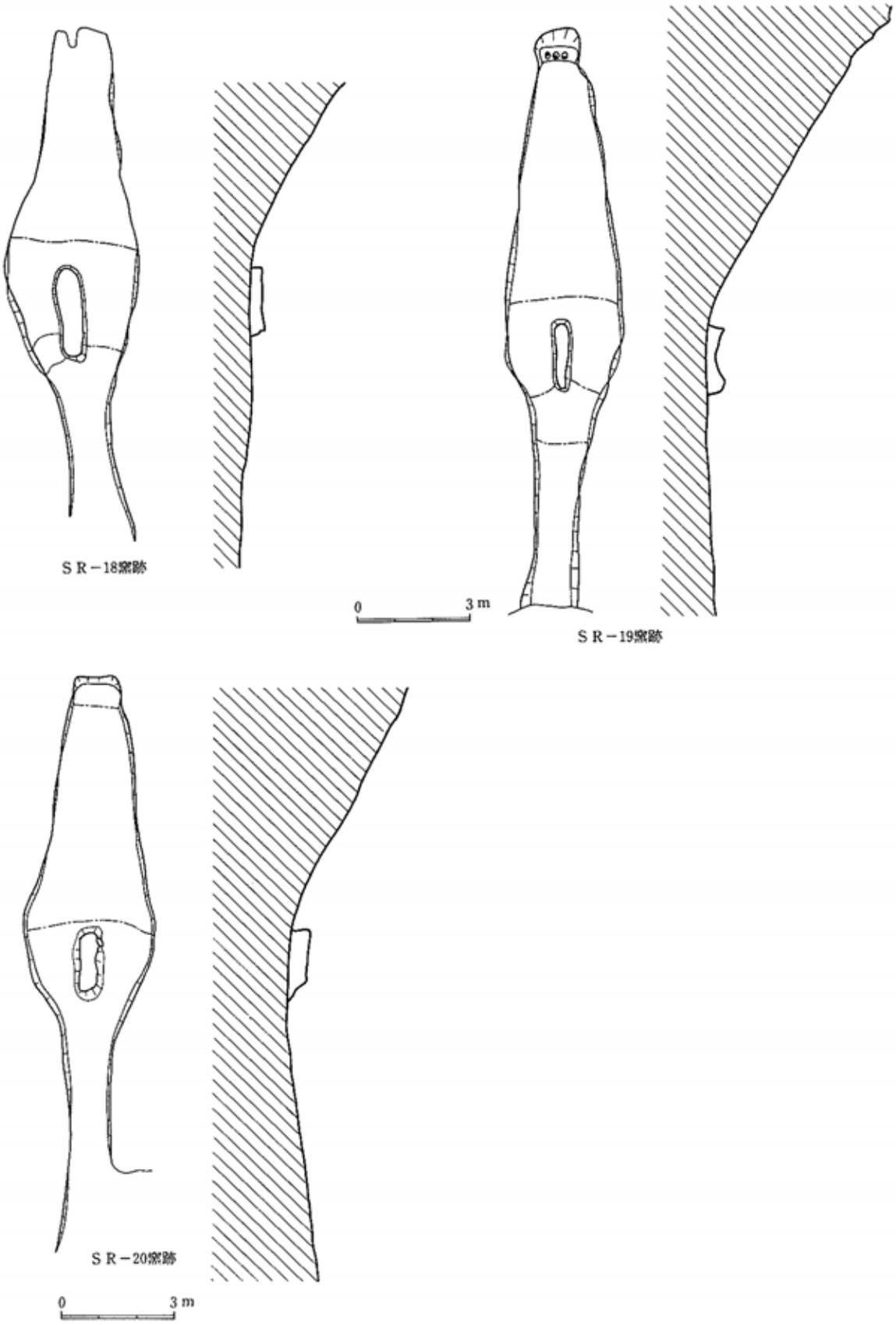
第116図　一本杉窯跡　平面図・断面図（２）



第117図　一本杉窯跡　平面図・断面図（３）



第118図　一本杉窯跡　平面図・断面図（４）



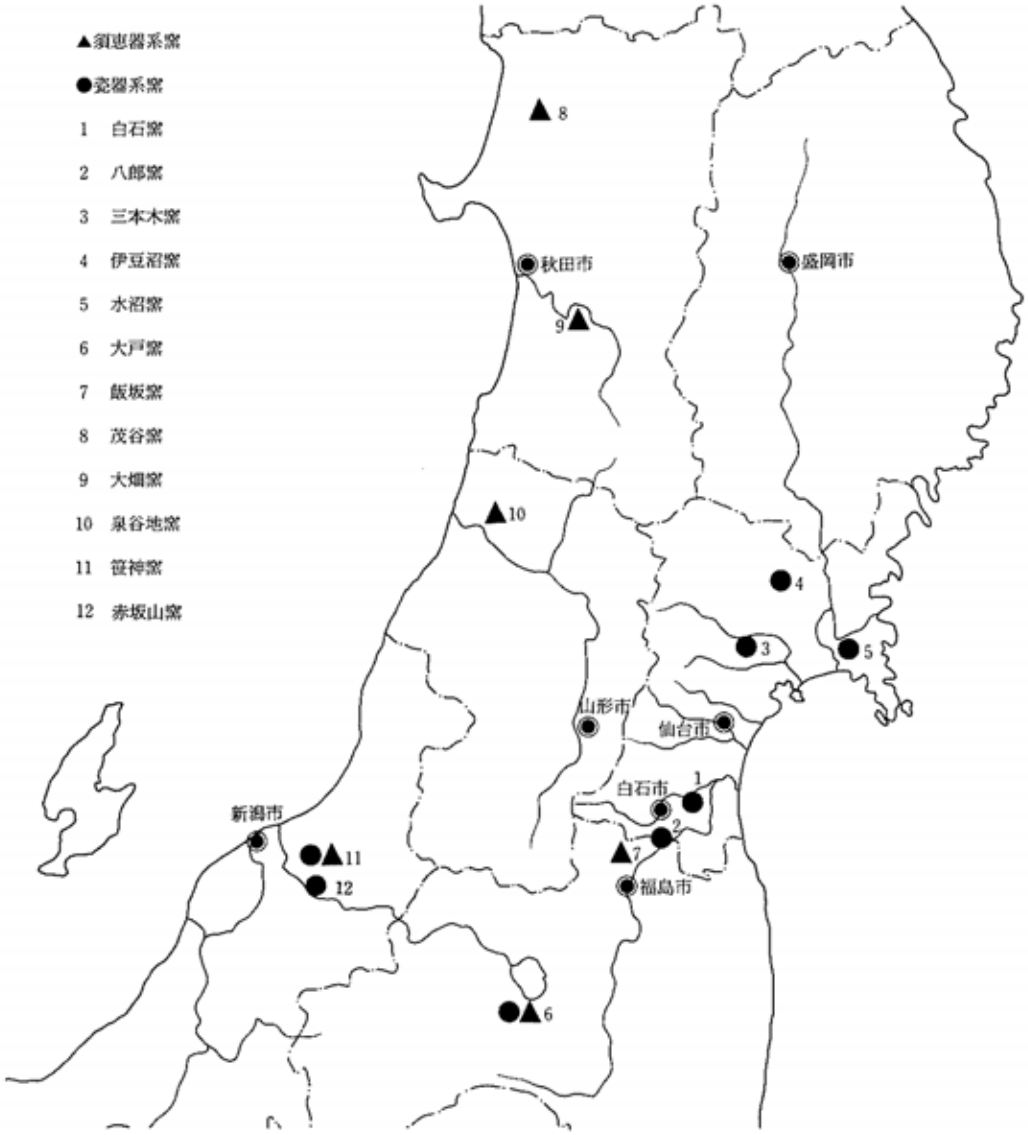
第119図　一本杉窯跡　平面図・断面図（５）

えられる。

［焼成部の施設］

ＳＲ-01～05・11・12 窯跡の焼成部の斜面部から、窯跡の軸線に平行した 3～4 条の小穴列が検出されている。列の間隔は 70～90cm であり、小穴は 40～50cm 間隔で 1 列に 10～13 段掘られている。穴の大きさは幅 20～40cm で、深さは 3～5cm である。

このような小穴列については、製品を安定させるための窪み、もしくは急斜面で作業する際の足場穴の 2 通りの可能性が考えられる。小穴の窪んでいる部分は他の床面同様に焼けて赤変もしくは珪質化していることから、火熱が直接当たったものと考えられる。さらに、ＳＲ-11 窯跡では小穴列と焼台痕跡がともに検出されている。それによれば製品の並べられた位置は小穴列と一致せず、むしろ小穴列の中間の位置に製品が並べられていたことが観察される。これらのことから、これらの小穴は作業のための足場穴であったと考えることが妥当であろう。



第120図　東北の中世窯

【煙道部】

煙道部は 9 基の窯跡（ＳＲ-01・03・07・11・12・15・17・19・20 窯跡）で検出されている。燃焼部との境目はくびれており、床面はほぼ平坦で、平面形は馬蹄形を呈している。規模は幅約 1m、奥行約 1mである。上部は削平のため残っていない。

［煙道部の施設］

ＳＲ-11・12・15・17・19 窯跡からは、平坦部で傾斜変換線より 10㎝ 程奥まった付近で、炭化材の入った直径 5〜10㎝ の小ピットが 4〜6 個、傾斜変換線に平行して検出されており、煙道部の空気調整の施設（ダンパー）の痕跡と考えられる。

(3) 他地域の窯跡との構造の比較

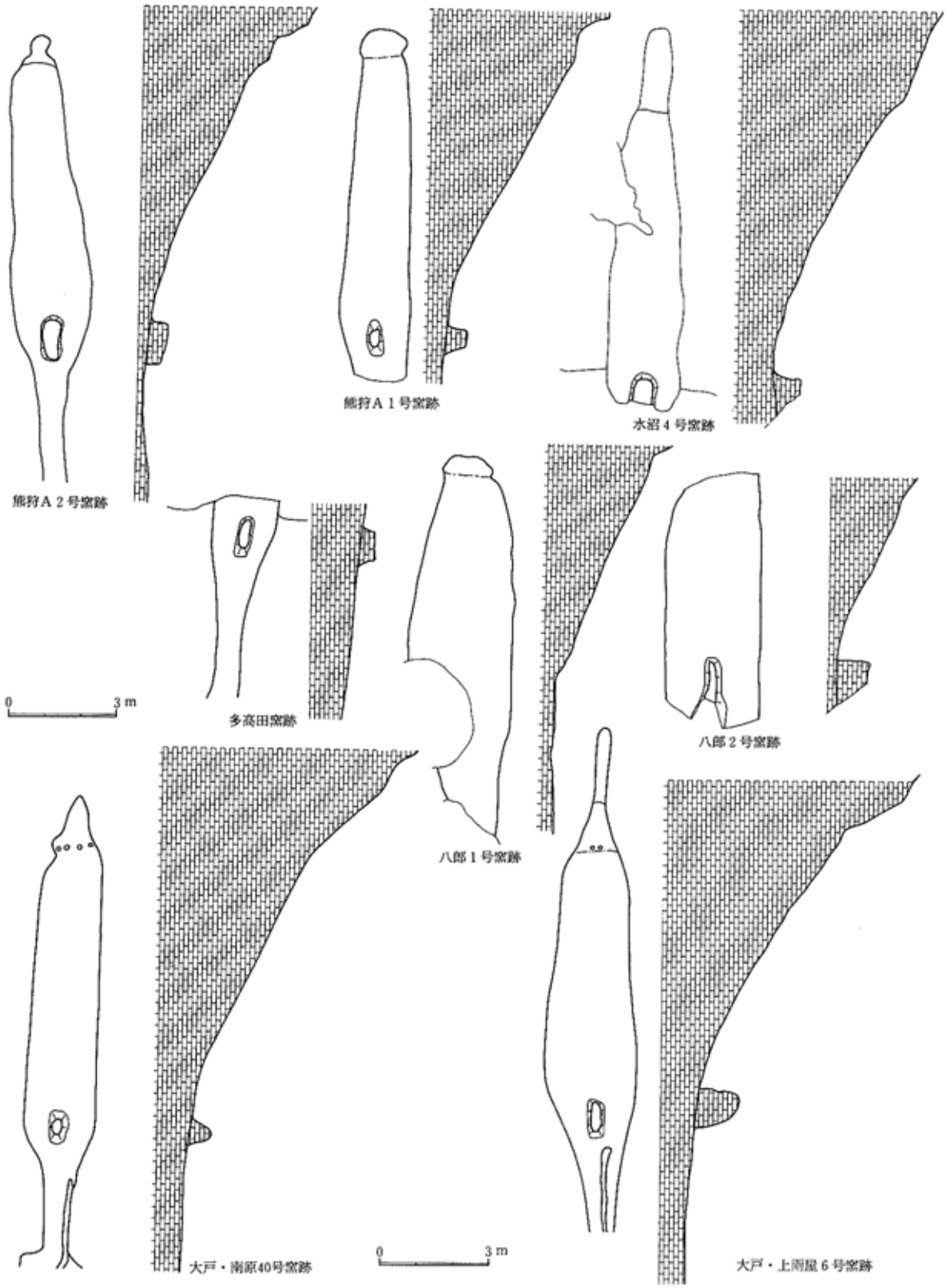
一本杉窯跡群から検出された窯跡の特徴については、上記のとおりである。

窯体の構造は、地下式の窖窯で、分焔柱を有するという特徴をもつ。このような窯体の構造は、各地域で検出されている瓷器系中世陶器窯跡の一般的な構造と同様のものである。ところで、一本杉窯跡群の窯体の特徴のひとつとしては、長大な規模をもつことがあげられる。東北地方のこの時期の窯跡にはこれほどの規模をもつものはなく、当時の窯業の先進地である常滑の中でも最大級の規模をもつ愛知県阿久比町福住古窯跡群（阿久比町：1978）や知多市七曲古窯跡群（知多市：1987 他）などのものに匹敵する。

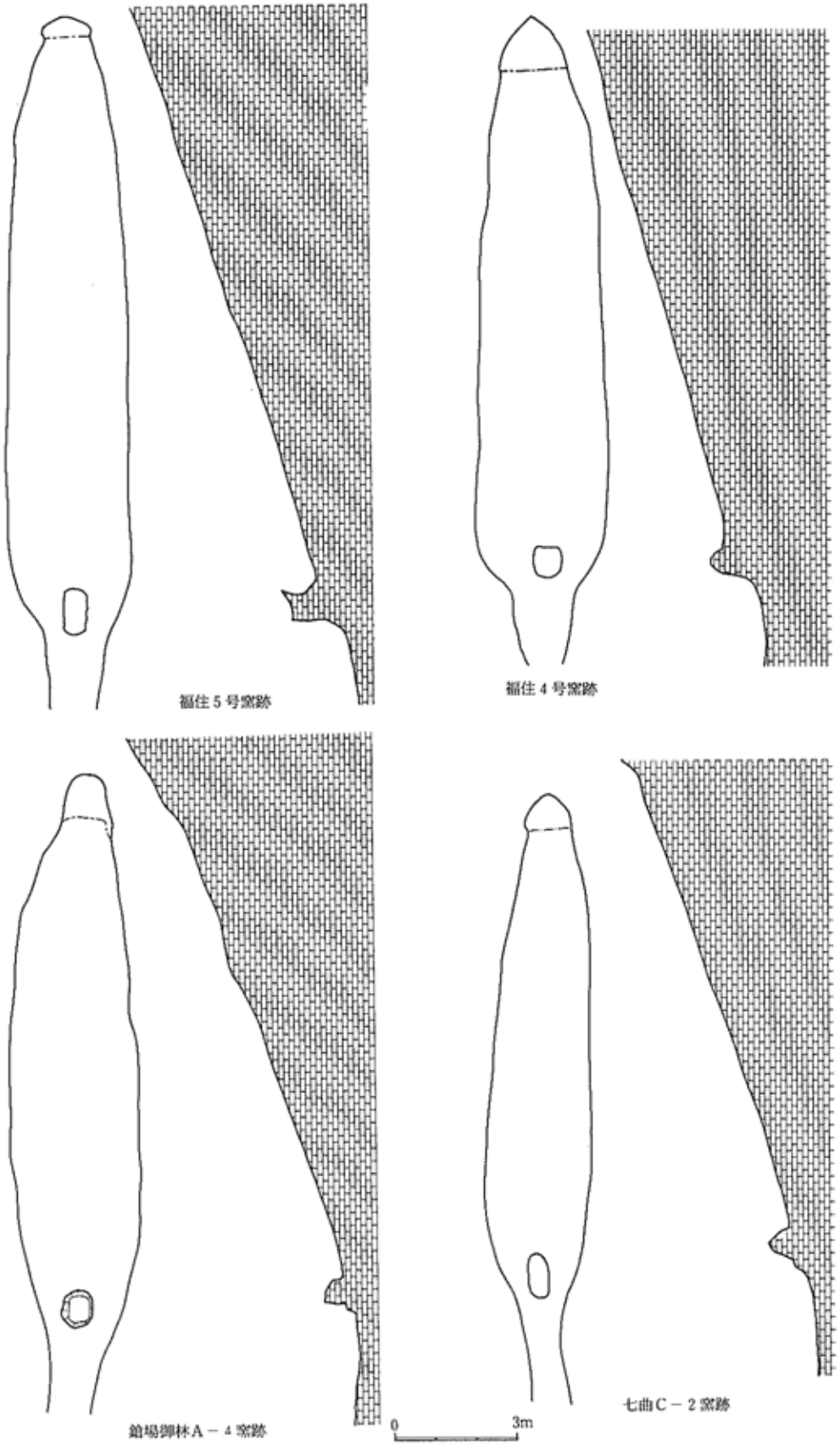
燃焼部の形態・規模は、他の窯跡と比べて大きな差異はみられない。燃焼部の構造で特徴的なのは燃焼部から焼成部へかけての床面の傾斜の変化である。本窯跡のものは、焚口から分焔柱にかけてはほぼ平坦であるか、大きくても 10°程度の角度で緩く下がっており、分焔柱の後端もしくはこの部分から約 1m奥まったところから急激に立ち上がる。これに対して、常滑窯のほとんどは分焔柱手前から傾斜（上昇）が始まり、焼成部にかけて多少の変化はあるもののほぼ連続的に傾斜し、分焔柱奥での明瞭な傾斜の変化はみられない。その他の窯跡では、越前の福井県宮崎村水上窯跡群（田中：1994）・同上長佐窯跡群（田中：1994）や東北南部の福島県梁川町八郎窯跡群（飯村・寺島：1987）、宮城県石巻市水沼窯跡群（藤沼：1995）、同築館町熊狩窯跡群（工藤・藤沼：1979）などは一本杉窯跡群と同様な状況であるのに対し、越後の新潟県笹神村狼沢窯跡群（川上：1992）、安田町赤坂山窯跡群（川上：1992）は常滑窯に類似し、福島県会津若松市大戸窯跡群（石田：1994）は中間的な様相を呈している。

前庭部から燃焼部にかけては、一本杉窯跡群では排水施設がほぼ半数に検出されている。同様の例としては大戸窯跡群上雨屋 6 号窯跡や南原 40 号窯跡などがある。

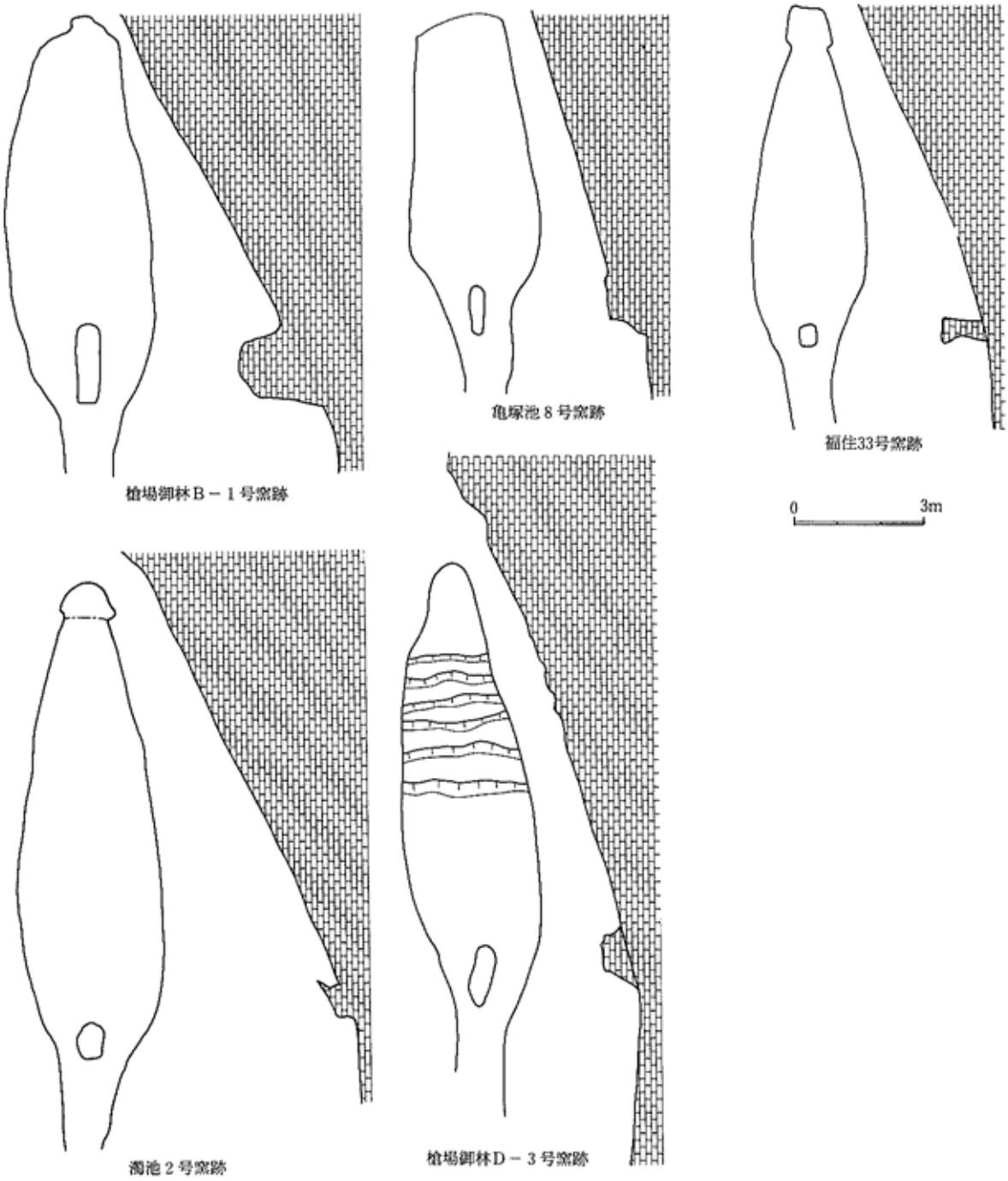
分焔柱は縦長で、大きい。このような例は他地域には少なく、一本杉窯跡群のひとつの特徴となっている。平面形は、越前や越後などでは円形かそれに近い楕円形、長方形を呈するものがほとんどで、一本杉窯跡群ほど縦長ではない。また、常滑についてみても同様で、縦長のものは愛知県常滑市鎗場御林Ｂ1 号窯跡（常滑市：1985）や同亀塚池 6 号窯跡（常滑市：1993）でわずかにみられる程度である。一方、このような縦長の分焔柱をもつ窯跡は宮城県三本木町多高田窯跡、熊狩窯跡群や八郎窯跡群などで認められ、宮城県から福島県北部かけて分布していることは注目される。



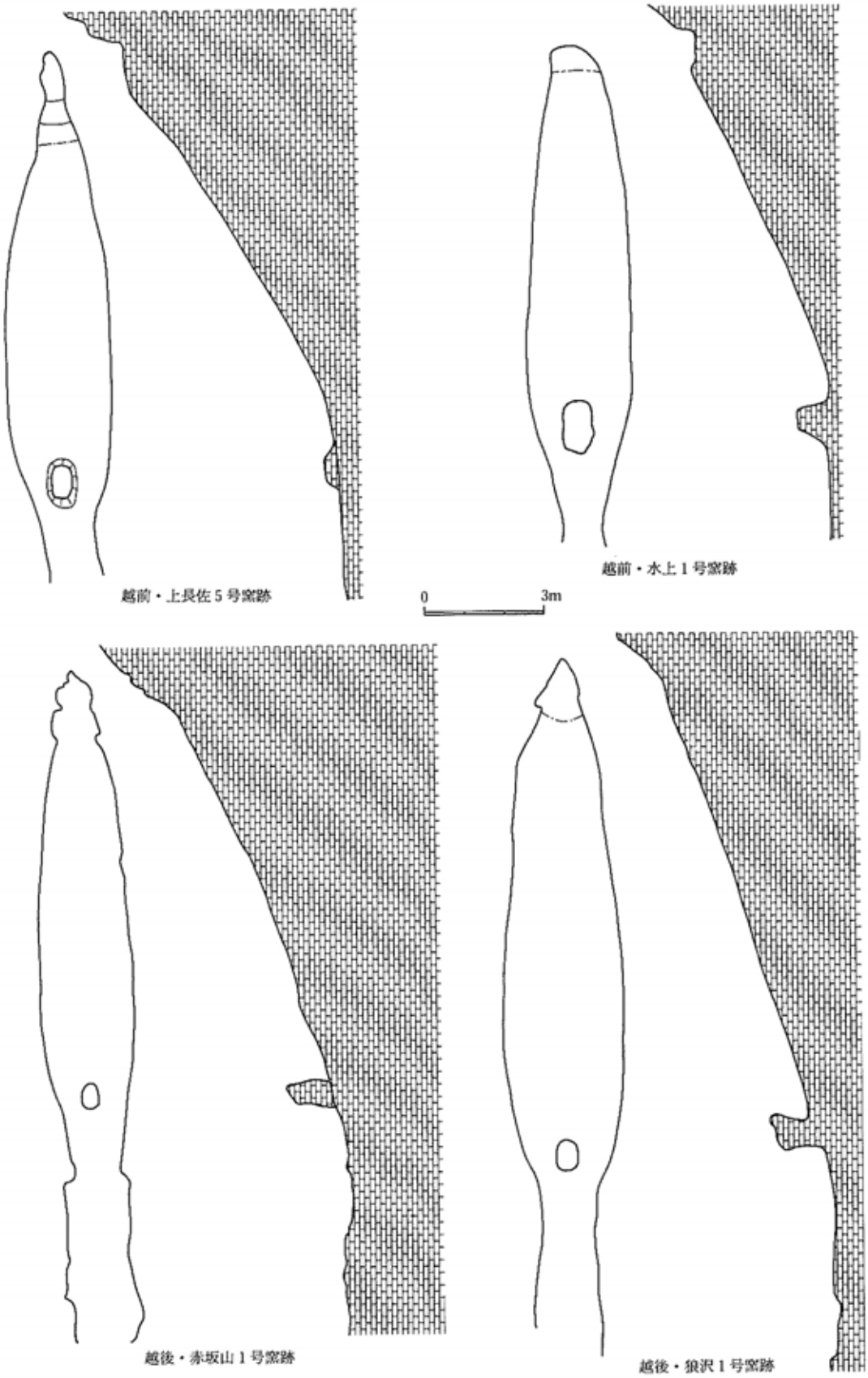
第121図　他地域の窯跡（東北南部）



第122図　他地域の窯跡（常滑）



第123図　他地域の窯跡（常滑）



第124図　他地域の窯跡（北陸）

焼成部は、平面形などでは他地域とほぼ同様の形態を示すが、非常に幅広であるという点と、床面の傾斜の角度とその変化の2点で異なっている。長さと幅の比率についてみると、他地域の窯跡では3.0：1～4.2：1程度であるのに対して、一本杉窯跡群では2.2：1～3.0：1となっている。常滑窯においては、「13世紀の前半（5型式期）から焼成部の長大化が進み、後半（6a型式期）になるとより大型化傾向が進展した」ことが指摘されている（中野：1995）。具体的には、常滑などでは窯体が長くなり、一方、一本杉窯跡では幅が広くなるという方向に進んでいる。

次に床面の傾斜についてみてみると、一本杉窯跡群ではⅠ～Ⅲ群の時期には30°程であり、Ⅳ群の時期には38°と傾斜が急になる。これに対して、常滑窯では多くのものが20°程度で、越前の水上・上長佐、越後の狼沢・赤坂山や東北南部の熊狩・大戸・八郎などの諸窯では常滑窯よりも若干急角度であるが20～30°の範囲に収まっており、一本杉窯跡群の特異性がうかがわれる。また、常滑窯では前述した窯体の長大化に伴い生産性と作業効率の向上をはかるため焼成部床面の傾斜はしだいに緩やかになっているが、一本杉窯跡群ではⅣ群の時期に急角度になり、常滑窯とは異なる変遷をたどっている。これは、常滑窯が比較的緩斜面の丘陵地に立地しており長大化が可能だったのに対して、一本杉窯跡群では尾根の上部の傾斜がきつい場所に築窯せざるを得なかったという地形的な制約が主な要因と考えられる。

こうしてみると、一本杉窯跡群は瓷器系中世陶器窯跡としての基本的な構造や平面形などでは常滑窯の特徴と類似する点が多く認められるものの、各部位ごとの構造（分焔柱の形状や傾斜変換線の位置）や大型化の方向性、焼成部の傾斜の変遷などで異なる点も多くみられる。一方、越前・越後をはじめ東北南部の諸窯とは共通する要素が多くみられる。

(4) 窯詰めの状況

検出された窯跡の中で窯詰めの状況の分かるものは、製品のかなりの量が原位置を保った状態で検出されたＳＲ-20窯跡2次面のほかに、焼台の痕跡から窯詰めの状況が推定することができるＳＲ-11窯跡1次面、ＳＲ-14窯跡1次面、ＳＲ-15窯跡4・8次面、ＳＲ-17窯跡2次面、ＳＲ-18窯跡3次面、ＳＲ-19窯跡2次面の合計7基8面である。

ＳＲ-20窯跡は甕・擂鉢を主体に焼成した窯跡である。焼成中に分焔柱付近の天井部が崩落しており甕6個、擂鉢18個、壷2個の位置が特定できた（第103図）。なお、これら以外の製品は搬出されたと考えられる。

甕は3段分検出されており、下段の甕ｆ、中段の甕ｃ・ｄ・ｅ、上段の甕ａ・ｂがある。また、上段の甕ｂの東側では大形の焼台が検出されており、製品は検出されなかったものの、ここにも甕が置かれていたと推定できる（甕ｇ）。このことから中・上段では一段に3個ずつ並べて焼かれていたことになる。これらの甕の配置についてみると、甕ａ・ｃは西壁に、甕ｅ・ｇは東壁に沿って並べられているのに対して、中間に位置する甕ｂ・ｄ・ｆはいずれも中心から東西にずれた位置に置かれており、「く」字形を呈している。

擂鉢は8ヶ所から18個出土しており、擂鉢ｂでは7個、擂鉢ｃでは5個、擂鉢ｆ・ｇでは2個の重

ね焼きが行なわれている。擂鉢の置かれている場所は、大きく分けると分焔柱の直後と甕の2段目付近の2ヶ所あり、特に後者では甕ｄ・ｅ間の120cmほどの隙間に集中している(6ヶ所15個)。この他、甕ｃ・ｄ間と甕ｄ・ｆ間から小形の焼台が検出されており、本来はここにも擂鉢が置かれていたものと考えられる。これらの様子からみると、擂鉢は、全体に均一に規則的に並べられたというよりも、甕を配置した際にできた空間（隙間）を充填するように並べられたものであると考えられる。

窯内での製品の固定方法であるが、すべての製品を除去したところ、それぞれについて床面に貼り付いた状態で焼台が検出された。焼台はいわゆる「馬爪形焼台」と呼ばれるもので、径が15～20cmの大形のものと、5～10cm の小形のものとがあり、甕などの大形品には大形のものを、擂鉢などの小型品には小型のものを用いている。焼台はすべて2個1対で使用されており、製品を載せる際には台と製品の間には陶器片が挟まれている。

次に、ＳＲ-14窯跡1次面、ＳＲ-15窯跡4次面、ＳＲ-17窯跡2次面、ＳＲ-18窯跡3次面、ＳＲ-19窯跡2次面についてみてみる。

これらの窯跡はいずれも甕・擂鉢を主体に焼成している窯跡で、焼成部の斜面の部分から直径 15～20cmの大形の焼台痕の列が3列検出されている。その配置をみると、外側の2列は両側壁に平行して直線的に並ぶのに対して、中間に位置するものは左右にずらしてジグザグに置かれている。また、列の中での個々の並びについてみると、窯体の狭い部分では外側の製品はそれぞれ同じ高さ(段)に揃えて並べられているのに対して、中間に位置するものはこれらの段の中間になるように高さをずらして、同一の段で3個横並びにならないように配置されている。一方、焼成部下方の傾斜変換線付近で窯体の広い部分については間の列が 2 列になるもの(1 段に 4 個並べられたもの)も認められる(ＳＲ-18窯跡)。

また、これらの窯跡からは小形の焼台痕もいくつか検出されており、大形品の隙間に配置されている。

このような窯詰めの状態は前述したＳＲ-20窯跡2次面とほぼ共通するもので、基本的には甕などの大形品を規則的に配置して、その際にできた隙間の部分を充填するような位置に擂鉢などの小形品が置かれたものと考えられる。

一方、ＳＲ-15窯跡8次面では径15～20cmの大形の焼台痕6ヶ所と、5～10cmの小形の焼台痕37ヶ所が検出されている。大形の焼台痕は側壁に沿うように2列認められており、焼成部の中程まで5段分検出されている。一方、小形の焼台痕はこれ以外の部分の全域で検出されており、大形のものとは異なり不規則に分布している。壁際に大形の製品を規則的に並べ、その他の部分を充填するように小形品が配置されているという点では他の窯跡の窯詰めの状況と同じであるが、大形品を少なくしてその分小形品を多く焼成している点で他と異なっている。同一の窯跡においても操業面によって異なる組成・構成比で製品が焼かれていたものとして注目される。

次に、1 回の操業でどれだけの製品が焼かれていたかを考えてみる。なお、この場合、焼台の位置から製品の窯詰めの様子が推定できるのは、規則的に配置されている大形品（甕など）のみであることから、ここでは大形品を対象とする。

まず、焼成部の中で大形品がどの場所に置かれていたのか考えてみる。製品の置かれた上限については、ＳＲ−11 窯跡１次面やＳＲ−17 窯跡２次面、ＳＲ−19 窯跡２次面では、煙道部との境界付近まで焼台痕が確認されており、焼成部の上端まで窯詰めされていたものと考えられる。一方、下限については、ＳＲ−14 窯跡では、焼成部の平担部（通焔孔付近）で直径 30cm ほどの青変した部分が確認されており、製品を置いた痕跡と考えられ、ＳＲ−08 窯跡では分焔柱の側壁に融着した甕の体部破片が検出されており、この部分にも製品が置かれたことは明らかである。したがって、製品（大形品）は焼成部全面に置かれたものと推定される。

こういった前提にたつと、ＳＲ−15 窯跡４次面では、焼成部の斜面の部分で焼台痕が約 80cm 間隔で６段確認されており、焼台痕の検出されなかった部分についても同様の間隔で窯詰めされていたとすれば９〜11 段並ぶことになる。また、焼成部の平坦部ではＳＲ−14 窯跡１次面の状況から６個程度置かれたと推察され、ＳＲ−15 窯跡４次面全体では 35 個程度焼かれていたものと考えられる。同様にＳＲ−17 窯跡では、9〜13 段並び全体で 44 個程度、ＳＲ−19 窯跡では７〜９段で全体で 32 個程度焼かれたものと考えられる。したがって、大形品は通常一回の操業で 30〜40 個程が焼かれたものと推定される。

一方、大型品が少なく小形品が多いＳＲ−15 窯跡の８次面では、大形品は焼成部の下半を中心に 22 個程度と推定される。

なお、小形品は、窯詰めの状況から大型品より少なかったとは考えにくい。小形品としては壷・擂鉢などがあるが、擂鉢はＳＲ−20 窯跡では最高で７個の重ね焼きが認められており、1 回の操業で焼かれていた擂鉢は、かなりの数にのぼるものと考えられる。

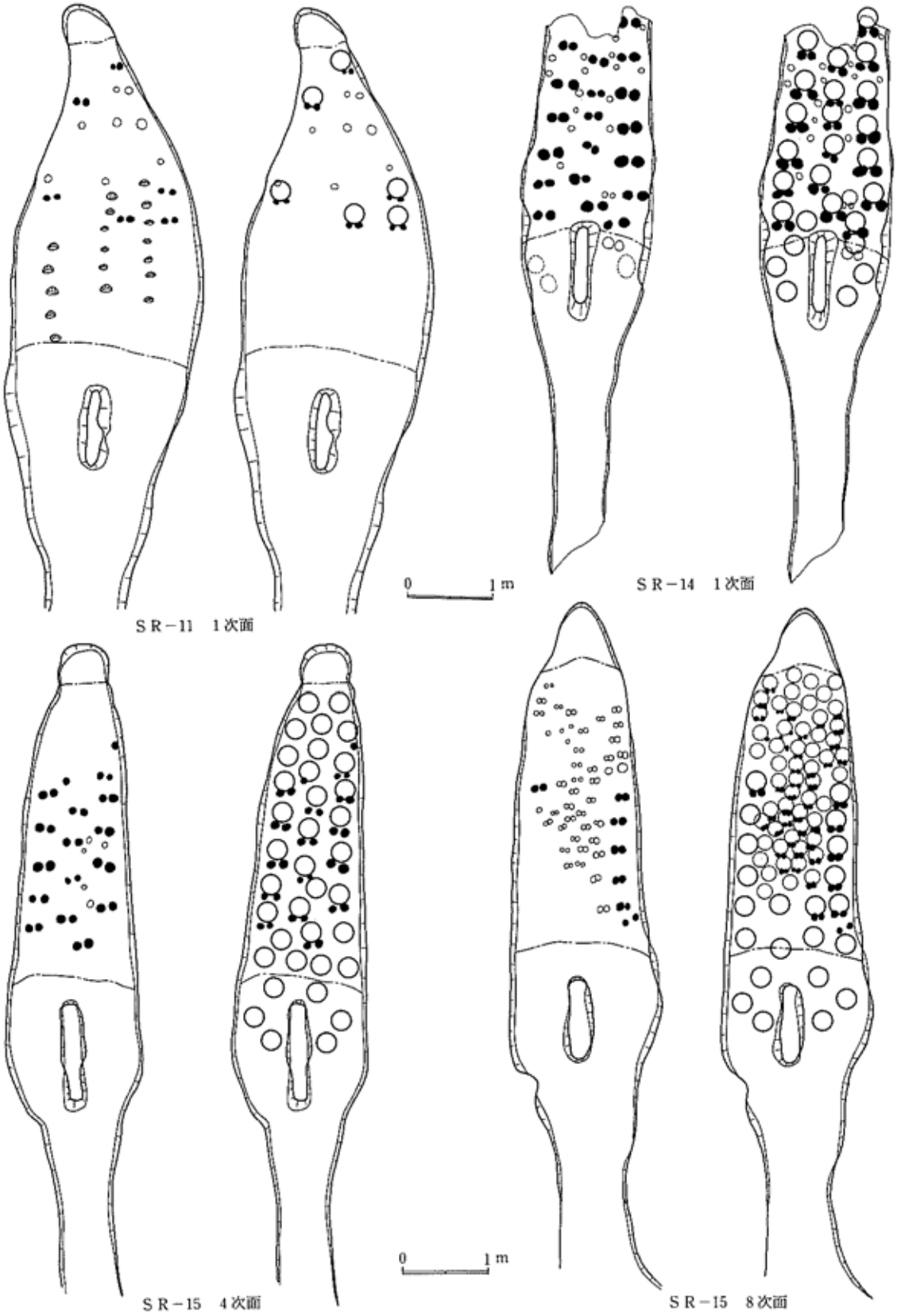
他の窯跡で窯詰めの状況が推察できるものには、築館町熊狩窯Ａ2 号窯跡がある。この窯跡の焼成部下半から甕・擂鉢・壷・皿などが多量に出土し、床面に貼りついた状態の馬爪形焼台や、これが剥離した際の痕跡が多数検出されたことから、窯詰めの状態が推察されている（藤沼他：1979）。

これによれば、甕は両側壁に沿って１列ずつ並べられ、しかも同じ高さで２個が横並びにならないように高さをずらして配置されている。一方、擂鉢・壷・皿などの小形品は甕と甕との隙間の部分から出土している。

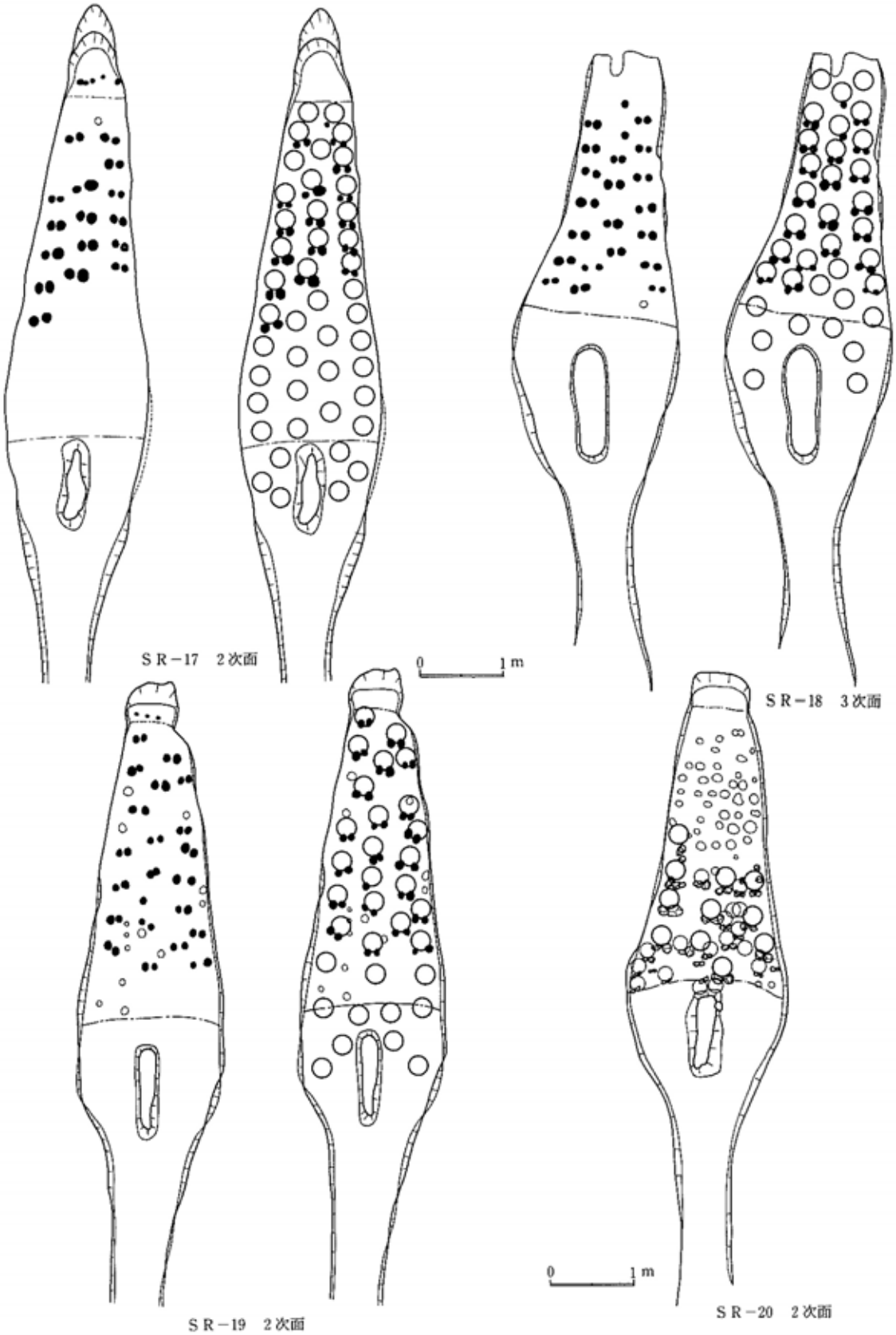
両窯跡間の窯詰めの方法について比較してみると、大形品を窯壁に沿って規則的に配置し、その隙間を擂鉢・壷・皿などの小形品で充填していくという方法は共通のものであり、基本的には同様の窯詰めが行なわれたものと考えられる。一方、熊狩窯では甕の配列が２列である点が一本杉窯跡群のものと異なるが、このことは窯体の規模（焼成部の幅）に起因するものであり本質的な差異とは考えられない。また、擂鉢は熊狩窯では重ね焼きが行なわれていないのに対して、一本杉窯跡群では行なわれているという点で相違がみられる。

2．遺物について

一本杉窯跡群の出土遺物には、陶器（甕・壷・擂鉢・火鉢）・陶硯・陶錘・焼台があり、この中で出土量の大半を占めるのは甕･壷･擂鉢である。ここではそれらの遺物について分類し、検討を加える。



第125図　窯詰めの様子（模式図）



第126図　竈詰めの様子（模式図）

(1) 遺物の分類

出土した遺物の中で甕と壷については、形態的に大きな違いは認められないが、ここでは頚部が比較的短く「八字形」を呈し、頚部から肩部（体部上部）にかけての移行が緩やかで、その区別が明確でないものを「甕」として、頚部がすぼまり頚部と肩部の境界が比較的明瞭なものを「壷」として扱うこととする。以下、それぞれの器種ごとに説明を加えていく。

【甕】

［器形］

底部から開き気味に立ち上がり、体部下半では直線的に外傾する。体部上半からやや内湾し、そのまま肩部に続く。肩部は丸味をもって推移するナデ肩で、ここからは八字形を呈する短い頚部をへて口縁部にいたる。口縁部は頚部から短く外反し、その先端は上方に引き出されており、外側に幅 1.8～2.5cm の縁帯が巡るいわゆる「受け口」状を呈している。

［器面調整］

外面は体部下半では縦方向のケズリ、体部上半から肩部にかけては横方向のケズリ、頚部から口縁部にかけては横ナデが施されている。内面の調整は体部下半ではヘラ状の工具や指頭によるものと考えられる粗いナデ調整が行なわれており、粘土紐の継目の部分には指頭によるオサエの痕跡が認められる部位もある。特に体部の上半から頚部にかけてのナデ調整は体部下半に較べて雑で、ほとんどの製品は指頭によるオサエの痕跡がそのまま残っている。また、いずれの製品にも底部から肩部までの間に継目が肥厚し屈曲した部分が 3 ヶ所程度あるが、これらは段階的に製造したことにより不連続線が形成された痕跡であると考えられる。なお、器面に押印の施されているものは、破片資料を含めても全く認められなかった。

［分類］

器形や口縁帯の特徴から以下のように分類される。

全体的な器形については大きな変化は認められないものの、器高と体部の最大径の比率（体部最大径／器高）や肩部の位置・頚部の形態などの点で若干の差異がみられ、大きく次の 2 つに分かれる。

Ⅰ：器高に比して体部最大径が小さいもの。両者の比が 1.1 程度の全体的に縦長のもので、肩部(最大径)が体部の比較的高い位置（器高の 75%前後の位置）にあり、肩から頚部にかけて外反気味（内側に凸）に立ち上がる。

Ⅱ：器高に比して体部最大径が大きいもの。両者の比が 1.2 程度の膨らみのある形で、肩部は体部の比較的低い位置（器高の 70%前後の位置）にあり、肩から頚部にかけて内湾気味（外側に凸）に立ち上がる。

口縁帯の状況は、器形に比べて各窯跡ごとに差異がみられるが、口唇部の引き出し方や縁帯上端の形態、縁帯下端の稜などの特徴から、大きく 2 つに分かれる。

Ａ：口唇部を長くつまみ上げ、上端部が薄いもの。縁帯下端の稜が明瞭である。

Ｂ：口唇部の引き出しが短く、厚いもの。縁帯下端は丸く、稜線を形成しない。

以上のように、甕は、全体的器形と口縁帯の作りの面からそれぞれ２つに分かれることにより、甕ＩＡ・ＩＢ・ⅡＡ・ⅡＢの４類に細分される。

なお、甕には法量に大小がある。ただし、焼け歪みが激しいものや全体の法量までは判明しない個体が多数を占めていることから、この甕の大小については事実の指摘にとどめておくことにする。

大甕：口径 55～64cm、体部の最大径 80～90cm、器高 70～75cm 程のもの。

中甕：口径 45～50cm、体部の最大径 65～70cm、器高 55～65cm 程のもの。

【壷類】

全体的器形や頚部・口縁部の特徴から次の７種が認められる。

〈広口壷〉

図示したものは合計 53 個体ある。口径 20～25cm、体部の最大径 35～40cm、器高 40cm 程度の大形のものである。

［器形］

底部から緩やかに立ち上がり、体部上半で内湾気味になりそのまま肩部へと移行する。肩部から頚部にかけては、八字形を呈し、上半で直立気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部の形態は甕に非常に類似しており、外側に幅 1.8～2.5cm の縁帯が巡り受け口状を呈している。

［器面調整等］

外面は、体部下半では縦方向のケズリ、体部上半から肩部にかけては横方向のケズリ、頚部から口縁部にかけては横ナデとなっている。内面は、体部下半ではヘラ状の工具や指頭によるものと考えられる粗いナデ調整が施されており、粘土紐の継目の部分には指頭によるオサエの痕跡が認められる部分もある。体部の上半付近のナデ調整は体部下半にくらべて雑で、ほとんどの製品は指頭によるオサエの痕跡がそのまま残っている。また、多くの製品で底部から肩部までの間に継目が肥厚化し屈曲した部分が１ヶ所認められており、肩まで作成するのに２段階に分けて製造したものと考えられる。

また、底部の中心部に長方形の凹みが見られるものがあり（第 100 図 1）、制作には回転台が用いられたと考えられる。

［分類］

全体の器形や口縁帯の特徴から次のように分類される。

まず、全体的な器形では大きく次の２つに分かれる。

Ⅰ：肩が高い位置（器高の 70％程度の位置）にあるもの。体部から肩への屈曲が急で、肩から頚部へ直線的に移行する。全体的に肩が張った感じがする。

Ⅱ：肩が低い位置（器高の 63％程度の位置）にくるもの。肩部から頚部への移行もⅠ類と比べてなめらかで肩の張りが小さく、全体的に丸みを帯び扁平な感じがする。

次に口縁部では、口唇部や縁帯の下端部の特徴から次のように分かれる。

Ａ：口唇部が長く、上端部が内湾するもの。縁帯下端に明瞭な稜をもつ。

Ｂ：口唇部が長く、上端部が直立もしくはわずかに外反するもの。縁帯下端に明瞭な稜をもつ。

Ｃ：口唇部が短く、上端部が丸味をもっておさまるもの。縁帯下端は丸く、明瞭な稜をもたない。

したがって、広口壷は全体的器形と口縁帯の特徴から、広口壷ＩＡ・ＩＢ・ＩＣ・ⅡＡ・ⅡＢ・ⅡＣの６類に分類される。

〈短頸壷〉

口径 18～24㎝、体部の最大径 20～30㎝、器高 20～30㎝の中形のものである。体部上半から口縁部にかけての破片が多く、全体形がわかるものは少ない。底部からわずかに外反気味に立ち上がり、そのまま肩部へ至る。肩部から頸部にかけては急激にすぼまり、そこから口縁部が短く外反している。いずれも短い頸をもつが口縁部の形態により、端部が玉縁状に丸く収まるもの（A類）、角張るもの（B類）、受け口状になるもの（C類）の３種がある。

外面の調整は、体部下半では縦方向の、体部上半では横方向のケズリが施され、肩部から口縁部にかけては横ナデされている。内面はヘラ状の工具によるものと考えられるナデ調整が施されている。内面の調整は甕や広口壷に比べて丁寧に行なわれており、粘土紐の継目が残るものは少ない。

比較的多くの個体に体部から肩部にかけてヘラ書きをもつものがある。

〈無頸壷〉

すべて破片資料で全体形がわかるものは出土しておらず、量的にもごく少数である。口径 15～20㎝、体部の最大径 20～30㎝の中形のものである。肩部から丸味をもって内湾しそのまま口縁部にいたり、端部はそのまま丸くおさまる。

外面の調整は、体部下半ではケズリが施され、肩部から口縁部にかけては横ナデされている。内面は肩部よりも下の部分ではヘラ状の工具によるものと考えられるナデ調整が、肩部から口縁部にかけては横ナデされている。

〈小壷〉

口径 5～6㎝、体部の最大径 10～12㎝、器高 7㎝程度の非常に小形のものである。器高に対して体部の径が大きい比較的扁平な壷である。底部から丸味をもって肩まで立ち上がり、肩部から頸部にかけては急激にすぼまりそこから口縁部が短く外反するもの（A類）と、底部から直線的に立ち上がり肩部で大きく屈曲し、肩部から頸部にかけて急激にすぼまり、そこから口縁部が短く外反するもの（B類）とがある。いずれも口縁端部は丸くおさまり、片口の付くものや受け口状を呈するものはみられない。

外面の調整は、体部下半では縦方向のケズリが、肩部付近では横方向のケズリが施され、頸部から口縁部にかけては横ナデが加えられている。内面は肩部よりも下の部分ではヘラ状の工具や指頭によるナデ調整が行なわれている。口縁部付近は横ナデである。

〈玉縁口縁壷〉

口縁部から頸部にかけての破片が１点出土している。ＳＲ-15-10 は口径 10㎝の中形の壷で、頸部が他のものと比べ比較的長く作られており、口縁部は玉縁状を呈する。

【仏花瓶】

2点出土している（ＳＲ-11-18・19）。口径3cm、体部の最大径4cm、器高8cm、底径5cm程度の非常に小形の仏花瓶である。手捏ねにより形を整え、上方から棒を差し込んで体部を中空としている。外面には指頭による成形痕（ナデツケ）や粗いナデ調整がみられる。

【小瓶】

1点出土している。ＳＲ-15-3は口径6cm、体部の最大径17cm、器高13cmと小壷よりも若干大形である。底部から直線的に立ち上がり肩部で大きく屈曲し、肩部から頚部にかけてはほぼ平坦となり、頚部が直立する。頚部は1cm程度と非常に短く、口縁端部は丸くおさまる。

付着物が多く調整のよく観察できない部分もあるが、体部下半では縦方向のケズリが、肩部よりも上の部分ではナデ調整が行なわれている。肩部付近には植物（松樹文）の線刻が施されている。

【擂鉢】

［器形］

底部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する浅い鉢で、片口が1つないし2つ付けられている。無高台を基本とするが、高台の付くものが破片も含め全出土遺物の中で3点認められた。

体部の立ち上がり方に以下の5種類がある。

1：体部が直線的に外傾しそのまま口縁部に至るもの

2：体部が直線的に外傾し口縁部で内湾気味になるもの

3：体部が外半気味に開き口縁部で内湾気味になるもの

4：底部から急角度に立ち上がり、のちに屈曲して直線的に外傾し口縁部で内湾気味になるもの

5：体部が急角度に立ち上がり途中で屈曲して外反気味に開き、そのまま口縁部に至るもの

［器面調整等］

底部外面の中心に方形ないし長方形の圧痕が認められるものが多数あり、製作に際し回転台が使用されたと考えられる。

器面調整は内外面とも回転台によるナデのみで、ケズリなどが加えられているものはない。

片口は全体を製作後に付けられている。

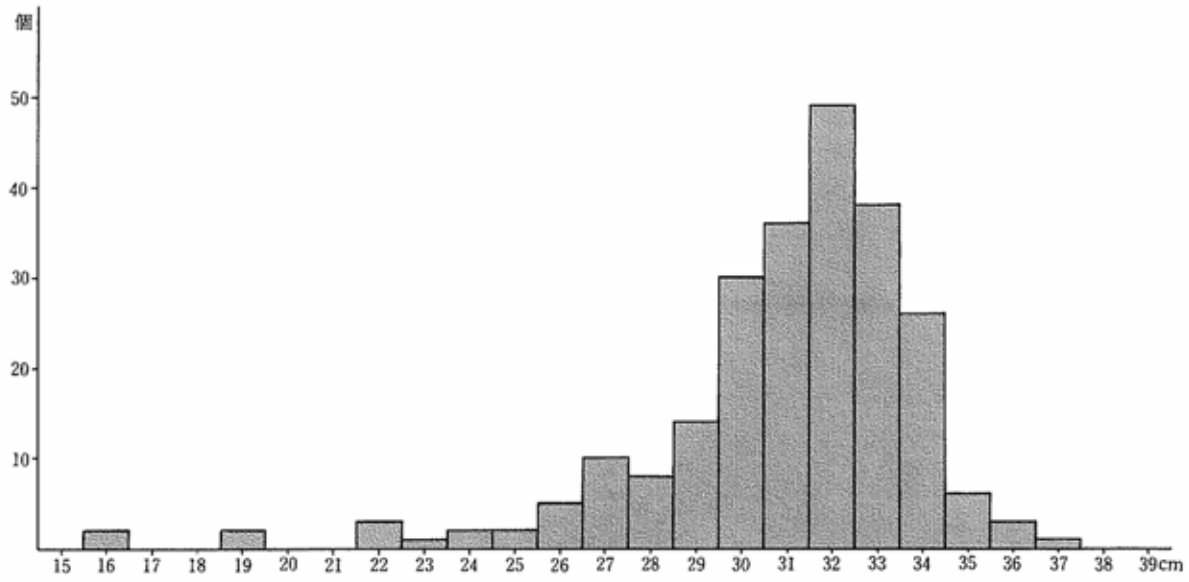
［分類］

口径は15～37cmと幅があるが(グラフ1)、その分布の状況から大中小の3グループに分類できる。

Ⅰ：小形のもの。口径15～21cm、底径10cm程度、器高6～7cmで、全体の法量がわかるものは7点で、量的には非常に少ない。

Ⅱ：中形のもの。口径22～27cm、底径11～13cm、器高12～13cmであるが、口径は26cm程度のものが最も多い。全体の法量のわかるものは28点で、全体の1割を占める。

Ⅲ：大形のもの。口径28～34cm、底径11～14cm、器高12～13cmであるが、口径は31cm程度のものが最も多い。全体の法量のわかる擂鉢240点中の205点を占め、擂鉢類の主体をなす。



グラフ1　擂鉢の口径分布

これらのグループの器形にはほとんど差異がみられないので、同じ形のものが目的に応じて法量を変えて3種類作られたと思われる。

一方、口径と底径の比を較べると、以下の3類に分かれる。

Ａ：口径に比して底径が大きい（44%程度）もの

Ｂ：口径に比して底径が比較的大きい（40%程度）もの

Ｃ：口径に比して底径が小さい（16%程度）もの

以上の分類と器形の特徴を合わせると、擂鉢はⅠA1、ⅠA3、ⅡA1～4、ⅡB1、ⅡB5、ⅡC1、ⅡC3、ⅡC5、ⅢA1～5、ⅢB1～5、ⅢC1～5の27類に細分される。

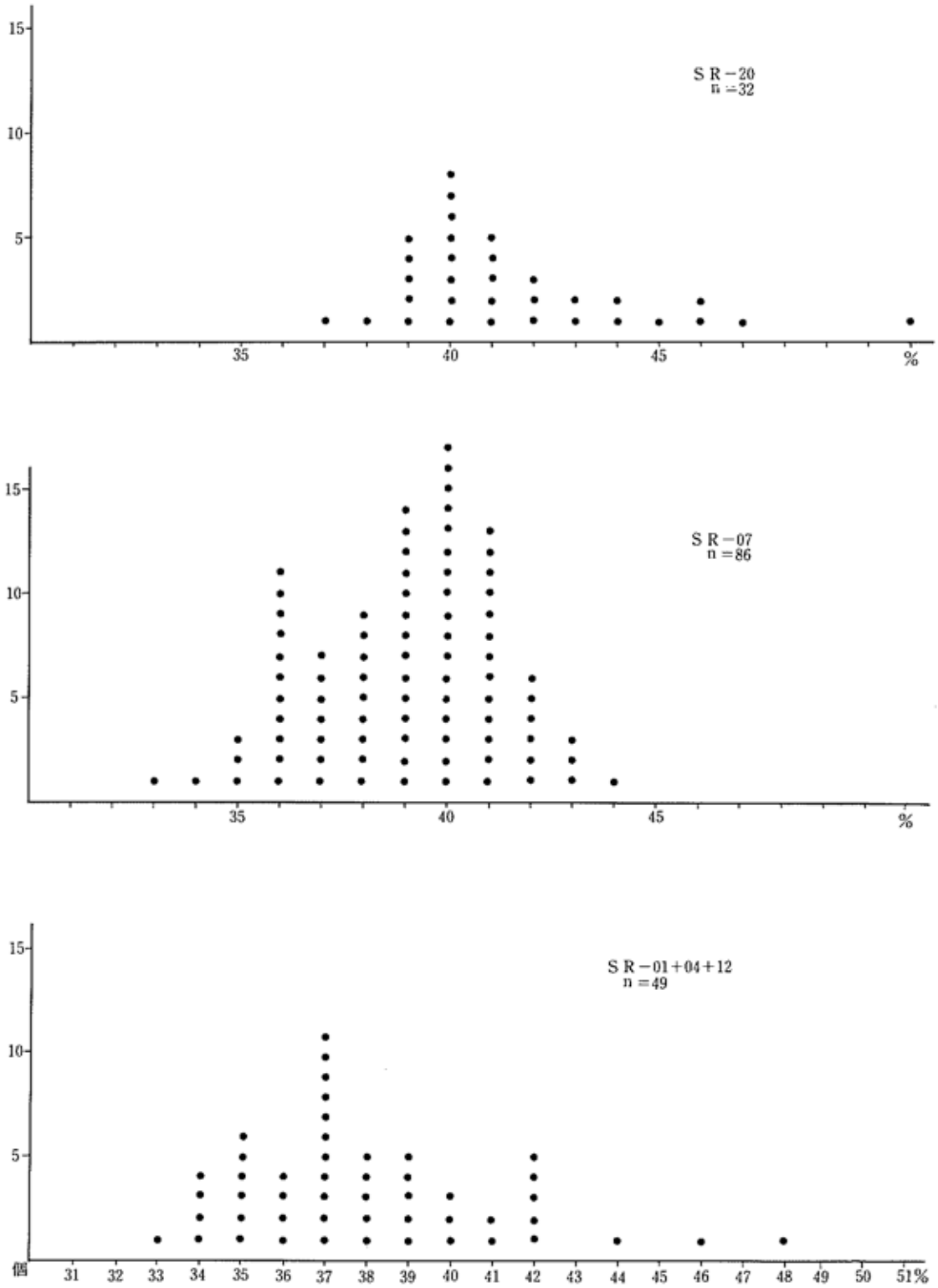
［筋目の占有率］

擂鉢類では上記各類の中に、筋目が施されているものとそうでないものがみられる。両者はいずれの窯跡でも混在して出土しており、筋目が施されているもののみ焼成している窯跡や筋目の無いもののみ焼成している窯跡はない。筋目が施されているものの占有率は全体で17.4%（図示資料42/241）であり、各窯跡ごとにみると多少バラツキがみられるがおおむね10～20%の範囲に収まる。

［筋目の入れ方］

筋目が施された擂鉢の中で筋目全体がわかるものは33個ある。筋目の入れ方には5種類あり、6～10本単位の櫛歯状の工具を用いたものと（①類～④類）、棒状の工具を用いたもの（⑤類）とがある（第127～130図）。

①：最初に中央に筋目を1条配して器面を2分割し、底部中央から外側に向かって放射状に筋目を配



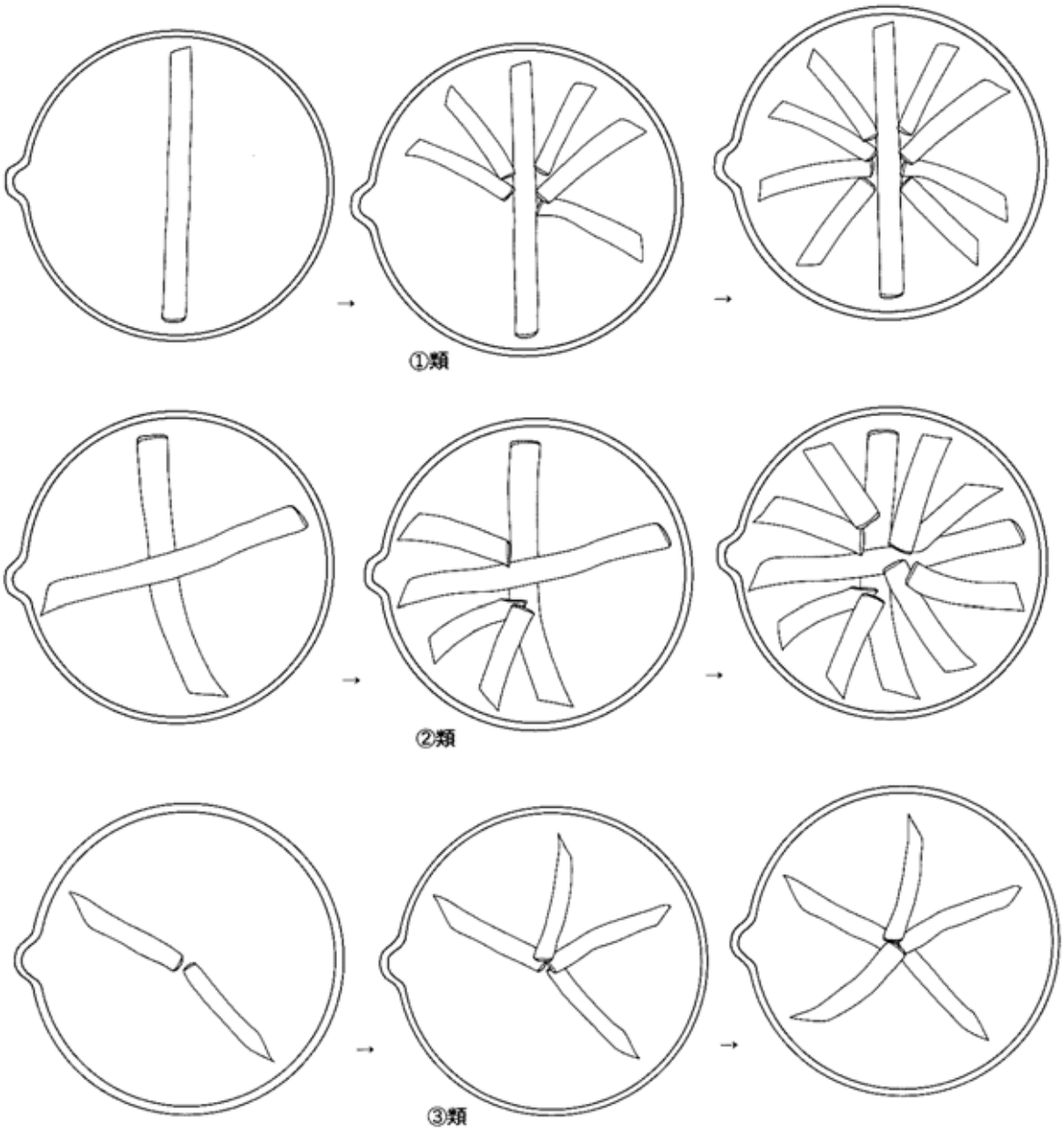
グラフ２　擂鉢の口径（a）と底径（b）の比（b/a）

したもので、2 個ある。また、筋目の書き方には直線的に書いているものと、先端の部分を屈曲させているものがある（第 128 図 1・2）。

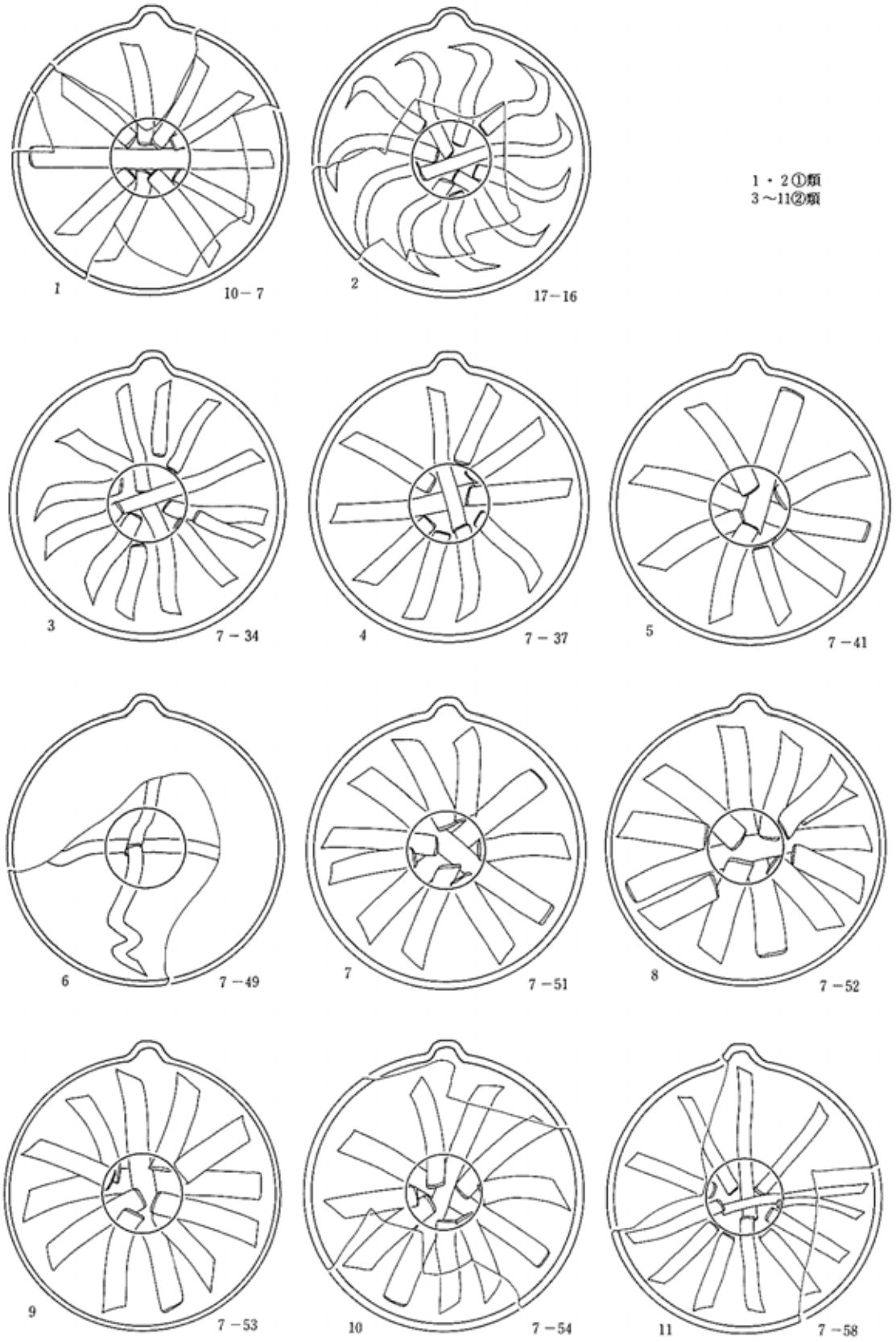
②：最初に「十」字状に筋目を配して器面を 4 分割し、分割した部分に 1 条ないし 2 条の筋目を外側に向かって放射状に配したもので、14 個ある。筋目の書き方には①と同様に直線的に書いているものと、先端の部分を屈曲させているものとがある（第 128 図 3～11、第 129 図 12～17）。

③：器面を分割せずに底部中央から外側に向かって放射状に筋目を配しているもので、12 個ある。①・②と同様に筋目の書き方には直線的に書いているものと、先端の部分を屈曲させているものとがある（第 129 図 18～23、第 130 図 24～28）。

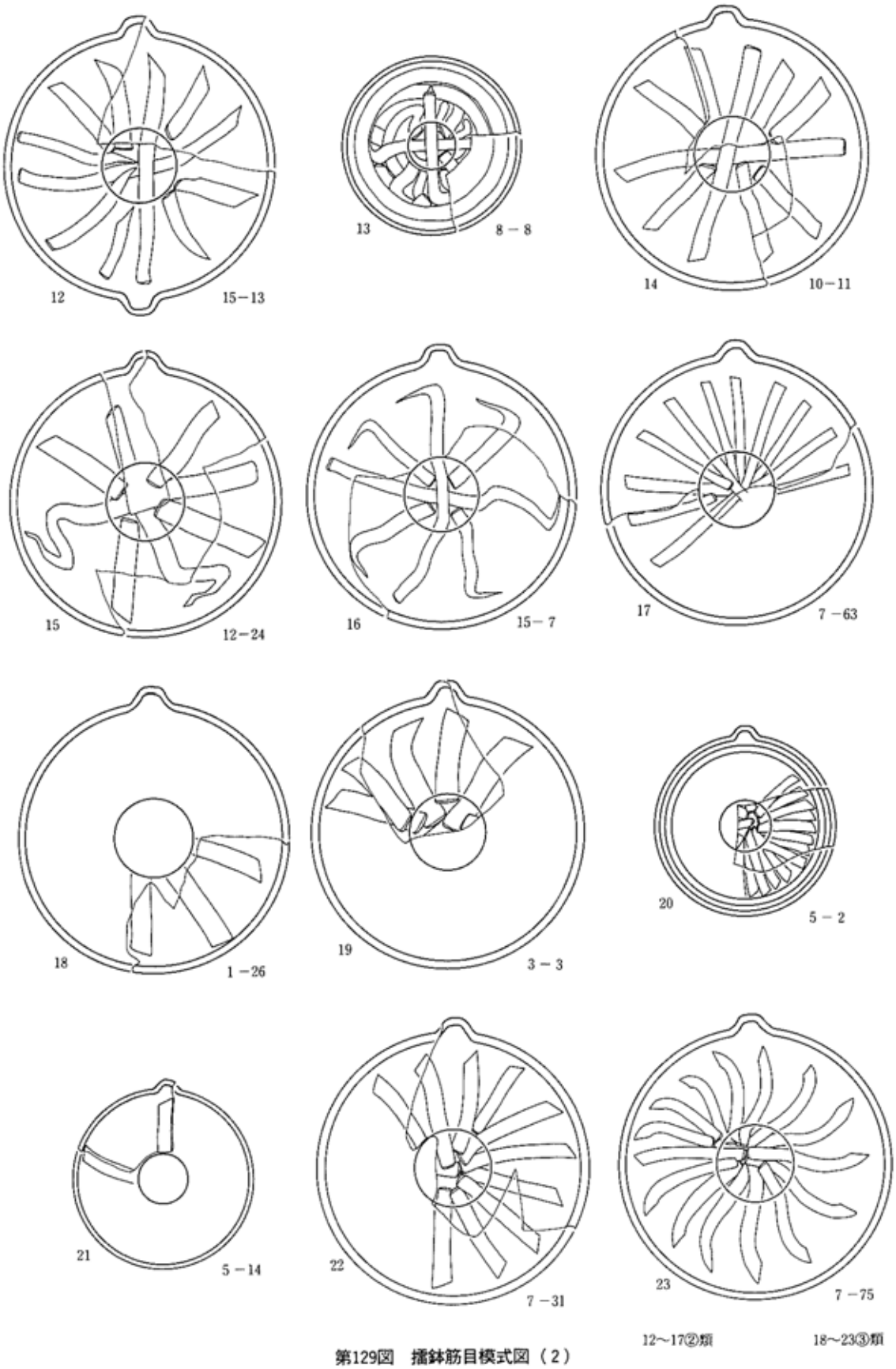
④：縦横無尽に筋目を配し、規則性のみられないもので、3 個ある（第 130 図 29～31）。



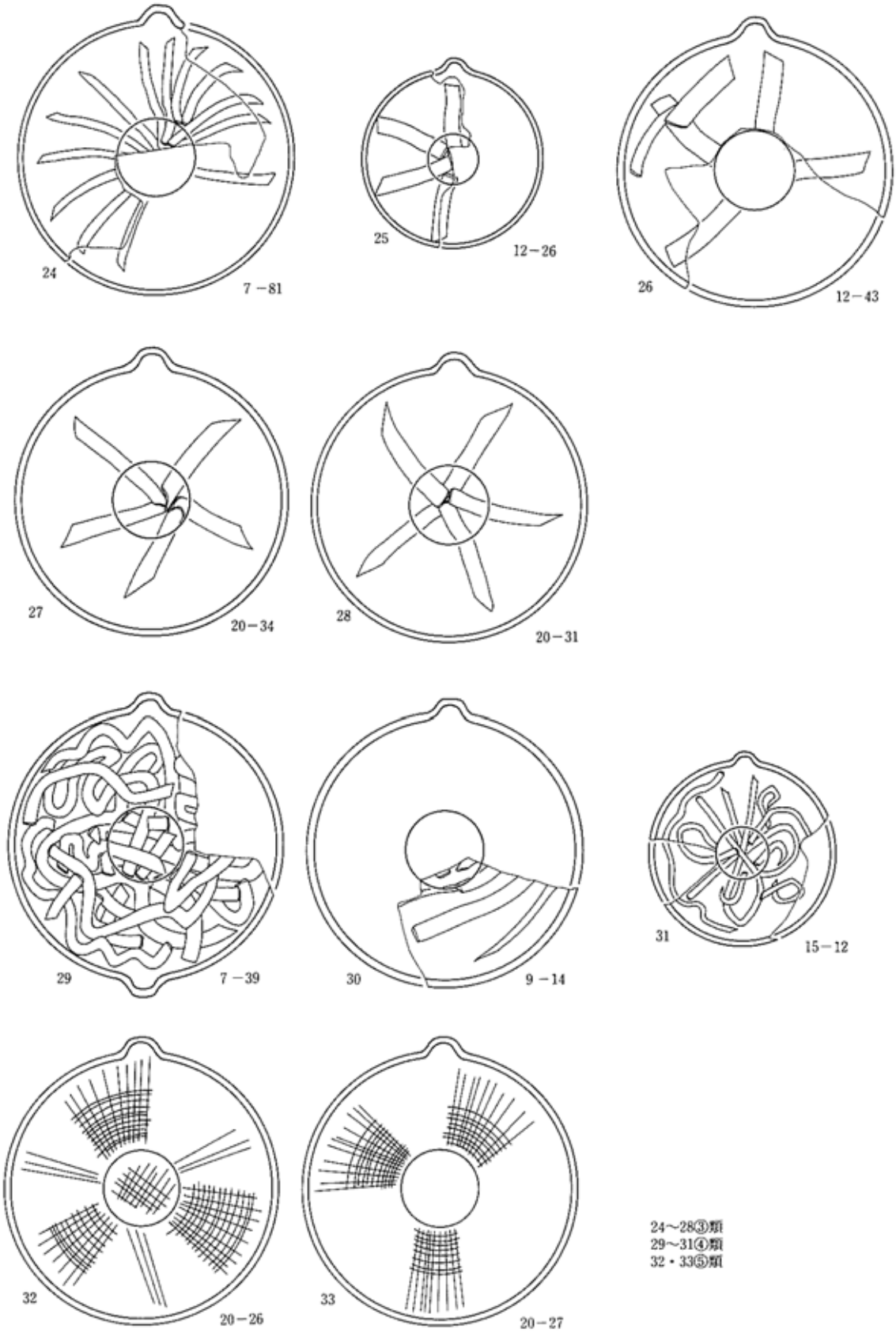
第127図　筋目の入れ方



第128図　播鉢筋目模式図（1）



第129図　擂鉢筋目模式図（2）



第130図　擂鉢筋目模式図（3）

⑤：1 本単位で格子状に書かれているもので、2 個ある（第 130 図 32・33）。

【火鉢】

破片も含めて、16 個体出土している。大きな鍔を有するもの（Ⅰ類）と、鍔が付かず浅い鉢形を呈するもの（Ⅱ類）の 2 つに分類される。

Ⅰ類は 13 個体ある。窯跡で焼成されている全体の製品の中に占める割合は低いが、Ⅲ･Ⅳ群のほとんどの窯跡から出土しており、当該時期においては普遍的に存在する器種と考えられる。

大きさは口径 33～46㎝、鍔の外径 43～58㎝、高さ 11～17㎝ ある。器形は体部が直線的に外傾し、上半が屈曲して大きく外反し、鍔となっている。屈曲部から口縁部が立ち上がっている。

底部は平坦で薄く作られている。脚の有無については不明であるが、ＳＲ-07 窯跡からは獣脚状の脚部が出土している。

鍔は幅 4～5㎝ あり、貫通する穴が穿たれている。ＳＲ-02-2 には合計 8 個の穴が対称の位置にあり、ＳＲ-04-10 には穴が 12 個程度あると考えられる。鍔の端部は角形になるもの、丸くおさまるもの、上方につまみ上げたものなどがみられる。器面調整は全体に回転台によるナデ調整が行なわれている。口縁部や鍔、体部の内面については特に丁寧な調整が施されているのに対して、体部外面の調整はこれに比べると雑で成形時の指頭痕がそのまま残るものもみられる。

Ⅱ類は、直径 20㎝ 程度の小形のもの（Ⅱａ類）と、40㎝ 程度の大形のもの（Ⅱｂ類）とがある。前者は 2 点あり、底部から内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部にいたる。ＳＲ-04-21 は口縁部が角形を呈し上面は平坦になる。口縁部から体部内面はロクロによる丁寧なナデ調整が行なわれており、体部外面にはヘラ書きによる花文（菊花文）が施されている。ＳＲ-04-22 は口縁部が丸くおさまる。調整は内外面とも回転台によるナデ調整で、体部外面には「◎」のヘラ書きが連続して行なわれている。

後者はＳＲ-01-5 の 1 点のみである。口縁部付近の破片で、全体の形態については不明である。口縁部は角形を呈し上面は平坦になる。体部の上半にはⅠ類のものと同様に貫通孔が穿たれている。

【卸皿】

ＳＲ-04 窯跡とＳＲ-11 窯跡から合計 4 点出土している。平面形が円形のものと楕円形のものがある。ＳＲ-04-6･7･28 は円形で、ＳＲ-04-6 は直径約 14㎝、ＳＲ-04-7･28 は直径約 10㎝ ある。粘土板（底部）に粘土紐を 1 段程度積み上げて浅い皿を作り、回転台によるナデ調整を加えた後に半円形の工具（竹を半裁したもの）を連続的に刺突して卸目としている。刺突は 1 列ごとに方向が逆になっている。大きなＳＲ-04-6 は、見込みの中心に沈線を引いて器面を 2 分割したのち、卸目が施されている。

ＳＲ-11-15 は楕円形で、10×12㎝ 程度と推定される。手捏ねにより、薄い粘土板の周囲を上方に折り曲げて縁としている。卸目は沈線による 5～10㎜ 間隔の格子状である。

【陶硯】

1 点出土している。ＳＲ-04-14 は長方形で、幅 6㎝、長さ 11㎝ である。硯面を隆線で二等分してい

る。

【五輪塔】

ＳＲ-04 窯跡から火輪が、ＳＲ-03 窯跡から水輪が出土している。いずれも組合わせ式のものである。

水輪は破片すべてが二次焼成を受け、焼台として使用されていることから、ＳＲ-04 窯跡で焼成された後、ＳＲ-03 窯跡で焼台に転用された可能性もある。ただし、この 2 個体は、器面の調整や胎土の状態に大きな差異がみられることから組み合うものではないと考えられる。

火輪は、軒口が比較的厚く、勾配や軒の部分が緩やかに反った作りとなっている。上部は、天井部に露盤（一辺約 15cm、高さ約 2cm）が作り出されており、空風輪との接続部には直径約 10cm のホゾ穴が開けられている。下面はほぼ平坦に作られており、水輪との接続部となる中央には直径 28cm の穴が開けられている。大きさは軒幅約 48cm、高さ約 24cm で、この部分から推定される五輪塔全体の高さは 1mにも達すると考えられる。軒の中央にはヘラ状工具で書かれた種子が 1 文字認められる。また、他の面についても種子が書かれている可能性があるが小片のため確認できなかった。種子は文字の半分程度が認められるのみであるが、残存部から「𑖀・アー」もしくは「𑖁・アク」と考えられる。ところで、本来火輪には「𑖭・ラ」の種子が書かれ、「𑖀・アー」「𑖁・アク」はそれぞれ地輪の東方発心門・北方涅槃門の位置に書かれているのが一般的である。どのような理由から、本来用いられるべき種子が書かれなかったのか不明であるが、福岡県太宰府市五条遺跡では水輪の位置に「𑖀・アー」が陰刻された五輪搭が出土している。

水輪は球の上下を切り取った形をしている。焼台として再利用されたため、歪みが著しい。大きさは直径約 32cm、高さ 23cm である。全体の 1/2 程度残存するが、種子等は認められなかった。

【陶錘】

1 点出土している。ＳＲ-01-1 は紡錘形を呈し、長さ 7.4cm、最大径 2.4cm である。中央に径 4mm の穴が貫通している。全体に指痕が残っていることから、作り方は細い棒に粘土を巻き付け、それを手で握って形を整えたと考えられる。

【その他の遺物】

ＳＲ-11 窯跡から盆状の製品が出土している。ＳＲ-11-16 は長方形を呈し、幅 11cm、長さ 18cm、器高 2.4cm である。長方形の粘土板の周縁に粘土紐を 1 段積み、端部を上方につまみ上げて縁としている。縁の部分はナデ、その他の部分はヘラケズリされている。小形の仏花瓶 1 対、小皿 1 点と共に出土しており、これらを載せるための台であると考えられる。

(2) 遺物の組合せと変遷の検討

出土遺物の内容は前述のとおりである。各窯跡から出土した遺物を比較すると、窯跡によって主体となる遺物の種類に偏りがみられ、下表のように、第 1 群遺物と第 2 群遺物の大きく 2 つのグループ

に分かれる。前者はＳＲ-14・15・20 窯跡に代表され、後者はＳＲ-01・04・12 窯跡に代表される。

		甕	広口壺	短頸壺	小壷	玉縁壷	擂　鉢	火鉢	五輪塔	卸皿
第１群	主体	ＩＡ	ＩＡ・ＩＢ	Ａ・Ｂ	○	○	Ⅲ-A1・A2・B1・B2			
	少量	ＩＢ	ⅡＣ				Ⅱ			
第２群	主体	ⅡＢ	ⅡＣ	Ａ・Ｃ	○		Ⅲ-C3・C5	○	○	○
	少量	ＩＢ・ⅡＡ	Ａ・ⅡＢ	Ｂ			Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-B3・B5			

第１群遺物の器種組成は基本的には甕・壷類・擂鉢の３種である。

甕は、全体的に縦長で、口唇部が長いＩＡ類が主体を占める。ＳＲ-20 窯跡では図示できた７個中６個が甕ＩＡ類で残りの１個は甕ＩＢ類となっている。

壷類には、広口壷・短頸壷・小壷・玉縁口縁壷があるが、短頸壷・小壷・玉縁口縁壷は量的に少ない。広口壷は肩が張り、口唇部の長いＩＡ・ＩＢ類が主体を占める。短頸壷は量的に少なく、口縁端部が受け口状を呈するＣ類はみられない。

擂鉢は、Ⅲ類では、口径に比して底径が大きめで、体部が直線的に外傾するA1・A2・B1・B2 類が主体を占める。Ⅱ類が少量あるが、Ⅰ類は見られない。ＳＲ-20 窯跡では筋目の施条されたものの中に⑤類の棒状工具による格子状の筋目のものがある。

つぎに、第２群遺物についてみてみる。この群の器種組成も基本的には甕・壷類・擂鉢の３種であるが、第１群遺物にはみられない火鉢が含まれるようになる。また、ＳＲ-04 窯跡ではこれら以外に五輪塔・卸皿・火鉢などの特殊な器種も焼成されている。

甕は器形的には膨らみのある形で、口唇部の引き出しが短いⅡＢ類が主体を占め、ＩＢ・ⅡＡ類が若干みられる。

壷類には、広口壷・短頸壷・小壷があり、短頸壷の占める割合が第１群遺物と比べ高まる。広口壷は肩が張らず、口唇部の短いⅡＣ類が主体を占め、他にⅡＡ・ⅡＢ類がみられる。短頸壷は口縁部の角張るＢ類はほとんどみられず、端部が丸くおさまるＡ類と受け口状を呈するＣ類が約半数を占めている。

擂鉢は、Ⅲ類では、口径に比して底部の小さなもので、体部が外反気味に立ち上がるC3 類や、急角度で立ち上がったのちに外反するC5 類が主体を占め、他にB3・B5 類がみられる。また、ＳＲ-01・04 窯跡のものは底部付近の器壁が厚めに作られているものが多く、外径に比して見込みの径が小さく感じられるものが多い。他に、Ⅰ・Ⅱ類が若干見られる。筋目の施条されたものはすべて櫛歯によるものである。

一本杉窯跡群の 20 基の窯には、窯跡本体や灰原の重複関係から大きく 4 時期の変遷が認められることは前述のとおりである。

この中で第１群遺物を出土するＳＲ-20 窯跡は最も古い段階のＩ群に、ＳＲ-14･15 窯跡はⅡ群に位置

付けられており、第 2 群遺物を出土するＳＲ-01･04･12 窯跡は最も新しい段階のⅣ群に位置付けられている。したがって、第 1 群遺物が第 2 群遺物に先行するものであることは明らかである。

これら以外の窯跡をみると、第 1 群遺物に近い特徴をもつ遺物を出土する窯跡はＳＲ-10・17・18・19 窯跡､第 2 群遺物に近い特徴をもつ遺物を出土する窯跡はＳＲ-02・03・05～09・11 窯跡である。したがって、第 1 群遺物は第Ⅰ・Ⅱ群の時期の窯跡から出土し、第 2 群遺物はⅢ・Ⅳ群の時期の窯跡から出土することがわかる。

ただし、第 1 群遺物と第 2 群遺物との相違点は、器形の微妙な違いや主体となる器種の占有率の違いという程度であり、両者の間に形式差を認めるには至らないものであると考えられる。

(3) 他窯跡との比較と年代について

ここでは他の窯跡群と比較することによって、一本杉窯跡群の特徴を明らかにし、年代について検討する。

① 他支群との比較

一本杉窯跡は白石古窯跡群の一支群である。白石古窯跡群は一本杉・東北・黒森・市ノ沢の 4 支群からなっており、これらの群は高田川によって開析された低地を取り囲むように径約 1ｋｍの範囲内に存在している。

一本杉以外の他の支群は発掘調査は行なわれておらず、遺物も藤沼邦彦氏や中橋彰吾氏らにより表面採集されたものがあるにすぎないが、どの支群も瓷器系の中世陶器を焼成していること、器種組成は基本的には甕・壷・擂鉢の 3 種であることが知られている（藤沼：1976 他）。

遺物の胎土、焼成、縁帯のつくりなどは一本杉窯跡群と大きく変わらず、東北窯跡群では筋目のある擂鉢も認められている。また、市ノ沢窯跡群からは五輪塔の地輪の一部とみられる破片も出土している。

これらの支群の変遷については不明な点が多いが、東北窯跡群からは一本杉窯跡群ではみられなかった押印をもつ甕の体部片が採集されている。押印は、時期が新しくなると存在しなくなることが指摘されており、このことからすれば東北窯跡群は一本杉窯跡群より早くから操業していた可能性がある。

② 周辺の諸窯跡群との比較

ここでは、一本杉窯跡群と地理的に近い東北南部の中で、常滑系とされる諸窯跡群の出土遺物と比較してみる。

【八郎窯跡群との比較】

福島県梁川町八郎窯跡群は本遺跡の南方約 15ｋｍと最も近い場所にある。焼成された器種は基本的

に甕・壷・擂鉢の 3 種類である（飯村・寺島 ; 1987）。八郎窯跡群ではこの 3 種に限定されるのに対し、一本杉窯跡群ではこれら以外に五輪塔や仏花瓶などの仏具や火鉢、卸皿などの少数の特殊品が存在する点で異なっている。

器種ごとに形態をみると、甕では口縁部が縁帯を有し受け口状を呈するという点では共通するが、八郎窯跡群のものは一本杉窯跡群と比べ縁帯の幅も狭く、端部の引き出しも短い。また、体部には一本杉窯跡群では全くみられなかった押印が施されている。

壷は広口壷と短頸壷があり、その特徴は両者に大きな差異は認められないが、量的には八郎窯跡群では短頸壷が「特異な壷」と報告されているようにわずかな例が認められているにすぎない。

擂鉢は製作に回転台を使用し片口を有するという点では共通するものの、八郎窯跡群ではかなりの割合で高台を有する（39／46）点や筋目の施されたものが全くみられないなど一本杉窯跡群と異なる様相もみられる。

八郎窯跡群の年代については、常滑窯との比較や熱残留磁気による年代測定から、「13 世紀前半」とされている（飯村 : 1987・1992）。甕の口縁部の縁帯は新しい時期のものが広くなっており、擂鉢の高台は基本的にあるものからないものへと変遷したとされていることから、八郎窯跡群は一本杉窯跡群より古いものと考えられる。

【宮城県北部の多高田窯跡・熊狩窯跡群との比較】

主な器種構成は、いずれも甕・壷・擂鉢の 3 種であるが、熊狩窯跡群ではこれに皿が加わる。また、一本杉窯跡群では少数の特殊品が存在することが他窯跡と異なる。

器種ごとにみると、窯では口縁部に縁帯を有し受け口状を呈するという点は共通するが、熊狩窯跡群では体部に押印の施されたものが出土する点で異なっている。

壷類は各窯跡間で大きな相違がみられる。口縁部が縁帯を有し受け口状を呈する大形の広口壷 1（熊狩窯跡群の報告書では「甕Ｂ」）や小壷はいずれにも共通してみられるものの、熊狩窯跡群では壷Ａ類、多高田窯跡では壷Ｂ類と分類されている比較的頸の長い壷が、一本杉窯跡群では 1 点しか出土せず、前二者とは異なっている。また、一本杉窯跡群の第 2 群遺物に特徴的な短頸壷（Ｃ類）は両窯跡からは出土していない。

擂鉢はいずれの窯跡でも法量的に大中小の 3 種みられることや、無高台である点は共通する要素であるが。多高田窯跡や熊狩窯跡群では筋目をもつものは出土していない。

このように、多高田窯跡・熊狩窯跡群では甕の体部に押印があることや、筋目のある擂鉢が存在しないという、一本杉窯跡群に比べて若干古い要素がみられ、このことからすればこれらの窯跡が一本杉窯跡群に先行することが考えられる。

③　他地域の窯跡との比較

ここでは、遠隔地ではあるが、当時の窯業の先進地域である常滑・越前・加賀・越後の諸窯跡と比較してみる。

【常滑窯との比較】

愛知県常滑窯跡群は 12～16 世紀まで操業していたものと考えられ、大きく三段階 14 型式期の変遷が考えられている（赤羽・中野：：1994）。

器種ごとにみてみると、甕は、口縁部が縁帯を有し受け口状を呈する点や縁帯が下方に垂れない点で 5 型式期と類似するが、頚部から口縁部のプロポーションは 6 a 型式期と類似している。

鉢類は、常滑窯では 5 型式期の後半には、片口鉢Ⅱ類の無高台化が始まり、6 a 型式期には高台をもつものは見られなくなる。一本杉窯跡群では高台はほとんど認められておらず、当該期の無高台化という流れのなかで捉えられるものと考えられる。しかし、一本杉窯跡群では擂鉢のなかに筋目をもつものが 10～20％含まれるのに対し、常滑窯においては全時期を通して擂鉢に筋目は認められないという相違点がみられる。

壷類の中では、広口壷は、甕と同様、全体的器形や口縁部形態等の点で 5～6 a 型式期と類似する特徴がみられる。一方、一本杉窯跡群では一定の割合でみられる短頚壷は、常滑窯では 2 型式期までの古い段階に存在するのみで、5～6 a 型式期にはない器種である。また、常滑窯では 5～6 a 型式期に出現する玉縁口縁壷が、1 点のみであるが一本杉窯跡群からも出土していることが注目される。

このような差異は、基本的には、本窯跡群を含めた陸奥南部の常滑系窯跡に共通してみられ、「地方色＝地域性」と捉えられており、ある時期に常滑から導入された技術が、それ以降に技術導入がなかったため、地域の中で常滑窯とは異なる展開を示したためと考えられている（飯村：1994）。

年代は、上述のように地方色があるため直接比較はできないが、甕の口縁部形態などから、常滑編年の 5 型式期よりも遡るものではなく、5～6 a 型式期に近い時期とみておきたい。

【北陸諸窯との比較】

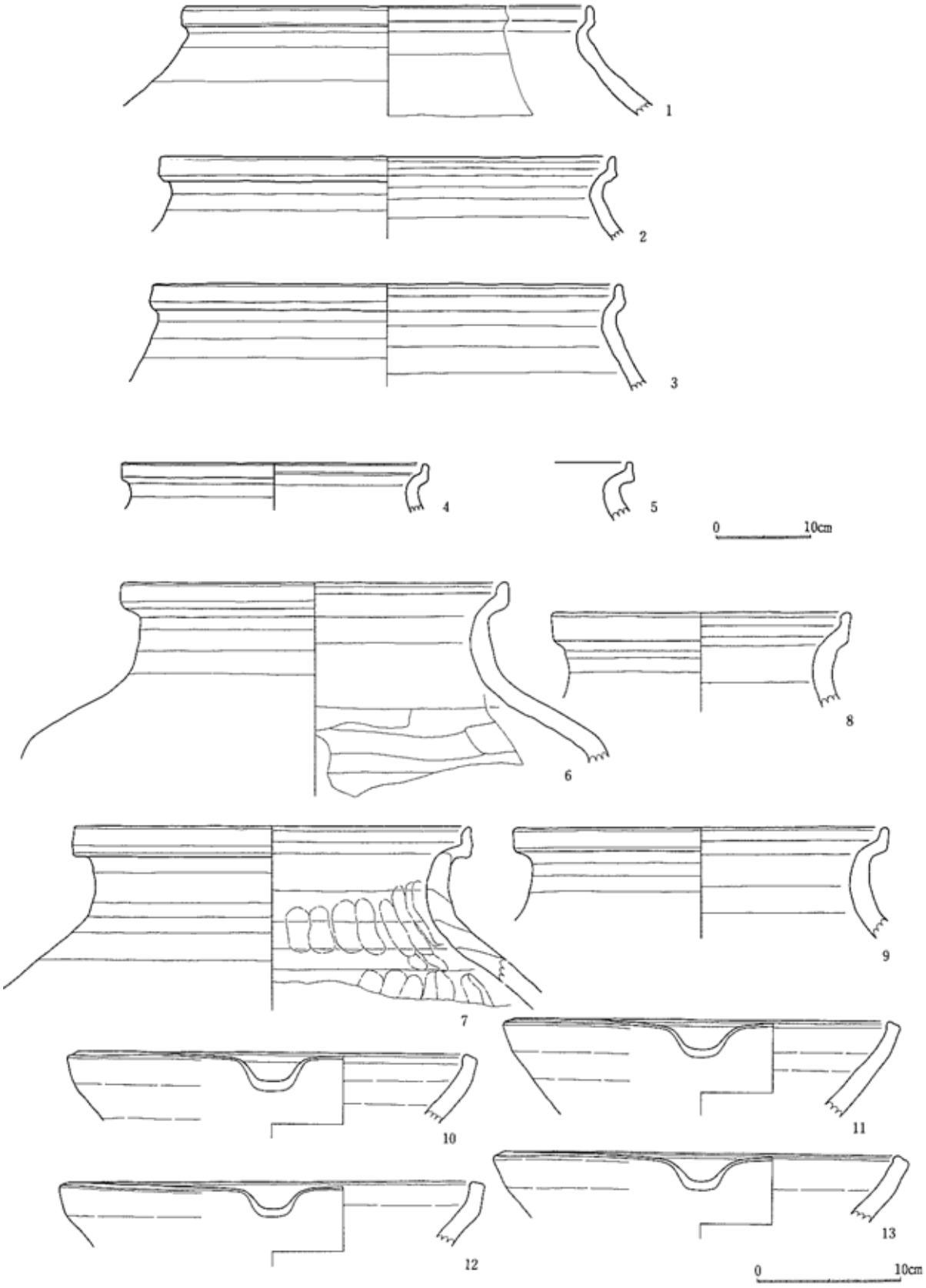
［越前窯］

福井県越前窯跡群は、これまで 12 支群約 200 基の窯跡が確認されており、12 世紀末から 16 世紀末頃まで操業していたと考えられ、大きく 5 時期の変遷が知られている。越前窯の中で一本杉窯跡群のものと類似する窯跡に福井県水上窯跡群があり、Ⅱ期の後半（13 世紀後半）に位置付けられている（田中：1994）。

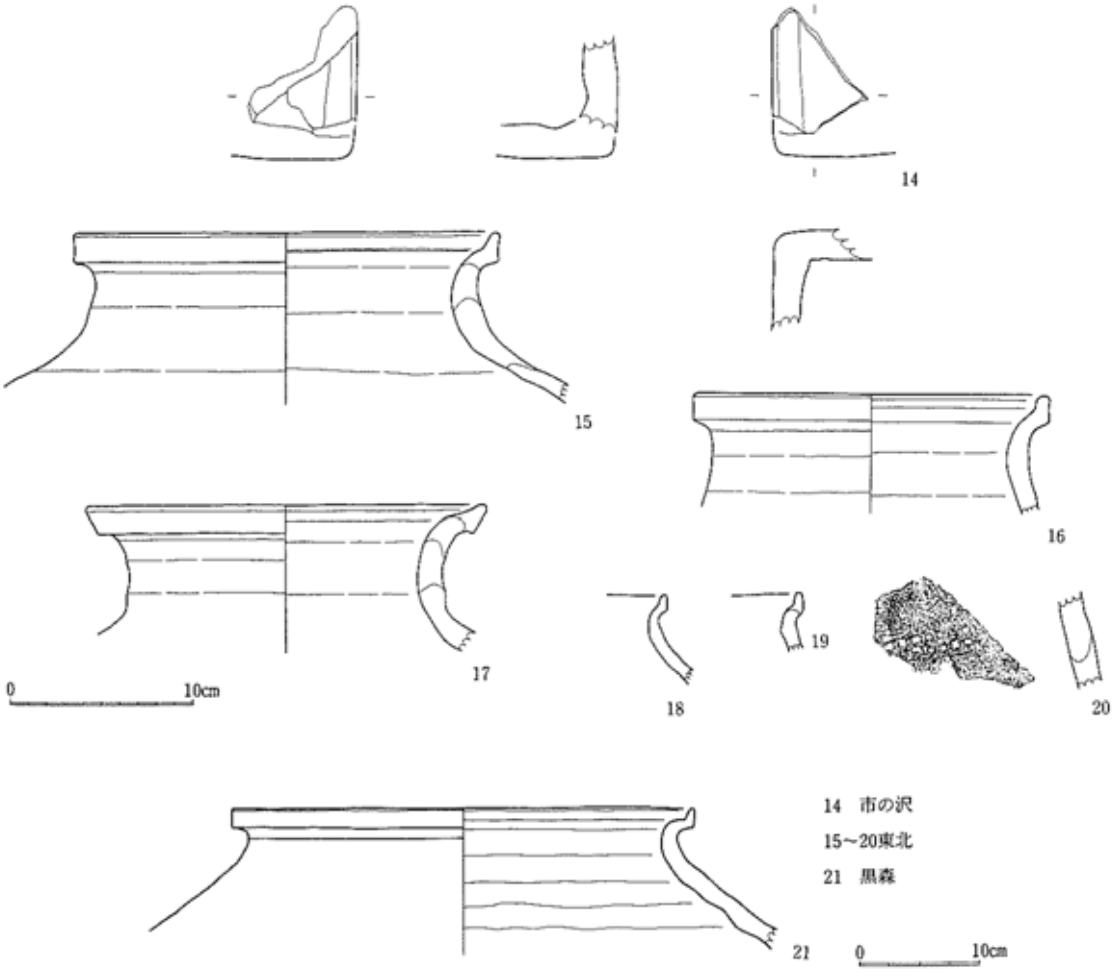
越前窯のⅡ期の甕は幅の広い縁帯をもち、縁帯側面がほぼ垂直で口唇部の引き出しも長く、端部の作りがしっかりしている。この時期以降、縁帯は幅を狭め口唇部の引き出しも短くなり、内側に痕跡的に樋口状の受け口をもつものへと変化していく。宮城県周辺の諸窯跡と同様に、縁帯が常滑のように発達することなく退化していくという、地域独自の変化がみられることは注目される。

擂鉢類は器形が直線的に外傾するなど類似する点もあるが、水上窯跡群では多くのものが高台をもつこと、筋目をもつものはⅣ期の後半（14 世紀後半）以降にしか見られないなど相違する点も多い。

また、越前窯ではこの時期にヘラ書きによる鳥や植物の装飾文の施された製品の増加が指摘されており、一本杉窯跡群でヘラ書きの施されたものが多く見られることと共通する。



第131図　市ノ沢窯跡出土遺物



第132図　市の沢窯・東北窯・黒森窯出土遺物

［加賀窯］

加賀窯は越前窯に近い石川県南西部の那谷町・西原町を中心に分布する瓷器系陶器を生産する窯跡群で、これまで12群35基の窯跡が確認されている。12世紀末から14世紀末頃まで操業していたものと考えられ、大きく6時期の変遷が考えられている（宮下：1992）。

一本杉窯跡群の遺物と比較すると、甕は短く外反した口縁部にあまり発達しない縁構を有する点で、擂鉢は無高台で、筋目を施条したものがかなりみられる点で、第Ⅲ期（13世紀中～後半代）のものと類似している。

また、Ⅱ期（13世紀前半代）の那谷町カナクソダニ窯跡からは肩から体部にかけて櫛歯による波状文の装飾の加えられた甕が出土している（宮下：1992）。同様の文様が施文された壷は一本杉窯跡群（ＳＲ-07窯跡）からも出土している。

［五頭山麓中世窯跡群］

五頭山麓中世窯跡群は新潟県北東部の五頭連峰西麓に分布し、須恵器系陶器と瓷器系陶器を生産した2系統の窯跡の存在が認められている。瓷器系の窯跡には笹神窯跡群・赤坂山窯跡群などがあり、北沢窯跡群などの須恵器系の窯跡に後続するものと考えられている（川上：1992）。

一本杉窯跡群に類似するものには赤坂山窯跡群出土（14 世紀前葉）のものがある。共通する特徴としては、甕類は短く外反する口縁部が受け口状を呈する点や、擂鉢の大半が無高台で筋目が施条されていることなどがあげられる。しかし、赤坂山窯跡のものには、口縁部断面がN字形を呈し、縁帯下端が垂れるものが多く見られる点や、甕の体部に押印が見られる点で異なっている。

④　年代

地理的に近い八郎窯跡との対比では、一本杉窯跡群は 13 世紀前半頃とされている八郎窯跡より新しく、これに後続する年代が考えられる。また、一本杉窯跡群と同様に白石古窯跡群の支群である東北窯跡群も、八郎窯跡に後続するものと考えられており、東北窯跡群には一本杉窯跡群より古い要素が見られることを考え合わせると、一本杉窯跡群の年代はおおよそ 13 世紀後半頃と思われる。

なお、東北窯跡群が先行して操業していた可能性があることや、一本杉窯跡群では窯跡の数と焼成面数からある程度長期間操業していたと推定されることなどから、廃絶の時期は 14 世紀に下る可能性も考えられる。

また、常滑窯などの他地域の窯跡と比較してみると、いずれも 13 世紀後半頃～14 世紀前半頃の時期のものと特徴が類似しており、上述の推定を裏付けている。

なお、後述する消費地での状況も、13 世紀～14 世紀の遺物と共に出土しており、年代的な矛盾は見あたらない。

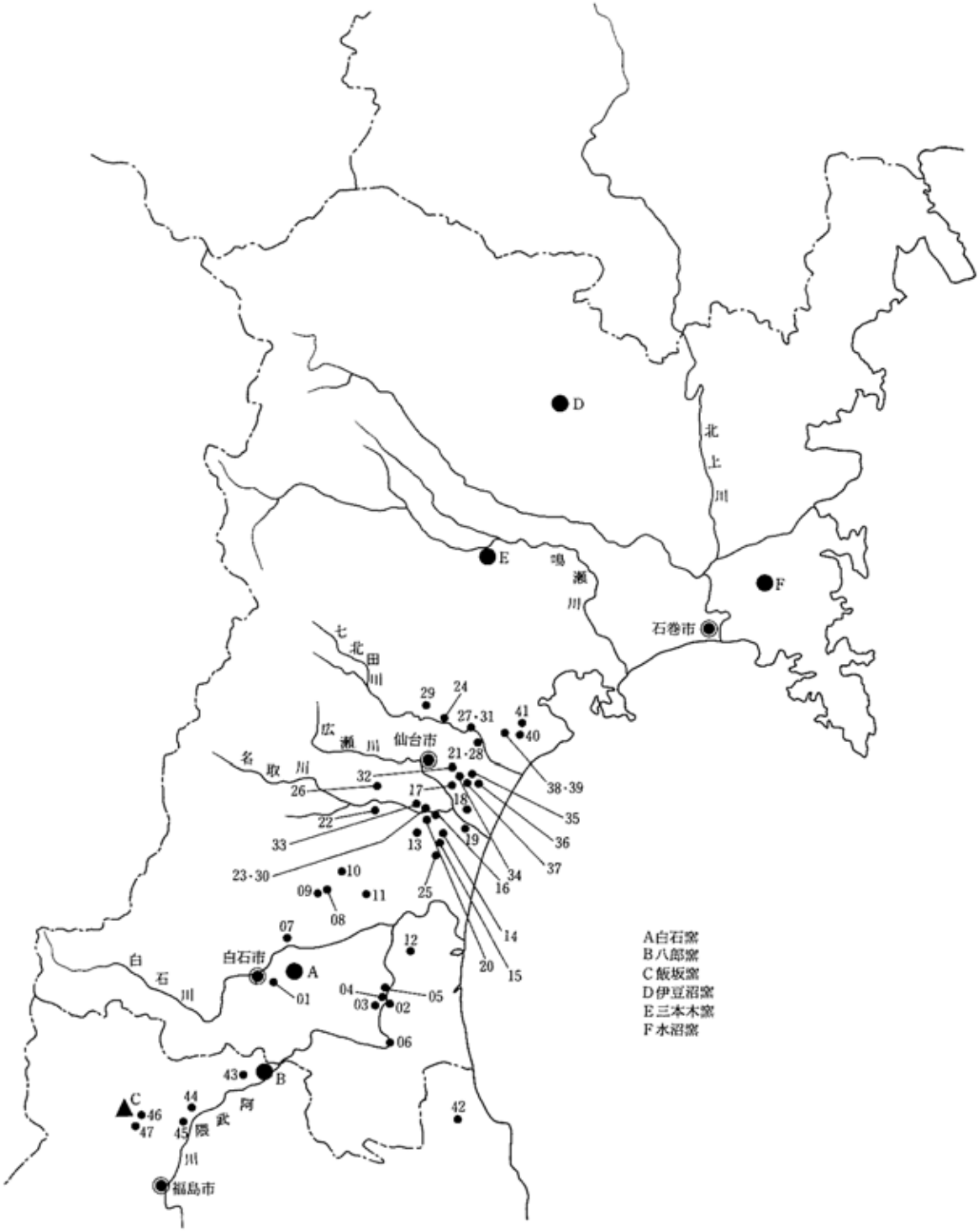
(4) 消費遺跡との関連

ここでは、城館や集落などの消費遺跡との関連について検討してみる。なお、白石古窯跡群の 4 つの支群（一本杉・東北・市ノ沢・黒森）で生産されている製品は大きな型式差がみられず、しかも焼成の状況や胎土も類似しており、消費遺跡から出土した遺物を支群ごとに区別することは不可能である。ここでは 4 つの支群を一括して「白石窯」の遺物として扱うこととする。

現在のところ白石窯産と考えられる遺物が報告されている遺跡は 47 ヶ所あり、宮城県中南部から福島県北部の広い範囲にわたって分布している（第 133 図、藤沼・千葉：1992 に加筆）。大まかにみると阿武隈川流域と名取川・広瀬川流域そして七北田川流域に多い。流通に関して、これらの河川が大きな役割を占めたことが想定される。

阿武隈川流域の遺跡には、角田市田町裏遺跡（斎藤：1991 他）や郡山遺跡（新庄屋：1980）、丸森町矢ノ目遺跡（後藤：1984）や県境を越えて桑折町金谷館跡（東北歴史資料館：1983）、福島市医天王寺跡（藤沼：1983）などがある。また、名取川・広瀬川流域の遺跡には、仙台市松木遺跡（工藤・佐藤：1986）や今泉城跡（佐藤：1983）、王ノ壇遺跡（小川：1993）などがある。これらの遺跡では消費されている陶器のなかでも白石窯産陶器の占める割合が他地域に比べてかなり高くなっている。

七北田川流域の遺跡には、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡（白鳥・加藤：1974）や多賀城市新田遺跡（石川・千葉：1990）・山王遺跡などがあり、これらが現在知られている中では分布類の北限となっている。



01	谷津川遺跡	13	川上遺跡	25	栗遺跡	37	地蔵堂遺跡
02	郡山遺跡	14	清水遺跡	26	町田遺跡	38	新田遺跡
03	住社遺跡	15	中田南遺跡	27	東光寺遺跡	39	山王遺跡
04	田町裏遺跡	16	安久遺跡	28	洞ノ口遺跡	40	高崎遺跡
05	吉野城跡	17	南小泉遺跡	29	長命館跡	41	西沢遺跡
06	矢ノ目遺跡	18	今泉遺跡	30	王ノ権遺跡	42	三貫地遺跡
07	持長地遺跡	19	四郎丸遺跡	31	若宮前遺跡	43	金谷館跡
08	赤鬼上遺跡	20	松木遺跡	32	国分寺跡	44	土井の内遺跡
09	戸の内縄遺跡	21	湯ノ巣遺跡	33	裏町古墳	45	大樋遺跡
10	東足立遺跡	22	山田条里遺跡	34	中在家南遺跡	46	大鳥城跡
11	戸の内遺跡	23	富沢遺跡	35	明屋敷遺跡	47	医王寺遺跡
12	館南遺跡	24	赤生津遺跡	36	岡崎遺跡		

第133図　白石窯産中世陶器出土遺跡

なお、宮城県の北部地域に関しては調査例が少ないことや、白石窯とほぼ同時代に操業した多高田窯跡や伊豆沼古窯跡の製品との識別が困難であるため不明な点も多い。この地域については今後の調査例の増加や整理作業が進展すれば、分布域はさらに北に拡大する可能性がある。

次に、これらの遺跡での出土状況や、共伴する遺物について検討する。

蔵王町持長地遺跡は阿武隈川に合流する白石川の流域に存在する遺跡で、中世の武士階層の屋敷跡と考えられている。表土中から東北窯跡で採集されている正格子の押印と同一意匠の押印をもつ甕と擂鉢（筋目の有るものを含む）、常滑5～6ａ期に対比できる甕（同一個体と考えられる甕が4号建物跡から出土）が出土している（黒川：1980）。

名取市川上遺跡は名取川流域の遺跡で、中世の名取熊野那智神社の門前町と考えられている。多数の建物、土倉、井戸などの遺構とともに多量の陶磁器類が出土している。中でもＳＤ-01 溝跡の堆積土からは白石窯産の甕・擂鉢とともに常滑5期の甕・擂鉢や、13～14 世紀に位置付けられる中国浙江省龍泉窯産の青磁碗などが出土している。また、ＳＫ-02 土壙からは白石窯に特徴的な受け口状を呈する短頸壷が、基本層位のⅡ層からは龍泉窯産の双魚文の青磁碗が出土している（恵美：1990）。

仙台市今泉城跡は中世から近世にかけての城館跡である。館内を区画する溝跡や井戸跡から多くの陶磁器類が出土している。なかでもＳＤ-11 溝跡の遺物は比較的まとまっており、堆積土中から白石窯産の甕・小壷・擂鉢（筋目の有るものを含む）と、常滑5期の甕と6期の壷や瀬戸Ⅲ期の瓶子（もしくは梅瓶）が出土している。

仙台市松木遺跡は古代から近世までの屋敷・集落跡で、Ⅱ期（12～14 世紀）の遺構群は武士階層の屋敷跡と考えられている。この時期のＳＫ-130 土壙では白石窯産の広口壷と 13～14 世紀に位置付けられる中国産の青磁（盤・碗）、ＳＤ-02 溝跡では白石窯産の甕と 13 世紀代とされる瀬戸産の卸皿がそれぞれ堆積土中から出土している。

多賀城市新田遺跡は中世の方形区画をもつ屋敷跡と考えられている遺跡である。区画の溝や堆積土（基本層位Ⅲ層）から多くの陶磁器類が出土している。ＳＤ-634 溝跡からは白石窯産の小壷・甕・擂鉢と常滑5期の壷が、ＳＤ-637 溝跡からは白石窯産の擂鉢と常滑5期の甕・擂鉢がそれぞれ堆積土中から出土している。

このほかにも、亘理町館南囲遺跡（古川他：1991）では白石窯産の擂鉢（筋目の有るものを含む）と常滑6ａ期の甕や13 世紀中頃～14 世紀初頭にかけての龍泉窯産の青磁碗が、角田市郡山遺跡（新庄屋：1980）では白石窯産の甕・擂鉢（筋目の有るものを含む）と常滑5～6期の甕が、柴田町戸ノ内遺跡（佐々木：1980）では白石窯産の甕・壷と常滑6期の甕が表土から出土している。

白石窯の製品を出土する遺跡の概要は上記のとおりである。明確な共伴関係はつかめないものの、常滑5～6ａ期（13 世紀中葉～13 世紀末）の甕・擂鉢、13～14 世紀の中国製の青磁、13 世紀代とされる瀬戸産の施釉陶器などとともに出土する例が多く白石窯製品の使用・廃棄年代の一端が窺われる。

4．「ヘラ書き」をもつ遺物について

今回出土した遺物の中でヘラ書きの認められるものが合計 164 点出土している。ヘラ書きの種類には文字・記号・文様の 3 種があり、この中で文字を書いたものには文章・銘・月日などを複数の文字で表記したものと、一文字のみ書かれたものとがある。また、文様の中には、記号を連続することによって装飾的な効果を発揮させているものもある。

【複数の文字が書かれているもの】

4 点出土している。

ＳＲ-07-122（以下、ＳＲは省略し、7-122 のように表記する）は広口壷の頸部に、かな文字による 6 行分の文章が非常に細い工具で書かれたものである。解読できないが、初めの 3 行は同じ文章が書かれている。京都府由良川河口付近出土の越前産の甕（水野：1981）や、渥美窯の惣作 10 号窯跡出土の碗（小野田：1982）などでは和歌や戯れ歌が書かれたものがあり、本例についても同様のものかと考えられる。

4-19 は火鉢の鍔の部分で、同一個体と思われる破片が 3 点出土している。それぞれ「津久る主者平四□」「□□文？等」「□□□」と刻まれており、作者名が「平四□」であることを表している。

4-90 は火鉢の鍔の部分に「□十五日」、表士-4 は甕の体部に「十一月十□」と月日が刻まれている。

ところで、14 世紀代以降の刻銘陶器の大半は、作者あるいは窯元が寺社に寄進したものと考えられている（吉岡：1991）。したがって、4-19 についてもこういった意図で製作された可能性が考えられる。4-90 や表士-4 は日付のみの破片で断定はできないが、日付の前に年号が記されていたとすれば同様の可能性が考えられる。

【1 文字あるいは記号 1 つのもの】

122 点あり、全体の約 75％を占める。上・大・夫・円などの漢字や、崩した文字を書いたものと、‖・|||・廾・卅・×などの直線や曲線を組み合わせた記号的なものとがある。器種と部位が判明したものは 111 点で、擂鉢の体部内面 87 点、擂鉢の見込 1 点、甕の体部外面 5 点、甕の頸部外面 2 点、短頸壷体部 5 点、小壷体部 3 点、小壷見込 1 点、種別不明の壷の体部外面 7 点であり、擂鉢が大半で、壷類がこれに次ぐ。

〈1 文字のもの〉

「上」は 5 点認められた。正位のものが 1 点（第 134 図 4-92）と倒位のものが 4 点ある（第 134 図 4-94・95、10-16、12-56）。擂鉢の体部内面 4 点、垂体部外面 1 点である。

「大」は 8 点認められ、正位のもの 7 点（第 134 図 4-84、7-112・114、8-24・25）と倒位のもの 1 点（第 134 図 4-91）がある。擂鉢体部内面 7 点、垂体部外面 1 点となっている。

これら「上」「大」は、古代の墨書土器の中にも比較的多く見られるもので、多賀城市山王遺跡（吉野：1996）や白石市青木遺跡（小川：1981）でも数多く出土しており、吉祥文字と考えられているが、正確な意味は明らかではない。

「夫」は2点（第134図7-113･117）、「円？」（第134図1-29）は1点認められ、いずれも正位に書かれている。3点とも擂鉢の体部内面に書かれている。

この他、「草書体の文字」をヘラ書きしたものが4点認められる（第134図1-14、15-18、19-3、20-29）。かなり崩れた文字であるため判読はできない。うち3点は擂鉢の体部内面に、1点は小壷体部外面に書かれている。似たものとして愛知県武豊町中田池A-1号窯跡出土の陶硯の銘文の末尾に刻された花押がある（武豊町：1990）。本遺跡のものはこれより単純化されており、単独で書かれていることから不明確である。

〈記号1つのもの〉

縦に直線を2本引いた「‖」は11点認められる（第134図1-13・26・27、2-28、3-6、4-58・59・62、12-50、表土-11）。うち9点は擂鉢の体部内面に、2点は壷もしくは甕の体部外面に書かれている。

縦に直線を3本引いた「|||」は12点認められる（第134図1-15、2-26、4-49・51・52・57、5-17・19・20、8-29、12-44・55）。うち11点は擂鉢の体部内面に、1点は壷もしくは甕の体部外面に書かれている。

直線を直交させた「＋」あるいは「×」が17点認められる（第135図1-16、4-61・63・93、7-121）。このうち、書かれた部位の方向などから「＋」と考えられるものが9点（第135図4-5・46・47、7-136、11-28、12-26、15-21、18-3）、「×」が2点ある（第135図4-86、8-31）。また、櫛歯によって書かれたものと（第135図4-81）、＋を〇で囲んだもの（第135図20-44）が1点ずつみられる。部位は、擂鉢の体部内面12点、擂鉢の底部見込部分1点、壷もしくは甕の体部外面3点、小壷底部の見込部分1点となっている。

3本の直線を交差させた「*」は2点認められ（第135図5-23、12-52）、いずれも擂鉢の体部内面に書かれている。

1本と2本の線を直交させた「廾」あるいは「キ」は合計で17点認められた。書かれた部位の方向などから「廾」と考えられるものが13点（第135図4-15・53、5-21・22、7-111・116・124・134・135、8-17・32、19-5、表土-12）、「キ」と考えられるものが3点ある（第135図2-27、4-65、15-19）。ほかに〇で囲んだものが1点みられる（第135図11-26）。部位は擂鉢の体部内面12点、小壷体部外面1点、短頸壷肩部外面2点、甕の頸部2点となっている。

1本と3本の線を直交させた「卅」は6点認められた（第135図1-15、2-3、8-19・20・28、12-49）。うち、5点は擂鉢の体部内面に、1点は短頸壷体部外面に書かれている。

この‖・|||・＋・廾・卅などは、擂鉢という量産された器種に集中して書かれている点や、記号が数字ともみられることから、数量を表している可能性も考えられる。

2本線を直交させた「#」は5点認められた（第135図8-18・26、12-51・54、15-20）。うち、4点は擂鉢の体部内面に、1点は壷体部外面に書かれている。

細長い2つの長方形を直交させて十字形にしたものは2点認められ、いずれも壷の体部外面に刻されている（第135図4-82・87）。

縦線2本と横線1本を配したもので、「F」字状のもの（第135図4-79）「カ」の逆字状のもの（第135

図 1-9）、「ϟ」字状のもの（第 135 図 2-29）が 1 点ずつある。すべて擂鉢の体部内面に書かれたものである。

横線 1 本に縦線 1 本を垂直に配した「┐」状のものは 2 点認められ（第 136 図 5-24、7-118）、いずれも擂鉢の体部内面に書かれたものである。

斜行する 2 本の直線を交差させた「＜」状のもの（第 136 図 4-80）、3 本の直線を交差させた「↑」状のもの（第 136 図 19-4）がある。いずれも擂鉢の体部内面に書かれている。

○を書いたものは合計 10 点認められ、その中の 6 点はヘラ書きによるもので（第 136 図 4-76、5-18、7-120・131・137、15-17）、他の 4 点は竹などの中空の植物の木口面を刺突したものである（第 136 図 7-115、8-15、表土-1、第 137 図 7-125）。後者の中には 8-15 のように三角形に竹管を配しているものもある。部位は、ヘラ書きによるものは擂鉢の体部内面 4 点、短頸壷体部外面 1 点、小壷体部外面 1 点、竹管によるものは擂鉢の体部内面 2 点、短頸壷の肩部外面 1 点、甕体部外面 1 点となっている。

【文様的なもの】

38 点出土しており、ヘラ書きをもつものの中では約 20%を占める。

文様には、植物・鳥などを描いたものと、前項の記号を連続的に配して装飾的にしたものや櫛歯による装飾文などがある。いずれも小破片であり、いくつかの文様や装飾が組み合って存在した可能性が考えられる。これらはＳＲ-04・07 窯跡からの出土が目立つ。

ヘラ書きの行なわれた部位が判明するものは 35 点あり、甕の体部外面 2 点、体部内面と底部見込 1 点、頸部外面 9 点、肩部外面 1 点、広口壷体部外面 4 点、頸部外面と肩部外面が各 1 点、短頸壷の肩部外面 2 点、体部外面 1 点、小壷体部外面 2 点となっており、甕・壷類が圧倒的に多い。

〈植物〉

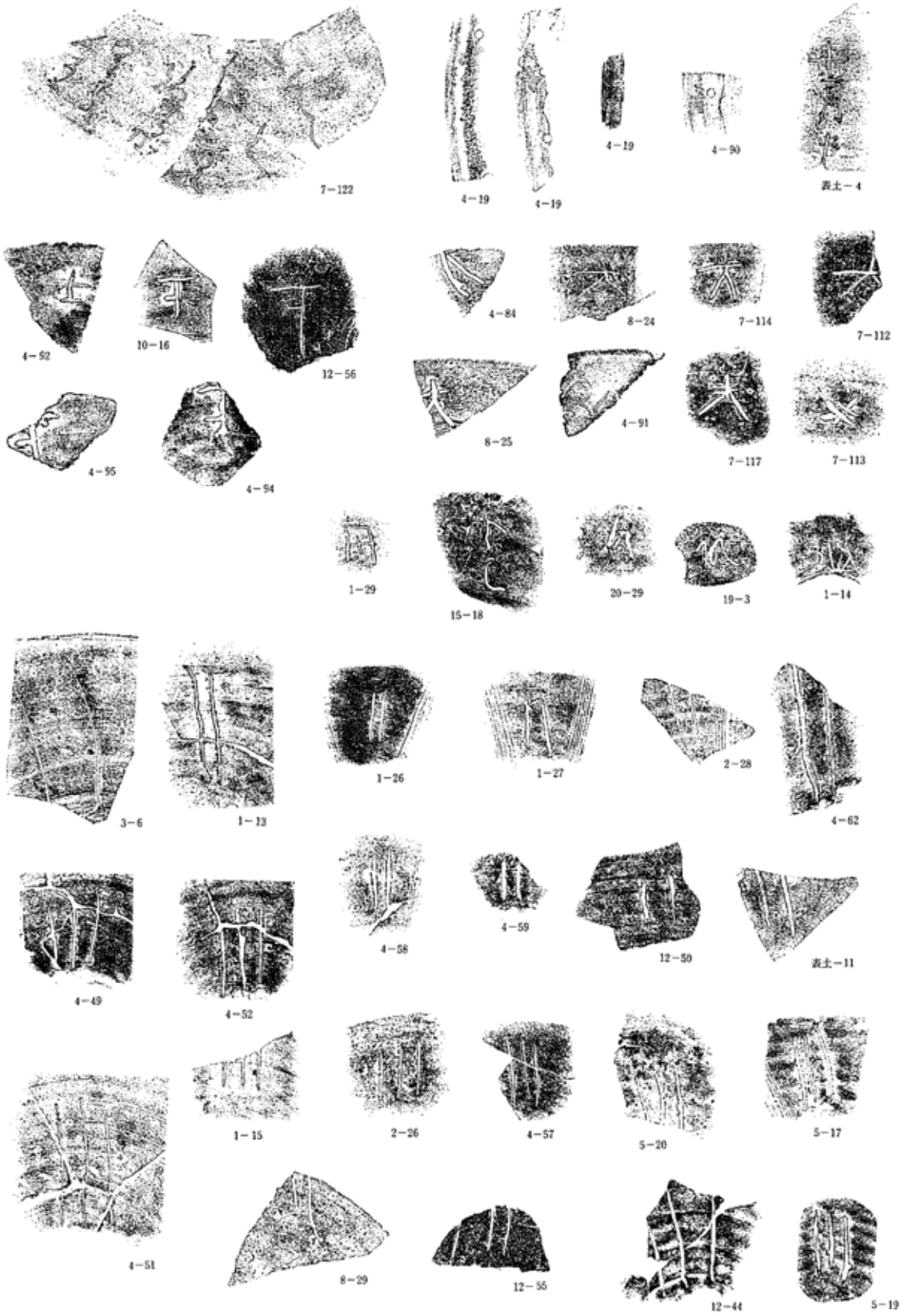
8 点出土している。松や楓の葉、菊花などがある。

松と思われるものは 2 点ある（第 136 図 4-67、15-3）。前者は、甕頸部外面に樹幹から松葉にかけての部分が、後者は小瓶肩部外面に松の幼樹と根の部分が描かれている。松は精霊の宿る樹木であり、好んで松の絵が描かれたと考えられている（吉岡：1994）。同様の例は珠洲窯などで出土している。

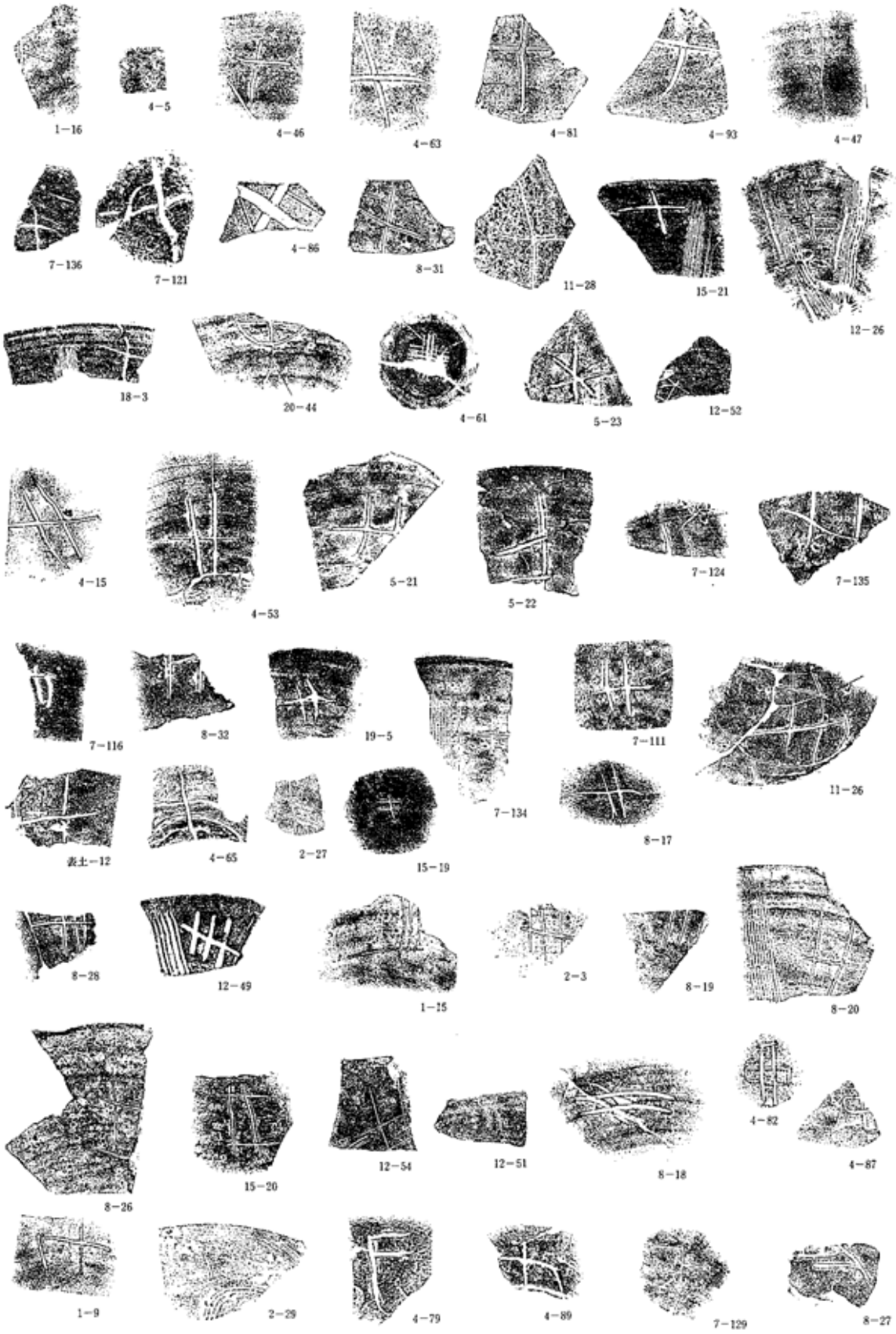
楓の葉は、同一個体とみられる甕の底部の見込部分、体部の内面、頸部の外面に描かれている（第 136 図 8-16）。頸部に書かれたものは横並びに連続して施文され、装飾効果を高めているのに対して、見込や体部の内面など外からでは見えない部分にも施文されており、どのような意図で書かれたものか不明である。

菊花状の花文は、小形の火鉢の外面に数個単位で書かれている（第 136 図 4-21）。大小 2 つの同心円を書き、外側の大きな円から中の小さな円に向かって細線を配している。これと同様の意匠の花文をもつ甕が仙台市松木遺跡から出土している（工藤・佐藤：1986）。この花文とよく似たモチーフの菊花文の押印が常滑をはじめ加賀など各地に一般的にみられるもので、本遺跡のものはこれを写したものと考えられる。

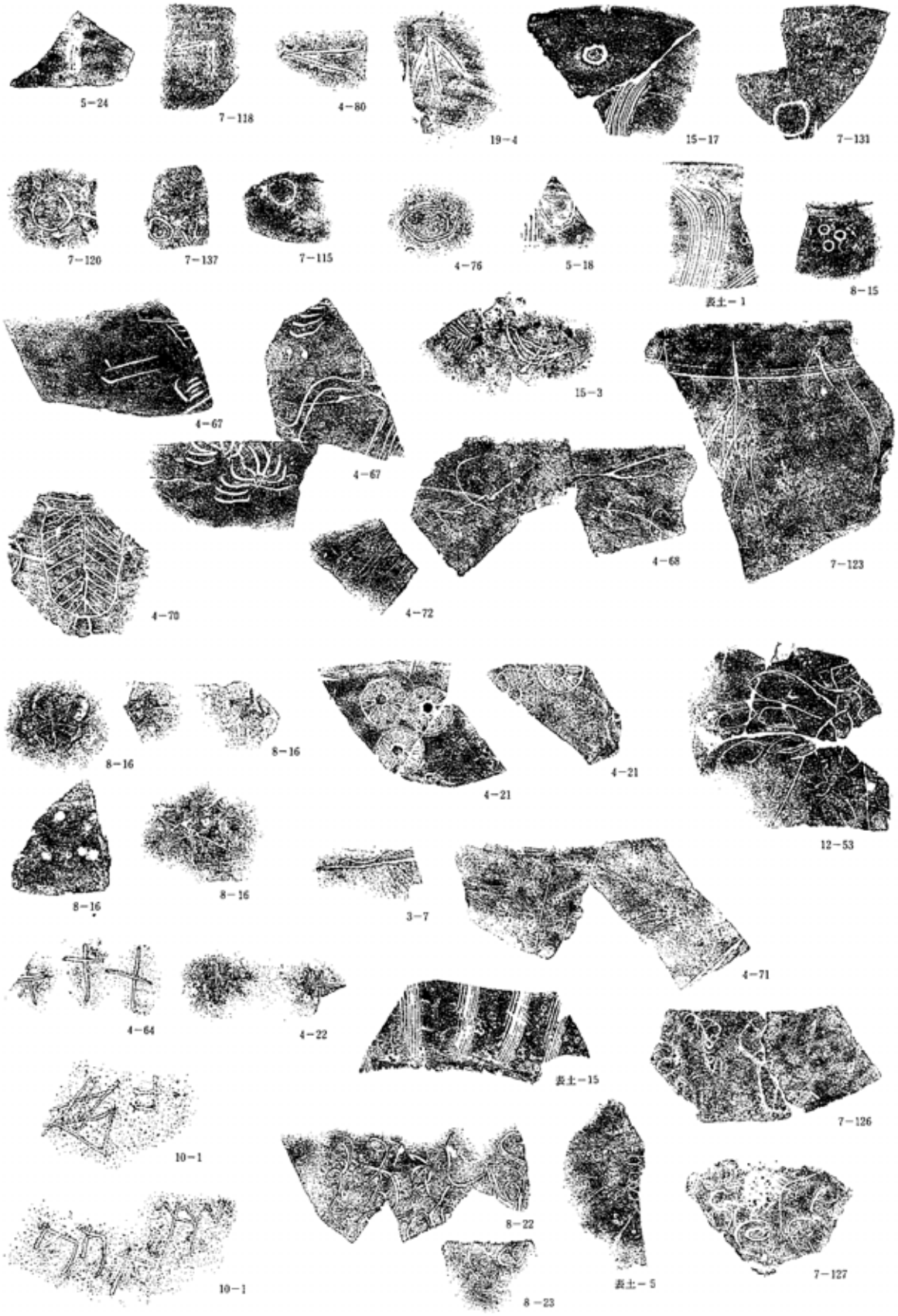
第 136 図 12-53 は水滴状の円文を縦に 2 列配し、房状を呈することから藤の花をモチーフにしたもの


7−122
4−19
4−19
4−19
4−90
表土−4
4−52
10−16
12−56
4−84
8−24
7−114
7−112
4−95
4−94
8−25
4−91
7−117
7−113
1−29
15−18
20−29
19−3
1−14
3−6
1−13
1−26
1−27
2−28
4−62
4−49
4−52
4−58
4−59
12−50
表土−11
4−51
1−15
2−26
4−57
5−20
5−17
8−29
12−55
12−44
5−19

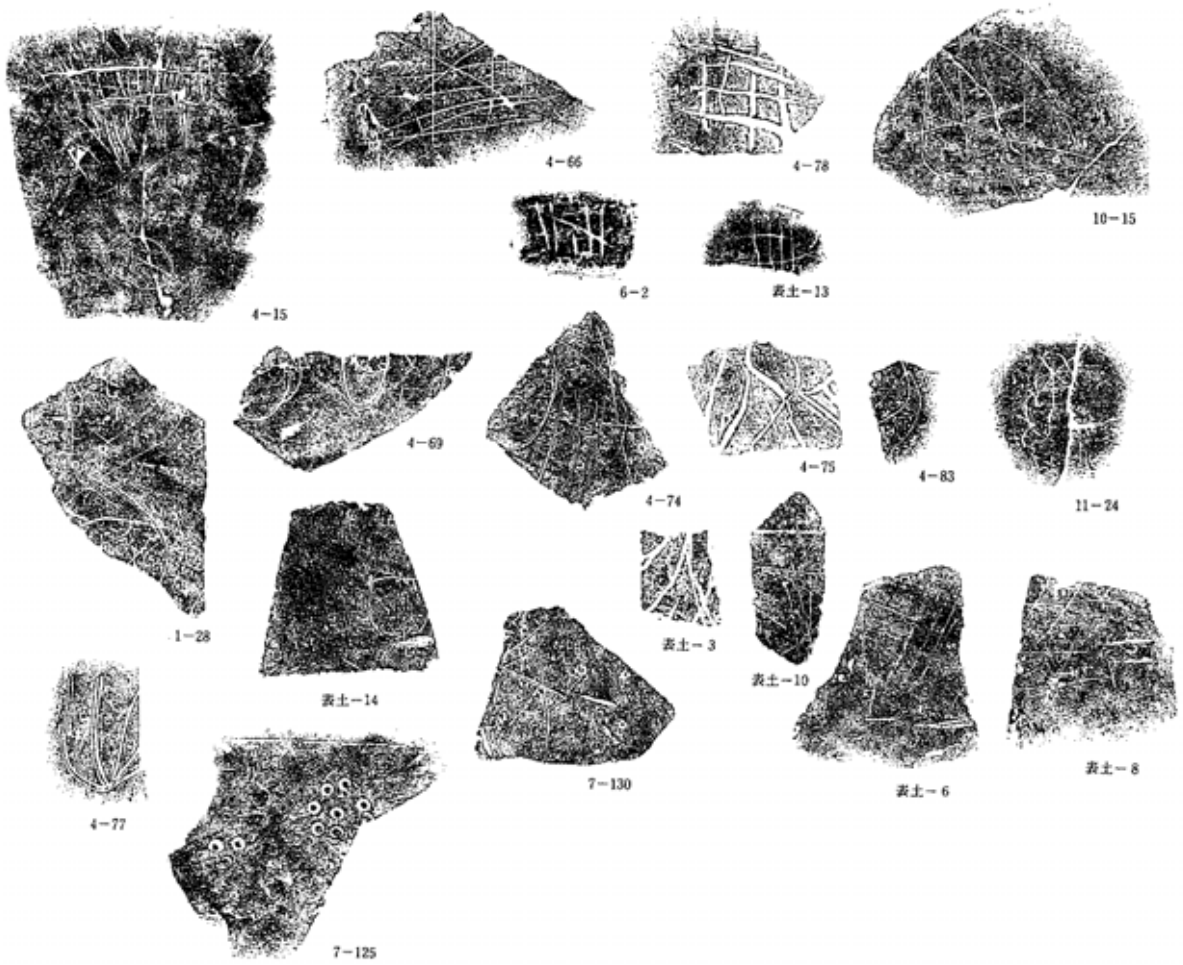
第134図　ヘラ書き (1)


1−16
4−5
4−46
4−63
4−81
4−93
4−47
7−136
7−121
4−86
8−31
11−28
15−21
12−26
18−3
20−44
4−61
5−23
12−52
4−15
4−53
5−21
5−22
7−124
7−135
7−116
8−32
19−5
7−111
11−26
表土−12
4−65
2−27
15−19
7−134
8−17
8−28
12−49
1−15
2−3
8−19
8−20
8−26
15−20
12−54
12−51
8−18
4−82
4−87
1−9
2−29
4−79
4−89
7−129
8−27

第135図　ヘラ書き (2)


5−24
7−118
4−80
19−4
15−17
7−131
7−120
7−137
7−115
4−76
5−18
表土−1
8−15
4−67
15−3
4−67
4−68
7−123
4−70
4−72
8−16
8−16
4−21
4−21
12−53
8−16
8−16
3−7
4−71
4−64
4−22
表土−15
7−126
10−1
8−22
表土−5
7−127
10−1
8−23

第136図　ヘラ書き (3)



第137図　ヘラ書き (4)

と考えられる。壷もしくは甕の肩部に書かれている。

他に、甕の頸部外面に植物と考えられるものが描かれたものがある（第 136 図 4-68・72、7-123）。

〈鳥〉

2 点出土している（第 136 図 3-7、4-71）。前者は飛んでいる姿を書いたもので、羽毛なども微細に表現されている。頸が長く、嘴も長い鳥であることから、鷺などの水鳥を表していると考えられる。破片の焼き歪みが著しいが、壷の頸部に書かれたものと考えられる。後者は甕の頸部に書かれたもので、翼を広げ右側を向いて立っている様子を表現したものと考えられる。頭部や胴部は弦と弧の組合せで三日月形に簡略化して表されており、前者と比べると抽象化した表現となっている。

鳥を描いた中世陶器は、東北地方では伊豆沼古窯跡群熊狩Ｂ窯跡（藤沼：1979）や会津若松市大戸窯跡群上雨屋 64 号窯跡（石田：1994）から出土している。

なお、鳥は植物文などと組み合わせて描かれる場合が多い。

〈記号を連続したもの〉

3 点ある（第 136 図 4-22・64、10-1）。4-22 は「ᛉ」を火鉢の体部内面に横並びに書いており、4-64 は「＋」を鉢の体部外面に横並びにかいている。10-1 短頸壷の肩部に「カ」を連続的に配しており、

三角や「w」状の記号も書かれている。

〈櫛歯による文様〉

2 点ある(第 41 図 17、第 136 図表土-15)。前者は広口壷の頚部に横方向へ展開する波状文が 1 条書かれたもので、後者は甕の体部下半の破片で、上下方向に多条の櫛歯文が書かれたものである。櫛歯文は宮城県内や福島北部の諸窯跡、また常滑窯からは出土しておらず、むしろ珠州窯などの須恵器の系譜をひく北陸の中世陶器にみられる特徴である。

〈直線や曲線を組み合わせたもの〉

24 点ある。1 条だけのヘラ書きや成作時の擦痕、工具痕と区別のつかないものについては除外した。

第 136 図 7-126・127、8-22・23、表土-5 は、縦に螺旋状の曲線が書かれたもので、前 4 者は甕の頚部外面に、後者は壷の体部外面に施されている。

第 137 図 4-15・66・78、6-2、10-15、表土-13 は多条の直線を縦横に配し、格子状の文様を描いたものである。4-15 では曲線的な文様や「廾」などの記号的なものと組み合わされており、10-15 は格子のまわりをさらに丸で囲んでいる。4-15・78 は短頚壷の体部外面と肩部に、6-2、表土-13 は小壷の体部外面に、10-15、4-66 は甕の頚部外面と体部外面に書かれている。

第 137 図 1-28、4-69・74・75・83、12-24、表土-14 は多条の曲線を配したもので、全体的モチーフについては不明なものである。前 5 者は甕の体部外面に後 2 者は壷の体部外面に施されている。

第 137 図 7-130、表土-3・6・8・10 は多条の直線を配したもので、全体的モチーフについては不明なものである。すべて甕の体部外面に書かれている。

このほかに、壷体部外面に「ψ」状のヘラ書きをもつもの(第 137 図 4-77)、壷もしくは甕の頚部外面に籠のようなものを書いたもの(第 136 図 4-70)がある。

Ⅳ．まとめ

○　一本杉窯跡群は、白石市白川犬卒塔婆字一本杉に所在する。

○　一本杉窯跡群は、東北窯跡群、市ノ沢窯跡群、黒森窯跡群とともに『白石古窯跡群』を構成する支群の一つである。今回の調査を含めると『白石古窯跡群』の窯数は50基以上存在することが明らかになったが、周辺の山林には未発見の支群や窯跡が多数存在する可能性がある。

○　窯跡群は東西に延びる尾根の、標高98m～115mのところにあり、尾根の南斜面に18基、北斜面に2基の合計20基が構築されている（未完成のもの1基、未使用のもの1基を含む）。

○　窯の構造は、いずれも分焔柱を持ち、凝灰岩の地山を掘り抜いた地下式の窖窯で、常滑窯の影響の下に成立したと考えられる。

○　窯跡は大規模で、焼成部が急傾斜であることが特徴である。分焔柱など各部位の形状は東北地方南部の独自の形態を示している。

○　窯跡群は13世紀後半頃に操業していたと考えられ、大きく4時期に分けられ、さらに数時期に細分できる。

○　窯の位置関係や重複状況から、2～3基単位で操業していたと考えられる。

○　焼成された製品はすべて瓷器系の中世陶器で、甕、壷、擂鉢を主体とし、他に火鉢、陶硯、五輪塔、陶錘などがある。

○　遺物は古いグループ（窯跡の第Ⅰ・Ⅱ群で焼成）と、新しいグループ（窯跡の第Ⅲ・Ⅳ群で焼成）に分けられるが、形式的に分離できるものではない。

○　器種組成や器形（特に甕の口縁帯の形態変遷）は東北地方南部の独自の変化をしている。

○　出土遺物中にはヘラ書きされたものが多く存在する。

○　製品の窯詰法は、基本的には、大型品を規則的に配置し、隙間に小形品を充填するという方法である。

引用・参考文献

赤羽一郎　(1995)「常滑窯製品の編年と流通経路」『考古学ジャーナル』396号

赤羽・中野（1994)「生産地における編年について」 シンポジウム『中世常滑焼をおって』　日本福祉大学知多半島総合研究所

新巽ヶ丘団地関係遺跡調査団（1978）『福住古窯址群』　新巽ヶ丘団地関係遺跡発掘調査報告書

阿部　恵　(1980)「飯詰館跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』　宮城県文化財調査報告書第62集

飯村　均　(1992)「福島県の中世窯業－流通と経済－」 シンポジウム『東日本における古代・中世窯業の諸問題』　大戸古窯跡群検討会・津若松市教育委員会

飯村　均　(1994)「陸奥南部の常滑系陶器の生産と技術」 シンポジウム『中世常滑焼をおって』日本福祉大学知多半島総合研究所

飯村　均　(1995)「東北の中世窯と常滑窯」『考古学ジャーナル』396号

飯村・寺島（1987）『八郎窯跡群』　梁川町文化財調査報告書第12集

猪狩英究　(1995)「大鳥城跡2」『大森城跡・大鳥城跡2』　福島市文化財調査報告書第78集

石川・千葉他（1990）『新田遺跡』　多賀城市文化財調査報告書第23集

石田明夫　(1994)『会津大戸窯』　会津若松市文化財調査報告書第37集

宇野隆夫　(1992)『能登珠洲窯』　シンポジウム『東日本における古代・中世窯業の諸問題』　大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会

恵美昌之　(1988)『大門山遺跡』　名取市文化財調査報告書第22集

恵美昌之　(1990)『上川遺跡』　名取市文化財調査報告書第25集

恵美昌之　(1993)『名取熊野三山遺跡群』　名取市文化財調査報告書第32集

太田昭夫　(1994)『中田南遺跡』　仙台市文化財調査報告書第182集

太田昭夫　(1995)『中田南遺跡』　仙台市文化財調査報告書第206集

小川淳一　(1981)「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』　宮城県文化財調査報告書第71集

小川淳一　(1993)「王ノ壇遺跡」『年報14』　仙台市文化財調査報告書第176集

小野田勝一（1982)「渥美の陶器」『日本やきもの集成2』　平凡社

加藤道男　(1981)「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』　宮城県文化財調査報告書第72集

川上貞雄　(1992)「新潟県五頭山麓窯跡群」　シンポジウム『東日本における古代・中世窯業の諸問題』　大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会

工藤哲司　(1982)『栗遺跡』　仙台市文化財調査報告書第43集

工藤哲司　(1994)『仙台市東郊条里跡』　仙台市文化財調査報告書第183集

工藤・佐藤（1996)「松木遺跡」『柳生』　仙台市文化財調査報告書第95集

黒川利司　(1980)「持長地遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』　宮城県文化財調査報告書第71集

後藤彰信　(1984)「矢の目遺跡」『宮城県営圃場整備関連遺跡調査報告書』　宮城県文化財調査報告書第100集

佐々木安彦（1980)「地蔵院館跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』　宮城県文化財調査報告書第65集

佐々木安彦（1980)「葉坂戸の内遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』　宮城県文化財調査報告書第65集

佐藤　淳　(1990)『南小泉遺跡』　仙台市文化財調査報告書第141集

佐藤　洋　(1983)『今泉城跡』　仙台市文化財調査報告書第58集

佐藤　洋　(1990)『南小泉遺跡』　仙台市文化財調査報告書第140集

佐藤好一　(1990)『赤生津遺跡』　仙台市文化財調査報告書第139集

白鳥・加藤（1974)「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第35集

新庄屋元晴（1980)『角田郡山遺跡』　角田市文化財調査報告書第3集

斉藤彰裕　(1991)「荒町遺跡」『住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡』　角田市文化財調査報告書第7集

斉藤彰裕　(1991)「田町裏遺跡」『住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡』　角田市文化財調査報告書第7集

斉藤彰裕　(1994)『田町裏遺跡』　角田市文化財調査報告書第14集

磯部・奥川（1990)『中田池古窯址群その1』

田中照久　(1994)「越前焼きの歴史」『越前古陶とその再現』　出光美術館

玉川一郎　(1978)『三貫地遺跡』　新地町文化財調査報告書

知多市　　（1987）『七曲古窯址群　第1次発掘調査』
知多市　　（1988）『七曲古窯址群　第2次発掘調査』
知多市　　（1989）『七曲古窯址群　第3次発掘調査』
土妓山武　（1980）「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』　宮城県文化財調査報告書第72集
常滑市　　（1983）『濁池古窯址群』
常滑市　　（1985）『槍場御林古窯址群』
常滑市　　（1993）『亀塚池古窯址群』
中野晴久　（1992）「常滑窯」　シンポジウム『東日本における古代・中世窯業の諸問題』　大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会
中野晴久　（1995）「常滑窯編年作業と今後の課題」『考古学ジャーナル396号』
中野晴久　（1995）「知多古窯跡群の研究」　『知多古文化研究9号』
中山・大槻（1985）『大榧遺跡』　桑折町文化財調査報告書第2集
丹羽・小野寺（1981）「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』　宮城県文化財調査報告書第77集
藤沢典彦　（1995）「陶製五輪塔」『　』
藤沼邦彦　（1976）「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『東北歴史資料館研究紀要第2巻』
藤沼邦彦　（1977）「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要第3巻』
藤沼邦彦　（1979）『熊狩Ａ窯跡』　東北歴史資料館資料集1
藤沼邦彦　（1983）「福島県の中世陶器」『東北の中世陶器』
藤沼邦彦　（1991）「東北地方出土の常滑焼・渥美焼について」『知多半島の歴史と現在3』
藤沼邦彦　（1995）「水沼窯跡群」『石巻の歴史第7巻　考古資料編1』
藤沼・佐々木（1978）『多高田窯跡』　三本木町文化財調査報告書第4集
藤沼・千葉（1992）「宮城県の中世窯」　シンポジウム『東日本における古代・中世窯業の諸問題』　大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会
古川・鈴木・大和（1991）「舘南囲遺跡」『舘南囲遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第144集
宮下幸夫　（1992）「加賀窯について」　シンポジウム『東日本における古代・中世窯業の諸問題』　大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会
森　貫喜　（1980）「田中遺跡」「谷津川遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』　宮城県文化財調査報告書第62集
吉岡康暢　（1994）『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
渡辺弘美　（1995）『四郎丸館跡』　角田市文化財調査報告書第200集